徳田秋聲
正宗白鳥
上司小劍
宇野浩二
監修

近松秋江傑作選集

中央公論社刊

第一巻　目次

別れたる妻に送る手紙……………………………………一

黒髪………………………………………………………二七

狂亂………………………………………………………一七三

霜凍る宵…………………………………………………二六五

編輯者の言葉

「わが藝術に對して深き自信なきは予の最も不幸とするところなれども、書きたることは悉く自己を欺かざるを信ず。」

右は、近松秋江が、『別れた妻に送る手紙』、『黒髪』、『狂亂』、『霜凍る宵』、『子の愛の爲に』、その他を收めた、選集の序詞であるが、この秋江の「書きたることは悉く自己を欺かざる」小說は、誇張していふと、古今東西に無類の作品である。

假りに「書きたることは悉く自己を欺かざる」小說が他にもあるとしても、その小說が無類といふ點で一步か半步かを秋江の小說に讓らなければならぬのは、秋江の「悉く自己を欺かざる」小說は殆ど情痴と愛慾の世界に限られてゐるからである。

また假りに情痴と愛慾の世界を「悉く自己を欺かざる」小說にする作家が他にもあるとしても、その小說が秋江の小說に何か及ばないところがあるのは、秋江の小說の主人公は、情痴と愛慾のためには、見得は勿論、あるだけの金を使ひ果たしても少しも悔いないほど一途なところがあるからである。

假りにそれ等の小說の主人公を作者自身とすると、秋江のそれ等の小說は、作者が作中の主人公と一身同體であるから、情痴と愛慾に普通の人間の七倍を七倍にしたほど惱み惱まされた作者の身心の體驗が殆どそのまま讀者に傳はり通じる。これが秋江の謂はゆる情痴文學が無類である所以である。

近松秋江は、今から十年程前に書いた『私の小說』といふ文章の中で、「人間の愚かな煩惱については、私は相當に深い體驗を

持つてゐるつもりである。」と述べ、「必ずしも人間生活を悉く醜惡なものとばかりは思はないが、私は、平常、口を拭いて、綺麗な顏をして世間に面向けてゐる人たちの生活の裏に廣がつてゐる煩惱や俗慾の情景を想像して、そんな事により多くの興味を持つ。それを喜ぶのでは決してないが、人間がそんな煩惱や慾望に苦患を嘗めずにはゐられないところを見ると、人間生活はそんなに有難いものではない、」と云ひ、つづいて、「かといつて、その爲めに、いつもいつも悲觀ばかりもしてゐられないが、それだけの五慾煩惱逃妄の煉獄を經て來て、初めて人間の事が透明に見えて來るのではないか、」と書いてゐる。

右に引いた文章でも分るやうに、近松秋江は、「煩惱や俗慾の情景」により多くの興味を持ち、「人間生活の甘さより苦さ」を

好んで題材にし、「五慾煩惱逃妄の煉獄」を經て、人間の事が透明に見える域にまで達した作家である。

『榮花物語』にかういふ文句がある。

「是生滅法は愛慾の河を渡る般若の船なり。」

さうすると、近松秋江の情痴と愛慾を題材にした幾篇かの小說は、『是生滅法』であり『般若の船』である、と云へよう。さうして、『般若』とは、いふまでもなく、「分別、妄想を離れて、實相、眞如を達觀する智慧」といふ意味であるから、近松秋江の小說は、深き愛慾の河を渡つて、實相、眞如を達觀した小說、といふことになる。

しかし又、近松秋江は、さまざまの愛慾の河を渡つたが、いつも分別と妄想から離れられなかつたので、あのやうな無類の

愛慾兼情痴文學を創造したのであるかも知れない。それは、實相、眞如を達觀すれば、肝心の藝術から離れることになるかも知れないからである。

しかし又、近松秋江はかういふ事を云つてゐる。

自分の作に自己の愚を些の差恥もなく現したのは、「そこに僞らざる人間の眞がある」と思ひ、「その行動と心理の狀態に、描いて、もつて、一篇の小說にするに足る特色がある」と信じて、「敢て、それを題材として、創作の擧に出でた」のである。

かういふ抱負と自信をもつて謂はゆる私小說（或ひは自叙傳的小說）を書いてゐるといふ事だけでも、近松秋江は無類の作家である。私が進んでこの選集の編輯をする所以である。

昭和十四年七月吉日

宇野浩二

別れたる妻に送る手紙

拝啓

お前――別れて了つたから、もう私がお前と呼び掛ける權利は無い。それのみならず、風の音信に聞けば、お前はもう疾くに嫁いてゐるらしくもある。もしさうだとすれば、お前はもう取返しの付かぬ人の妻だ。その人にこんな手紙を上げるのは、道理から言つても私が間違つてゐる。けれど、私は、まだお前と呼ばずにはゐられない。どうぞ此の手紙だけではお前と呼ばしてくれ。また斯樣な手紙を送つたと知れたなら大變だ。私はもう何うでも可いが、お前が、さぞ迷惑するであらうから申すまでもないが、讀んで了つたら、直ぐ燒くなり、何うなりしてくれ。――お前が、私とは、つい眼と鼻との間の同じ小石川區內にゐるとは知つてゐるけれど、丁度今頃は何處に何うしてゐるやら少しも分らない。けれども私は斯うして其の後のことをお前に知らせたい。いや聞いて貰ひたい。お前の顏を見なくなつてから、やがて七月になる。その間には、私には種々なことがあつた。

一緒にゐる時分は、ほんの些とした可笑しいことでも、悔しいことでも即座にぶちまけて何とか彼とか言つて貰はねば氣が濟まなかつたものだ。またその頃はお前の知

つてゐる通り、別段に變つたことさへなければ、國の母や兄とは、近年ほんの一月に一度か、二月に三度ぐらゐしか手紙の往復をしなかつたものだが、去年の秋私一人になつた當座は殆ど二日置きくらゐに母と兄とに交る〴〵手紙を遣つた。

けれども今、此處に打明けようと思ふやうなことは、母や兄には話されない。たれにも話すことが出來ない。唯せめてお前にだけは聞いて貰ひたい。私は最後の半歳ほどは正直お前を恨んでゐる。けれどもそれまでの私の仕打に就いては隨分自分がよくなかつた、といふことを、十分に自身でも承知してゐる。だから今話すことを聞いてくれたなら、お前の胸も幾許か晴れよう。また私は、お前にそれを心のありつたけ話し盡したならば、私の此の胸も透くだらうと思ふ、さうでもしなければ私は本當に氣でも狂れるかも知れない。出來るならば、手紙でなく、お前に直に會つて話したい。けれどもそれは出來ないことだ。それゆゑ斯うして手紙を書いて送る。

お前は大方忘れたらうが、私はよく覺えてゐる。あれは去年の八月の末――二百十日の朝であつた。お前は、

「もう話の着いてゐるのに、あなたが、さう何時までも、のんべんだらりと、ずる〱

にしてゐては、皆に、私が矢張しあなたに未練があつて一緒にずる〳〵になつてゐるやうに思はれるのが辛い。少しはあなただつて人の迷惑といふことも考へて下さい。いよ〳〵別れて了へば私は明日の日から自分で食ふことを考へねばならぬ。……それを思へば、あなたは獨身になれば、何うしようと、足纏ひがなくなつて、結局氣樂ぢやありませんか。さうしてゐる内にあなたはまた好きな奥さんなり、女なりありますよ。兎に角今月中に何處か下宿へ行つて下さい。さうでなければ私が柳町の人達に何とも言ひやうがないから。」

と言つて催促するから、私は探しに行つた。

二百十日の蒸暑い風が口の中までジヤリ〳〵するやうに砂塵埃を吹き捲つて夏負けのした身體は、唯歩くのさへ大儀であつた。矢來に一處あつたが、私は主婦を案内に空間を見たけれど、假令何樣な暮しをしようとも、これまで六年も七年も下宿屋の飯は食べないで來てゐるのに、これからまた以前の下宿生活に戻るのかと思つたら、私は、其の座敷の、夏季の間に裏返したらしい疊のモジヤ〳〵を見て今更に自分の身が淺間しくなつた。それで、

「多分明日から來るかも知れぬから。」

と言つて歸りは歸つたが、どう思うても急に他へは行きたくなかつた。といふのは強ちお前のお母さんの住んでゐる家――お前の傍を去りたくなかつたといふのではない。それよりも斯うしてゐて、自然に心が變つて行く日が來るまでは身體を動かすのが大儀であつたのだ。加之錢だつて差當り要るだけ無いぢやないか。歸つて來て、

「どうも可い宿はない。」といふと、

「急にさう思ふやうな宿は何うせ見付からない。松林館に行つたら屹度あるかも知れぬ。彼處ならば知つた宿だから可い。今晩一緒に行つて見ませう。」

と言つて、二人で聞きに行つた。けれども其處にはどんな室もなかつた。其の途中で歩きながら私は最後に本氣になつて種々と言つて見たけれど、お前は、

「そりや、あの時分はあの時分のことだ。……私は先の時分にも四年も貧乏の苦勞をして、またあなたで七年も貧乏の苦勞をした。私も最早貧乏には本當に飽き〳〵した……假令月給の仕事があつたつて、私は文學者は嫌ひ。文學者なんて偉い人は私風情にはもつたいない。私もよもやにひかされて、今にあなたが良くなるだらう、今に良

くなるだらうと思つてゐても、何時まで經つてもよくならないのだもの。それにあなたぐらゐ猫の眼のやうに心の變る人は無い。一生當てにならない……。」

斯う言つた。そりや私も自分でも、さう偉い人間だとは思つてゐないけれども、お前に斯う言はれて見れば、丁度色の黒い女が、お前は色が黒い、と言つて一口にへこまされたやうな氣がした。屢く以前、

「あなたは何彼につけて私をへこます。」と言ひ〱した。私は「あゝ濟まぬ。」と思ひながらも隨分言ひにくいことを屢々言つてお前をこき下した。それを能く覺えてゐる私には、あの時お前にさう言はれても、何と言ひ返す言葉もなかつた。それのみたらず全く私はお前に滿六年間、

「今日は。」

といふ想ひを唯の一日だつてさせなかつた。それゆゑさうなくつてさへ何につけ自信の無い私は、その時から一層自分ほど詰らない人間は無いと思はれた。何を考へても、何を見ても、何をしても白湯を飲むやうな氣持もしなかつた。……けれども、斯樣なことを言ふと、お前に何だか愚痴を言ふやうに當る。私は此の手紙でお前に愚痴

をいふつもりではなかつた。愚痴は、もう止さう。
兎に角、あの一緒に私の下宿を探しに行つた晩、
あなたがどうでも家にゐれば、今日から私の方で、あなたのゐる間、親類へでも何處へでも行つてゐる。……奉公にでも行く。……好い縁があれば、明日でも嫁かねばならぬ。……同じ歳だつて、女の三十四では今の內早く何うかせねば拾つてくれ手が無くなる。」と言ふから、
「ぢや今夜だけは家にゐて明日からいよ〳〵さうしたら好いぢやないか。さうしてくれ。」と私が賴むやうに言ふと、
「さうすると、またあなたが因緣をつけるから……厭だ。」
「だつて今夜だけ好いぢやないか。」
「ぢやあなた、一足前に歸つていらつしやい。私柳町に一寸寄つて後から行くから。」
私は言ふがまゝに、獨り自家に戻つて、遲くまで待つてゐたけれど、お前は遂に歸つて來なかつた。あれッきりお前は私の眼から姿を隱して了つたのだ。
それから九月、十月、十一月と、三月の間、繰返さなくつても、後で聞いて知つて

もゐるだらうが、私は、お前のお母さんに御飯を炊いて貰つた。お前も私の癖は好く知つてゐる。お前の洗つてくれた茶碗でなければ、私は立つて、わざ〳〵自分で洗ひ直しに行つたものだ。わけてもお前のお母さんと來たら不精で汚らしい、そのお母さんの炊いた御飯を、私は三月――三月といへば百日だ、私は百日の間辛抱して食つてゐた。

お前達の方では、これまでの私の性分を好く知り拔いてゐるから、あゝして置けば遂に堪らなくなつて出て行くであらう、といふ量見もあつたのだらう。が私はまた、前にも言つたやうに、自然に心が移つて行くまで待たなければ、何うする氣にもなれなかつたのだ。

それは老母の身體で、朝起きて見れば、遠い井戸から、雨が降らうがどうせうが、水も手桶に一杯は汲んで、ちやんと緣側に置いてあつた。顏を洗つて座敷に戻れば、机の前に膳も据ゑてくれ、火鉢に火も入れて貰つた。

段々寒くなつてからは、お前がした通りに、朝の焚き落しを行火に入れて、寢てゐる裾から靜と入れてくれた。――私にはお前の居先は判らぬ。またお母さんに聞いた

つて金輪際それを明かす譯はないと思つてゐるから、此方からも聞かうともしなかつたけれど、お母さんがお前の處に一寸一寸會ひに行つてゐるくらゐは分つてゐた。それゆゑ行火を入れるのだけは、「あの人は寒がり性だから、朝寢起きに行火を入れてあげておくれ。」とでもお前から言つたのだらうと思つた。

それでも何うも夜も落々眠られないし、朝だつて習慣になつてゐることが、がらりと樣子が變つて來たから寢覺めが好くない。以前屢くお前に話し〳〵したことだが、朝熟く寢入つてゐて知らぬ間に靜と音の立たぬやうに新聞を胸の上に載せて貰つて、その何とも言へない朝らしい新しい匂ひで、何時とはなく眼の覺めた日ほど心持の好いことはない。まだ幼い時分に、母が目覺しを枕頭に置いてゐて、「これツ〳〵。」と呼び覺してゐたと同じやうな氣がしてゐた。それが最早、まさか、新聞まで寢入つてゐる間に持つて來て下さい、とは言はれないし、假令さうして貰つたからとて、お前にして貰つたやうに、うまくしつくりと行かないと思つたから頼みもしなかつたが、時時そんなことを思つて一つさうして貰つて見ようかなどと寢床の中で考へては、ハツと私は何といふ馬鹿だらうと思つて獨りでに可笑しくなつて笑つた事もあつたよ。

で、新聞だけは自分で起きて取つて來て、また寢ながら見たが、さうしたのでは唯字が眼に入るだけで、もう面白くも何ともありやしない。……本當に新聞さへ澤山取つてゐるばかりで碌々讀む氣はしなかつた。

それに、あの無愛想な人のことだから、何一つ私と世間話をしようぢやなし。——尤も新聞も面白くないくらゐだから、そんならたれと世間話をしようといふ興も湧かなかつたが——米だつて惡い米だ。私はその朝無暗に早く炊いて、私の起きる頃には、もう可い加減冷めてポロ〳〵になつた御飯に茶をかけて流し込むやうにして朝飯を濟ました。——間食をしない私が、どんなに三度の食事を樂しみにしてゐたか、お前がよく知つてゐる。さうして獨りでつくねんとして御飯を食べてゐるのだと思つて來るとむら〳〵と逆上げて來て、果ては膳も茶碗も霞んで了ふ。

寢床だつて暫時は起きたまゝで放つて置く。床を疊む元氣もないぢやないか。枕當の汚れたのだつて、私が一々口を利いて何とかせねばならぬ。

秋になつてから始終雨が降り續いた。あの古い家のことだから二所も三所も雨が漏つて、其處ら中にバケツや盥を竝べる。家賃はそれでも、十日ぐらゐ遲れることがあ

つても拂つたが、幾許直してくれと言つて催促してもなか〳〵職人を寄越さない。寒いから障子を入れようと思へば、どれも破れてゐる。それでも入れようと思つて色々にして見たが、建て付けが悪くなつてどれ一つ滿足なのが無い。

私はもう「えゝどうなりとなれ！」と、パタリ〳〵雨滴の落ちる音を聞きながら、障子もしめない座敷に靜として、何をしようでもなく、何を考へようでもなく、四時間も五時間も唯呆然となつて坐つたなり日を暮すことがあつた。

何日であつたか寢床を出て鉢前の處の雨戸を繰ると、あの眞正面に北を受けた縁側に落葉交りの雨が顔をも出されないほど吹付けてゐる。それでも私は寢卷の濡れるのをも忘れて、其處に立つたまゝ凝乎と向ひの方を眺めると、雨の中に遠くに久世山の高臺が見える。そこらは私には何時までも忘れることの出來ぬ處だ。それから左の方に銀杏の樹が高く見える。それがつい四五日氣の付かなかつた間に黄色い葉が見違へるばかりにまばらに瘦せてゐる。私達はその下にも住んでゐたことがあつたのだ。

そんなことを思つては、私は方々、目的もなく歩き廻つた。

天氣が好ければよくつて戸外に出るし、雨が降れば降つて家内にじつとしてゐられ

ないで出て歩いた。破れた傘をさして出歩いた。

さうしてお前と一緒に借りてゐた家は、古いのから古いのから見て廻つた。けれどもどの家の前に立つて見たつて、皆知らぬ人が住んでゐる。中には取拂はれて、以前の跡形もない家もあつた。

でも九月中ぐらゐは、若しかお前のゐる氣配はせぬかと雨が降つてゐれば、傘で姿が隱せるから、雨の降る日を待つて、柳町の家の前を行つたり來たりして見た。

家内にゐる時は、もう書籍なんか讀む氣にはなれない。大抵猫と遊んでゐた。あの猫が面白い猫で、あれと追駈ツこをして見たり、樹に逐ひ登らして、それを竿でつゝいたり、弱つた秋蟬を捕つてやつたり、ほうせん花の實つて彈けるのを自分で面白くつて、むしつて見たり、それを打つけて吃驚させて見たり、そんなことばかりしてゐた。處がその猫も、一度二日も續いて土砂降りのした前の晩、些との間に何處へ行つたか、ゐなくなつて了つた。お母さんと二人で色々探して見たが遂に分らなかつた。

そんな寂しい思ひをしてゐるからつて、これが他の事と違つて他人に話の出來ることぢやなし、またたれにも話したくなかつた。唯獨りの心に閉ぢ籠つて思ひ耽つてゐ

た。けれどもあの矢來の婆さんの家へは始終行つてゐた。後には「また想ひ遣りですか。……あなたが、あんまりお雪さんを虐めたから。……またあなたもみつちりお働ぎなさい。……さうしたらお雪さんが、此度は向うから頭を下げて謝つて來るから。……」などと言つて笑ひながら話すこともあつたが、あの婆は、丁度お前のお母さんと違つて口の上手な人でもあるし、また若い時から隨分種々な目にも會つてゐる女だから、

「本當にお雪さんの氣の强いのにも呆れる。……私だつて、あゝして四十年連れ添うた老爺さまと別れは別れたが、ああ今頃はどうしてゐるだらうかと思つて時々呼び寄せては、私が狀袋を張つたお錢で好きな酒の一口も飮まして、小遣ひをやつて歸すんです。……私には到底お雪さんの眞似は出來ない。……思ひ切りの好い女だ。それを思ふと雪岡さん、私はあなたがお氣の毒になりますよ……。」

と言つて、襦袢の袖口で眼を拭いてくれるから、私のことと婆さんのこととは理由が全然違つてゐるとは知つてゐながら、

「ナニお雪の奴、そんな人間であるもんですか。……それに最早、どうも嫁いてゐる

らしい。屹度それに違ひない。」と言ふと、婆さんは此度は思はせ振りに笑ひながら、
「へ…奴なんて、まあ大層お雪さんが憎いと思はれますね。まさかそんなことはないでせう。…私には分らないが…お雪さんだつて、あれであなたの事を色々と思つてゐるんですよ…あの自家（うち）の押入れに預かつてある茶碗なんか御覧なさいな。壊れないやうに丹念に一つ〳〵紙で包んで仕舞つてある。矢張（やつぱ）しまたあなたと所帯を持つ下心があるからだ…あんなに細かいことまでしやん〳〵とよく氣の利く人はありませんよ。」と、斯う言ひ〳〵した。

私は、私とお前との間は、私とお前とが誰よりもよく知つてゐたから、婆さんがそんなことを言つたつて、決して本當にはしやしない。隨分度々、お前には引越しの手數を掛けたものだが、その度每に、茶碗だつて何だつて丁寧に始末をしたのは私も知つてゐる――尤も後になつては、段々お前も「もう茶碗なんか、丁寧に包まない。」と言ひ出した。それも私はよく知つてゐる。またそれが、いよ〳〵別れねばならぬことになつて、一層丁寧に、私の所帯道具（もちもの）の始末をしてくれたのも知つてゐる。

それでゐて、私は柳町の人達よりも一層深い事情（わけ）を知らぬ婆さんがさう言つてくれ

るのを自分でも氣安めだ、と承知しながら聞いてゐるのが何よりも樂しみであつた。私は寄席にでも行くやうなつもりで、何か買つて懐中に入れては婆さんの六十何年の人情の節を付けた調子で「お雪さんだつて、あれであなたのことは思つてゐるんですよ。」を聞きに行つた。

さうしながら心は種々に迷うた。どうせ他へ行かねばならぬのだから家を持たうかと思つて探しにも行つた。出歩きながら眼に着く貸家には入つても見た。が、婆さんを置くにしても、小女を置くにしても私の性分として矢張し自分の心を使はねばならぬ。それに敷金なんかは出來やうがない。少し纏まつた錢の取れる書き物なんかする氣にはどうしてもなれない。それならどうしようといふのではないが、唯何にでも魂が奪られ易くなつてゐるから、道を歩きながら、フト眼に留つた見知らぬ女があると、浮々と何處までも其の後を追うても見た。

長く男一人でゐれば、女性も欲しくなるから、矢張し遊びにも行つた。さうかと言つて錢が無いのだから、好くつて面白い處には行けない。それゆゑ、錢のいらない珍しい處を〳〵と漁つて歩いた。ならうならば、何もしたくないのだから、家賃とか米

代とか、お母さんに酷しく言はれるものは、據なく書き物をして五圓、八圓取つて來たが、そんな處へ遊びに行く錢は「あゝ行きたい。」と思へば段々段々と大切にしてゐる書籍を凝乎と、披いて見たり、捻つて見たりして「あゝこれを賣らうか遊びに行かうか。」と思案をし盡して、最後にはさてどうしても賣つて遊びに行つた。矢來の婆さんの處にも度々古本屋を連れ込んだ。さうすればでも二三日は少しは心が落着いた。

その時分のことだらう。居先は明かさないが、一度お前が後始末の用ながらに婆さんの處へ寄つて、私の本箱を明けて見たり、抽斗を引出して見たりして、

「まあ本當に本も大方賣つて了つてゐる。あの人は何時まで、あゝなんだらう。」と言つて、それから私の夜具を戸棚から取出して、黴を拂つて、緣側の日の當る處に乾して、婆さんに晩に取入れてくれるやうに賴んで行つたことをも聞いた。

まあさういふやうにして、ちよび／＼書籍を賣つては錢を拵へて遊びにも行つた。けれども、それでも矢張し物足りなくつて、私の足は一處にとまらなかつた。唯女を買つただけでは氣の濟む譯がないのだ。私には一人樂しみが出來なければ寂しいのも紛れない。

處がさうしてゐる內に、到頭一人の女に出會(でつくは)した。
それがどういふ種類の女であるか、商賣人ではあるが、藝者ではない、といへばお前には判斷出來よう。一口に藝者でないと言つたつて——笑つてはいけない。——さう馬鹿には出來ないよ。遊びやうによつては隨分金(かね)も掛かる。加之(それに)女だつて銘々性格(たち)があるから、藝者だから面白いのばかしとは限らない。
その時は、多少纒(いくらか)まつた錢(かね)が骨折れずに入つた時であつたから、何時もちよび／＼本を賣つては可笑しな處ばかしを彷徨(うろつ)いてゐたが、今日は少し氣樂な贅澤がして見たくなつて、一度長田の友達といふので行つた待合に行つて、その時知つた女(の)を呼んだ。さうするとそれがゐなくつて、ほか女(の)が來た。それが初め入つて來て挨拶をした時にちらと見たのでは、それほどとも思はなかつたが、別の間に入つてからよく見ると些と男好きのする女だ。——お前が知つてゐる通り私はよく斯樣なことに氣がついて困るんだが、——脫いだ着物を、一寸觸つて見ると、着物も、羽織も、ゴリ／＼するやうな好いお召の新しいのを着てゐる。この社會のことには私も大抵目が利いてゐるから、それを見て直ぐ「これは、なか／＼賣れる女だな。」と思つた。

よく似合つた極くハイカラな束髪に結つて小肥な、色の白い、肌理の細かい、それでゐて血氣のある女で、――これは段々後になつて分つたことだが、――氣分もよく變つたが、顔が始終變る女だつた。――心もち平面の、鼻が少し低いが私の好きな口の小さい――尤も笑ふと少し崩れるが、――眼も平常はさう好くなかつた。でもさう馬鹿に濃くなくつて、柔か味のある眉毛の恰好から額にかけて、何處か氣高いやうな處があつて、泣くかどうかして憂ひに沈んだ時に一寸々々品の好い顔をして見せた。そんな時には顔が小さく見えて、眼もしをらしい眼になつた。後には種々なことから自暴酒を飲んだらしかつたが、酒を飲むと堪らない大きな顔になつて、三つ四つも老けて見えた。私も「どうしてこんな女が、さう好いのだらう？」と少し自分でも不思議になつて、終には淺間しく思ふことさへもあつた。肉體も厚味のある幅の狹い、さう大きくなくつて、私とはつりあひが取れてゐた。

で、その女をよく見ると、「あゝ斯ういふ女がゐたか。」と思つた。それが、その女が私の氣に染みついたそも〳〵だつた。さうすると、私の心は最早今までと違つて何となく、自然に優しくなつた。

靜(じつ)と女の指――その指がまた可愛い指であつた、指環も好いのをはめてゐた――を握つたり、もんだりしながら、

「君は大變綺麗な手をしてゐるねえ。さうして斯う見た處、こんな社會に身を落すやうな人柄でもなささうだ。それには何れ種々(いろん)な理由(わけ)もあるのだらうが、出來ることなら、少しも早くこんな商賣は止して堅氣になつた方がいゝよ。君は何となしまだ此の社會の灰汁(あく)が骨まで染込んでゐないやうだ。惜しいものだ。」

　人間といふものは勝手なものだ。こんな境涯に身を置く人に同情があるならば、私はどの女に向つても同じことを言ふ筈だが、私は其の女にだけそれを言つた。さう言ふと、女は指を私に任せながら、默つて聞いてゐた。

「名は何といふの？」

「宮。」

「それが本當の名？」

「えゝ本當は下田しまといふんですけれど、此處では宮と言つてゐるんです。」

「宮とは可愛い名だねえ。……お宮さん。」

「えツ。」

「私はお前が氣に入つたよ。」

「さうォ……あなたは何をなさる方?」

「さあ何をする人間のやうに思はれるかね。言ひ當てゝ御覽。」

さういふと、女は、しを〳〵した眼で、まじ〳〵と私の顏を見ながら、

「さう……學生ぢやなし、商人ぢやなし、會社員ぢやなし、……判りませんわ。」

「さう……判らないだらう。まあ何かする人だらう。」

「でも氣になるわ。」

「さう氣にしなくつても心配ない。これでも惡いことをする人間ぢやないから。」

「さうぢやないけれど……本當言つて御覽なさい。」

「これでも學者見たやうなものだ。」

「學者!……何學者?……私、學者は好き。」

本當に學者が好きらしう聞くから、

「さうか。お宮さん學者が好きか。この土地にや、お客の好みに叶ふやうに、頭だけ

束髮の外見だけのハイカラが多いんだが、お宮さんは、ぢや何處か學校にでも行つてゐたことでもあるの？」

　學生とか、ハイカラ女を好む客などに對しては、その客の氣風を察した上で、女學生上りを看板にするのが多い。――それも商賣をしてゐれば無理の無いことだ。――その女も果して女學校に行つて居つたか、どうかは遂に分らなかつたが、所謂學者が好きといふことは、後になるに從つて本當になつて來た。

　から言つて先方の意に投ずるやうに聞くと、

「本鄕の××女學校に二年まで行つてゐましたけれど、都合があつて廢したんです。」と言ふから、ぢやどうしてこんな處に來てゐる……と訊いたら、斯うしてお母さんを養つてゐると言ふ。お母さんは何處にゐるんだ？　と聞くと、下谷にゐて他家の間を借りて、裁縫をしてゐるんです、と言ふ。

　私は、全然直ぐそれを本當とは思はなかつたけれど、女の口に乘つて、紙屋治兵衞の小春の「私一人を賴みの母樣。南邊の賃仕事して裏家住み……」といふ文句を思ひ起して、お宮の母親のことを本當と思ひたかつた。――否、或は本當と思込んだのか

も知れぬ。
お前がこんなことをしてお母さんを養はなくつてもほかに養ふ人はないのか？　と訊くと、姉が一人あるんですけれど、それは深川のある會社に勤める人に嫁いてゐて先方に人數が多いから、お母さんは私が養はなければならぬ、としをらしく言ふ。
「さうか。……ぢや宮といふ名は、小説で名高い名だが、宮ちやん、君は小說のお宮を知つてゐるかね？」
「えゝ、あの貫一のお宮でせう？　知つてゐます。」
「さうか。まあ彼様なものを讀む學者だ。私は。」
「ぢやあなたは文學者？　小說家？」
「まあそこらあたりと思つてゐれば可い。」
「私もさうかと思つてゐましたわ。……私、文學者とか法學者だとか、そんな人が好き。あなたの名は何といふんです？」
「雪岡といふんだ。」
「雪岡さん。」と、獨り飲込むやうに言つてゐた。

「宮ちやん、年は幾歳？」
「十九。」
十九にしては、まだ二つ三つも若く見えるやうな、派手な薄紅葉色の、シツポウ形の友禪縮緬と水色繻子の狹い腹合せ帶を其處に解き棄ててゐたのが、未だに、私は眼に殘つてゐる。
暫時そんな話をしてゐた。

私は、最初からこんな嬉しい目に逢つたのは、生れて初めてであつた。水の中を泳いでゐる魚ではあるが、私は急に、そのまゝにして置くのが惜しいやうな氣がして來て、
「宮ちやん。君には、もう好い情人が幾人もあるんだらう。」と言つて見た。
すると、お宮は、眼を瞑つた顏を口元だけに微笑みながら、
「そんなに他人の性格なんか直ぐ分るもんですか。」甘えるやうに言つた。私は性格と

いふ言葉を使つたのに、また少し興を催して、
「性格！…性格なんて、君は面白い言葉を知つてゐるねえ。」と世辭を言つた。――兎に角漢語をよく用ひる女だつた。
さうして私は唯柔かい可愛らしい心になつて、蒲團を疊む手傳ひまでしてやつた。
他の室に戻つてから、
「また來るよ。君の家は何といふ家？」
「家は澤村といへば分ります。…あゝそれから電話もあります。電話は浪花のね、三四の十二でせう。それに五つ多くなつて、三四十七、三千四百十七番と覺えてゐれば好いんです。」と立ちながら言つて、疲れて顳顬の邊を蒼くして歸つて行つた。
私は、何だか俄に枯木に芽が吹いて來たやうな心持がし出して、――忘れもせぬ十一月の七日の雨のバラ〳〵と降つてゐた晩であつたが、私も一足後から其家を出て番傘をさげながら――不思議なものだ、その時ふと傘の破れてゐるのが氣になつたよ。種々な屋臺店の幾個も竝んでゐる人形町の通りに出た。しつとりとした小春らしい夜であつたが、私は自然にふい〳〵口淨瑠璃を唸りたいやうな氣になつて、すしを摘ま

うか、燒とりにしようかと、考へながら頭でのれんを分けて露店の前に立つた。
その錢が入つたら――例の箱根から酷しくも言つて來るし、自分でも是非そのまゝにしてゐる荷物を取つて來たり、勘定の仕殘りだのして二三日遊んで來ようと思つてゐたのだが、私はもう箱根に行くのは厭になつた。で、種々考へて見て箱根へは爲替で錢を送ることにして、明日の晩早くからまた行つた。さうして此度は泊つた。――斯ういふ處へ來て泊るなんといふことは、お前がよく知つてゐる、私には殆ど無いと言つて可い。

續けて行つたものだから、お宮は、入つて來て私と見ると「さては……」とでも思つたか「いらツしやい。」と離れた處で尋常に挨拶をして、此度上げた顏を見ると嬉しさを、キユツと紅をさした脣で小さく食ひ締めて、誰が來てをるのか、といふやうな風に空とぼけて、眼を遠くの壁に遣りながら、少し、首を斜にして、默つてゐた。その顏は今に忘れることが出來ない。好い色に白い、意地の强さうな顏であつた。二十歲頃の女の意地の强さうな顏だから、私には唯美しいと見えた。
私は可笑しくなつて此方も暫く默つてゐた。けれども、私はそんなにして默つてゐ

るのが嫌ひだから、
「そんな風をしないでもつと此方においで。」と言つた。
待つてゐる間、机の上に置いてあつた硯箱を明けて、卷紙にいたづら書きをしてゐた處であつたから、机の向うに來ると、
「宮ちやん、これに字を書いて御覽」
「えゝ書きます。何を？」
「何とでも可いから。」
「何かあなたさう言つて下さい。」
「私が言はないつたつて、君が考へて何か書いたら可いだらう。」
「でもあなた言つて下さい。」
「ぢや宮とでも何とでも。」
「‥‥私書けない。」
「書けないことはなからう、書いてごらん。」
「あなた神經質ねえ。私そんな神經質の人嫌ひ。」

「……」

「分つてゐるから、……あなたのお考へは。あなた私に字を書かして見てどうするつもりか、ちやんと分つてゐるわ。ですから、後で手紙を上げますよ。あゝ私あなたに濟まないことをしたの。名刺を貰つたのを、つい無くして了つた。けれど住所はちやんと憶えてゐます。……××區××町××番地雪岡京太郎といふんでせう。」

こんなことを言つた。私に字を書かして見て何うするつもりかあなたの心は分つてゐます、なんて自惚れも强い女だつた。

その晩。待合の湯に入つた。「お前、先入つておいで。」と言つて置いて可い加減な時分に後から行つた。

なほ他の室に行つてから、

「宮ちやん、お前斯ういふ處へ來る前に何處か嫁いてゐたことがあるの？」

と、具合よく聞いて見た。

「えゝ一度行つてゐたことがあるの。」と問ひに應ずるやうに返事をした。

日毎、夜毎に種々な男に會ふ女と知りながら、また何れ前世のあることとは察して

ゐながら、私は自分で勝手に尋ねて置いて、それに就いてした返事を聞いて少し嫉ましくなつて來た。

「どういふ人の處へ行つてゐたの？」

「大學生の處へ行つてゐたの。…卒業前の法科大學生の處へ行つてゐたんです。」

私は腹の中で、「ヘツ！　うまいことを言つてゐる。成程本郷の女學校に行つてゐた、といふから、もしさうだとすれば、どうせ野合者（くつゝきもの）だ。さうでなければ生計（くら）しかねて、母子（おやこ）相談での内職か。」と思つたが、何處かさう思はせない品の高い處もある。

「へえ。大學生！　大學生とは好い人の處へ行つてゐたものだねえ。どういふやうな理由（わけ）から、それがまたこんな處へ來るやうになつたの？」

「行つて見たら他に細君があつたの。」

「他に細君があつた！　それはまた非道い處へ行つたものだねえ。欺されたの？」大學生には、なか〳〵女たらしがゐる、また女の方で隨分たらされもするから、私は、或は本當かとも思つた。

「えゝ。」と問ふやうに返事をした。

「だつて、公然、仲に立つて世話でもする人はなかつたの？　お母さんが付いて居ながら、大事な娘の身で、そんな、もう細君のある男の處へ行くなんて。」
「そりや、その時は口を利く人はあつたの。ですけれど此方がお母さんと二人きりだつたからうまく皆に欺されたの。」
私は、女が口から出任せに嘘八百を言つてゐると思ひながら、聞いてゐれば、聞いてゐるほど、段々先方の言ふことが眞實のやうにも思はれて來た。さうして憐れな女母子の爲に、話の大學生が憎いやうな、また羨ましいやうな氣がした。
「ひどい大學生だねえ。お母さんが――さぞ腹を立てたらう。」
「そりや怒りましたさ。」
「無理もない、ねえ。……が一體どんな人間だつた？　本當の名を言つて御覽。」
女は枕に顏を伏せながら、それには答へず、「はあ……」と、さも術なさうな深い太息をして、「だから、私、男はもう厭！」傍を構はず思ひ入つたやうに言つた。「私もその人は好きであつたし、その人も私が好きであつたんですけれど、細君があるから、どうすることも出來ないの。……溫順しい、それは深切な人なんですけれど、男とい

ふものは、あゝ見えても皆道樂をするものですかねえ。……下宿屋の娘か何かと夫婦になつて、それにもう兒があるんですもの。」
「フム。……ぢや別れる時には二人とも泣いたらう。」
「えゝ、そりや泣いたわ。」女は悲しい甘い涙を憶ひ起したやうな少し浮いた聲を出した。
「自分でも私はお前の方が好いんだけれど、一時の無分別から、もう兒まで出來てゐるから、どうすることも出來ない、と言つて男泣きに泣いて、私の手を取つて散々あやまるんですもの。——その女の方で何處までも付いてゐて離れないんでせう——私の方だつて、ですから怒らうたつて怒られやしない。氣の毒で可哀さうになつたわ。——でも細君があると知れてから、隨分もんで苛めてやつた。」
人を傍に置いてゐて、さう言つて獨りで忘れられない樂しい追憶に耽つてゐるやうであつた。私は靜と聞いてゐて、馬鹿にされてゐるやうな氣がしたが、自分もその大學生のやうに想はれて、さうして苛められるだけ、苛められて見たくなつた。
その男は高等官になつて、名古屋に行つてゐると言つた。江馬と言つて、段々遠慮

がなくなるにつれて、何につけ「江馬さん〳〵。」と言つてゐた。
　それのみならず、大學生に馴染があるとか、あつたとかいふのが此の女の誇りで、後になつても、よく「角帽姿はまた好いんだもの。」と口に水の溜まるやうな調子で言ひ言ひした。
　すると、お宮は暫くして、フッと顔を此方に向けて、
「あなた、本當に奥様は無いの？」
「あゝ。」
「本當に無いの？」
「本當に無いんだよ。」
「男といふものは眞個に可笑しいよ。細君があればあると言つて了つたらよささうなものを、此方で『あなた奥様があつて？』と聞くと大抵の人があつても無いといふよ。」
「おや私も有つても無いと言つてゐるやうに思はれるかい？」
「どうだか分らない。」人の顔を探るやうに見て言つた。
「僕、本當はねえ、あつたんだけれど、今は無いの。」

「さうら……本當に？」女はにや〳〵笑ひながら、油斷なく私の顏を見戍つた。

「本當だとも。有つたんだけれど、別れたのさ。……薄情に別れられたのさ。……一人で氣樂だよ。……同情してくれ給へ！　衣類だつて、あれ、あの通り綻びだらけぢやないか。」

「それで今、その女はどうしてゐるの？」お宮の瞳が冴えて、兩頰に少し熱を帶びて來た。

「さあ、別れたツきり、自家にゐるかどうしてゐるか、行先なんか知らないさ。」

「本當に？……何時別れたんです？……ちやんと分るやうに仰しやい！　法學者の處にゐたから、曖昧なことを言ふと、すぐ弱點を抑へるから。……どうして別れたんです？」氣味惡さうに聞いた。

「色々一緒にゐられない理由があつて別れたんだが、最早半歲も前の事さ。」

「ヘツ、今だつてあなたその女に會つてゐるんでせう。」操るやうに疑つて言つた。

「馬鹿な。別れた細君に何處に會ふ奴があるものかね。」

「さう……でも其の女のことは矢張し思つてゐるでせう。」

「そりや、何年か連添うた女房だもの、少しは思ひもするさ。斯うしてゐても忘れられないこともある。けれども最早いくら思つたつて仕様がないぢやないか。宮ちやんの、その人のことだつて同じことだ。」

「……私、あなたの家に遊びに行くわ。」

本當に遊びて來て貰ひたかつた。けれども今來られては都合が惡い。

「あゝ、遊びにお出で。……けれども今は一寸家の都合が惡いから、その内私家を變らうと思つてゐるから、さうしたら是非來ておくれ。」

私は、その時初めて、お前のお母さんの家を出ようといふ氣が起つた。自然に心の移る日を待つてゐたらお宮を遊びに來さす爲には早く他へ行きたくもなつた。

さう言ふと、お宮はまた少し胡散さうに、

「都合が惡い！……ヘツ、矢張しあるんだ。」と微笑んだ。

「ある處かね。あれば仕合せなんだが。」

「ぢや遊びに行く。」

「……………。」

「奥様がなくつて、ぢやあなた何様な處にゐるの？」

「年取つた婆さんに御飯を炊いて貰つて、二人でゐるんだから面白くもないぢやないか。宮ちやんに遊びに來て貰ひたいのは山々だけれど、その婆さんは私が細君と別れた時分のことから、知つてゐるんだから、少しは私も年寄りの手前を愼まなければならぬのに、幾許半歳經つと言つたつて、宮ちやんのやうな綺麗な若い女に訪ねて來られると、一寸具合が惡いからねえ。屹度棒るから棒つたらお出で。」

すると、「宮ちやん〳〵。」と女中の低聲がして、階段の方で忙しさうに呼んでゐる。

二人は少しはつとなつた。

「どうしたんだらう？」

「どうしたんだらう？……」二三秒して、「えツ？」と女中に聞えるやうに言つた。「一寸行つて見て來る。」

お宮は、そのまゝ出て行つた。

四五分間して戻つて來た。「此の頃、警察がやかましいんですつて。戸外に變な者がウロ〳〵してゐるやうだから何時遣つて來るかも知れないから、若し來たら階下から

『宮ちやん〳〵』ツて聲をかけるから、さうしたら直ぐ降りてお出でツて。……ちやんと隱れる處が出來てゐるの。……今燈を點して見せて貰つたら、ずうつと奧の方の物置(ものおき)室の座板の下に疊を敷いて座敷があるの……」

さう言つて大して驚いた氣色も見えぬ。また私も驚きもしなかつた。

やがて廊下を隔てた隣の間でも、ドシ〳〵と男の足音がしたり、靜かな話聲がしたり、衣擦れの音がしたりして段々客があるらしい。

自家(うち)に歸れば猫の子もゐない座敷を、手探りにマツチを擦つて、汚れ放題汚れた煎餅蒲團に一人柏餅のやうになつて寢ねばならぬやうな生活をしてゐたので、私はもう一生待合で斯うして暮したくなつた。

「……。」私は何か言つた。

廊下の足音が偶に枕に響いた。

「……だれか來やしないか。……一寸(ちよいと)お待ちなさい。……それからだれか其處にゐるよ……」手眞似で制した。警察のやかましいぐらゐ平氣でゐるかと思つたら、また存外神經質で處女(きむすめ)のやうな臆病な性質(ところ)もあつた。

夜が更ければ、更けるほど、朝になればなつても不思議に美しい女であつた。
きぬ〴〵の別れ、といふ言葉は、想ひ出されないほど前から聞いて知つてはゐたが、元來堅人の私は恥づべきことか、それとも恥とすべからざることか、それが果して、どういふ心持のするものか、この歳になる迄、自分ではつひぞ覺えがなかつたが、その朝は生れて初めて成程これが「後朝の別れ」といふものかと懐かしいやうな殘り惜しいやうな想ひがした。

女が「ぢや切りがないから、もう歸りますよ。」と言つて歸つて行つた後で、女中の持つて來た櫻湯に潤いた咽喉を濕して、十時を過ぎて、其處を出た。

午前の市街は騷々しい電車や忙がしさうな人力車や大勢の人間が、眼の廻るやうに動いてゐた。

十一月初旬の日は、好く晴れてゐても、弱く、靜かに暖かであつたが、私には、それでもまだ光線が稍強過ぎるやうで、脊筋に何とも言ひやうのない好い心地のだるさを覺えて、少しは肉體の處々に冷たい感じをしながら、何といふ目的もなく、唯、も少し永く此の心持を續けてゐたいやうな氣がして浮々と來合せた電車に乘つて遊びに

行きつけた新聞社に行つて見た。
長田は旅行に出てゐなかつたが、上田や村田と一しきり話をして、自家に戻つた。お宮が昨夜あなたの處へ遊びに行くと言つた。それには自家を拵らねばならぬ。拵るには錢が要る。どうして錢を拵へようかと、そんなことを考へながら戻つた。
それから二三日して長田の家に遊びに行くと、長田が——よく子供が歯を出してイーといふことをする、丁度そのイーをしたやうな心持のする險しい顔を一寸して、
「此間櫻木に行つたら『この頃屢くいらつしやいます。泊つたりしていらつしやいます。』……お宮といふのを呼んだと言つてゐた。……僕は泊つたりすることはないが、……お宮といふのはどんな女か、僕は知らないが、……」
その言葉が、私の胸には自分が泊らないのに、どうして泊つた？ 自分がまだ知らない女をどうして呼んだ？ と言つてゐるやうに響いた。私は苦笑しながら默つてゐた。長田は言葉を續けて、
「此間社に來て、昨夜耽溺をして來た、と言つてゐたと聞いたから、はあ此奴は屹度櫻木に行つたなと思つたから、直ぐ行つて聞いて見てやつた。」笑ひながら嘲弄するや

うに言つた。

私は、返事の仕様がないやうな氣がして、

「うむ：：お宮といふんだが、君は知らないのか：：。」と下手に出た。

他の女ならば何でもないが、このお宮とのことだけは、誰にも知られたくなかつた。尤も平常から聞いて知つてゐる長田の遊び振りでは或は夙にお宮といふ女のゐることは知つてゐるんだが、長田のこととてつい何でもなく通り過ぎて了つたのかとも思つてゐた。：：初めてお宮に會つた時にもうそんなことが胸に浮んでゐた。それが今、長田の言ふのを聞けば、長田は知つてゐなかつた。知つてゐなかつたとすれば尙ほのこと、知られたくなかつたのだが、既に斯う突き止められた上に、惡戯で岡燒きの强い人間と來てゐるから、此の形勢では早晩何とかしずにはゐまい。もしさうされたつて「賣り物、買ひ物」それを差止める權利は毛頭無い。高があゝいふ商賣の女を長田と張合つたとあつては、自分でも野暮臭くつて厭だ。もし他人に聞かれでもすると一層外聞が惡い。此處は一つ觀念の眼を瞑つて、長田の心で、ならうやうにならして置くより他はないと思つた。

が、さうは思つたものの、自分の今の場合、折角探しあてた寶をむざ〳〵他人に遊ばれるのは、身を斬られるやうに痛い。と言つて「後生だ。どうもしないで置いてくれ。」と口に出して賴まれもしないし、賴めば、長田のことだから、一層惡く出て惡戲をしながら、默つてゐるくらゐのことだ。

と、私はお宮ゆゑに種々心を碎きながら、自家に戻つた。この心をお宮に知らす術はないかと思つた。

取留めもなく、唯自家で沈み込んでゐた時分には、どうかして心の紛れるやうに好きな女でも見付かつたならば、意氣も揚るであらう。さうしたら自然に讀み書きをする氣にもなるだらう。讀み書きをするのが、どうでも自分の職業とあれば、それを勉强せねば身が立たぬ、と思つてゐた。すると女は兎も角も見付かつた。けれども見付かると同時に、此度はまた新しい不安心が湧いて來た。しばらく寂しく沈んでゐた心が、一方に向つて强く動き出したと思つたら、それが樂しいながらも苦しくなつて來た。

女からは初めて、心を惹くやうな、悲しんで訴へるやうな、氣取つた手紙を寄越し

た。私の心は何も彼も忘れて了つて、唯其方の方に迷うてゐた。錢がなければ女の顔を見ることが出來ない。が、その錢を拵へる心の努力は決して容易ではなかつた。――辛抱して錢を拵へる間が待たれなかつたのだ。

さうする内に箱根から荷物が届いた。長く彼方にゐるつもりであつたから、その中には私に取つて何よりも大切な書籍もあつた。之ばかりはどんなことがあつても賣るまいと思つてゐたが、お宮の顔を見る爲に、それも賣つて惜しくないやうになつた。

厭味のない紺靑の、サンタヤナのライフ・オブ・リーゾンは五册揃つてゐた。此の夏それを丸善から買つて抱へて歸る時には、電車の中でも紙包を披いて見た。オリーヴ表紙のサイモンヅの「伊太利紀行」の三册は、十幾年來憧れてゐて、それも此の春漸く手に入つたものであつた。座右に放さなかつた「アミエルの日記」と、サイモンヅの譯したベンベニユトオ・チエリニーの自叙傳とは西洋に誂へて取つたものであつた。アーサア・シモンズの「七藝術論」、サント・ブーブの「名士の賢婦の畫像」などもあつた。

私は其等をきちんと前に竝べて、獨り熟々と見惚れてゐた。さうしてゐると、その

中に哲人文士の精神が籠つてゐて、何とか言つてゐるやうにも思はれる。或はまた今まで其等が私に嘘を吐いてゐたやうにも思はれる。

私がそんな書籍を買つてゐる間、お前はお勝手口で、三十日に借金取の斷りばかりしてゐた。私もまさかそんな書籍を買つて來て、書箱の中に竝べ立てゝ、それを靜と眺めてさへゐれば、それでお前が、私に言つて責めるやうに「今に良くなるだらう。」と安心してゐるほどの分らず屋ではなかつたが、けれども唯お前と差向つてばかりゐたのでは何を目的に生きてゐるのか、といふやうな氣がして、心が寂しい。けれどもさうして書箱に、そんな種々な書籍があつて、それを時々出して見てゐれば、其處に生き甲斐もあれば、また目的もあるやうに思へた。私だとても米代を拂ふ胸算もなしに、書籍を買ふのでもないが、でもそれを讀んで、何か書いてゐれば、「今に良くなるのだらう。」くらゐには思はないこともなかつた。

これはお宮の髮容姿と、「ライフ・オブ・リーゾン」や「アミエルの日記」などと比べて見て、初めて氣の付いたことでもない。

いや、お前に「私もよもやに引かされて、今にあなたが良くなるだらう、今に良く

なるだらうと思つてゐても、何時まで經つてもよくならないのだもの。」と口に出して言はれる以前から自分にも分つてゐた。「良くなる。」といふのは、何が良くなるのだらう？　私には「良くなる。」といふことが、よく分つてゐるやうで、考へて見れば見るほど分らなくなつて來た。

私は一度は手を振上げて其の本に「何だ、馬鹿野郎！」と、拳固を入れた。けれども果して書籍に入れたのやら、それとも私自身に入れたのやら、分らなくなつた。

私は、ハツとなつて、振返つて、四邊を見廻した。けれども幸ひ誰もゐなかつた。固より誰もゐよう筈はない。

身體は自家にゐながら、魂魄は宙に迷うてゐた。お宮を遊びに來さす爲には家を棒りたいと思つたが、お前のこと、過去のことを思へば、無態と、此處を餘處へ行く事も出來ない。お母さんの顏には、日の經つごとに「何時までゐるつもりだ。さツ〳〵と出て行け！」といふ色が、一日々々と濃く讀めた。またそれを口に出して言ひもした。私も無理はないと知つてゐた。さうでなくてさへ況して年を取つた親心には、可愛い生みの娘に長い間苦勞をさした男は、譯もなく唯、仇敵よりも憎い。お母さんで

見れば、私と別れたからと言つて、そんなら
お前をどうしようといふのではない。唯暫時でも傍へ置いときさへすれば好い。それが仇敵がさうしてゐる爲に、娘を傍に置くことが出來ないばかりではない、自分で仇敵に朝晩の世話までしてやらなければならぬ。老母（としより）に取つては、それほど逆さまなことはない。

けれども、私の腹では、假令お前はゐなくつても、此處（こゝ）に斯うしてゐれば、まだ何處か縁が繋がつてゐるやうにも思はれる。出て了へば、此度こそ最早（もう）それきりの縁だ。それゆゑイザとなつては、思ひ切つて出ることも出來ない。さうしてゐて、たゞ一寸逃れにお宮の處に行つてゐたかつた。

四度目であつたか――灯影の暗い座敷に、獨り机によつてゐたら、引入れられるやうに自分のこと、お前のこと、またお宮のことが思はれて、こらへられなくなつた。お宮には、錢（かね）さへあれば直ぐにも逢へる。逢つてゐる間は他の事は何も彼も忘れてゐる。私はどうしようかと思つて、立上つた。立上つて考へてゐると、もうそのまゝ坐るのも大儀になる。私は少し遲れてから出掛けた。

櫻木に行くと、女中が例（いつも）の通り愛想よく出迎へたが、上ると、氣の毒さうな顔をし

て、
「先刻、澤村から、電話でねえ。あなたがいらつしやるといふ電話でしたけれど、他の者の知らない間に主婦さんが、もう一昨日から斷られないお客様にお約束を受けてゐて、つい今、お酉さまに連れられて行つたから、今晩は遲くなりませうツて。あなたがいらしつたら、一寸電話口まで出て戴きたいつて、さう言つて來てゐるんですが……」

私は、さうかと言つて電話に出たが、固より「えゝ／＼。」と言ふより仕方がなかつた。

女中は、商賣柄、「まことにお氣の毒さまねえ。今晩だけ他な女をお遊びになつては如何です。他にまだ好いのもありますよ。」と言つてくれたが、私はお宮を見付けてから、もう他の女は振り向いて見る氣にもならなかつた。

まだ淺い馴染とはいひながら、それまでは行く度に機會好く思ふやうに呼べたが、逢ひたいと思ふ女が、さうして他の客に連れられてお酉さまに行つた、と聞いては、固より有りがちのことと承知してゐながらも、流石に好い氣持はしなかつた。さうい

ふ女を思ふ自分の心を哀れと思うた。
「いや！　また來ませう。」と其家を出て、そのまゝ戻つたが、私は女中達に心を見透かされたやうで、獨りで恥しかつた。さぞ悄然として見えたことであらう。
戸外は寒い風が、道路に、時々輕い砂塵埃を捲いてゐた。その晩は分けて電車の音も冴えて響いた。ましてお酉さまと、女中などの言ふのを聞けば、何となく冬も急がれる心地がする。
「あゝ詰らないく。斯うして、浮々としてゐて、自分の行末はどうなるといふのであらう？」と、そんなことを取留めもなく考へ込んで、もちつとで電車の乘換へ場を行き過ぎる處であつた。心柄とはいひながら、夜風に吹き曝されて、私は眼頭に涙を潤ませて歸つた。
それでも少しは、何かせねばならぬこともあつて、二三日間を置いてまた行つた。私は電車に乘つてゐる間が毎時も待ち遠しかつた。さういふ時には時間の經つのを忘れてゐるやうに面白い雜誌か何か持つて乘つた。
その時は三四時間も待たされた。――此間の晩もあるのに、あんまり來やうが遲い

から、來たら些と口說を言つてやらう、それでももう來るだらうから、一つ寢入つた風をしてゐてやれ、と夜着の襟に顏を隱して自分から寢た氣になつても見る。するとそれも、ものの十分間とは我慢しきれないで、またしても顏を出して何度見直したか知れない雜誌を繰披いて見たり、好きもせぬ煙草を無暗に吹かしたり、獨りで焦れたり、嬉しがつたり、浮かれたりしてゐた。

火鉢の佐倉炭が、段々眞赤に圓くなつて、冬の夜ながらも、室の中はしつとりとしてゐる。煙草の煙で上の方はぼんやりと淡靑くなつて、黑の勝つた新しい模樣の友禪メリンスの小さい幕を被せた電燈が朧に霞んで見える。

階下(した)では女中の聲も更けた。もう大分前に表の木戸を降したらしい。時々低く電話を鳴らしてお宮を催促してゐるやうであつた。

やがてすうつと襖が開いて、衣擦れの音がして、枕頭の火鉢の傍に默つて坐つた。私は獨りで擽られるやうな氣持になつて凝乎と堪へて蒲團を被つたまゝでゐた。

女は矢張し默つて輕い太息を洩らしてゐる。

私は到頭負けて襟から顏を出した。

女は雲のやうな束髪をしてゐる。何時か西洋の演劇雑誌で見たことのある、西洋の女俳優のやうな頭髪をしてゐる、と思つて私は仰けに寝ながら顔だけ少し横にして、凝乎と微笑ひ〳〵女の姿態に見惚れてゐた。

壁鼠とでもいふのか、くすんだ地に薄く茶絲で七寳繋ぎを織り出した例のお召の羽織に矢張りこれもお召の沈んだ小豆色の派手な矢絣の薄綿を着てゐた。

深夜の、朧に霞んだ電燈の微光の下に、私は、それを、何も彼も美しいと見た。

女は、矢張り默つてゐる。

「おい！　どうしたの？」私は矢張り負けて靜かに斯う口を切つた。

「どうも遲くなつて濟みませんでした。」優しく口を利いて、輕く嬌態をした。

さう言つたまゝ、後はまた默あつて此度は一層强い太息を洩らしながら、それまでは火鉢の縁に翳してゐた兩手を懷中に入れて、傍の一閑張りの机にぐツたりと身を凭せかけた。さうして右の掌だけ半分ほど胸の處から覗かして、襦袢の襟を抑へた。その指に指環が光つてゐた。崩れた膝の間から派手な長襦袢が溢れてゐる。

女と逢ひそめてから、これまでまだ四度にしかならぬ。それが、そんな惱んだ風情

を見せられるのが初めてなので、それをも、私は嬉しく美しいと自分も黙あつて飽かず眺めてゐた。
けれども到頭辛抱しきれないで、また、
「どうしたの?」と重ねて優しく問うた。すると、女は、「はあツ」と絕え入るやうに更に強い太息を吐いて片袖に顏を隱して机の上に俯伏して了つた。束髮は袖に緩く亂れた。
私は哀れに嬉しく心許なくなつて來た。
戸外を更けた新内の流しが通つて行つた。
「おい! 本當にどうかしたの?」私は三度問うた。
すると尙ほ暫時經つて、女は、
「ほうツ」と、一つ深あい呼吸をして、疲れたやうにそうツと顏を上げて、此度はさも思ひ餘つたやうに胸元をがつくりと落して、頸を肩の上に投げたまゝ味氣なささうに、目的もなく疊の方を見詰めて居た。矢張り兩手を懷中にして。
私は何處までも凝乎とそれを見てゐた。

平常はあまり眼に立たぬほどの切れの淺い二重瞼が少し逆上となつて赤く際だつてしをれて見えた。睫毛が長く眸を霞めてゐる。

「どうしたい！」四度目には氣輕く訊ねた。「散々私を待たして置いて來る早々沈んで了つて。何でそんな氣の揉めることがあるの？　好い情人でもどうかしたの？」

「遲くなつたつて私が故意に遲くしたのぢやないし。ですから、濟みませんでした、と謝つてゐるぢやありませんか。早く來ないと言つたつて、方々都合が好いやうに行きやしない。……はあツ、私もうこんな商賣するのが厭になつた。……」うるささうに言つた。

それまでは、機會に依つては、何處かつんと思ひ揚つて、取澄ましてゐるかと思へば、またひどく愼やかで、愛想もさう惡くはなかつたが、今夜は餘程思ひ餘つたことがあるらしく、心が惱めば惱むほど、放埓な感情がぴり〳〵と苛立つて、人を人臭いとも思はぬやうな、自暴自棄な氣性を見せて來た。

そのとき私はます〳〵「とりや好い女を見つけた。この先どうか自分の持物にしてモデルにもしたい。」と腹で考へた。さう思ふと尙ほ女が愛しくなつて、一層聲を和げ

て嫌すやうに、

「…何を言つてる？　君が早く來ないと言つてそれを何とも言つてやしないぢやないか。見給へ！　斯うして溫順しく書籍を讀んで待つてゐたぢやないか。…戸外はさぞ寒かつたらう。さツ、…お寢！」

「本當に濟みませんでしたねえ、隨分待つたでせう。」此方に顏を見せて微笑んだ。

「さあ〳〵そんなことはどうでも好いわ…。」けれどもそれは女の耳に入らぬやうであつた。

「はあツ…私、困つたことが出來たの。」聲も絕え〳〵に言つた。「困つた。…どうしよう？…言つて了はうか。」と一寸小首を傾げたが、「言はうかなあ…言はないで置からかツ。」と一つ舌打ちをして、「言つたら、さぞあなたが愛想を盡かすだらうなあ！」と獨りで思案にくれて、とつおいつしてゐる。私は、やゝ心許なくなつて來た。

「どうしたの？…私が愛想を盡かすやうなことツて。何か知らぬが、差支へなければ言つて見たら好いぢやないか。」私はその時些と胸に浮んだので、「はあ！　ぢや分つた！　私の知つた人でも遊びに來たの？」と續けて訊いた。

「否む！」と頭振を掉つた。私も幾許何でもまさかそんなことは無いであらうと思つてゐたが、あんまり心配さうに言ふので、もしそんなことでもあるのかと思つたがさうでなくつて、先づそれは安心した。

「ぢや何だね？　待たして焦らしてさ！　尙ほその上に唯困つたことがある、困つたことがある。……と言つてゐたのでは私も斯うしてゐれば氣に掛かるぢやないか。役に立つやうだつたら、私も一緖に心配しようぢやないか。……何樣なこと？」

「はあツ」と、まだ太息を吐いてゐる。「ぢや思ひ切つて言つて了はうかなあ！……あなたが屹度愛想を盡かすよ。……盡かさない？」うるさく訊く。

「どんなことか知らぬが盡かしやしないよ、僕は君といふものが好いんだから假令これまでに如何なことをしてゐようとも、どんな素姓であらうとも差支へないぢやないか。それより早く言つて聞かしてくれ。宵からさう何や彼に焦らされてゐては私の身も耐らない。」と言ひは言つたが、腹では本當にたよりない心持がして來た。

「ぢや屹度愛想盡かさない？」

「大丈夫！」

「ぢや言ふ！……私には情夫があるの！」
「へえツ……今？」
「今……」
「何時から？」
「以前から！」
「以前から？　ぢや法科大學の學生の處に行つてゐたといふのはあれは噓？」私もまさかと思つてゐたが、それでも少しは本當もあると思つてゐた。
「それもさうなの。けれどまだ其の前からあつたの。」
「その前からあつた！　それはどんな人？」
先刻から一人で浮かれてゐた私は、眞面目に心細くなつて來た。さうして腹の中で斯ういふ境涯の女にはよくあり勝ちな、惡足でもあることと直ぐ察したから、
「遊人か何か？」續けさまに訊いた。
「いや、さうぢやないの。……それも矢張り學生は學生なの。……それもなか〳〵出來ることは出來る人なの……」低い聲で獨り恥辱を辯解するやうに言つた。其男を惡

く言ふのは、自分の古傷に觸られる心地がするので、成るたけ靜として置きたいやうである。

「ふむ。矢張し學生で：：：大學生の前から：：：。」私は獨語のやうに言つて考へた。

女も、それは耳にも入らぬらしく、再び机に體を凭して考へ込んでゐる。

「それでその人とは今どういふ關係なの？――ぢや大學生の處に、欺されてお嫁に行つたといふのも嘘だつたね。：：：さうか：：：。」私は輕くまた獨語のやうに言つた。さうして自分から、美しう信じてゐた女の箔が急に剝げて安ツぽく思はれた。溫順しいと思つた女が、惡擦れのやうにも思はれて唯聞いただけでは少し恐くもなつて來た。

「えゝ嘘なの。：：：私にはその前から男があるの。：：：はあツ」とまた一つ深い、太息をして、更に言葉を續けた。「私は、その男に去年の十二月から、つい此間まで隱れてゐたの。：：：もう分らないだらうと思つて、一と月ほど前から此地に來てゐると一昨日また、それが、私のゐる處を探り當てゝ出て來たの。：：：私、明後日までにまた何處かへ姿を隱さねばならぬ。：：：ですから最早今晩きりあなたにも逢へないの。：：：あなたにこれを上げますから、これを記念に持つて行つて下さい。」と言葉は落着

いて溫順しいが、仕舞をてきぱきと言ひつゝ、腰に締めた茶と小豆の辨慶格子の、もう可い加減古くなつた短い縮緬の下じめを解いて前に出した。

「へえソ！」と、ばかり、私は寢心よく夢みてゐた樂しい夢を、無理に搖り起されたやうで、暫く呆れた口が塞がらなかつた。けれども、しごきをやるから、これを記念に持つて行つてくれ、といふのは、子供らしいが、嬉しい。何といふ懷かしい想ひをさせる女だらう！　惡い男があればあつても面白い！　と、われ識らず棄て難い心持がして、私は、

「だつて、どうかならないものかねえ？　さう急に隱れなくたつて、……私は君と今これツきりになりたくないよ。も少し私を棄てないで置いてくれないか。……いつかも話した通り、此の土地で初めてお蓮を呼んで、あまり好くもなかつたから、二十日ばかりも足踏みしなかつたが、また、ひよツと來て見たくなつて、お蓮でも可いから呼べと思つて、呼ぶと、蓮ちやんがゐなくつて、宮ちやんが來た。それから後は君の知つてゐる通りだ。宮ちやんのやうな女は、また容易に目付からないもの。」

さう言つて、私は、仰けになつてゐた身體を跳ね起きて、女の方に向いて蒲團の上

に胡坐をかいた。
お宮は、沈んだ頭振を掉つて、
「いけない！　どうしても隱れなくツちやならない！」堅く自分に決心したやうに底力のある聲で言つて、後は「ですからあなたにはお氣の毒なの……。私の代りにまたお蓮さんを呼んであげて下さい。」と言葉尻を優しく愛想を言つた。さうしてまた獨りで思案に暮れてゐるらしい。
私は、喪然して了つた。
「どうでも隱れなくつてはならない！……君には、そんな逃げ隱れをせねばならぬやうな人があつたのか。……それには何れ一と通りならぬ理由のあることだらうが、どうしてまあそんなことになつたの？……そんなこととは知らず、僕は眞實に君を想つてゐた。――尤も君を想つてゐる人は、まだ他にも澤山あるのだらうが――けれどもさういふ男があると知れては、幾許思つたつて仕方がない。……ねえ！　宮ちやん！……ぢや、せめてお前と、その人との身の上でも話して聞かしてくれないか。……もう大分遲いやうだが、今晩寢ないでも聞くよ。私には扱帶なんかよりもその方が好い

よ。……私もさういふことのまんざら分らないこともない。同情するよ。……それを聞かして貰はうぢやないか。……えツ？　宮ちやん！……お前の國は本當何處なの？」私は、わざと陽氣になつて言つた。

何處かで、ボーンボーンと、高く二時が鳴つた。

すると、お宮は沈み込んでゐた顏を、ついと興奮したやうに上げて、私の問ひに應じて口數少くその來歷を語つた。

一體お宮は、一口に言つて見れば、單に嘘を商賣にしてゐるからばかりではない、その言つてゐることでも、その所作にも、何處までが眞個で何處までが嘘なのか嘘と眞個との見境の付かないやうな氣持をさせる女性だつた。年も初め十九と言つたが、二十一か二にはなつてゐたらう。心の恐ろしく複雜んで、人の口裏を察したり、眼顏を讀むことの驚くほどはしこい、それでゐてあどけないやうな、何處までも情け深さうな、たよりな氣で人に憐れを催さすやうな、嘘を言つてゐるかと思ふと、また思ひ詰めれば、至つて正直な處もあつた。それ故その身の上ばなしも、前後辻褄の合はぬことも多くつて、私には何處までが眞個なのか分らない。

お宮といふ名前も、また初めての時、下田しまと言つた本當の名も、皆その他にまだ幾通かある變名(かへな)の中の一つであつた。
「だから故鄕(くに)は栃木と言つてるぢやないか。」お宮はうるささうに言つた。
「さうかい。……だつて僕はさう聞かなかつた。何時か、熊本と言つたのは噓か、福岡と言つてゐたこともあつたよ。……それらは皆知つた男の故鄕(くに)だらう。」
「そんなことは一々覺えてゐない。……宇都宮が本當さ！」
「何時東京に出て來たの？」
「丁度、あれは日比谷で燒討のあつた時であつたから、私は十五の時だ。下谷に親類があつて、其處に來てゐる頃、その直ぐ近くの家に其男(それ)もゐて、遊びに行つたり來たりしてゐる間に次第にさういふ關係になつたの。」
「その人も學校に行つてゐたんだらうが、その時分何處の學校に行つてゐたんだ？」
「さあ、よく知らないけれど、師範學校とか言つてゐたよ。」
「師範學校？　師範學校とは少し變だな。」私は、女がまた出鱈目を云つてゐるのか、それとも、さう思つてゐるのか、と、眞個に教育の有無をも考へて見た。

「でも師範學校の免狀を見せたよ。」
「免狀を見せた。ぢや高等であつたか尋常であつたか。」
「さあ、そんなことは何方であつたか、知らない。」
「その人の國は何處なんだ。年は幾つ？　何と言ふの？」
「熊本。……今二十九になるかな。名は吉村定太郎といふの。……それはなか／＼才子なの。」
「ふむ。江馬といふ人とどうだ？」
「さうだなあ、才子といふ點から言へば、それや吉村の方が才子だ。」
「男振りは？」
「男は何方も好いの。」と、普通に言つた。私は、それを聞いて、腹では一寸妬けた。
「どうも御馳走さま！……宮ちやん男を拵へるのが上手と思はれるナ。……そりやあ、學生と娘と關係するなんか、ザラに世間にあることだから、惡くばかしは言へない。が、その吉村といふ人とそんな仲になつて、それからどういふ理由で、その男を逃げ隱れをするやうになつたり、またお前がこんな處に來るやうな羽目になつたんだ

？」私は、何處までも優しく訊ねた。

「吉村も道樂者なの。」と、言ひにくさうに言つた。「あなたさぞ私に愛想が盡きたでせう。」

「ふむ……江馬さんも溫順しい深切な人であつたが、下宿屋の娘とくつついたし、吉村さんも道樂者。……成程お前が、何時か『男はもう厭！』と言つたのに無理はないかも知れぬ。……私にしたつて、斯うしてこんな處に來るのだから矢張り道樂者に違ひない……が、併しその人はどういふ道樂者か知らないが、道樂者なら道樂者として置いて、君がこんな處に來た理由が分らないな。私には、私だつて、つき合つて見れば、この土地にゐる女達も大凡どんな人柄かくらゐは見當がつく。先達て私の處に初めて寄越した手紙だつて、「多くの人は、妾等の悲境をも知らで、侮蔑をもつて能事とする中に、流石は、同情をもつてその天職とせる文學者に初めて接したるその利那の感想は……」——ねえ、ちやんとから私は君の手紙を諳記してゐるよ。——その利那の感想はなんて、あんな手紙を書くのを見ると、どうしても女學生あがりといふ處だ。どうも君の實家だつて、さう惡い家だとは思はれない、加之宮ちやんは非常に氣

位が高い。隨分大勢女もゐるが、皆平氣で商賣してゐるのに君は自分が悲境にゐることをよく知つてゐて、それほど侮蔑を苦痛に感じるほど高慢な人が、どうしてこんな處に來たの？……可笑しいぢやないか。えッ宮ちやん？」

けれどもお宮は、それに就いては、唯、人に饒舌らして置くばかりで默つてゐた。

さうして此度は其の男を辯護するかのやうに、

「そりや初めはその人の世話にも隨分なるにはなつたの。……あなたの處に遣つた、その手紙に書いてゐるやうなことも、私がよく漢語を使ふのも皆其の人が先生のやうに敎育してくれたの。……けれど、學資が來てゐる間はよかつたけれど、その内學校を卒業するでせう。卒業してから學資がぴつたり來なくなつてから困つて了つて、それからどすることも出來なくなつたの。」

「だつて可笑しいなあ。君がいふやうに、本當に師範學校に行つてゐて卒業したのなら高等の方だとすると、立派なものだ。そんな人が、何故自分の手をつけた若い娘を終にこんな處に來なければならぬやうにするか。……十五で出て來て間もなくといふんだから、男を知つたのもその人が屹度初めだらう？」

「えゝ、そりやその人に……」と、それを取返しの付かぬことに思つてゐるらしい。
「はゝゝゝ。面白いことを言ふねえ。もし尋常師範ならば、成程國で卒業して、東京に出てから、ぐれるといふこともあるかも知れぬが、今二十九で、五年も前からだといふから、年を積つても可笑しい。師範學校ぢやなからう。……お前の言ふことは何うも分らない。……けれど、まあそんな根掘り葉掘り聞く必要はないわねえ。……で一昨日はどうして此處に來てゐることが分つたの?」
「下谷に知つた家があつて、其處から一昨日は電話が掛かつて、一寸私に來てくれと言ふから、何かと思つて行くと、其處に吉村が、ちやんと來てゐるの。それを見ると私ははあツと思つて本當にぞつとして了つた。」
「ふむ。それでどうした?」
「私は默あツてゐてやつた。さうすると『どうして默つてゐる? お前は非道い奴だ。俺を一體何と思つてゐる? 殺して了ふぞ。』と、恐ろしい劍幕で言ふから、『何と思つてゐるツて、あなたこそ私を何と思つてゐる?』と私も強く言つてやつた。此方でさう云ふと、此度は向うから優しく出るの。さうして何卒これまでのやうになつてゐて

くれといふの。……私は『厭だ！』と言つてやつた。そんなことを言ふんなら、私は今此處で本當に殺してくれと言つてやつた。……惡い奴なの。」と、さも／＼惡者のやうに言ふ。

「さういふと、どう言つた？」

「けれども、どうもすることは出來ないの、……元は屢く私を撲つたもんだが、それでも、此度は餘程弱つてゐると思はれて、どうもしなかつた。」お宮は終りを獨語のやうに言つた。

「どうして分つたらうねえ？　お前が此處にゐるのが。」

「其處が才子なの。私本當に恐ろしくなるわ。方々探しても、どうしても分らなかつたから、口髭なんか剃つて了つて、一寸見たくらゐでは見違へるやうにして、私の故郷に行つたの。さうすると、家の者が、皆口ぢや何處にゐるか知らない、とうまく言つたけれど、田舍者のことだから間が拔けてゐるでせう。すると、誰も一寸居ない間に、吉村が狀差しを探して見て、その中に私が此處から遣つた手紙が見付かつたの。よくさう言つてあるのに、本當に田舍者は仕樣がない。」

「ふむ。お前の故郷まで行つて探した！　ぢや餘程深い仲だなあ。……さうしてその人、今何處にゐるんだ？　何をしてゐるの？」
「さあ、何處にゐるか。そんなこと聞きやしないさ。……それでも私、後で可哀さうになつたから、持つてゐたお錢を二三圓あつたのを、銀貨入れのまゝそつくり遣つたよ。煙草なんかだつて、惡い煙草を吸つてゐるんだもの。……くれて遣つたよ。私。」
と、ホツと息を吐いて、後は萎れて、しばらく默つてゐる。
「身裝なんか、どんな風をしてゐる？」
「そりや汚い身裝をしてゐるさ。」
「どうも私には、まだ十分解らない處があるが、餘程深い理由があるらしい。宮ちやんも少しどうかして上げれば好い。」
「どうかしてあげれば好いつてどうすることも出來やしない。際限がないんだもの。」
と、お宮は、怒るやうに言つたが、「私もその人の爲にはこれまで盡せるだけは盡してゐるの。初め此方が世話になつたのは、もう夙に恩は返してゐる。何倍此方が盡してゐるか知れやしない。……つまり自分でもこの頃漸く、私くらゐな女は、何處を探し

ても無いといふことが分つて來たんでせうと思ふんだ。斯う見えても、私は、本當の心は好いんですから、そりや私くらゐ盡す女は滅多にありやしないもの。……ですから其の人の心も、他の者には知れなくつても、私にだけは分ることは、よく分つてゐるの。」と、しんみりとなつた。

「うむ〳〵。さうだ。お前の言ふことも、私にはよく分つてゐる。……ぢや二人で餘程苦勞もしたんだらう。」

「そりや苦勞も隨分した。米の一升買ひもするし……私、終には月給取つて働きに出たよ。」

「へえ、そりやえらい。何處に?」

「上野に博覽會のあつた時に、あの日本橋に山本といふ葉茶屋があるでせう。彼處(あすこ)の出店に會計係になつても出るし、それから神保町の東京堂の店員になつて出てゐたこともある。……博覽會に出てゐた時なんか、暑うい時分に私は朝早くから起きて、自分で御飯を炊いて、私が一日居なくなつても好いやうにして出て行く。その後で、晩に遲くなつて歸つて見ると、家では、朝から酒ばツかり飲んで、何にもしないでゐる

んですもの。……」

「酒飲みぢや仕様がない。……酒亂だな。」

「えゝ酒亂なの、だから私、こんな處にゐても、酒を飲む人嫌ひ。……湯島天神に家を持つてゐたんですが、私、一と頃生傷が絶えたことがなかつた。……そんな風だから、私の方でも、終には『あゝもう厭だ。』と思つて、何か氣に入らぬことがあると此方でも負けずに言ふでせう。さうすると『貴様俺に向つて何言ふんだ。』と言つて、煙管で撲つ、ビール瓶で打つ、煙草盆を投げ付ける。……その煙草盆を投げつけた時であつた。その時の傷がまだ殘つてゐるんです。此處に小さい痣が出來てゐるでせう。痣なんか、私にやありやしなかつた。」と、言つて、白い顔の柔和な眉毛の下を遺恨のあるやうに、輕く指尖で抑へて見せた。それは、あるか、無いかの淡靑い痣の痕であつた。

私は默つてお宮の言ふのを聞きながら、靜とその姿態を見戍つて、成程段々聞いてみれば、何うも賢い女だ。縹緻だつて他人にはどうだか、自分にはまづ氣に入つた。これが、まだそんな十七や八の若い身で元は皆心がらとはいひながら、男の爲に、眞

實にさういふ所帶の苦勞をしたかと思へば、唯いぢらしくもある。自分で氣にするほどでもないが、痣の痕を見れば、寧そそれがしをらしく見える。私は、「おゝ」と言つて抱いてやりたい氣になつて、

「ふむ……それは感心なことだが、併しそれほど心掛けの好い人がどうして、とゞの詰り斯らいふ處へ來るやうになつたんだらうねえ？」

と、またころりと横になりながら、心からさう思つて、餘りうるさく訊くのも、却つて女の痛心に對して察しの無いことだから、さも餘所の女のことのやうに言つてまたしても斯う訊ねて見た。さうして、つい身につまされて、先刻からお宮の話を聞きながらも、私は自分とお前とのことに、また熟々と思入つてゐた。「お雪の奴、いま頃は何處にどうしてゐるだらう？　本當にもう嫁いてゐるか。嫁いてゐなければ好いが嫁いて居ると思へば心許なくてならぬ。最後には自分から私を振切つて行つて了つたのだ。それを思へば憎い。が、元を思へば、みんな此方で苦勞をさしたからだ。あゝ惡いことをした。彼女も行末はどうなる身の上だらう？　淺間しくなつて果てるのではなからうか？」しみ〴〵と哀れになつて、斯うして靜としてはゐられないやうな氣

がして來て、しばらくは、私達が丁度お宮等二人のやうに思はれてゐたが、「いや〳〵お雪が、お宮と同じであらう道理が無い。自分がまた吉村であらう筈もない。私に、どうして斯ういふ女を、終にこんな處に來なければならぬやうにするやうな、そんな無慙なことが出來よう！」と、私は少しく我に返つて、

「けれどもその人間も隨分非道いねえ。そんなにして何處までも、今まで通りに夫婦になつてゐてくれといふほどならば、何故、宮ちやんがそんなにして盡してゐる間に少しはお前を可愛いとは思はなかつたらうねえ？　お前が可愛ければ、自分でも確乎せねばならぬ筈だ。況して自分が初めて手をつけた若い女ぢやないか！」と、人の事を全然自分を責めるやうに、さう言つた。

お宮はお宮で、先刻から默つて、獨りで自分の事を考へ沈んでゐたやうであつたが

「ですから私、何度逃げ出したか知れやしない。……その度每に追掛けて來て捉へて放さないんだもの……はあツ！　一昨日からまた其の事で、彼方此方してゐた。」と、またしても太息ばかり吐いて、屈託し切つてゐる。私にはその大學生の江馬と吉村と女との顚末などに就いても、屹度面白い筋があるに違ひないと、それを探るのを一つ

は樂しくも思ひながら、種々と腹の中で考へて見たが、お宮に對つてはその上強ひて
は聞かうともしなかつた。唯、「で、一昨日は何と言つて別れたの？」と訊ねると、
「まあ二三日考へさしてくれと、可い加減なことを言つて歸つて來た。……ですから
どうしたら好いか、あなたに智慧を借りれば好いの。……」と、その事に種々心を碎
いてゐる所爲かそれとも、唯私に對してさう言つて見ただけなのか、腹から出たとも
口前から出たとも分らないやうな調子で言ふから、
「……智慧を借りるツたつて、別に好い智慧もないが、ぢや私が何處かへ隱して上げ
ようか。」
と、女の思惑を察して私も唯一口さう言つて見たが、此方からさう言ふと、女は、
「否！　どうしても駄目！」と頭振を掉つた。
「ぢや仕樣がない。よく自分で考へるさ。……あゝ遲くなつた。もう寢よう。君も寢
たまへ。」と、言ひながら、私は欠伸を嚙み殺した。
「えゝ。」と、お宮は氣の拔けたやうな返事をして、それから五分間ばかりして、
「あなたねえ。濟みませんが、今晩私を此のまま靜ツと寢かして下さい。一昨日から

何處の座敷に行つても、私身體の鹽梅が惡いからツて、みんな、さう言つて斷つてゐるの……明日の朝ねえ……はあツ神經衰弱になつて了ふ。」と萎えたやうに言つて、橫になつたかと思ふと、此方に背を向けて、襟に顏を隱してしまつた。さうして夜具の中から、

「あゝ、あなた本當に濟みませんが、電燈を一寸捻つて下さい。」

「あゝ〳〵。よくお寢！」

と、私は立つて電燈を消したが、頭の心が冴えてしまつて眠れない。

また立つて明るくして見た。お宮は眠つた眼を眩しさうに細く可愛く開いて見て、口の中で何かむにや〳〵言ひながら、一旦上に向けた顏をまたくるりと枕に伏せた。私は此度は幕で火影を包んで置いて、それから腹這ひになつて煙草を一本摘んだ。それが盡きると、また立ち上つて暗くした。お宮は聽てぐつすり寢入つたらしい。……私は夜明けまで到頭熟睡しなかつた。翌朝（あくるあさ）、お宮は、

「精神的だわ。」と、一つは神經の疲れてゐた所爲（せゐ）もあつたらうが、ひどく身體を使つた。

「ぢや、これツ切りもう會へないねえ。何だか殘り惜しいなあ。お別れに飯でも食べよう。…何が好いか？…かしはにしようか。」と私は手を鳴らして朝飯を誂へた。

お宮は所在なさゝうに、

「あなた、私に詩を教へて下さい。私詩が好きよッ。」と言つて自分で賴山陽の「雲乎山乎」を低聲で興の無さゝうに口ずさんでゐる。

その顏を、凝乎と見ると、種々な苦勞をするか、今朝はひどく面變れがして、先刻洗つて來た、昨夕の白粉の痕が青く斑點になつて見える。「…萬里泊舟天草灘…」とたゞ口の先だけ聲を出して、大きく動かしてゐる下顎の骨が厭に角張つて突き出てゐる。斯うして見れば年も三つ四つ老けて、案外さう縹緻も好くないなあ！と思つた「ねえ！教へて下さい。」

と、いふから、「ぢや好いのを教へよう。」と氣は進まないながら、自分の好きな張若虛の「春江花月夜」を教へて遣つた。「これに書いて意味を教へて下さい。」といふから卷紙に記して、講釋をして聞かせて遣つた。「…昨夜閒潭夢落花。可憐春半不還家。江水流春去欲盡…」といふ邊は私だけには大いに心遣りのつもりがあつた。

飯は濟んだが、私はまだ女を歸したくなかつた。

お宮は、心は何處を彷徨いてゐるのか分らないやうに、懐手をして、呆然窓の處に立つて、つま先で足拍子を取りながら、何かフイ〳〵口の中で言つて、目的もなく戸外を眺めなどしてゐる。

「あなた、一寸々々。」

と、いふから「え何？」と立つて、其處に行つて見ると、

「あれ、子供が體操の眞似をしてゐる。……見てゐると面白いよ。」と、水天宮の裏門で子供の遊んでゐるのを面白がつてゐる。

私は「何だ！　昨夜はあんな思ひ詰めたやうなことを言つて、今朝のこのフハ〳〵とした風は？……」と元の座に戻りながら、不思議に思つて、またしても女の態度を見戍つた。

すると、女は、フツと此方を振向いて、窓の處から傍に寄つて來ながら、

「あなた、妾を棄てない？……棄てないで下さい！」と、言葉に力は入つてゐるが、それもまた口の先から出るやら、腹の底から出たのやら分らぬやうな調子で言つた。

「あゝ。」と、私もそれに應ずるやうに返事した。

「ぢや屹度棄てない？……屹度？」重ねて言つた。

さう言はれると、此方もつい釣込まれて、

「あゝ屹度棄てやしないよ。……僕より君の方が棄てないか？」と、言つたが、眞實に腹から「棄てないで下さい！」と言ふのならば、思ひ切つて、どうかして下さい、とでも、も少し打明けて相談をし掛けないのであらうと、それを甲斐なく思つてゐた。

さういふと、女は默つてゐた。また以前の通り何處に心があるのやら分らなかつたするとまた暫く經つて、「定つたらあなたに手紙を上げますから、さうしたらどうかして下さいな。」とさう言ふ。此度は此方で「うむ！」と氣のない返事をした。

戸外は日が明るく照つて、近所から、チーンチーンと鍛冶の鎚の音が強く耳に響いて來る。何處か少し遠い處で地を搖るやうな機械の音がする。今朝は何だか濕りつ氣がない。

勘定が大分嵩んだらう。……斯う長く居るつもりではなかつたから、固より持合せは少かつた。私は突然に好い夢を破られた失望の感と共に、少しでも勘定が不足にな

るのが氣になつて、さうしてゐながらも、些とも面白くなかつた。私にはまだ自分で待合で勘定を借りた經驗はなかつた。お宮を早く歸せば錢も嵩まないと分つてゐたが、それは出來なかつた。又假令これ限りお宮を見なくなるにしてもお宮のゐる前で勘定の不足をするのは何ぼ堪へられなかつた。さう思つて先刻から、一人で神經を惱ましてゐたが、ふつと、今日は、長田が社に出る日だ、彼處に使ひを遣つて、今日はもう十七日だから、今月書いた今までの分を借りよう。――それはお前も知つてゐる通りに、始終行つてゐたことだ。――と、さう氣がついて、手紙の裏には「牛込區喜久井町、雪岡」と書いて車夫に、彼方に行つたら、若しも何處から來たと聞かれても、牛込から來た、と言はしてくれと女中に頼んだ。

暫時して車夫は歸つて來たが、急いで封を切つて見ると、錢は入つてゐなくつて唯、「主筆も編輯長もまだ出社せねば、その金は渡すこと相成りがたく候。」

と、長田の例の亂筆で、汚い新聞社の原稿紙に、いかにも素氣なく書いてある。私は、それを見ると、錢の入つてゐない失望と同時に「はつ」と胸を打たれた。成程使者が丁度向うに行つた頃が十二時時分であつたらうから、主筆も編輯長もまだ出社せ

ぬといふのは、さうであらう。が「その金は渡すこと相成り難く候。」とあるのは可怪しい。長田の編輯してゐる日曜附録に、詰らぬことを書かして貰つて僅かばかりの原稿料を、併も錢に困つて、一度に、月末まで待てないで、二度に割いたりなどして受取つてゐるのだが、分けてもこの頃は種々なことが心の面白くないことばかりで、それすら碌々に書いてもゐない。けれども前借をと言へば、假令自分が出社せぬ日であつても、これまで何時も主筆か編輯長に當てゝ幾許の錢を雪岡に渡すやうに、と、長田の手紙を持つてさへ行けば、私に直ぐ受取れるやうに、兎に角氣輕にしてくれてゐる。然るに、假令錢は渡せない分とも、その錢は渡すことならぬ、といふその錢は、どういふつもりで書いたのだらう？　自分は平常懶惰者で通つてゐる。お雪を初めその母親や兄すらも、最初こそ二足も三足も譲つてゐたものだが、それすら後には向うからあの通り到頭愛想を盡かして了つた。幾許自分にしても傍で見てゐるやうに理由もなく、只々懶けるのでもないが、成程懶けてゐるに違ひない。長田は國も同じければ、學校も同時に出、また爲てゐる職業もほゞ似てゐる。それ故この東京にゐる知人の中でも長田は最も古い知人で、自分の古い頃のことから、つい近頃のことまで、長

田が自分で觀、また此方から一寸々々話しただけのことは知つてゐる。長田の心では雪岡はまた女に凝つてゐる、あの通り、長い間一緒にゐた女とも有耶無耶に別れて了つて、段々詰らん坊になり下つてゐる癖に、またしても、女道樂でもあるまい、と、少しは見せしめの爲にその錢は渡すこと相ならぬ、といふ積りなのであらうか。それならば難有い譯だ。が、否！ あの人間の平常から考へて見ても、他人の事に立入つた忠告がましいことや、口を利いたりなどする長田ではない。して見れば、この、その錢は渡されぬといふ簡單な文句には、あの先達ての樣子といひ、長田の性質が歴然と出てゐる。これまでとても、隨分向側に廻つて、小蔭から種々な事に、ちびり〳〵邪魔をされたのが、あれにあれに、あれと眼に見えるやうに心に殘つてゐる。此度はまた淫賣のことで祟られるかな、と平常は忘れてゐる、そんなことが一時に念頭に上つて自分をば取着く島もなく突き離されたその上に、まだ石を打付けられるかと、𡘯𡘯と感じながら、

「ふむ〳〵。」と、獨り肯き〳〵唯それだけの手紙を、私はお宮が、

「それは何？」

と、終に怪しんで問ふまで、長い間、默つて凝視めてゐた。それ故文句も、一字一句覺えてゐる。

お宮にさう言はれて、漸とわれに返つて、「うむ。何でもないさ！」と言つて置いて早速降りて行つて、女中を小陰に呼んで譯を話すと、女中は忽ち厭あな顔をして、

「そりや困りますねえ。手前共では、もう何方にも、一切さういふことは、しないやうにして居るんですが、萬一さういふことがあつた場合には、私共女中がお立て換へをせねばならぬことになつて居るんですから。ですからその時は時計か何か持つておいでになる品物でも一時お預りして置くやうにして居りますが。」と、言ひにくさうに言ふ。ぢや、古い外套だが、あれでも置いとかう、と、私が座敷に戻つて來ると、神經質のお宮は、もう感付いたか、些と顔を青くして、心配さうに、

「何事？……どうしたの？……どうしたの？」と、氣にして聞く。私は、失敗つた！と、穴にも入りたい心地を力めて隱して、

「否む！　ナニ。何でもないよ。」と言つてゐると、階下から、

「宮ちやん！　宮ちやん！」と口早に呼ぶ。

お宮は「えツ？」と降りて行つたが、直ぐ上つて來て、默つて坐つた。
「ぢや、もうお歸り。」と、いふと、
「さうですか。ぢやもう歸りますから……種々御迷惑を掛けました。」と、尋常に挨拶をして歸つて行つた。
その後から、直ぐ此度は、若い三十七八の他の女中が入り代りに上つて來て、
「本當にお氣の毒さまですねえ。手前共では、もう一切さういふことはしないことにして居りますから、どうぞ惡しからず思召してねえ。……あの長田さんにも隨分長い間、御贔屓にして戴いて居りますけれど、あの方も本當にお堅い方で。長田さんにすら、もう一度もそんなことはございませんのですから。……況してあなたは長田さんのお友達とは承知して居りますけれどついまだ昨今のことでございますし。」
と、さも氣の毒さうな顏をして、黃色い聲で、口先で世辭とも何ともつかぬことを言ひながら追立てるやうに、其處等のものを片端からさつさつと片付け始めた。
「えゝ、ナニ。そりやさうですとも。私の方が濟まないんです。私は今まで斯樣な處で借りを拵へた覺えがないもんですから、それが極りが惡いんです。」と、心の千分の

――を言葉に出して恥辱を自分で紛らした。
「あれ！　極りが惡いなんて。些ともそんな御心配はありませんわ。ナニ、こんな失禮なことを申すのぢやございませんのですけれどねえ。」と、少し低聲になつた眞似をして「帳場が、また惡く八ケ間敷いんですから、私なんか全く困るんですよ。……時時斯うして、お客樣に、女中がお氣の毒な目をお掛け申して。」
「全く貴女方にはお氣の毒ですよ。……いや、どうも長居をして濟みませんでした。」
と、私はそんなことを言ひながらも、
「あの女は、もうゐなくなるさうですね。……自分ぢや、ついこの間出たばかりだ、と言つてゐたが、そんなことはないでせう。」と聞くと、
「えゝ居なくなるなんてことは、まだ聞きませんが、隨分前からですよ。此度戻つて來たのは、つい此間ですけれど、初めて出てから、もう餘程になりますよ。」
と言ふ。私は「彼女（あいつ）め！　何處まで嘘を吐くか。」と思つて、ます〳〵心に描いた女の箔が褪めた思ひがした。
　私は、あの古い外套（とんび）を形（かた）に置いて、櫻木の入口を出たが、それでも、それを着てゐ

れば目に立たぬが、下には、あのもう袖口も何處も切れた、剝げちよろけの古い米澤琉球の羽織に、着物は例の、燒けて焦茶色になつた秩父銘仙の綿入れを着て、堅く腕組みをしながら玄關を下りた時の心持は、われながら、自分の見下げ果てた狀態が、歷々と眼に映るやうで、思ひ做しばかりではない、女中の「左樣なら！　どうぞお近い内に！」といふ送り出す聲は背後から冷水を浴びせ掛けられてゐるやうであつた。

昨夜は、お宮の來るのが、遲いので、女中が氣にして時々顏を出しては、「……いえあの娘のゐる家は、恐ろしい慾張りなもんですから、一寸でも時間があると、御座敷へ出さすものですから、それで斯う遲くなるのです。……本當にお氣の毒さまねえ。でも、もう追付け參りませうから。」と詫びながら柔かいお召のどてらなどを持つて來て貸してくれた。私はそれを、悠然と着込んで待つてゐたのだが、用事のある者は、みんなそれ〴〵忙しさうにしてゐる時分に、日の射してゐる中を、昨夜に變る、今朝のこの姿は、色男の器量を瞬く間に下げて了つたやうで、音も響も耳に入らず、消え入るやうに、勢も力もなく電車に乘つたが、私は切符を買ふのも氣が進まなかつた。

喜久井町の自家に戻ると、もうかれこれ二時を過ぎてゐた。さて詰らなさうに戻

つて見れば、家の中は今更に、水の退いた跡のやうで、何の氣もしない。何處か、其處らに取り着く物でもゐるのではないかと思はれるやうにまたぞつと寂しさが募る。私は、落ちるやうに机の前に尻を置いて、「ほうツ」と、一つ太息を吐いて、見るともなく眼を遣ると、もう幾日も／＼片付けをせぬ机の上は、塵埃だらけな種々なものが重なり放題重なつて、何處から手のつけやうもない。それを見ると、また續けて太息が出る。「ああ！」と思ひながら、脇を向いて、此度は、背を凹ますやうに捻ぢまげて何氣なく、奥の六疊の方を振返ると、あの薄暗い壁際に矢張りお前の箪笥がある。それには平常の通り用箪笥だの、針箱などが重ねてあつて、その上には、何時からか長いこと、桃色甲斐絹の裏の付いた絲織の、古らい前掛に包んだ火熨斗が吊してある。「あの前掛は大方十年も前に締めたのであらう！」と思ひながら、私はあの暗い天井の隅々を、一遍ぐるりツと見廻した。さうして、また箪笥の方に氣が付くと、あの抽斗も、下の方の、お前の僅ばかりの物で、主なものの入つてゐさうな處は、最初から錠を下してあつたが、でも上の二つは、――私の物も少しは入つてゐるし、――何か知ら、種々なものがあつて、錠も下さないであつたが、婆さんがしたのか、誰がしたの

か、何時の間にかお前の物は、餘所々々しく、他へ入れ換へて了つて、今では唯上の一つが、抽き差し出來るだけで、それには私の單衣が二三枚あるばかりだ。……「一體何處にどうしてゐるんだらう?」と、また暫時そんなことを思ひ沈んでゐたが、……お宮も何處かへ行つて了ふと、言ふ。加之今朝のことを思ひ出せば、遠く離れた此處に斯うしてゐても、何とも言ふに言へない失態が未だに身に付き纒うてゐるやうで、唯あの土地を思つても、厭な心持がする。ナニ糞！ と思つて了へば好いのだがさう思へないのは矢張りお宮に心が殘るのであらう。と、ふつと自分が可笑しくもなつて、獨り笑ひをした。

後はまた、それからそれへと種々なことを取留めもなく考へながら、呆然縁側に立つて、遠くの方を見ると、晩秋の空は見上げるやうに高く、清淨に晴れ渡つて、世間が靜かで、冷やりと、自然に好い氣持がして來る。向うの高臺の上の方に、何處かの工場の煙であらう? 緩く立迷つてゐる。

それ等を見るともなく見ると、私は、あゝ、自分は秋が好きであつた。誰に向つても、自分は秋が好きだ〳〵と言つて、秋をば自分の時節が回つて來たやうに、その靜

かなのを却つて樂しく賑かなものに思つてゐたのだが、この四五年來といふもの、年一年とどの年を考出して見ても、樂しい筈であつたその秋の樂しかつたことがない。毎年も唯そは〳〵と、心ばかり急がしさうにしてゐる間に經つて行つて了ふ。わけてこの秋くらゐ、斯うしてこんなに寂しい思ひのするのは、初めて覺えることだ。何よりも一つは年齒の所爲かも知れぬ。白髮さへ頻りに眼について來た。加之段々、豫期してゐたことが、實際とは違つて來るのに、氣が付くに連れて、世の中の事物が、何も彼も大抵興が醒めたやうな心持がする。――昨夕のお宮が丁度それだ。ああいふ境遇にゐる女性だから、どうせ清淨なものであらう筈も無いのだが、何につけ事物を善く美しう、眞個のやうに思ひ込み勝ちな自分は、あのお宮が最初からさう思はれてならなかつた。すると昨夕から今朝にかけて美しいお宮が普通な淫賣になつて了つた。口の利きやうからして次第に粗末な口を利いた。自分の思つてゐたお宮が今更に懷かしい。――が、あのお宮は眞實に去つて了ふか知らん?――自分はどうも夢を眞實と思ひ込む性癖がある。それをお雪は屢々言つて、「あなたは空想家だ。小栗風葉の書いた欽哉にそつくりだ。」と、戲談ふやうに「欽哉々々。」と言つては、「そんな目算も無い

ことばかり考へてゐないで、もつと手近なことを、さつ〳〵と爲さいな！」と、たしなめたしなめした。本當に、自分は、今にもつと良いことがある、今にもつと良いことがある、と夢ばかり見てゐた。けれども、私を空想家だ空想家だと言つた、あのお雪が矢張り空想勝ちな人間であつた。「今にあなたが良くなるだらう、今に良くなるだらう、と思つてゐても何時まで經つても良くならないのだもの。」と、あの晩彼女が言つたことは、自分でも熟々とさう思つたからであらうが、私には、あゝ言つたあの調子が悲哀なやうに思はれて、何時までも忘れられない。彼女も私と一緒に、自分の福運を只夢を見てゐるのだ。私は到頭その夢を本當にしてやることが出來なかつた。七年の長い間のことを、今では、さも、詰らない夢を見て年齢ばかり取つて了つた、と、恨んで居るであらう。年々ひどく顏の皺を氣にしては、

「私の眼の下のこの皺は、あなたが拵へたのだ。私はこの皺だけは恨みがある。……これは、あの音羽にゐた時分にあんまり貧乏の苦勞をさせられたお蔭で出來たんだ。」

と、二三年來、鏡を見ると、時々それを言つてゐた。……そんなことを思ひながらフツと庭に目を遣ると、杉垣の傍の笹混りの草の葉が、もう紅葉するのはして何時か

末枯れて了つてゐる中に、ひよろ〳〵ツと、身長ばかり伸びて、勢の無いコスモスが三四本わびしさうに咲き遅れてゐる。

　これはこの六月の初めに、到頭話がついて、彼女が後の女中の心配までして置いてあの關口臺町から此家へ歸つて來る時分に、彼家の庭によく育つてゐたのを、

　あなた、あのコスモスを少し持つて行きますよ。自家の庭に植ゑるんですから。」とそれでも樂しさうに言つて、簞笥や蒲團の包みと一緒に荷車に載せて持つて戻つたのだが、たれが植ゑたか、投げ植ゑるやうにしてあるのが、今時分になつて、やう〳〵數へるほどの花が白く開いてゐる。

　あゝ、さう思へば、あの戸袋の下の、壁際にある秋海棠も、あの時持つて來たのであつた。先達て中始終秋雨の降り朽ちてゐるのに、後から後からと蕾をつけて、根よく咲いてゐるな、と思つて、折々眼につく度に、さう思つてゐたが、それはもう咲き止んだ。

　六月、七月、八月、九月、十月、十一月と、丁度半歳になる。あの後、どうも不自由で仕方が無い。夏はどうせ東京には居られないのだから、旅行をするまでと、言つ

て、また後を追うて此家に暫時一緒になつて、それから、七月の十八日であつた。いよいよ箱根に二月ばかし行く。それが最後の別れだ、と言つて、立つ前の日の朝、一緒に出て、二人の白單衣を買つた。それを着て行かれるやうに、丁度盆時分からかけて暑い中を、私は早く寢て了つたが、獨り徹夜をして縫ひ上げて、自分の敷蒲團の下に敷いて寢て、敷延しをしてくれた。朝、眼を覺して見ると、もう自分は起きてゐてまだ寢衣のまゝ、詰らなさうに、考へ込んだ顏をして、靜と默つて煙草を吸つてゐた。もう年が年でもあるし、小柄な、瘦せた、縹緻も、よくない女であつたが、あゝ、それを思ふと、一層みじめなやうな氣がする。それから新橋まで私を送つて、暫時汽車の窓の外に立つてゐたが、別に話すこともなかつた。私の方でも口を利くのも大儀であつた。

「斯うしてゐても際限がないから、……私、最早歸りますよ。ぢやこれで一生會ひませんよ。」と、傍を憚るやうに、低聲で强ひて笑ふやうにして言つた。

私は「うむ！」と、唯一口、首肯くのやら、頭振を掉るのやら自分でも分らないやうに言つた。

それから汽車に乘つてゐる間、窓の枠に頭を凭して、乘客の顏の見えない方ばかりに眼をやつて、靜と思ひに耽つてゐた。——彼地に行つても面白くないから、それでまたしても戻つて來たのだが、斯うしてゐても、あの年齡を取つた、血氣のない、利巧さうな顏が、明白と眼に見える。……あれから、あゝして、あゝしてゐる間に秋海棠も咲き、コスモスも咲いて、日は流れるやうに經つて了つた。……

それにしても、胸に納まらぬのは、あの長田の手紙の文句だ。歸途に電車の中でも勢ひその事ばかりが考へられたが、此度のお宮に就いては、惡戲ぢやない嫉妬だ。洒落た唯の惡戲は長田のしさうなことではない。……碌に錢も持たないで長居をするなどは、だれに話したつて、自分が惡い。それに就いて人は怨まれぬ。が、あの手紙を書いた長田の心持は、忌々しさに、打壞しをやるに違ひない。どういふ心であるか、餘所ながら見て置かねばならぬ。もし間違つて、此方の察した通りでなかつたならばそれこそ幸ひだが。それにしても、他人との間に些とでも荒立つた氣持でゐるのは、自分には斯う靜と獨りでゐても、耐へられない。兎に角行つて樣子を見よう。自家にゐても何だか心が落着かぬ。

と、また出て長田の處に行つた。
長田は、もう一と月も前から目白坂のあの水田の居たあとの二階のある家に越して來てゐたから、行くには近かつた。――長田は言ふに及ばず、その水田でも前に言つた△△新聞社の上田でも、村田でも、その他これから後で名をいふ人達も、凡てお前の一寸でも知つてゐる人ばかりだ。――
長田は、丁度居たが、二階に上つて行くと、平常は大抵此方から、何か知ら初め口を利くのが、その時は、長田に似ず、何か自分で氣の濟まぬことでも、私に仕向けたのを笑ひで紛らすやうに、些と顏に愛嬌をして、
「今日、も少し使者の來るのが遲かつたら好かつたんだが……明日でも自分で社に行くと可い。」と言ふ。
「うむ。なに、一寸相變らずまた小遣が無くなつたもんだから。」と、私は、何時もよくいふ通りに言つて、何氣なく笑つてゐた。すると、長田は意地惡さうな顏をして、
「他人が使ふ錢だから、そりや何に使つても可い理由なんだ。……何に使つても可い理由なんだ。」と、私に向つて言ふよりも、自分の何か、胸に潛んでゐることに向つて

言つてゐるやうに、輕く首肯きながら言つた。
私は「妙なことを言ふ。ぢや適確と此方で想像した通りであつた。」と腹で首肯いた。が、それにしても、彼樣なことをいふ處を見れば、今朝の使者が何處から行つたといふことを長田のことだから、もう見拔いてゐるのではなからうか、とも思ひながら、俺が道樂に錢を遣ふことに就いて言つてゐるのだらう、それは飮み込んでゐる、といふやうに、「はゝゝ。」と私は抑へた笑ひ方をして、それに無言の答へをしてゐた。けれども何處から使者が行つたかは氣が付いてゐないらしい。
けれども、お宮はあの通り隱れると言つたから、本當にゐなくなるかも知れぬ。若し矢張りゐるにしても、ゐなくなると言つて置いた方が事がなくつて好い。むざ〳〵と人に話すには、惜いやうな昨夕であつたが、いつそ長田に話して了つて、悶嫉きの氣持を和がした方が可い、と私は卽座に決心して、
「例のは、もう居なくなるよ。二三日あと一寸行つたが、彼女には惡い情夫が付いてゐる。初め大學生の處に嫁に行つてゐたなんて言つてゐたが、まさかそんなことは無いだらうと思つてゐたが、その通りだつた。その男を去年の十二月から、つい此間ま

で隱れてゐたんだが、其奴がまた探しあてゝ出て來たから二三日中にまた何處かへ隱れねばならぬ、と言つて記念に持つてゐてくれつて僕に古臭いしごきなんかをくれたりした。……少しの間面白い夢を見たが、最早覺めた。あゝ！ あゝ！ もう行かない。」

笑ひ〱、さう言ふと、長田は興ありさうに聞いてゐたが、居なくなると言つたので初めて、稍同情したらしい笑顏になつて、私の顏を珍しく優しく見戍りながら、

「本當に、一寸とだつたなあ。……さういふやうなのが儚き緣といふのだなあ！」

と、私の心を咏歎するやうに言つた。私もそれにつれて、少しじめ〱した心地になつて、唯、

「うむ！」と言つてゐると、

「本當にゐなくなるか知らん？ さういふやうな奴はよくあるんだが、そんなことを言つても、なか〱急に何處へも行きやしないつて。……さうかと思つてゐると、まだ居る、なんて言ふことはよくあることなんだから。」と、長田は自分の從來の經驗から割り出したことは確かだといふやうに、一寸首を傾けてキツとした顏をしながら半

分は獨言のやうに言つた。

私は凝乎と、その言葉を聞きながら顏色を見てゐると、

「その內是非一つ行つて見てやらう。」といふ心が歷々と見える。

「或はさうかも知れない」と私はそれに應じて答へた。

暫時そんなことを話してゐたが、長田は忙しさうであつたから、早く出て戻つた。

自家に戻ると、日の短い最中だから、四時頃からもう暗くなつたが、何をする氣にもなれず、また矢張り机に凭つて掌に額を支へたまゝ靜としてゐると、段々氣が滅入り込むやうで、何か確乎としたものにでも執り付いてゐなければ、何處かへ淩はれて行きさうだ。さうして薄暗くなつて行く室の中では、頭の中に、お宮の、初めて逢つた晩のこと、その他折によつて、種々に變つて、此方の眼に映つた眉毛、目許口付、むつちりとした白い手先、くゝれの出來た手首なとが歷々と浮き上つて忘れられない。……それが最早居なくなつて了ふのだと思ふと、倘ほ明らかに眼に殘る。

私は、どうかして、この寂しく廢れたやうな心持を、少しでも陽氣に引立てる工夫はないものか、と考へながら何の氣なく、其處にあつた新聞を取上げて見てゐると、

有樂座で今晩丁度呂昇の「新口村」がある。これは好いものがある。これなりと聞きに行かう、と、八時を過ぎてから出掛けた。

さういふやうにして、お宮に夢中になつてゐたから、勝手に付けては、殆ど毎日のやうに行つてゐた矢來の婆さんの家へはこの十日ばかりといふもの、パツタリと忘れたやうに、足踏みしなかつたが、お宮がゐなくなつて見ると、また矢張り婆さんの家が戀しくなつて、久振りに行つて見た。婆さんは何時も根好く狀袋を張つてゐたが、例の優しい聲で、

「おや、雪岡さん、どうなさいました？　この頃はチツトもお顏をお見せなさいませんなあ。何處かお加減でも惡いのかと思つて、をばさんは心配してゐましたよ。」と言ひながら、眼鏡越しに私を見成つて微笑つてゐる。「雪岡さん、頭髮なんかつんで、大層綺麗におめかしゝて。」と、尙ほ私の方を見てゐました。

「えゝ暫時御無沙汰をしてゐました。」

と言つてゐると、

「雪岡さん。あなたもう好い情婦が出來たんですつてねえ。大層早く拵へてねえ。」と

あの婆さんのことだから、言葉に情愛を付けて面白く言ふ。私は、ハテ不思議だ、屹度お宮のことを言ふのだらうが、どうしてそれが瞬く間にこの婆さんの家にまで分つたらうか、と思つて、首を傾けながら、

「えゝ、少しやそれに似たこともあつたんですが、どうして、それがをばさんに分つて？」

「ですから悪いことは出來ませんよ。……チャンと私には分つてますよ。」

「へえ！　不思議ですねえ。」

「不思議でせう。……此の間お雪さんが柳町へ來た序でに、また一寸寄つた。と言つて、私の家へ來て『まあ、おばさん。聞いて下さい。雪岡は何うでせう、既う情婦を拵へてよ。矢張りまた前年のやうに濱町か蠣殼町らしいの。……あの人のは三十を過ぎてから覺えた道樂だから、もう一生止まない。だから愛想が盡きて了ふ。』ツて、お雪さんが自分でさう言つてゐました。……雪岡さん、本當に悪いことは言はないから淫賣婦なんかお止しなさい。あなたの男が下るばかりだから」と思ひ掛けもないことを言ふ。

「へーえツ……驚いたねえ！　お雪が、さう言つた。不思議だ！　嘘だらう。をばさ、ん可い加減なことを言つてゐるんでせう。お雪がそんなことを知つてゐる理由がないもの。……」

「不思議でせう！……あなたこの頃、頭髪に付ける香油かなんか買つて來たでせう。ちやんと机の上に瓶が置いてあるといふではありませんか。さうして鏡を見ては頭髪を梳いてゐるでせう。」婆さんは、若い者と違つて、別段に冷やかすなどといふ風もなくさういふことも言ひ馴れた、といふ風に、初めから終りまで同じやうな口調で、落着き拂つて、柔かに言ふ。

「へーえツ！　そんなことまで！　どうしてそれが分つたでせう？」

「それから女の處からよく手紙が來るといふではありませんか。」

「へツ！　手紙の來ることまで！」

私は本當に呆れて了つた。さうして自然に頭部に手を遣りながら、「氣味が悪いなあ！　お雪の奴、來て見てゐたんだらうか。……彼奴屹度來て見たに違ひ無い。」

「否、お雪さんは行きやしないが、お母さんが、お雪さんの處へ行つて、さう言つた

んでせう。……さうしてこの頃何だか、ひどくソハ〳〵して一寸々々出つても來るつて。歸ると思つて、戸を締めないで置くもんだから不用心で仕樣が無いつて。」
「へーえツ！　あの婆さんが、さう言つた。嘘だ！　年寄にそんなことが、一々分る道理が無いもの。」
「それでも、お母さんが、さう言つたつて。お母さんですよ。違やあしませんよ。……あれで矢張し吾が娘に關したことだから、幾許年を取つてゐても、氣に掛けてゐるんでせうよ、……どうしても雪岡といふ人は駄目だから、お前も、もうその積りでゐるが好いつて、お雪さんに、さう言つてゐたさうですよ。」
「へーえツ！　さうですかなあ！　本當に濟まないなあ！」私は眞から濟まないと思つた。
「ですからお雪さんだつて、あなたの動靜を遠くから、あゝして見てゐるんですよ。嫁いてなんかゐやしませんよ。」
「さうでせうか？」
「さうですよ。それに違ひありませんよ……この間も私の話を聞いて、お雪さん、獨

りで大層笑つてゐましたつけ……私が『お雪さん、雪岡さんがねえ。時々私の家へ來ては、婆やのやうに、をばさん〳〵と、くさやで、お茶漬を一杯呼んで下さいと言つて、自家に無ければ、自分で買つて來て、それを私には出來ないから、をばさんに燒いて、むしつてくれつて、箸を持つてちやんと待つてゐるのよ、と言つたら、お雪さんが『まあ？　そんなことまでいふの？　本當に雪岡には呆れて了ふ。をばさんを捉へて私に言ふ通りに言つてゐるのよ。』と獨りではあはあ言つて笑つてゐましたよ。」と婆さんは、言葉に甘味を付けて、靜かに微笑ひながら、さう言つた。

私も「へーえ、お雪公、そんなことを言つてゐましたか。」と言ひながら笑つた。淫賣婦と思へば汚いけれど、お宮はひどく氣に入つた女だつたが、彼女がゐなくなつても、お前が時々、矢來へ來てそんなことを言つて、婆さんと、蔭ながらでも私の噂をしてゐるかと思へば、思ひ做しにも自分の世界が賑やかになつたやうで、お宮のことも諦められさうな氣持がして、

「矢張り何處に居るとも言ひませんでしたか。」

と、訊ねて見たが、婆さんも、

「言はないッ！　何處にゐるか、それだけは私が何と言つて聞いても『まあ〳〵それだけは。』と言つてどうしても明さない。」
と、さも〳〵それだけは、力に及ばぬやうに言ふ。
　さうなると、矢張り私の心許なさは少しも減じない。それからそれへと、種々なことが思はれて、相變らず心の遣りばに迷ひながら、氣拔けがしたやうになつて、またしても、以前のやうに何處といふ目的もなく方々歩き廻つた。けれどもお宮といふ者を知らない時分に歩き廻つたのとはまた氣持が大分違ふ。寂しくつて物足りないのは同じだが、その有樂座の新口村を聽いてから、あの「……薄尾花はなけれども……」と、呂昇の透き徹るやうな、高い聲を張り上げて語つた處が、何時までも耳に殘つてゐて、それがお宮を懷かしいと思ふ情をそゝつて、自分でも時々可笑しいと思ふくらゐ心がうはついて、世間が何となく陽氣に思はれる。私は湯に入つても、便所に行つても其處を口ずさんで、お宮を思つてゐた。
　明後日までに何とか定めて了はなければならぬ、と、言つてゐたから、二日ばかりはそんな取留めもないことばかりを思つてゐたが、丁度その日になつて、日本橋の邊

を彷徨しながら、有り合せた自動電話に入つて、そのお宮のゐる澤村といふ家へ聞くと、お宮は居なくて、主婦が出て「えゝ、宮ちやん。さういふことを言ふにや言つてゐたやうですけれど、まだ急に何處へも行きやしないでせう。荷物もまだ自家に置いてゐるくらゐですもの。……ですから、御安心なさい、またどうか來てやつて下さい。」と、流石に商賣柄、此方から正直に女から聞いた通りを口に出して訊ねて見ても、そんな惡い情夫の付いてゐることなんか、少しも知らぬことのやうに、何でもなく言ふ。

兎に角、さう言ふから、ぢやお宮といふ女奴、何を言つてゐるのか、知れたものぢやない、と思ひもしたが、まだ何處へも行きやしないといふので安心した。斯うしてブラ〳〵としてゐても、まだ心の目的の樂しみがあるやうな氣がする。けれども其處にゐるとすれば、何れ長田のことだから、この間も、あの「本當に何處かへ行くか知らん?」と言つてゐた處を見ると、遣つて行くに相違ない。その他固より種々な嫖客に出る。これまではそんなことが、さう氣にならなかつたが、しごきをくれた心が忘れられないばかりではない、あれからは女が自分の物のやうに思はれてならぬ、と思

ひ詰めればそんな氣がするが、よく考へれば、その吉村といふ切つても切れぬらしい情夫がある。……自分でも「いけない！」といふし、情夫のある者はどうすることも出來ない。と言つて、あゝして、あのまゝ置くのも惜しくつて心許ない。錢がうんとあれば十日でも二十日でも居續けてゐたい。

「あゝ錢が欲しいなあ！」と、私は盜坊といふものは、斯ういふ時分にするのか知れぬ、とそんなことまで下らなく思ひあぐんで、日を暮らしてゐた。

　そんなにして自家に獨りでゐても何事にも手につかないし、さうかと言つて出歩いても心は少しも落着かない。それで、またしても自動電話に入つてお宮の處に電話を掛けて見る。

「宮ちやん、お前あんなことを言つてゐたから、私は本當かと思つてゐたのに、上姉さんに聞くと、何處にも行かないといふぢやないか。君は嘘ばつかり言つてゐるよ。君がゐてくれゝば僕には好いんだが、あの時は喪然して了つたよ。」と恨むやうに言ふと、

「えゝ、さう思ふには思つたんですけれど、種々都合があつてねえ。……それに自家の姉さんも、まあ、も少し考へたが好いといふしねえ。……あなたまたいらしつて下

さい。」

「あゝ行くよ。」

と、言ふやうなことを言つて、何時までも電話で話をしてゐた。行く錢(かね)が無い時には、私は五錢の白銅一つで、せめて電話でお宮と話をして蟲を堪へてゐた。電話を掛けると、大抵は女中か、主婦(おかみ)かが初め電話口に出て、「今日宮ちやんゐるかね？」と聞くと、「えゝ、ゐますよ。」と言つて、それからお宮が出て來るのだが、その出て來る間の、たつた一分間ほどが、私にはぞく〳〵として待たれた。お宮が出て來ると、毎時も、眼を瞑つたやうな靜かな、優しい聲で、

「えゝ、あなた、雪岡さん？　わたし宮ですよ。」と、定つてさう言ふ。その「わたし宮ですよ。」といふ、何とも言ふに言へない口調が、私の心を溶かして了ふやうで、それを聞いてゐると、少し細長い靨の出來た、物を言ふ口元が歴々(ありあり)と眼に見える。

「ぢやその内行くからねえ。」と、言つて、「左樣なら、切るよ。」と、言ふと、「あゝ、もしもし。あゝ、もし〳〵。雪岡さん！」と呼び掛けて、切らせない。此度は、「さよなら！　ぢや、いらつしやいな！　切りますよ。」と向うから言ふと、私が、「あゝもし、

もし、宮ちゃん〳〵、一寸々々。まだ話すことがあるんだよ。」と何か話すことがありさうに言つて追掛ける。終にはわざと、兩方で、

「左樣なら！」

「さよなら！」

を言つて、後を默あつてゐて見せる。私は、お宮の方でも、さうだらうと思つてゐた。

さうして交換手に「もう五分間來ましたよ。」と、催促をされて、そのまゝ惜しいが切つて了ふこともあつたが、後には、あとからまた一つ落して、續けることもあつた。白銅を三つ入れたこともあれば、十錢銀貨を入れたこともあつた。私は、氣にして、始終白銅を絕やさないやうにしてゐた。

珍しく一週間も經つて、櫻木では、この間のやうなこともあつたし、元々其家は、長田の定宿のやうになつてゐる處だから、またどんなことで、何が分るかも知れないと思つて、お宮に電話で、櫻木は何だか厭だから、是非何處か、お前の知つた他の待合にしてといふと、それではこれ〳〵の處に菊水といふ、櫻木ほどに淸潔ではないが

私の氣のおけない小さい家があるから、と、約束をして、私は、ものの一と月も顏を見なかつたやうな、急々した心持をしながら、電話で聞いただけでは、その菊水といふ家もよく分らないし、一つは澤村といふ家はどんな家か見て置きたいとも思つて、人形町の停留場で降りて、行つて見ると、成程蠣殼町二丁目十四番地に、澤村ヒサと女名前の小さい表札を打つた家がある。古ぼけた二階建の棟割り長屋で、狹い間口の硝子戸をぴつたり締め切つて、店前に、言ひ譯のやうに、數へられるほど「敷島」だの「大和」だのを竝べて、他に半紙とか、狀袋のやうなものをも少しばかり置いてゐる。ぐつと差し出した軒燈に、通りすがりにも、よく眼に付くやうに、向つて行く方に向けて赤く大きな煙草の葉を印に描いてゐる。「斯ういふ處にゐて働ぎに出るのかなあ!」と、私は、穢いやうな、淺間しいやうな氣がして、暫時戸外に立つたまゝ靜と內の樣子を見てゐた。

「御免!」

と言つて、私は出て來た女に、身を隱すやうにして、低聲で、「私、雪岡ですが、宮ちやんゐますか。」と、言ひながら、愛想に「敷島」を一つ買つた。「あゝ、さうですか。

ぢや一寸お待ちなさい！」と、次の間に入つて行つたが、また出て來て、「宮ちやん、其方の戸外の方から行きますから。」と、密々と言ふ。

私は何處から出て來るのだらう？　と思つて、戸外に突立つてゐると、直ぐ壁隣りの洋食屋の先の、廂合ひのやうな薄暗がりの中から、ふいと、眞白に塗つた顏を出して、お宮が、

「ほゝ、あはゝゝゝ。……雪岡さん？」と懷かしさうに言ふ。

變な處から出て來たと思ひながら、「おや！　そんな處から！」と言ひながら、傍に寄つて行くと、「あはゝゝゝ暫くねえ！　どうしてゐて？　と向うからも寄り添うて來る。

其處の火灯で、夜眼にも、今宵、紅をさした脣をだらしなく開けて、此方を仰くやうにして笑つてゐるのが分る。私は外套の胸を、女の胸に押付けるやうにして、

「どうしてゐたかツて？……電話で話した通りぢやないかツ……人に要らぬ心配さして！」

女は「あはゝゝゝ」と笑つてばかしゐる。

「おい！　菊水といふのは何處だい？」

「あなたあんなに言つても分らないの？　直ぐ其處を突き當つて、一寸右に向くと、左手に狹い橫町があるから、それを入つて行くと直き分つてよ。……その橫町の入口に、幾個も軒燈が出てゐるから、その内に菊水と書いたのもありますよ。よく目を明けて御覽なさい……先刻、私、お湯から歸りに寄つて、あなたが來るから、座敷を空けて置くやうに、よくさう言つて置いたから……二疊の小さい好い室があるから、早くその室へ行つて待つていらつしやい。私直ぐ後から行くから。」と、嬉々としてゐる。

「さうか。ぢや直ぐお出で！……畜生！　直ぐ來ないと承知しないぞツ！」と、私は一つ睨んで置いて、菊水に行つた。

お宮は直ぐ後から來て、今晩はまだ早いから、何處か其處らの寄席にでも行きませう、といふ。それは好からうと、菊水の老婢を連れて、藥師の宮松に呂淸を聽きに行つた。

私は、もうぐつと色男になつたつもりになつて、蟇口をお宮に渡して了つて、二階

の先の方に上つて、二人を前に坐らせて、自分はその背後に横になつて、心を遊ばせてゐた。

此間、有樂座に行つた時には、此座へお宮を連れて來たら、さぞ見窄しいであらうと思つたが、此席ではどうであらうか、と思ひながら、便所に行つた時、向側の階下の處から、一寸お宮の方を見ると、色だけは人並より優れて白い。

その晩、

「吉村といふ人、それからどうした？」と聞くと、

「矢張りそのまゝゐるわ。」と、言ふ。

「そのまゝツて何處にゐるの？」

「何處か、柳島の方にゐるとか言つてゐた。……私、本當に何處かへ行つて了ふかも知れないよ。」と、萎れたやうに言ふ。

私は、居るのだと思つてゐれば、またそんなことをいふ、と思つて、はつと落膽しながら、

「君の言ふことは、始終變つてゐるねえ。も少し居たら好いぢやないか。」と、私は、

斯うしてゐる内にどうか出來るであらうと思つて、引留めるやうに言つた。けれども女は、それには答へないで、

「……私また吉村が可哀さうになつて了つた。……昨日、手紙を讀んで私眞個に泣いたよ。」と、率直に、この間と打つて變つて今晩は、沁々と吉村を可哀さうな者に言ふ。

さう言ふと、妙なもので、此度は吉村とお宮との仲が、いくらか小憎いやうに思はれた。

「ヘツ！　この間、あんなに惡い人間のやうに言つてゐたものが、どうしてまた、さう遽かに可哀さうになつた？」私は輕く冷やかすやうに言つた。

「……手紙の文句がまた甘(うま)いんだもの。そりや文章なんか實にうまいの。才子だなあ！　私感心して了つた。斯う人に同情を起さすやうに同情を起さすやうに書いてあるの。」と、獨りで感心してゐる。

「へーえ。さうかなあ。」と私はあまり好い心持はしないで、氣の無い返事をしながらも、腹では、フジ、文章がうまいツて、どれほどうまいんであらう？　馬鹿にされたやうな氣もして、

「お前なんか、何を言つてゐるか分りやしない。ぢや向うの言ふやうに、一緒になつてゐたら好いぢやないか。何もこんな處にゐないでも。」

さういふと女は、

「そんなことが出來るものか。」と、一口にけなして了ふ。

私は、これは、愈々聞いて見たいと思つたが、その上强ひては聞かなかつた。

お宮のことに就いて、長田の心がよく分つてから、以後その事に就いては、斷じて此方から口にせぬ方が可いと思つたが、だれの處といふことなく、寂しいと思へば遊びに行く私のことだから、……先達てから二週間ばかりも經つて久振りに遊びに行くと、丁度其處へ饗庭――これもお前の、よく知つた人だ。――が來てゐたが、何かの話が途切れた機會に、長田が、

「お宮はその後どうした?」と訊く。

私はなるたけ避けて靜として置きたいが、腹一杯であつたから、

「もう、お宮のことに就いては、何も言はないで置いてくれ。」と、一寸左の掌を出して、拜む眞似をして笑つて言ふと、長田は唯じろ〳〵と笑つてゐたが、暫時して、

「あの女は寢顏の好い女だ。」
と、一口言つて私の顏を見た。
私は、その時、はつとなつて、「ぢや愈々」と思つたが强ひて何氣ない體を裝うて、
「ぢや、買つたのかい？」と輕く笑つて訊いた。
「うむ！……一生君には言ふまいと思つてゐたけれど、…此間行つて見た。ふゝん！」
と嘲笑ふやうに、私の顏を見て言つた。
「まあ可いさ。どうも種々の奴が買つてゐるんだからね……支那人にも出たと言つてゐたよ。」私は固より好い氣持のする理由はないが、どうせ斯うなると承知してゐたから、案外平氣で居られた。すると、長田は、
「ふゝん、そりやそんなこともあるだらうが、知らない者なら幾許買つても可いが、併し吾々の内の知つた人間が買つたことが分ると、最早連れて來ることもどうすることも出來ないだらう！……變な氣がするだらう。」とざまを見ろ！　好い氣味だといふやうに、段々恐い顏をして、鼻の先で「ふゝん！」と言つてゐる。
「變な氣は、しやしないよ。」と避けようとすると、

「ふゝん！　おれでも少しは變な氣がする筈だ。……變な氣がするだらう！」負け惜みを言ふな、嘘だらう、といふやうに冷笑する。

それでも私は却つて此方から長田を宥めるやうに、

「可いぢやないか。支那人や癩病と違つて君だと清淨に素姓が分つてゐるから。……まあ構はないさ！」と苦笑にまぎらして、見て見ぬ振りをしながら、一寸長田の顏を見ると、何とも言へない、執念深い眼で此方を見てゐる。私は、慄然とするやうな氣がして、これはなるたけ觸らぬやうにして置くが好いと思つて、後を默つてゐると、先は反對に何處までもそれを追掛けるやうに、

「この頃は吾々の知つた者が、大勢彼處に行くさうだが、僕は、最早あんな處に餘り行かないやうにしなければならん。……安井なんかも、よく行くさうだ。それから生田なんかも時々行くさうだから、屹度安井や生田なんかも知つてゐるに違ひない。生田が知つてゐると一番面白いんだが。あはゝゝゝ。だから知つた者は多い。あはゝゝゝ。」と、何處までも引絡んで厭がらせを存分に言はうとする。生田といふのは、自家に長田の弟と時々遊びに來た、あの眼の片眼惡い人間のことだ。……あんまり執拗い

から、私も次第に胸に据ゑかねて、此方が初め惡いことでもしはすまいし、何といふ無理な厭味を言ふ、と、今更に呆れたが、長田の面と向つた、無遠慮な厭味は年來耳に馴れてゐるので尙ほ靜と耐へて、

「君と靑山とは、一生岡燒きをして暮す人間だね。」と矢張り笑つて居らうとして、ふツと長田と私との間に坐つてゐる右手の饗庭の顏を見ると、饗庭が、何とも言へない獨り居り場に困つてゐるといふやうな顏をして私の顏を凝乎と見てゐる。その顏を見ると自分は泣き顏をしてゐるのではないか、と思つて、悄氣た風を見せまいと一層心を勵まして顏に笑ひを出さうとしてゐると、長田は、ます〳〵癖の白い齒を、イーンと露はして嬲り殺しの止めでも刺すかのやうに、荒い鼻呼吸をしながら、

「雪岡の知つてる奴だと思つたら厭な氣がしたが、あれは君とお宮とを侮辱するつもりでやつたことなのだ。」とせゝら笑ひをして、あくどく厭味を言つた。

けれども私は、「どうしてそんなことを言ふのか?」と言つた處が詰まらないし、立上つて喧嘩をすれば野暮になる。それに忌々しさの嫉妬心から打壞しを遣つたのだ、といふことは十分に飮込めてゐるから、何事に就けても嫉妬心が強くつて、直ぐまた

それを表に出す人間だが、そんなにもお宮のことが妬けたかなあと思ひながら、私は長田の嫉妬心の強いのを今更に恐れてゐた。

それと共に、また自分の知つた女をそれまでに羨まれたと思へば却つて長田の心が氣の毒なやうな氣も少しはして、それから、さういふ毒々しい侮辱の心持でしたと思へば、何だかお宮も可哀さうな氣分になつて來た。私はそんなことを思つて打壞された痛い心と、面と向つて突つかゝられる荒立つ心とを凝乎と取鎭めようとしてゐた他の二人も暫時默つて座が變になつてゐた。すると饗庭が、

「あゝ、今日會ひましたよ。」と、微笑としながら、私の顏を見て言ふ。

「誰に？」と、聞くと、

「奥さんに。つい、其處の山吹町の通りで。」

すると長田が、横合から口を出して「僕が會へば好かつたのに。……さうすれば面白かつた。ふゝん。」といふ、私は、それには素知らぬ顏をして、

「何とか言つてゐましたか。」

「いえ。別に何とも。……唯皆樣に宜しく言つて下さいつて。」

すると、また長田が横から口を出して、

「ふゝん。彼奴も一つ俺が口説いたらどうだらう。はゝツ。」と、毒々しく當り散らす。

それを聞いて、假令口先だけの戯談にもせよ、ひどいことを言ふと思つて、私は、ぐつと癪に障つた。今まで散々種々なことを、言ひ放題言はして置いたといふのはお宮はどうせ賣り物買ひ物の女だ。長田が買はないたつて誰が買つてゐるのか分りやしない。先刻から默あつて聞いてゐれば、隨分人を嘲弄したことを言つてゐる。それでも此方が强ひて笑つて聞き流して居ようとするのは、そんな詰まらないことで、男同志が物を言ひ合つたりなどするのが見つともないからだ。

お雪は今立派な商人の娘と、いふぢやない。またあゝいふ處にも手傳つてもゐたし、以前嫁いてゐた處もあんまり人聞きの好い處ぢやなかつた。あれから七年この方、自分とあゝなつて斯うなつたといふ筋道を知つてゐるが爲に、人を卑んでそんなことを言ふが、假令見る影もない貧乏な生計をして來ようとも、またその間がどういふ關係であつたらうとも、苟めにも人の妻でゐたものを捉へて、「彼奴も、一つ俺が口説いたらどうだらう。」とは何だ。此方で何處までも溫順しく苦笑で濟ましてゐればつけ上つ

て蟲けらかなんぞのやうに思つてゐる。云つて自分の損になるやうな人間に向つては、そんなことは、おくびにも出し得ない癖に、一文もたそくにならないやくざな人間だと思つて、人を馬鹿にしやがるないッ。

と、忽ちさう感じてわく〳〵する胸を撫でるやうに堪へながら、向うの顔を凝乎と見ると、長田は、その淺黑い、意地の惡い顏を此方に向けて、じろ〳〵と視てゐる。

「彼奴も俺が口說いたらどうだらう。」といふその自暴糞な出放題な言ひ草の口裏には自分の始終行つてゐる蠣殼町で、此方が案外好い女と知つて、しごきなどを貰つた、といふことが嫉けて嫉けて、焦れ〳〵して、それでそんなことを口走つたのだといふことが、明歷と見え透いてゐる。

　さう思つて、また凝乎と長田の顏色を讀みながら、自分の波のやうに騷ぐ心を落着け落着けしてゐたが、饗庭は先刻その長田の言つた言葉を聞くと、同時に又氣の毒な顏をして私を見てゐたが、二人が後を默つてゐるので、暫時經つてから何と思つたか、

「あの人可いぢやありませんか。……私なんか本當に感服してゐたんですよ。感服してゐたんですよ。……」と、だれにも柔かな饗庭のことだから、平常ほゞ知つてゐる

私の離別に事寄せてその場の私を輕く慰めるやうに言ふ。
「えゝ、どうもさう行かない理由があるもんですから。」と詳しく事情を知らぬ饗庭に答へてゐると、また長田が口を出して、
「ありや、細君にするなんて、初めからそんな氣はなかつたんだらう。一寸家を持つから來てくれつて、それからずる〳〵にあゝなつたんだらう。」
とにべも艶もなく、人を馬鹿にしたやうに、鼻の先で言つた。
私は、成程、男と女と一緒になるには、種々な風で一緒になるのだから、長田が、さう思へば、それで可いのだが、饗庭が、假令その場限りのことにしても、折角さう言つて、面白くもない、氣持を惡くするやうな話を和げようとしてゐるのに、また面と向つて、そんなことを言ふ。何といふ言葉遣ひをする人間だらう！ と思つて、返答の仕樣もないから、それには答へず、默つてまた長田の顏を見たが、お宮のことが忌々しさに氣が荒立つてゐるのは分り切つてゐる。さう思ふと、後には腹の中で可笑しくもなつて、怒られもしないといふ氣になつた。で、それよりもいつそ悄氣た照れ隱しに、先達てのあの扱帶をくれた時のことを面白く詳しく話して、陽氣に浮かれて

ゐた方が好い。他人に話すに惜しい晩であつた、と、これまでは、その事をちびりちびり思ひ出しては獨り嬉しい、甘い思ひ出を歡しんでゐたが、斯う打壞されて、荒されて見ると大事に藏つてゐたとて詰まらぬことだ。——あゝそれを思へば殘念だがどうせ斯うなるとは、ずつと以前「直ぐ行つて聞いて見てやつた。」と言つた時から分つてゐたことだ、と種々なことが逆上つて、咽喉の奧では咽ぶやうな氣がするのを靜と堪へながら、表面は陽氣に面白可笑しく、二人のゐる前で、さつき言つた、しごきをくれた夜の樣を女の身振りや聲色まで眞似をして話した。

黒髪

一

……その女は、私の、これまでに數知れぬほど見た女の中で一番氣に入つた女であつた。どういふ所が、そんなら、氣に入つたかと訊ねられても一々口に出して説明することは、むづかしい。が、何よりも私の氣に入つたのは、口のきゝやう、起居(たちゐ)振舞ひなどの、わざとらしくなく物靜かなことであつた。そして、生まれながら、何處から見ても京の女であつた。尤も京の女と云へば、どこか顏に締りのない感じのするのが多いものだが、その女は眉目の邊が引締つてゐて、口元なども屢々彼地(あちら)の女にあるやうに弛んだ形をしてをらず、色の白い、夏になると、それが一層白くなつて、じつとり汗ばんだ皮膚の色が、ひとりでに淡紅色(ときいろ)を呈して、いやに厚化粧を賣り物にしてゐるあちらの女に似ず、常に白粉などを用ゐぬのが自慢といふほどでもなかつたけれど……彼女は、そんな氣どりなどは少しもなかつたから……多くの女のする、手に暇さへあれば懷中から鏡を出して覗いたり、鬢をなほしたり、又は紙白粉で顏を拭くと

かいつたやうなことは、つひぞなく、氣持のさつぱりとした、何事にでも內輪な、どちらかといふと色氣の乏しいと云つてもいゝくらゐの女であつた。

　そして、何よりもその女の優れたところは、姿の好いことであつた。本當の背はさう高くないのに、ちよつと見て高く思はれるのは身體の形がいかにもすらりとして意氣に出來てゐるからであつた。手足の指の形まで、すんなりと伸びて、白いところにうす蒼い靜脈の浮いてゐるのまで、一入女を優しいものにしてみせた。冬など蒼白いほど白い顏の色が一層さびしく沈んで、いつも銀杏がへしに結つた房々とした鬢の毛が細おもての兩頰をおほうて、長く取つた髱が鶴のやうな頸筋から半襟に被ひかぶさつてゐた。

　それは物のいひ振りや起居と同じやうに柔和な表情の顏であつたが、白い額に、いかつくないほどに濃い一の字を描いてゐる眉毛は、さながら白砂青松ともいひたいくらゐ秀でて見えた。けれど私に、何時までも忘れられぬのはその眼であつた。いくらか神經質な、二重瞼の、飽くまでも黑い、賢さうな大きな眼であつた。彼女は、決して、人に求めるところがあつて、媚を呈したりして泣いたりなどするやうなことはな

かつたけれど、どうかした話のまはり合せから身の薄命を省みて、ふと涙ぐむ時など
じつと默つてゐて、その大きな黑眸(くろめ)がちの眼が、ひとりでに一層大きく張りを持つて
きて、赤く充血するとともに、さつと露が潤んでくるのであつた。私は、彼女の、そ
の時の眼だけでも命を投げ出して彼女を愛しても厭はないと思つたのである。その頃
は年もまだ二十を三つか四つ出たくらゐのもので若かつたが、商賣柄に似ぬ地味な好
みから、頭髮(かみ)の飾りなども金あしの簪に小さい翡翠の玉をつけたのをよく挿してゐた
……。

二

それは、その女を知つてから、もう四年めの夏であつた。夏中を、京都に近い畿内
のある山の上に過した。高い山の上では老杉の頂から白い雲が、碧い空のおもてに湧
いて、八月の半ばを過ぎる頃には早くも朝夕は冷(つめた)い秋めいた風を身に覺えるやうにな
り、それとともにそゞろに都會の生活が懷かしくなつてきた。夏の初め山に行くまで

東京から京都に來ると、私は一ケ月あまりその女の家にゐたのであつたが、又近い內に山を下りてゆくといふことを云つてやると、女からは簡單な返事が來て、少しく事情があつて、まだ自由な身でないので、內證の男を自分の處に置いとくことは方々に對して憚りがある。夏の時は、一年半も會はなかつたあとのことで、あれは格別に主人の計らひで公けにさうしたのであつたが、度々といふわけにはゆかぬ、そのうち此方から何とか挨拶をするまで、京都へは來ないで、すぐ東京の方へ歸つて居つてもらひたいといふのであつた。

けれども私は、どうしてもそのまゝすぐ東京へ歸つてゆく氣にはなれなかつた。そして九月の下旬に山を下りて紀伊から大阪の方の旅に二三日を費して、侘しい秋雨模樣の、ある日の夕ぐれに、懷かしい京都の街に入つてきた。夏の初め山の方に立つてゆく時は女の家から立つていつたので、長い間情趣のない獨り住居に飽きてゐた私は、暫くの間でも女の家にゐた間のしつとりした生活の味が忘られず、出來ることならば直ぐ又女の處へ行きたかつたのだが、女は九月の初めに、それまでゐた餘所の家の二階がりの所帶を疊んで母親はどこか上京邊の遠い親類にあづけ、自分の身が自由

になるまで、少しでも餘計な錢(かね)の要るのを省きたいと云つてゐた。そのくらゐのことならば、私の方でも心配するから、夏のをはりに、自分が又山を下りてくるまでお母さんは、やつぱり此處の家へ置いて、所帶もこのまゝにして居るやうに云ひ置きもし、手紙でも度々そのことを繰返しいつて寄越(よこ)したにもかゝはらず、たうとう家は一時仕舞つてしまつたと云つて來たので、私は懐かしさに躍る胸を抱きながら、その晩方京都に着くと、荷物はステーションに一時あづけにして置き、まづ心當りの落着きのよささうな旅館を志して上京(かみきやう)の方をたづねて歩いたが、どうも思はしいところがなく、さうしてゐるうちに秋の日は早くも暮れて、大分蒸すと思つてゐると、曇つた灰色の空からは大粒の雨がぽつり／＼と落ちてきた。

　どこか親し味のある取扱ひをして泊めてくれるやうな處はないだらうか。女はなぜ、あの二階借りの住居を疊んでしまつたらう。自分は、五月から六月にかけて一ケ月ばかり彼女の處にゐる間に健康を増して、いくらか體に肉が付いたくらゐであつた。しかし、もうあそこにゐないと云へば、これから行つてみたところで爲方(しかた)もない。母親はどこにゐるのだらう。尤も女に逢はうとおもへば、すぐにでも會へないこ

とはないが、さうして逢ふのは、つまらない。

　そんなことを考へながら、ともかくも、これから暫くゆつくり滯泊するところが求めたいと思つたけれど、そのほかに心あたりもなく、仕方なく又奥まつた處から、電車の通つてゐる方へ出てくると、その電車は丁度先に女のゐた處の方にゆく電車であつたので、今はそこにゐても居なくても、やつぱりそつちの方へ惹着けられてゆくやうな氣がして、雨も降つてくるので、そのまゝ電車に飛び乘つた。そして東山の方をずつと廻つて祇園町の通りを少しゆくと、そこに彼女の居た家があるので、その近くの停留場で電車を降り、夏の前暫くゐて勝手を知つてゐる、暗い路地の中に入つていつて見たが、門は締つてゐて、階下の家主の老女もゐる氣配はせず、上の、女のゐた二階――自分もそこに一ケ月ばかり女と一つの部屋にゐた――は戸が締つて灯光も洩れてゐない。

「まあ、しかし、それは明日になつてからでもよい。」

　さう思ひながら、なるたけそこに近い處に宿を取りたい、暫くの間でも好きな女と一緒にゐた、懐かしい場所から遠く離れたくない氣がして、そこから少し東山よりの

方へ上つていつた處にある、とある旅館にいつて泊ることにした。それといふのも、その旅館へはその女とも一緒によく泊りにいつたことのある馴染ふかい家であつたからだ。そのあたりは、そんな種類の女の住んでゐる祇園町に近いところで、三條の木屋町でなければ下河原といはれて、祇園町の女の出場所になつてゐる洒落た土地であつた。それは東山の麓に近い高みになつてゐて、閑雅な京都の中でも取り分けて閑寂なので人に悦ばれる處であつた。

三

その前の年の冬に東京から久しぶりに女に逢ひにいつた時にも、矢張りその家へ泊つたが、私はその時分のことを忘れることが出來ない。急に會つて話したいことがあるから來てもらひたい、といふ手紙を女から寄越したので、一月の中ごろであつた、私は夜の汽車で立つていつた。スチームに暖められた汽車の中に假睡の一夜を明かして、翌朝早く眼を覺ますと、窓の外は野も山も薄化粧をしたやうな霜に凍てて、それ

に麗かな茜色の朝陽の光が漲り渡つてゐた。雪の深い關ヶ原を江州の方に出抜けると、平潤な野路の果てに遠く太陽をまともに受けて、淡蒼い朝靄の中に霞んで見える比良、比叡の山々が湖西に空に連なつてゐるのも、もう身は京都に近づいてゐることが思はれて、ひとりでに胸は躍つてくるのであつた。そして、幾ら遠く離れてゐても、東京に靜としてゐれば、諦めて落着いてゐる筈の、いろ〳〵の思ひが、汽車の進行につれて次第に募つてきて、はては悩ましいまでに不安に襲はれてくる。

『女はい丶鹽梅に家にゐるだらうか。此間中から大阪などへ行つてゐて留守ではなからうか。大阪には一人深くあの女を思つてゐる男があるのだ。……自分が女を初めて知つた時の夏であつた。その男に招ばれて、女が向うの座敷にいつてゐる時、ちやうど上の木屋町の床で、四五軒離れた處から、二人とも今湯を上がつたばかりの浴衣姿で、その男の傍に女が來て坐つてゐるところを、遠見に見たことがあつた。その時さながら身を熬るやうな悩ましさを覺えたことがあつた。それを思うても何が苦しいというつて戀の苦しみほど身に徹へるものはない。……どうか家に居つてくれて、すぐ逢へればよいが。昨夜はかうして、自分は汽車に一夜を明かして、はる〴〵東京から逢

ひに來たのである。女はどこへ、どんな人間の座敷に招ばれていつたらうか。まだ朝は早い。朝の遲い廓では今ごろはまだ眠つてゐるであらう。』

　そんなことが綿々として、後からあとから思ひ浮んで、汽車の座席にじつとしてゐるに堪へられないくらゐになつた。私はそのあたりから賴信紙をとり出して、十一時までには必ず加茂川べりのある家に行き着いてゐるからといふ電報を打つて置いた。そして京都驛に着いたのはまだ八時頃であつたが、どんよりとした曉靄(あさもや)は朝餉の炊煙と融合ひ、停車場前の廣場に立つて一年近くも見なかつた四圍(あたり)の山々を懷かしく眺めわたすと、東山は白い靄に包まれて淸水の塔が音羽山の中腹に夢のやうにぼんやりと浮んで見える。遠くの愛宕から西山の一帶は朝暾(あさひ)を浴びて淡い藍色に染めなされてゐる。私は足の踏みども輕く、そこからすぐ先刻(さつき)電報で知らしておいた加茂川べりの、とある料理屋を志していつたが、そこも廓の中にある家のこととて、家の前に行つた時、やう〳〵店の者が表の戸をあけてゐるところであつた。やがて階段を上がつて、河原を見晴す二階の座敷に通り食べる物などをあつらへてゐるうちに、靄とも烟ともつかず、重く河原の面を立ち罩めてゐた茜色を帶びた白い川霧がだん〳〵中空をさし

て昇つてくる朝陽の光に消散して、四條の大橋を渡る往來の人の足音ばかり高く聞えてゐたのが、ちやうど影繪のやうな人の姿が次第に見え渡つて來た。靜かな日の影は麗々と向岸の人家に照り映えて、その屋竝の彼方に見える東山はいつまでも靜かな朝霧に籠められてゐる。

女中に、少ししたら女の聲で電話がかゝつてくるかも知れぬからと頼んで置いて、私はひとり暖かい鍋の物を食べながら、

『あゝいつて、委しい電報を打つて置いたけれど、丁度いい鹽梅に女が家にゐるか、ゐないか分らない、とり分け氣ばたらきのない、悠長な女のことであるから……尤もその、しつとりして物靜かなところがあの女の好い處であるが……たとひ折よく昨夜の出先から、今朝もう家に戻つてきてゐたにしても、あの電報を見て、早速てきぱきと、電話口に立つてゆくやうなことはあるまい。ほんとに、人の心も知らないといふのは彼奴のことだ。』

と、そんなことを思つて、不安の念に惱んでゐると、ものの一時間ともたゝないうちに、女中が座敷に入つてきて、

「あの、お電話どつせ。」といふ。

私は、跳ね上がつたやうな氣がしながら、すぐさま立つて電話のところへ下りていつた。

「あゝ、もし〳〵私。」と聲を掛けると、向うでも、

「あゝ、もし〳〵。」と呼ぶ聲がする。何といふ懐かしい、久し振りに聽く女の聲であらう。振返つて考へると、それは去年の五月から八九ケ月の間も聽かなかつた聲である。手紙こそ月の中に十幾度となく往復してゐるが、去年の五月からと云へば顔の記憶も朧になるくらゐである。

「あゝ、わたしよ。電報を讀んだの？」

「えゝ、今讀んだとこどす。」

「よく、家にゐたねえ。こちらは分つてゐるだらう。」

「よう分つてゐます。」

「それぢやすぐおいで。」

「えゝ、いても、よろしいけど、そこの人知つとる人多うおすさかい。私顔がさすと

いけまへんよつて。あんたはん、今日そこから何處へおいでやすのどす。」
「どこへ、とは？　泊るところ？」
「えゝ、さうどす。」
「それは、まだ定めてない。あんたに一遍逢つてからでもいゝと思つて。」
それから、兎も角そんなら東山の方の、とある小隱れた料理屋で一應逢つてからのことにしよう。二時から三時までの間に、兩方でそこまで行つて待合はすことにして互に電話を切らうとすると、女は、念を押すやうに、
「もし〳〵、あんたはん違へんやうにおしやす。」
いくらか嗄れたやうな女の地聲で繰返していふ。私はいきなり電話口へ自分の口をぴたりと押付けたいほどの氣になつて、
「戲談を。そちらこそ違へちやいけないよ。私はねえ、京都の地にゐる人と違ふんだよ。ゆうべ夜汽車で、わざ〳〵百何十里の道をやつて來たのだよ。氣の長い人だから、時間が當てにならない。待たしたら怒るよ。」さういふと、電話口で、ほゝと笑ふ聲だけして、電話は切れた。

やがてもとの座敷に戻つてくると、女中はくたくた煮える鍋の傍に付いてゐたが、

「來やはりしまへんのどすか。」と訊く。

「こゝへは來ないやうだ。」

さういつて、私はそこ〳〵に御飯にしてしまつた。南に向いた窓から河原の方に眼を放すと、短い冬の日はその時もう頭の眞上から少し西に傾いて、暖かい日の光は、さう思うて見るせゐか四條の大橋の彼方に竝ぶ向岸の家つゞきや、八坂の塔の見える東山あたりには、もう春めいた陽炎が立つてゐるかのやうである。私は約束の時間をちがへぬやうに急いでそこを出ていつた。京都の冬の日の閑寂さといつたらない。私はめづらしく、少しの酒にやゝ陶然となつてゐたので、そこから出るとすぐ居合はす俥に乘つて、川を東に渡り建仁寺の笹藪の蔭の土塀について裏門のところを曲つて、段段上りの道を東山の方に挽かれていつた。そして靜かな冬の日のさしかけてゐる下河原の街を歩いて、數年前一度知つてゐる心あたりの旅館を訪ふと、快く通してくれた。それを緣故にして、その後も度々いつて泊つたが、そこの座敷は簡素な造りであつたが、主人が風雅の心得のある人間で、金にいとめを見せず氣持よく座敷を飾つて

あつた。私は厚い八端の座蒲團の上に兎も角も坐つて、女中の靜かに汲んで出した暖かい茶を呑んでから、先刻女と電話で約束した會合の場所が、そこからすぐ近いところなので、時計を出して見い／＼遲刻せぬやうにと、一寸其處までといひ置いて、出て行つた。そこらは、もう高臺寺の境內に近いところで、蓊鬱とした松の木山がすぐ眉に迫り、節のすなほな、眞青な竹林が家のうしろに續いてゐたりした。私は、山の方に上がつてゆく靜かな細い通りを歩いて、約束の、眞葛ケ原のある茶亭の入口のところに來て暫く待つてゐた。そこは加茂川ぞひの低地から大分高みになつてゐるので、振返つて向うの方を見ると、麗かに照る午さがりの冬の日を眞正面に浴びた愛宕の山が、金色に輝く大氣の彼方にさながら藍霞のやうに渡つてゐる。そして、あまり遠くへゆかぬやうにしてそこらを少しの間ぶらぶらしてゐるところへ、此方に立つて見てゐると、細い坂道を往來の人に交つてやつて來るのは、まぎれもない彼女である。それは、去年の五月以來八九ケ月見なかつた容姿である。だん／＼近くなつてくると、向うでも此方を認めたと思はれて、嫣笑してゐる。銀杏返しに結つた頭髮を撫でもせず、黑い襟卷をして、お召の半ゴートを着てゐる下の方にお召の前掛などをし

てゐるのが見えて、不斷のまゝである。

「私だ、よく覺えてゐたねえ。」と、笑ふと、

「そら覺えてゐますさ。」

「今そこで宿をきめたのだ。知つてゐるだらう、すぐそこのあの家。あそこが早く氣が付くと、すぐあそこへ來てもらふんだつた。まあ、いゝ、入らう。」さういつて、私は先に立つて、そこの茶亭に入つた。

そして、庭の外はすぐ東山裾の深い竹林につゞいてゐる奧まつた離室に通つて、二三の食べる物などを命じて暫く話してゐた。

「こんな物が出來てえ。」と甘えるやうな鼻聲になつて、しきりに顏の小さい面皰のやうものを氣にしてゐる。

「私、ちよつと肥りましたやろ。」

「うむ、えゝ血色だ。達者で何より結構だ。そして急に話したいことがあるから來てくれと云つたのは何の事だい？」

さういつて訊いても女は默つて答へない。重ねて訊くと、

「それは又後で話します。」といふ。
「ぢや、これからそろ〳〵宿の方にゆからうか。」といふと、
「私、今すぐは行けまへんの。あんたはん先歸つてとくれやす。夜になつてから行きます。」
「なぜ今いけないの。一緒にゆからうぢやないか。」さういつて勸めたけれど、今は一寸餘所のお座敷をはづして逢ひに來たのですぐといふ譯にはいかぬといふので、堅く後を約束してそこの家を伴れ立つて一緒に出て戻つた。そして旅館の入口の前で別れながら、
「一緒に御飯を食べるやうに、都合して成るたけ早くおいで。」
「えゝ、さうします。」といつて、女はかへつて去つた。
冬の夜は靜かに更けて、嚴しい寒さが深々と加はるのを、室内に取付けた瓦斯煖爐の火に溫まりながら、私は落着いた氣分になつて讀みさしの新聞などを見ながら女の來るのを今か〳〵と待ちかねてゐた。女はなか〳〵やつて來なかつたので、たうとう空腹に堪へかねて、獨りで物足りない夕食を濟ましてしまつた。さうしてゐても女は

まだ〳〵やつて來ないので、微醺氣分でたいぶ焦れ〳〵してきて、氣長く待つ氣で讀んでゐた雜誌をも到頭そこに投げ出して、煖爐の前に褞袍にくるまつて肱枕で橫になり、來ても假睡した眞似をして默つてゐてやらう、と思つてゐると、十時も過ぎて、やがて十一時ちかくになつて、遠くの廊下に靜かな足音がして、今度は、どうやら女中ばかりの步くのとはちがふと思つてゐると、襖の外で何かいふ氣配がして、女中が外から膝をついて襖をそうつと開けると、そこに彼女のすらりとした姿が立つてゐた。そして、先刻とちがひ頭髮の容もとゝのへ薄く化粧をしてゐるのでずつと引き立つて見えた。からしてみると、たしかに佳い女である。この女に自分が全力を擧げて惚れてゐるのは無理はない。こんな女を自分の物にする悅びは一國を所有するよりももつと强烈なる本能的の悅びである。

女は悠揚とした態度で入つてきながら、

「えらい遲なりました。」と、一と口云つたきり、すこしもつべこべしたことをいはない。夕飯は濟んだのかと訊くと、食べて來たから、何も欲しくないといふ。翌日は一日、寒さを恐れて外にも出ずそこで遊んでゐたが、彼女は机に凭れて、遠くの叔母に

やるのだといつて頻りに卷紙に筆を走らせてゐた。櫻の花びらを、あるかなきかに、ところ〴〵に織り出した黒縮緬の羽織に、地味な藍色がかつた薄いだんだら格子のお召の着物をきて、ところ〴〵紅味の入つた羽二重しぼりの襦袢の袖口の絡まる白い纖細い腕を差伸べて左の手に卷紙を持ち、右の手に筆を持つてゐるのが、賤しい稼業の女でありながら、何となく古風の女めいて、どうしても京都でなければ見られない女であると思ひながら、私は寢床の上に樂枕しながら、女の容姿に横からつく〴〵と見蕩れてゐた。……

その時は、その晩遲い汽車で、女に京都驛まで見送られて東京に戻つてきた。それから一年ばかり、手紙だけは始終取交してゐながら、顏を見なかつたのである。

四

その女が、自分の他にどんな人間に逢つてゐるか、自分に對して、果してどれだけの眞實な感情を抱いてゐるか。近い處にゐてさへ賣笑を稼業としてゐる者の內狀は知

るよしもないのに、まして遠く離れて、しかも一年以上二年近くも相見ないで、たゞ手紙の交換ばかりしてゐて、對手の心の眞相は知られる筈もないのであるが、そんなことを深く疑へば、いくら疑つたつて際限がなかつた。時とすると堪へ難い想像を心に描いて、殆ど居ても起つてもゐられないやうな愛着と、嫉妬と、不安のために胸を焦がすやうなこともあつたが、私は、强ひて自から欺くやうにして、さういふ不快な想像を搔き消し、不安な思ひを胸から追ひ拂ふやうに努めてゐたのであつた。

そして、三四年につゞいてゐる長い間の此方の配慮の結果、あたりまへならば、もうとうに女の身の解決は着いてゐる筈であるのに、それがいつまで經つても要領を得ないので、後には自分の方から隨分詰問した書面を送つたこともあつたが、女はそれについては、少しも、此方を滿足せしめるやうな、はつきりした返事を寄越さなかつた。たうとう又、やうやく一年半ぶりに女に逢ふべく京都の地に來てゐながら、私は、たゞ、あたりまへの習慣に從つて女に逢ふのが物足りなくなつて、との前の時のやうに手紙や電報で合圖をしても、それに對して一向滿足な手紙をよとさないのであつた。たゞ普通の習慣に從つて逢はうとすれば直ぐにでもあへるのであるが、女の方

から進んで何とか云つてくるまでは暫く放棄つておかう。これを假りに人の事として平靜に考へてみても、向うから進んで何とか云はなければならぬ義理である。百歩も千歩も讓つて考へても、いくら卑しい稼業の女であつてもそんな譯のものではない。

さう思ひ諦めて、暫くの間、氣を變へるために、私は晩春の大和路の方に小旅行に出掛けていつた。そつちの方は、もう長い間行つてみたいと思つてゐたところであつたが、この四五年の間私の頭の中は全部その女の爲に占領せられて、ほかのことは何も彼も後まはしにして置いた。眞實のこと、私は、その女を自分のものにしなければ、何も欲しくないと思つてゐたのであつた。名譽も財寶も要らぬ、ただ、あの、漆のやうに眞黑い、大きな沈んだ瞳、おとなしさうな顏、白砂青松のごときぱらりとした眉毛、ふつくりと張つた鬢の毛、すらりとした容姿。あらゆる自分の心を惹きつける、そんな美しい部分を綜合的に持つてゐる生き物を自分の所有にしてしまはなければ、身も世もありはせぬ。隨分身體を惡くするまでそんなに思ひ詰めて、この數年をまるで熱病にでも罹つてゐる如き狀態で過ぎて來たのであつた。

それゆゑ私が、美しい自然や古い美術の寶庫である大和の方の晩春の中に入つて行

つたのは、丁度ウェルテルが悲しく傷んだ心を美しい自然の懐に抱かれて慰めようとしたと同じやうなものであつた。

そして一と月近く大和の方の小旅行をして再び京都に戻つて來た時にはもう古都の自然もすつかり初夏になつてゐた。悩ましい日の色は、思ひ疲れた私の眼や肉體を一層懊悩せしめた。奈良からも吉野からも到る處から繪葉書などを書いて送つて置いた。女から何とかいつて來るだらうと思つてゐたが、依然として知らん顔をして何のたよりもして寄越さなかつた。たうとう又根負けして此方から出かけて行つて仕方なく普通の習慣に從つて、ある家から自分といはずに知らすると、女はちやうど折よく內にゐたと思はれて早速やつて來た。一年半の間見なかつたのである。この前冬見た時よりも氣候の好い時分のせゐか、それとも普通に招かれたお座敷にゆくので美しく化粧をしてゐるせゐか、ずつと肉が付いて身體が大きくなつたやうに思はれ、もとからすらりとした容姿が一段引き立つて、脊が更に高く見えた。彼女達がそんな不意の座敷に招ばれてゆく時の風俗と思はれ、けばけばしい友禪の襦袢のうへに地味な黒縮緬の羽織を着てゐる。彼女は、階段の上り口から私の方を見たが、顔の表情は微動だも

せず、ぬうつとして落着いたその態度はまるで無神經の人間のやうであつた。そして傍へ來ても「お久しう。」とも何とも云はずに默つてそこへ坐つたまゝである。どんなことがあつても彼女は決して深く巧んだ惡氣のある女とは認めないが、對手のいふことがあまり腹の立つやうなことを云つたり、くどかつたりする時にはさながら京人形のやうに、その綺麗な小さい口を閉ぢてしまつて石の如く默つてしまふのである。その氣心をよく知つてゐるので、私は、こちらでもやゝ暫く默つて、わざとらしく、じろじろ女の顏を見てゐたが、やつぱり遂に根まけして、

「京人形、京人形の顏を二年も見なかつたので、今そこへ來た時にはほかの人間かと思つた。」戲弄ふやうにさういふと、彼女はそれでも微笑もせず、反對に、

「あんたはんかて餘りやおへんか。」

彼女は美しい眉根を神經質に顰めながら憤るやうにいふ。私は「えらい濟まんこと。」くらゐはいふであらうと思つてゐたのに、向うからそんな不足をいふので、何といふ勝手な女であらうと思つて、腹の中で少し勃然となつたが、又、そんなぺたつくやうな調子の好いことをいはぬのが却つてよくも思はれる。

「一年と半とし見ないんだよ。そして一體どんな話になるのだい？　こんなに長い間顏を見たいのを堪へてゐたのも、後を樂しみにしてゐるからぢやないか。」

さういつて、今まで手紙の度に幾度となく訊ねてゐる彼女の境遇の解放について重ねて訊ねたが、女はたゞ、

「そのことは又後でいひます。」といつたきり何にもいはうとしない。

「また後でいひますもないぢやないか。何年それを云つてゐると思ふ。」

二人はちやんと坐つて向ひ合ひそんな押問答を暫く繰返してゐたが、彼女は默つて考へてゐた擧句、謎のやうに、

「こゝではそのことも云へませんから、私、かへります。」といふ。

私は、少し眼の色を變へて、

「妙なことをいふ。こゝで云へないつて、どこでそれをいふの？」

「あんたはんがようおいでやす下河原の家へこれからいて待つとくれやす。そしたら私あとからいきます。こゝの家から一緒にゆくのは此處の家へ對していけまへんやろ。それから私一遍家へ去んで、あつちやから往きます。」女の持前の愛想のない調子

でそんなことをいふ。

私は又女のいふことにいくらか不安をも感じたが、本來それほど性情の善くない女とは思つてゐないので、段々疑ひも解け、その氣になり、

「ぢや、さうするから、きつとあそこへ來なければいけないよ。」と、念押しをして、その上もう餘り諄くいはぬやうにして、そこの家は體よくして、二人は別々に出て戻つた。

それから私は又、いつかの下河原の家へ行つて待つてゐた。それは日の永い五月の末の、まだ三時頃であつたが、彼女は容易にやつて來なかつた。悠暢な氣の永い女であることはよく知つてゐるので、そのつもりで辛抱して待つてゐたが、しまひには辛抱しきれなくなつて、いひやうのない不安の思ひに惱まされてゐるうちに、高い塀に取り圍まれてゐる靜かな栽庭にそろ〳〵日が翳つて、植木の隅の方が薄暗くなり、暖かつた陽氣が變つてうすら寒く肌に觸るやうになつてきた。それでもまだ女の顏は見られなかつた。不安のあとから不安が襲つてきて、いろ〳〵に疑つてみたが、あんなにいつてゐたからよもや來ないことはあるまい。そんな背を向けて欺き遁げるやうな質

の悪い女ではない筈である。そんなことをする女を、おめ〳〵と四五年の長い間一途に思ひ詰め、焦がれ悩んでゐたとしたら、自分はどうしても自身の不明を恥ぢねばならぬ。義理にもそんな薄情な行爲を仕向けられるやうな事を、自分は少しもしてゐない。……今に來るにちがひない。不安の念を、さう思ひ消して待つてゐた。

しかし、それは何ともいへない好い晩春の宵であつた。この前の冬の時と同じやうに女の來るのを待つてゐる心に變りはないが、あの時とちがひ今は初夏の頃とて、私は湯上りの身體を柔かい褞袍にくるまりながら肱枕をして寢そべり、障子を開放した前栽の方に足を投げ出して靜と心を澄ましてゐると、塀の外はすぐ圓山公園につゞく祇園社の入口に接近してゐるので、暖かい、ゆく春の宵を惜んで、そゞろ歩きするらしい男女の高い笑ひ聲が、さながら歡樂に溢れたやうに聞えてくるのである。花の季節はもう疾うに過ぎてしまつたけれど、新緑の薫が夕風のそよぎとともにすうつと座敷の中に流れこんで、何處で鳴いてゐるのか雛蛙の鳴く音が、もどかしいほど懐かしく聽えてくる。それを聞いてゐると、

『あの、喰ひついてやりたいほど好きでたまらない女は、しまひには本當に自分の物

になるのか知らん。いつまでこんな不安な惱ましい思ひに責め苛まされてゐなければならぬのであらう。もう何時までもこんな苦しい思ひをさせられてゐないで早く安らかな氣持になりたい。』

そこへ長い廊下を遠くの方で足音が靜かに聽えると思つて見ると、やがて女中が襖の外に跪きながら、

「えらい遲うおすなあ。お夕飯はどない致しまへう、もうちよつとお待ちになりますか。」

と訊く。そんなことが二三度繰返された後、私はたうとう待ち切れなくなつて、腹立ちまぎれに、又いつかの時のやうに、先に一人で食べてしまつたら、きつと來るだらう、早く顔を見せるまじなひに先に食べてしまはう、と思つて、「持つてきて下さい。」と命じた。その自分の心持には、ひとりでた眼に涙のにじむやうな悲しい憤りの感情が込み上げてきた。それは卑しい稼業の女に飽くまでも愛着してゐる、その感情が十分滿足されないといふばかりでなく、どうして此方のこの熱愛する心持が向うに通はぬであらう。こちらの熱烈な愛着の感情がすこしでも靈感あるものならば、それ

が女の胸に傳はつて、もつと、はき〳〵しさうなのに、彼女はいつも同じやうに悠長であつた。

そこへ女中が膳を運んできた。

「おほきにお待ちどほさん。」と、いひつゝ餉臺のうへに、取つて竝べられる料理の數數。それは今の季節の京都に必ずなくてはならぬ鰉の燒いたの、鮒の子膾、明石鯛の潮、それから高野豆腐の白醬油煮に、柔かい卵色湯葉と眞靑な莢豌豆の煮しめといふやうな物であつた。

私は、口に合つたそれらの料理を、むら〳〵と咽へとみ上げてくる涙と一緒に呑込むやうにして食べてゐた。さうしてもう濟みかけてゐるところへ廊下にほかの女中とはちがふらしい足音がして、襖の蔭から女がぬつと立ち現れた。彼女は先刻とちがひ、餘所ゆきらしい薄い金茶色の絽お召の羽織を着て、いつものとほり薄く化粧をしてゐるのが相變らず美しい。

「今まで待つてゐたけれどあんまり遲いから食べてしまつた。まだ？」

「えゝ……」

「ぢや、お今さん、すぐこしらへて下さい。このとほりでいゝ。」女中に命ずると、

女は、

「いりません。食べんかてよろしい。」

「まあ、そんなことをいはないで、一緒に食べよう、待つてゐる。」

女は、私の方へは答へず、女中に向つて、

「姐さん、どうぞ、ほんまにおいとくれやす。」

といつて斷つたが、ともかくも調へて持つて來させた。けれども、彼女は箸もつけようとせず、餉臺の向側に行儀よく坐つたまゝでゐる。そんな近いところから見てゐても、ちやうどこんな清々しい初夏の宵にふさはしいばらりとした顏であつた。匂やかな薄化粧の裝ひが鮮かで、髮の櫛目が水つぽく電燈の光を反射して輝いてゐる。

女はたうとう竝べた物に箸をつけなかつた、女中が膳を引いてゆく時、

「姐さん、えらい濟んまへんけど苺がおしたら、後で持つてきとくれやす。」

自分で註文しておいて、やがて女中が退つていつたあとで、女は先刻から默つて考へて居るやうな風であつたが――尤も彼女はいつでも、いふべき用のない時は無愛想

なくらゐ口數の少い女であつた。自分は、それが好きであつた――やがて又、彼女の癖のやうに、べちや〳〵とその理由をいはないで出し拔けに、
「あんたはん、私、ちよつと歸ります。」と、謎のやうなことをいふ。
私は思はず胸をはつとさせて、凝乎と女の顏を見ながら、「歸りますつて、お前、やつと今來たばかりぢやないか。何故そんなことをいふの。先刻の袖菊へいけば、あそこでは話がしにくい、此家へ行つてゐてくれと、あんたがいふから、私はこゝへ來たぢやないか。一體お前の體のことはどうなつてゐるの？私ももう四年五年昔のことを心配しつゞけて、今日になつても、五年前と同じやうにやつぱりずる〳〵では、とても私の力には及ばない。私は、先日うちから幾度も手紙でいつてゐるとほり、今度もあんたと遊ぶ爲にかうして今日は來たのではない。そのことを訊かうと思つて來たのだ。君はいつまで商賣をしてゐる氣でゐるの？」
私は腹を立てたやうな、彼女の爲に憂へてゐるやうな、なんどりした口調で訊ねるのであつた。けれど彼女は、口ごもるやうにして、それには答へず、
「それは又あとで解ります。」と、困つたやうに仕方なく笑つてゐる。

「あとで云ひます云ひますつて、それが、あんたの癖だ。もうそれを云つて聽かしてくれてもいゝ時分ぢやないか。」私も仕方なく笑ひにまぎらしてとひ詰める。

「こゝではいへません。」子供かなんぞのやうに同じことをいふ。

「こゝでは云へんて、こゝで今云へなければ、いふ折はないぢやないか。何故かへるといふの？」

さういつて、問ひつめても、女は碌に譯をもいはずたゞ頑强に口を噤んでゐるばかりである。

明るい電燈の光をあびてゐる彼女の容姿は水際立つて、見てゐればゐるほど綺麗である。そして、ふつと氣が付いてみると長い間見なかつた間にさうして坐つてゐる様子に何となく姉さんらしい落着きが出來て、何處といつて口に云へない顏のあたりがさすがに幾らか年を取つたのがわかる。それはさうである。はじめて彼女を知つたのが五年前の丁度今の時分で、爽かな初夏の風が柳の新綠を吹いてゐる加茂川ぞひの二階座敷に、幾日もいくかも彼女を傍に置いて時の經つのを惜んでゐた。座敷から見渡すと向うの河原の芝生が眞靑に萌え出でて、そちらにも小褄などをとつた美しい女達

が笑ひ興じてゐる聲が、華やかに聞えてきたりした。彼女はその頃よく地味な黑縮緬のたけの詰つた羽織を着て、はつきりした、すこし荒い白い竪縞のお召の袷衣（あはせ）を好んで着てゐたが、それが一層女のすらりとした姿を引立たせてみせた。でもその頃は今から見ると女の二十（はたち）といふ年から餘り遠ざかつてゐない若さがあつた。私自身にとつても、この女の爲に……まさしくこの女のためのみに齷齪思つてゐる間に、五年といふ歳月（としつき）は昨日今日と流れるごとく過ぎてしまつて、彼女は今年もう二十七になるのである。さう思つて又じつとその顏を見てゐると、うすい水淺黄の襦袢の衿の色からどことなく年增らしい、しつかりしたところも見える。

女は、女中が先程持つてきた白い西洋皿に盛つた眞紅な苺の實を銀の匙でつゝきながら、溫和しく口に持つていつてゐる。

「今夜ぜひ逢ふ約束でもしてゐる人があるのか？」私はさういつて訊ねた。

「ちがひます。」

「逢ふ約束の人がなければこゝにゐたつていゝぢやないか。手紙でこそ月に幾度となく話はしてゐたけれども、二年近くも逢はなかつたのだから私にいろんな話したいこ

とがあるのは、あんたもよう解つてゐる筈だ。」
「そやから歸つてから、後でいひます。」
「あんた、何をいつてゐるのか私には少しも解らない。かへつてから後にいふとは。そんなら今此處でいつたら可いぢやないか。」
「ほんなら、私歸つて直ぐあとで使ひに手紙を持つてこさします。」
「折角こゝへ來て、すぐ又歸るといふのが私には解らないなあ。あんた、もう私に逢はないつもりなの？」
「ちがひます。私又あとで逢ひます。」
「なあんの事をいつてゐるのだか、私には少しも合點がゆかぬ。しかしまあ可い。それぢやお前の好きなやうにおしなさい。どんなことをいつてくるかあんたの手紙を持つてくるのを待つてゐるから。必ず使ひを寄越すねえ。」
「えゝこれから二時間ほどしてから俥屋をおこします。ほんなら待つてとくれやす。」
さういひ置いて彼女は靜かに立上つて廊下の外に消えるやうに歸つてしまつた。私は又變な不安の念ひを抱きながら、あまり執拗に留めるのも大人げないことだと思つ

て女のいふがまゝにさしておいた。開放した濡縁のそとの、高い土塀で取り圍んだ小庭には、こんもり蓊つた植込みのまはりに、しつとりとした夜霧が立ち白んだやうになつて、いくらか薄暖かい空氣の中へ爽かな夜氣が絶えず山の方から流れ込んでくる。私は食べ物の香の殘つてゐる餉臺の處から身體をずらして、そちらの小庭に近い端の方へ行つて又ごろりと横になり、わけもなく懐かしい植物性の香氣の立ち薫つてゐるやうな夜氣の流通を呼吸しながら、女の約束していつた二時間のちのたよりを、それがどんなものであるかといふ不安で堪らない中にもいひ難い樂しみに充ちた期待をもつて待つ心でゐた。

あたりは靜かなやうでも、流石に一歩出れば、すぐ繁華な夜の賑ひの街に近いところのこととて、折々人の通り過ぎるどよみが遠音にひゞいてくる。しかし、その爲に一入靜けさを增すかのやうに思はれる。あんまり快い氣持なので、私は肱を枕にしたまゝ、足の先を褞袍の裾にくるんで、うつら〳〵となつてゐた。そこへ女中が入つてきて、

「お風召すといけまへん。もうお床おのべ致しませうか。……あの、どこか一寸おい

きやしたんどすか。」

「あゝ、お今さんか。あんまり好い心地なのでうと〳〵してゐた。……いや、ちよつと、もう少し待つて下さい。」

「さうどすか。そやつたら、どうぞえゝ時およびやしとくれやす。」お今さんは、そのまゝ又靜かに退つていつた。

時刻は段々移つて、障子を開けてさうしてゐるのが、冷えすぎるくらゐに夜も更けてきた。あゝ云つて行つたが、女はいつになつたら本當に使ひをよこすことだらう。もう、そろ〳〵こゝの家でも門を締めて寢てしまふ時分である。もしこのまゝ放棄つてしまふやうなことでもしたら、どうしてやらう。いつそこのまゝ床を取らして寢て居らう。生なか目を覺まして起きてゐると、そのことばかり思つて苦しくていけない、眠つて忘れよう。そんなことを思ひながら、又うと〳〵としてゐるところへ、廊下を急ぐ足音にふと目を覺まされると、女中が襖の外に膝をついて、

「お手紙どす。」と、いつて渡す封書を手にとつてみると、走り書きの手紙で、「先ほどは失禮いたしました。まことにむさくるしい處なれど一しよに御こし下され度候。あ

とはおめもじのうへにて。」と書いてある。狀袋を裏返してみたが、處も何も書いてゐない。
「お今さん、どんな使ひがこれを持つてきた。」女中に訊ねると、
「さあ、わたし、どや、よう知りまへんけど、何でも年とつた女の人のやうどした。」
「年とつた女。まだ待つてゐるだらうな。」私にはすぐには合點がゆかなかつた。
「へえ、待つてはります。」
それで、急いで玄關の處に立ち出てみると、門の外にゐるといふので、また玄關から門のところまで、長い敷石の道を踏んで出てみると、そこには暗がりの中に彼女の母親が佇んでゐた。
「あつ、おかあはんですか、お久しうお目にかゝりません。」と思はず懷かしさうにいつた。使ひが母親であつたので、私はもう、すつかり安心して好い心持になつてしまつた。
「えらい御返事が遲うなつて濟まんさかい、ようお詫びをいうておくれやすいうて、あの娘がいうてゐました。」母親は、門口の、頭のうへを照らしてゐる電燈の蔭に身を

隱すやうにしながらいふ。
「どうも、こんな夜ふけに御苦勞でした。ぢやすぐ一緒に行きますから、一寸待つてゐて下さい、私着物を着てきますから。」
私は又座敷に取つて返して衣服を更め、女中には、都合で外へ泊つてくるかも知れぬといひ置いて、急いで又出て來た。
「お待ちどほさま。さあ行きませう。」

五

私は、それから母親の先に立つてゆく方へ後から蹤いて行つた。もう夜は十二時も疾うに過ぎてゐるので、ことに東山のほとりのこととて人の足音もふつつりと絶えてゐたが、蒼白く靄の立ち罩めた空には、丁度十六七日ばかりの月が明るく照らして、頭を仰けて眺めると、そのまはりに暖かさうな月暈が銀を燻したやうに霞んで見える。そんなに遲く外を歩いてゐて少しも寒くなく、何とも云へない好い心地の夜であ

る。私は母親と肩を竝べるやうに懐かしく傍に寄り添ひながら、
「おかあはん、ほんたうにお久し振りでした。かうと、いつお目にかゝつたきり會ひませんでしたか。」といつて私は過ぎたことを何彼と思ひ浮べてみた。
はじめて女を知つた當座、自家はどこ、親達はどうしてゐる、兄弟はあるのかなどと訊いても、だれでも、人をよく見たうへでなければ、容易に實のことをいふものではないが、追々親しむにつれて、親は、六十に近い母が今は一人あるきり、兄弟も大勢あつたが、みんな子供のうちに死んで、たつた一人大きくなるまでは殘つてゐた弟が、それも去年二十歳で亡くなつた。それがために、母親はいふまでもなく自分までも、今日では、この世に樂しみといふものが少しも無くなつたくらゐに力を落してゐる。叔父叔母といつても、いづれも母方の親類で、しかも母親とは腹の異つた兄弟ばかり。父親の親類といふのは何處にもなく、生命の綱とも杖とも柱とも頼んでゐた弟に死なれてからは本當の母ひとり娘ひとりのたよりない境涯であつた。彼女は、ほかの事はあまり云はなかつたが、弟のことばかりは腹から忘れられないと思はれて、懐かしさうによく話して聞かせた。私は、そんな身の上を聽くと、すぐさま自分の思ひ

遣りの性癖から「天の網島」の小春が「私ひとりを頼みの母さん、南邊に賃仕事して裏家住み。死んだあとでは袖乞非人の餓ゑ死にをなされようかと、それのみ悲しさ。」と喞ち嘆くところを思ひ合はせて、いとさらにその女が可憐な者に思へたのであつた。

　もとは父親の生きてゐる時分から上京の方に住んでゐたが、廓に奉公をするやうになつて母親も一緒に近い處に越してきて、祇園町の片ほとりの路地裏に侘しい住ひをしてゐた。そこへ訪ねていつて初めて母親に會つた。そして後々の事まで話した。彼女はこんな女にどうしてあんな鶴のやうな娘が出來たかと思はれる、むくつげな婆さんであつたが、それでも話の様子には根からの廓者でない質朴なところがあつて、

「ほんまの親一人子ひとりの頼りない身どすさかい、どうぞよろしうお願ひいたします。」といつて、悲しい鼻にかゝる聲で、今のやうに零落せぬ、まだ一家の困らなかつた時分のことなどを愚痴まじりに話してきかせた。その話によると、彼女の家はもと同じ京都でも府下の南山城の大河原に近い鷲峯山下(しゆほうさんか)の山の中に在つたのであるが、二三十年前に父親が京都へ移つてきた。故郷の山の中には田畑や山林などを相當に所持してゐたが隨分昔のことで、その保管を頼んでゐた人間が借金の抵當に入れて、すつ

かり取られて無くしてしまつた。

「あれだけの物があればこの子にこない卑しい商賣をさせんかて、あんたはん結構にしてゐられますのや。」母親は心細い聲でそんな古いことと述いつてゐた。

女もそこに坐つて、默つて母親と私との話を聽いてゐたが、大きな黒い眼がひとりでに大きくなつて赤く充血するとともに玉のやうな露が潤んだ。

「もう古い事どすやろ。」と、彼女はたゞ一口温和しく云つて、母親の話もそれきりになつた。

その後夏の終頃までも京都の地にゐる間、偶に母親のところへも訪ねていつてその度ごと女の後々の事どもを繰返して話してゐたのであつた。振返つて指を折つてみると、もうあの時から足かけ五年になる。

「おかあはん、あなたがどうして居られるか私、始終、心には懸つてゐたのです。手紙の度にあなたのことを訊ねても、何處にゐるのか少しも委しいことを知らさないものですから、一向無沙汰をしてゐました。」

「滅相もない。私こそ御無沙汰してます。あんたはんが始終無事にしとゐやすちふこ

と、いつもあの娘から聞いてゐました。ほんまに何時もお世話になりまして、お禮の中樣もおへんことどす。」

月の下の夜道をそんなことを語り合ひながら、私達はもう電車の音も途絶えた東山通を下へ下へと歩いていつた。そして暫く行つてから母親は、とある横町を建仁寺の裏門の方へ折れ曲りながら、

「こつちやへおいでやす。」といつて、少しゆくと、薄暗いむさくるしい路地の中へからから足音をさせて入つていつた。私はその後から默つて蹤いてゆくと、すぐ路地の突當りの門をそつと扉を押開いて先に入り、

「どうぞお入りやして。」といつて、私のつゞいて入つたあとを閂を差してかた〳〵締めて置いて、また先に立つて入口の潛戸をがらりと開けて入つた。私もつゞいて家の中に入ると、細長い通り庭が又も一つ、やう〳〵體の入れるだけの小さい潛戸で仕切られてゐて、幽かな電燈の火影が表の間の襖ごしに洩れてくるほかは眞暗である。母親はまたそのくゞりをごろ〳〵と開けて向うへ入つた。そして同じやうに、

「どうぞ、こつちやへずつとお入りやしとくれやす。暗うおすさかい、お氣付けや

して。」

といつて、中の茶の間の上り框の前に立つて私のそつちへ入るのを待つてゐる。私は手でそこらをさぐりながら又入つて行つた。と、そこの茶の間の古い長火鉢の傍には、見たところ六十五六の品の好い小綺麗な老婦人が、靜かに坐つて煙草を喫つてゐた。母親はその老婦人にちよつと會釋しながら、私の方を向いて、

「構ひまへんよつて、どうぞそこからお上がりやしとくれやす。お婆さん、どうぞ御免やしとくれやす。」といつて、自分から先に長火鉢の前を通つて、すぐその三疊の茶の間のつきあたりの、襖の明いてゐるところから見えてゐる階段の方に上がつてゆく。私はそれで、やつとだん〳〵解つてきた。

「これは、この品の好い老婦人の家の二階を借りて同居してゐるのだな。」と、心の中に思ひながら自分もその老婦人に對して丁寧に腰を折つて挨拶をしつゝ母親のあとから階段を上がつていつた。すると、階段のすぐ取付きは六疊の汚れた座敷で、向うの隅に長火鉢だの茶棚などを置いてある。そして、その奥にもう一間あつて、そちらは八疊である。

母親は階段を上がるなり、

「おいでやしたえ。」とそつちへ聲を掛けると、今まで暗い處を通つてきた眼には馬鹿に明るい心地のする電燈の輝いてゐる奥から、女が先刻のまゝの姿で靜かに立つて來た。まるで先程の深く考へ沈んでゐる樣子とは別人のごとく變つて、打ち融けた調子で微笑みながら、

「お越しやす。先程はえらい失禮しました。こんな、むさくるしい處に來てもらうて、濟んまへんけど、あこより此處の方が氣が置けいでよろしいやろ思うて。」と、彼女はお世辭のない、うぶな調子でいつて、八疊の座敷の方に私を案内した。

私はもう、それで、すつかり安心して嬉しくなつてしまひ、座敷と座敷の境の閾のところに立つたまゝ、そこらを見廻すと、八疊の右手の壁に沿うて高い重ね箪笥を二棹も置き竝べ、向うの左手の一間の床の間には一寸した軸を掛けて、風爐釜などを置いてゐる。見たところ、もう住み古した雜な座敷であるが、それでも八疊で廣々としてゐるのと、小綺麗に掃除をしてゐるのとで何となく明るくて居心地が好ささうに思はれる。座敷のまんなかに陶器の大きな火鉢を置いて、そばに汚れぬ座蒲團を竝べ、

私の來るのを待つてゐたやうである。私は、つく〴〵感心しながら、
これは好い處だ、こんな處にゐたのか。いつからこゝにゐたの。まあ、それでもこんなところにゐたのならば、私も遠くにゐて長い間會はなくつても、及ばずながら心配して上げた效があつたといふものだ。うゝ好い簞笥を置いて。」私はさういひながら尙ほ立つてゐると、
「まあ、どうぞこゝへお坐りやして。」と、母子とも〴〵して云ふ。
やがて火鉢の脇の蒲團に座を占めて、母親は次の間の自分の長火鉢の處から新しい宇治を煎れてきたり、女は菓子箱から菓子をとつてすゝめたりしながら暫く差向ひでそこで話してゐた。
「長いことあんたはんにもお世話かけましたお蔭で、私もちよつとらくになつたとこどす。」
自分でもよく口不調法だといつてゐる彼女は、たら〳〵しい世辭もいはず、簡單な言葉でそんなことをいつてゐた。
私はいくらか咎めるやうな口調で、

「そんならそれと、なぜ、もつと早く此處へ來てくれ、話をする、とでも言つてくれなかつたのだ。一ケ月前此方へ來てからばかりぢやない。もう今年の初め頃から、あんなにやいやい喧しいことを云つて寄越したのも、それを知らぬから、いらぬ餘計な憎まれ言をいつたやうなものだつた。かうして來てみて私は安心したけれど。」

するると、母親も次の間の襖の蔭から聲を掛けて、

「この子がさういうてゐました。おかあはん、私は口が下手で、よういはんさかい、あんたから、お出でやしたら、ようお禮いうてえやちうて。……此家のことも、もつと早うにお返事すりや好うおしたのどすけど、この子が二月に一と月ほど、ちよつと心配するほど患ひましたもんどすさかい、よう返事も出しまへなんだのどす。」

私はそちらへ頭を振向けながら、

「いや、もう、かうして來て見て、思つてゐたほどでなかつたので安心しました。」

と、そちらへ聲を掛けた。

ちやうど氣候の加減が好いので、いつまで起きてゐても夜の遲くなつてゐるのが分らないくらゐである。

やがてまた母親が、
「もう二時を疾うに過ぎたえ。……あんたはんもお疲れやしたろ。お休みやす。」
といつたので、やうやく氣が付いて寢支度をした。

六

そこがあまり居り心が好かつたので、何年の間といふ長い獨身生活に飽いてゐた私は、さうして母子の者の、出來ぬ中からの行きとゞいた待遇ぶりに、つひに覺えぬ、温かい家庭的情味に浸りながら一ケ月餘をうか〳〵と過してしまつた。その爲に、まだ春の寒い頃から損ねてゐた健康をも、追々暖氣に向ふ氣候の加減も手傳つて、すつかり回復したのであつた。

女は用事を付けてその月一ぱいだけは一週間ばかり家にゐたまゝ休んでゐた。どこかへ一緒に歩いてみようかといつて誘つても、
「ほんとに商賣を廢めてしまうてからにします。」とばかりで、夜遅く近所の風呂にゆ

くほかは一日、靜かにして家にとぢ籠つてゐた。そして稚い女の子の氣まぐれのやうに、ふと思ひ出して風爐の釜に湯を沸かして、薄茶を立てゝ飲ましたりした。そして、そこにある塗物の菓子箱を指して、

「わたしが二月に病氣で寢てゐる時、これを持つて見舞ひに來てくれた人が、その時私を廢めさすいうてくれたんどつせ。」

「へえ、そんな深い人があるの。」

「深いことも何もおへんけど。」

「そして退かすといつた時あんたは何と云つたの。」

「私、すこし都合がおすさかいいうて斷りました。」

「その人はどんな人？　何をする人。」

「やつぱり商人の人どす。」

「まだ若い人？」

「若いことおへん。もうおかみさんがあつて、子供の三人もある人どす。」

「そんな人仕方がないぢやないか。」

「そやから、どうもしいしまへん。」
「でも向うではお前が好きなのだらう。」
「そりや、どや知りまへん。」
母親のゐない時など私達二人きり座敷で遊んでゐて、そんなことを話すこともあつた。女はいつも無口で眞面目なやうでも打融けてくると、よくとぼけた戯談を云つた。
母親がどこかへ行つてゐない時、宵のうちから私が疲れたといつて、床を取つて貰つて樂枕をして横になつてゐる傍にきて彼女は坐つてゐたが、急に眞面目になつて、
「私、あんたはんにはまだいひまへなんだけど、本當は一人子供が出來たんどつせ。」
と、いふ。
私は初めは疑ひながら、凝乎と女の本當らしい眼の處を見て、
「嘘だ。」といふと、
「うゝ、」と女は頭振りをふつて、「ほんまどす。」といふ。
「それは、そんな商賣をしてゐたつて、全く例のないことでもないから。本當？」
「ほんまどすたら。」

「へえ。」と、いつてゐたが、私はむら〳〵とむき〻になつてきて、體中の血が凍るやうな心地になり、寢床の上に腹這ひに起き直つて、
「いつ？　近いこと？」追掛けて訊ねた。
すると女は、いよ〳〵落着いて、
「えゝ、ちよつと半歳ほどになります。」
「ぢや、私が一年半も來なかつた間のことだな。」といつたが、私は自然に聲が上ずつたやうになるのを、わざと心で制しながら「ぢや、おかあはんも喜んでゐるだらう。どんな人間の子？　お前にも覺えがあるの？」
「お母はん、悅んではります。」
「さうだらうとも。それが、いつか話したお前の病氣の時擬めさすといつて來た人のこと？……そしてその赤ン坊は何處にゐるの？」「どこかへ里子にでも預けてあるの。」
私はもう、何も彼もさうと自分の心で定めてしまつた。さうすると、胸が無性にもやもやして、口が厭な渴きを覺えて堪らない。そして、さう思ひつゝ、寢ながら改めて女の方を見ると、いつもの通り、しつとりした容姿をして、なりも繕はず、不斷着

の茶つぽい、だんだらの銘仙の格子縞の袷衣を着て、形のくづれた銀杏返しの鬢のほつれ毛を撫で付けもせず、すぐ傍に坐つてゐる顏の蒼いほど色の白い、華奢な圓味を持つた頤のあたりがおとなしくて、可愛らしい。私は心の中で、

『どんな男が、この私の生命と同じい女に子を生ましたのだらう。何故私の子が生まれなかつたか。そんなことが萬一にもあるかも知れぬからこそ、一日も早く商賣を廢めさしたかつたのだ。いよ〳〵いけないことになつてしまつた。』

と、そんなことを思つてゐると、女は、

「その子を見せまよか。」といふ。

「うむ、見せてくれ。どこにゐる。男の子か女の子か。」

「女の子どす。ほんなら伴れて來ます。」と、いつて女は立ち上つた。

何處から伴れて來るだらうと思つて、私は女の背姿を睨むやうに見守つてゐると、彼女は重ね箪笥の上に置いてあつた長い箱を取り下ろして、蓋をあけて、その中から大きな京人形を取り出した。

「何あんだ、人を馬鹿にしてゐる。」私はそれで、一杯に詰まつてゐた胸が忽ち下がつ

たやうに輕くなつて、大きな聲で笑つた。
女もほゝと、柔和な顏をくづして靜かに笑つた。
「えゝお人形さんどつすやろ。」
私は「うゝ。」と、たゞ答へたが、その人形や塗物の菓子器の彼方にいろ〳〵な男の形が見えるやうな氣がした。
女はよく二つ竝べた簞笥の前に坐つて鍵をがちやがちやいはせてゐたが、
「あんたはんに見てもらひまよか。」といつて、衣裳戸棚の中からいろんな衣類をそこへ取擴げて見せたりした。大島紬の揃つた物やお召や夏の上布の好いものなどを數々持つてゐた。
「大變に持つてゐるぢやないか。それだけあれば澤山だ。」
「それら皆、あんたはんに頂いた物で拵へましたのどす。」母親もゐて、次の間から此方を見ながらさういつてゐたが、さうばかりでもなささうであつた。
「これもあんたはんので……」と、いひながら彼女は一枚一枚脇へ取除けてゆくうちに、ついこの間の夜着てゐた金茶の絲の入つた新調らしいお召の袷衣に手がかゝつた

時、私が、
「それも？」といつて、訊くと、何故(なぜ)か、彼女も母親もそれには默つてゐた。
「こんなに持つてゐれば安心ぢやないか。」さういふと、母親は、
「まだ〳〵あんたはん、たんと持つてゐましたのどすけど、上京(かみ)から祇園町(こつちや)へ來るやうになつた時、みんな賣つてしまひましたのどす。人のために災難に罹つて、持つてた物を悉皆(しつかい)取られても足りまへんので、この子にたうとうこんな處へ出てもらはんならんやうになつてしまひました。」母親の悲しさうな愚痴が又始まつた。
「こつちやへ來てからかて、來た當座にはまだ大分持つてゐましたえ。」
「あんたはん、この子何でも人さんに物を上げるのんが好きどすさかい、今のとこへ來た時あんなところへ來るやうな人みんな困つた末の人達どすよつて、ひどい人やと、それこそ着たまゝの人がおすさかい、なんでも好きなもんお着やすちうて、持つたものみんな上げてしまひましたのどす。」
「初めてそこへ來た時わたし、人が恐(こは)うおしたえ。」
「それはさうだつたらう。ずぶの世間知らずが、何方を向いても性の知れない者ばか

りのところへ入つて來たのだから。……それでも體さへ無事でゐればまた先で好い事もある。」

「ほんまに體一つ殘つてゐるだけどつせ。」彼女はさういつて笑つた。「殘つてるのは、あの古の長火鉢と、あの掛硯だけどす。」

私は又そこらを見廻した。箪笥の上には、いろんな細々した物を行儀よく竝べてゐたが、そこには小さい佛壇もあつた。私はそれに目をつけて、

「あの佛壇は？」

「あれも新しいのどす。お母はん、こつちやへ來る時古い佛壇を賣るのが惜しうて。」

女はさういつて又柔和に笑つた。

私も笑ひながら立ち上つて、その小さな佛壇の扉を開けて中に祭つてあるものをのぞいて見た。一番中央(まんなか)に母子(おやこ)の者の最も悲しい追憶となつてゐる、五六年前に亡くなつた弟の小さい位牌が立つてゐる。そして、その脇には小さい阿彌陀樣が立つてゐられる。私は何氣なく、手を差伸べてそれを取つてみようとすると、その背後(うしろ)に隱したやうに凭せかけてあつた二枚の寫眞が倒れたので、阿彌陀樣よりも、その方を手に取

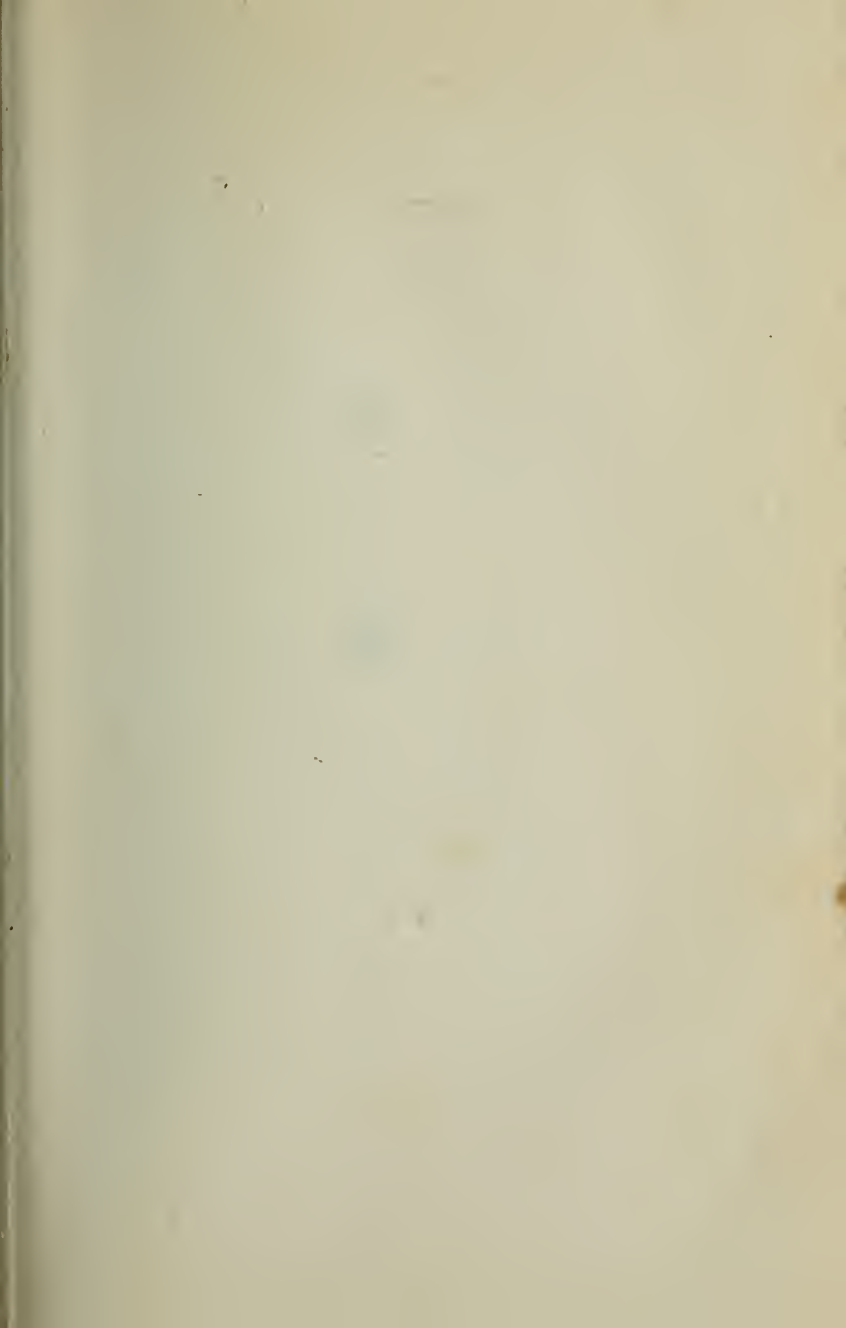
り出してよく見ると、それは、どうやら、女の死んだ父親でも、又愛してゐた弟の面影でもないらしい。一つは立派な洋服姿の見たところ四十恰好の男で、も一枚の方は羽織袴を着けた鼻の下に短い髭を生やした三十ぐらゐの男の立姿である。私はそれを手に持つたまゝ、

「おい、これはどうした人?」と、女の着物を疊んでゐる背後から低い聲をかけた。

すると女は、すぐ此方を振返りながら立つて來て、

「そんなもん見てはいけまへん。」と、むつとしたやうに私の手からそれ等の寫眞を奪ひとつた。

狂亂

一

二人の男の寫眞は佛壇の中から發見されたのである。それが、もう現世に居ない人間であることは、ひとりでに分つてゐるのだが、かうして死んだ後までも彼等が永(とこし)へに、彼女の胸に懷かしい思出の影像となつて留まつてゐると思へば、やつぱり、私は、捕捉することの出來ないやうな、變な嫉妬を感じずにはゐられなかつた。そして今、何人にも妨げられないで、彼女を自分ひとりの所有(もの)にして樂しんでゐる限りなき歡びが、その爲に忽ち索然として、生命(いのち)にも換へ難い大切な寶がつまらない物のやうな氣持になつた。しかし、また思ひなほすと、彼等は、どのくらゐ女に思はれてゐたか、私よりは深く思はれてゐるか、さうでなかつたか、わからぬにしても寫眞を佛壇に祀られるやうになつたのでは、結局この私よりもあの男達は不幸な人間であつた。さう思ふと、死んだ人間が氣の毒にもなつた。

「そんなに隱さないで、ちよつと見せたつていゝぢやないか。それは好きな人の寫眞

だらう。どうせ此處へ祀つてあるくらゐだから、死んだ人に相違ない。生きてゐる頃世話になつた人なら、祀つて上げるのが當りまへだ。」さばけた氣持でさう云つて、私は寫眞の面影を尙ほ追ふやうな心持になつたが、女は瞬く間に、數の多い、どこかそこらの箪笥の小抽斗にそれを隱してしまつた。

羽織袴を着けてゐる三十恰好の男はくり〳〵した二重瞼の、鼻の下の髭を短く刈つてゐたりするのが、あとの四十年配の洋裝の男よりも安つぽく思はれた。そしてそれが、ずつと前から、ちよい〳〵私の耳に入つてゐた、女と大分深い關係があつたといふ男のやうに直感させた。ある日本畫の畫家で女と噂の高かつた男が去年の夏頃死んだといふことを聞いてゐたので、それを思ひうかべた。

「和服を着てゐた人間は、何だか活動の辯士のやうぢやないか。」私は幾らか胸苦しい反感をもつてさういふと、

「何でも構ひません。あの人達が生きてたら、私、もう疾うにこんな商賣してえしまへん。」

女は向うをむいて、せつせと、取り擴げた着物を疊みながら、こちらの言葉にわざ

と反抗するやうに、さう云つてゐる。私は、そんな言葉を聽かされると、又、あまり好い心地はしなかつた。そして腹の中で、

『それぢや、四五年も前から、自分ばかりに、身體の始末を付けてもらひたいやうにいつて頼んでゐたのは、みんな噓であつたかも知れぬ。』と思つたが、女の厭がるやうなことを、くど〳〵追究して訊くのは却つて好くないと思つて、默つて置いた。

けれども、もうこの間から訊かう〳〵と思つて、幾度もいひ出しかけては、差控へてゐた、女の借金がどうなつてゐるか、又自分が長い間仕送つた金が、その借金を減らす爲に、どういふ具合に有效に使用せられてゐるか否かを明細に訊きたいと思つた。女は、その事を突込んで訊かれるのが、痛い處へ觸れられるやうで、なるたけ訊かれずに、そうつとして置きたい風があるのは、今年のまだ正月時分から、その金の使途について、急にやかましく、私から訊ねてよこした再三再四の手紙に對する返事で一向要領を得なかつたのでも、それがわかつてゐるし、今度京都に來て、先日から、祇園町の茶屋で久し振りに逢つた時にも、それを云ふと、妙に話を脇へそらすやうにするし、さうかといつて、女のいふまゝに下河原の旅館の方にいつて要領を得た話を訊か

うとしても、そこでも成るべくそんな話はいひ出さないやうにして、一寸遁れに逃れて居りたいのが見えてゐた。そして、あの晩たうとう自分をこの二階に伴れて來たのであつたが、からして、暫くでも女と一緒にゐて、母親にも共々に大事にせられてゐると、長い間自分の望んでゐた願ひが叶つたやうなものであるが、女の身體が今におき、やつぱり借金の爲に廓に繋がつてゐるのであつては、目前の歡樂はうたかたの如く果敢ない。

「着物がそんなに出來たのも好いことだが、あんたの借金の方は一體どうなつてゐるの？　着物は、あんたの身が自由になつた後に、ぽつ〳〵出來る。それよりも急ぐのは、今の商賣を廢して綺麗に脚を洗ふことぢやないか。」

暫くしてから私はなんどり訊いてみた。すると女も母親も默つてゐたが、私が繰返して、「ねえ、どうなつてゐるの。」といふので、女は、

「借金はまだ大分あります。」といふ。

「大分ありますつて、どのくらゐあるの。」

「さあ、まだ千圓ちかくありますやろ。」

彼女は、わざと陽に反抗の意を表して、誠意の籠らないやうな口吻で、さういふ。
それで私は又勃然となり、
「千圓？」自分の耳を疑ふやうに、重ねて、言葉を強くして訊いた。
けれども女は默りこくつてゐる。
「まだそんなにあるの？」私の聲は、自然に上ずつてきた。
「そんなにある筈がないぢやないか。私があんたを初めて知つた四五年前にそのくらゐあると云つてゐた。あれから四五年も稼いでゐて、そのうへそれだけの物は私から、一度に纏めてではないが確に來てゐる。そしてそれだけの金も手に入つてゐて今になつても矢張り四五年前と少しも借金が減つてゐないといふやうなことで、それで、あんた、どうするつもりなの？」私は、次の間の長火鉢の處にゐる母親にも聞えるやうに、疊み掛けて問ひつめた。
すると女は又棄鉢のやうに、
「そやからもうあんたはんのお世話になりまへん。私自分で自分の體の解決をつけますよつて、どうぞ心配せんとおいとくれやす。」

私は呆れた顔をして、そんなことをいふ女の顏を暫くじつと見てゐた。
「もうあんたはんのお世話になりまへんて、それぢやお前、今までどんな考へで私にいろんな事を賴んでゐたの。あんたの體の解決をする爲に、私も出來るだけのことをしたのぢやないか。今になつてそんな事をいつては、何のことはない、まるで私を騙つてゐたやうなものぢやないか。」
さういふと、女は返答に窮したやうに默つて焦れ〳〵しながら、肩で大きな息をしてゐるばかりである。
「ねえ、私の送つて上げた金は一體何に使つたの。……そりや、こんな着類をこしらへるにも要つたらうが、私自身にも欲しい物や買ひたいものが幾らもあるのを、そんな物より何より私には、唯々お前と云ふ者が欲しい爲に、出來ぬ中から私の力に能ふ限りのことをして來たのぢやないか。まとまつてゐないといつても、二百圓三百圓と纒つた金を送つたこともある。それは、あんたも覺えてゐる筈だ。私にとつては血の出るやうなその金を、これと云つて使ひ途のわからぬやうなことに使つて、今になつてもまだそんなに借金がある。……私はかうしてあんたに逢ふのも、何度もいふとほ

り、去年の一月から丁度一年と半歳ぶりだ。始終この京都の土地に居着いてゐるわけぢやないから委しいことは知らぬが、あんたが私から貰ふ金をほかの人間に貢いでゐるといふ噂を、ちら／＼耳にしたこともあつたけれども、私はそれを眞實とは思はないが、どうも、借金が尚ほそんなにある筈はないと思ふ。もつと私の納得するやうに本當のことをいつて聽かしてもらひたい。私が今までお前に盡してゐる眞心がお前に解つてゐるなら、もつと本當のことを打融けて聽かしてくれてもいゝと思ふ。」私は、それでも成るべく女の氣に障らぬやうに、言葉のはし／＼を注意しながら、さういつた。

　すると彼女は、愈々云ふことに詰まつたと思はれて、蹲んでしまつた着物をそこに積み重ねたまゝ、簞笥の前に凭れかゝつて靜として ゐたが、ヒステリツクに、黒い、大きな眼を白眼ばかりのやうに赫と瞬いて、

「わたし何も、退いてからあんたはんのところへ行く約束した覺えありまへん。」と、早口にいつた。

　そのあまりに凄じい相好に私は吃驚して、そのまゝやゝ暫く口を噤んでゐたが、

「今になつてそんなことを云つてゐる。」と、言葉を和げていふと、女もすぐ靜かな調子になつて、
「あんたはんが、たゞ自分ひとりでさうお思ひやしたのどすやろ。」
「私が自分ひとりでさう思つた？……あんたの體を解決することを。」
「えゝ、さうどす。」
「私が自分ひとりでさう思つたつて、あんたの方でも依頼したから送る物を送つてゐたのぢやないか。いくら私がお前を好いてゐたつて、そつちでも賴まないものを、どこに、自分の身を詰めてまで仕送る道理がない。」
「そやけど、あんたはん、初めの時分は、私にさうおいひやしたやおへんか。自分はお前を可哀さうや思うて惠んでやるさかい、後になつて私の處にお前が來る氣があつたら來てもえゝ、その氣がなかつたら來てもらはいでもえゝ。……私そのつもりでゐました。」彼女は靜かな調子ですこし人を戲弄ふやうにいふ。
なるほどさう云へば、ぼんやりしてゐるやうでも、女がよく記憶してゐるとほりに彼女にずつと初めに金品などを與れてやつた時分には、そんなことを云つたやうに思

ふ。それは、女にどんな深い關係の人間があるかわからない爲の、此方の遠慮である
と同時に、又自分の方へ彼女を靡き寄せようとする手もまじつてゐたのであつた。け
れども女の方でも後には、そんな考へでのみ此方の扶助を甘んじて受けてゐなかつた
ことは、長いの間の經緯で否應なしに承知してゐる筈であつた。
「うむ、それは、あんたのいふとほり、初めはそんなことを云つてゐたことも覺えて
ゐる。けれどもお前も段々、そんなつもりばかりで私に長い間依賴してゐたのではな
かつたらう。」
さういふと、女はそれに何といつて應へたらいゝかと、ちよつと考へてゐるやらで
あつたが、
「そない金々て、お金のことをいはんとおいとくれやす。」と、又口を突いていつた。
それで、大分心が平靜に復つてゐた自分は又感情が激してきて、
「金のことをいはんと置いてくれて、私は好んで金のことをいひたくはない。けれど
も出來ぬ中から無理をして出來る限りの事をして上げたといふのは、そこに、とても
一口では言ひ盡すことのできぬ私の眞心が籠つてゐるからぢやないか。何も金が惜し

いのでいふのぢやない。」
女はやつぱり箪笥に凭りかゝりながら、
「それはよう解つてます。……そやからお金をお返ししますいうてます。何ぼお返し
しまよ。」
「いや。私は金が返してほしいのぢやない。今お前がいふやうに、私がこれまで爲た
ことが、よう解つてゐるなら、少しも早くその商賣を止めてもらひたい。」
女はそれに對して確答を與へようとはしないで、
「お金をお返ししさへすりや、あんたはんに、そんな心配してもらはんかてよろしい
やろ。」
私の靜まりかけてゐる心は又しても女の云ひやうで激してくるのであつた。
「お前は、お金をどれだけか私に戻しさへすれば、それで私と今までの事が濟むと思
つてゐるのか。」
私は金を返さうと主張する女の心の奥に潜んでゐる何物かを凝乎と疑つてみた。そ
れで、さうなれば、どんなに金を山ほど積んでも倍々、金では濟まされないといふこ

とになる。けれども、そんな者が、若しあつては、彼女が私に對してとかく眞實のある返答を避けようとするのもその筈である。可矣(よし)、それなら此方にもそのつもりがある。

「私は金が取り戻したいなどとは少しも思つてゐない。けれども、あんたが眞實を打ち明けて、私の處に來てくれようといふ心が全く無いものなら、私も有り餘る金ではないから、それで濟ますといふ譯には行かぬ。金でも返してもらふより仕方がない。」

「ほんなら何ぼお返ししまよ。」

女は本當に金を返す氣らしい。

さうなると、やつぱり自分は元々金よりも女の方に飽くまで未練があるので、口の中で云ひ澱んでゐると、女は重ねて、

「なんぼでよろしい。」と、いつて、此方の意向を測りかねたやうに私の顏を見守りながら、

「私もさうたんとのことは出來まへんけど、何ぼくらゐか、云うてみとくれやす。」

女が金で濟まさうとするらしい意向が見えればみえるほど、自分はこの女は金錢な

どには替へられない、自分にとつては何物にも優る、欲しい物品であるのだと思ふと
どんなにしても自分の所有にしたい。
「私は金は返して欲しいとは思はない。けれどもあんたが金を返して私との約束をや
めようといふのなら、私は初めから上げた金を全部返してもらふ。」
「初めからの金て、どのくらゐどす。」
「それは、あんた自分でも知つてゐる筈だ。いつかの手紙にも書いたくらゐはあるだ
らう。」
するど、女は勃然として、
「わたし、そんなに貰うてえしまへん。」と白々しさうに云ふ。
「いや、たしかにそれくらゐは來てゐるけれども幾度もいふとほり私は金は一文も返
してほしくはないのだ。たゞ、あんたが私の處に來てくれぬといふなら、それをみん
な戻してもらはねばならぬ。」
すると、女は又棄鉢のやうになつて、
「もうあんたはんの心はよう解りましたから、ほんなら返します。私も御覧のとほり

どすよつて、一度にはよう返しまへんけど追々にお返しします。……おかあはん、これ、あそこへ持つていとくれやす。」と、ぷり／＼しながら、突然起ち上つて、やけに箪笥の抽斗をあけて、中から唐草模様の五布風呂敷を取り出してそこに積み重ねてゐた衣類をそれに包んだうへに、またがちや／＼箪笥を引き出して、ほかの品物まで入れ足さうとする。どこかへ持つて往つて直ぐ金を融通しようといふのであらう。

私はすこしも金など欲しいとは思はないので、飛んだ事になつたと、はら／＼しながら、眉に皺を寄せて宥めるやうに、

「これ、何をするの。そんなことはしないが可い。さうして折角出來てゐる物をそんなことをしないでもいゝぢやないか。私はお前から金を戻してもらひたくないのだ。」

と、手を差出して女の手を捉らんばかりにしていふと、彼女はそれには答へず、

「おかあはん、これ直ぐ持つていとくれやす。」と、荒々しく風呂敷を包んでゐる。

私は、母親はどんな心持でゐるのかと、そつちを振返つてみると、母親は次の間の火鉢の傍で人の好ささうな顔をして、微笑しながら娘のすることを默つて遠くから見てゐるばかりである。そして、女が幾度も急き立てるやうに、

「持つていとくれやす。さあ今すぐ持つていとくれやす。」といふのを、母親は「えゝえゝ。」とばかりいつて、起たうとはしない。
私は母親の火鉢の前に立つていつて、
「おかあはん、どうぞ持つていかないやうにして下さい。」
といふと、母親はうなづきながら、
「えゝ、心配せんと置いとくれやす。又あとであの娘によういひますよつて。」と、事もなげに笑つてゐる。
彼女はまるで母親と私と二人に向つてだゞを捏ねるやうに、なほ暫くの間、
「はやう持つて往とくれやす。」と、幾度も母親を催促してゐた。
女の機嫌を傷けてしまつたので、どうか、そんな衣類の入つた大風呂敷などを外に持ち出すやうな淺間しいことをしてくれなければよい、此處へ初めて來た夜彼女がいつたやうに、長いことあんたはんにもお世話かけましたお蔭で、私もちよつと樂になつたとこどす、といふのが本當ならば、折角いくらか幸福になりかけてゐる彼女の境遇を、そんなことをして、又情けない思ひをさせたくない。それにしても、自分から

少しは樂になつたといつてゐるのだから、もう借金もさう多くある筈がない。何故この女は私に眞實の心を明かさないのであらうか。

それで、私は暫くそこにゐない方が、女の焦立つた氣分を和げるによからうと思つて、重ねて、母親に風呂敷包などを持ち出さぬやうにいひ置いて、そのまゝ外に出ていき、東山の方をぶらりと一とまはりして歸つて來た。

二

唐草模樣の五布の風呂敷はそのまゝ箪笥の上に載せてその後三四日は目についてゐたが、私の知らぬ間に、外に持ち出したのか、それとも中の物を又箪笥に藏つたのかやがていつもの處に見えなくなつた。そして、それに懲りて私は、彼女の體の解決の事については、幾ら心に思つてゐても口には出さなくしてゐた。母子の間ではどんな話をしてゐたか知れぬが、女の氣持もすぐ又もとのとほりになつた。それのみならずそのことがあつた夜、母親が長く外に出ていつて歸らなかつたので、風呂敷包を持ち

出したのかと思つて氣を付けると、それは無事にあるので、さうでもないと思つて安心してゐた。すると、その翌日母親は、娘がちよつと主人の處へ歸つてくるといつて出ていつて留守になつてゐる間に、

「昨日はえらい、お氣の毒どした。」と、次の間の長火鉢の處から聲をかけた。私は、

「お氣の毒て、何のことです。」と、そちらを振向くと、母親は微笑しながら、

「あの娘があんな我儘いうて、あんたはんに、えらい濟まんことどした。」

「なに、そんなことはちつとも心配いりません。機嫌さへ直ればいゝのです。」

母親はそれでも腹から憂はしげな顏をして、

「わたし、もう心配で。あの娘が、あのとほりあんまり我儘いうて、あんたはんに後で愛想盡かされるやうなことがありやしまへんか思うて、心配でならんどすさかい、昨夜あとであちらの主人のところへ相談に往て來ましたのどす。そしたら、あちらの姐さんのおいひやすには、お母はん、なんもそないに心配することはない、そんなこというて、あんたはんに甘えるんやさかい、構はんと置きやすいうてくりやはりましたけど、私はそれが心配になつて、ゆうべも、よう寢られしまへんのどす。ほて、お

母はん一遍本人を寄越しやす、私からよう云うて聽かすさかい、いうておくれやすので、それで今日あの子もちよつと屋形へいとります。又姐さんから、あんじやう云うて聽かしとくれやすやろ思うてます。」

私は母親が正直さうにさういつて心配してゐるのを聽くと、一入打解けた好い氣持になつて、

「どうぞ、そんなに心配しないで下さい。だゞを捏ねてゐるのはよく解つてゐるんです。」

といつて、自分も一緒に笑つてゐたが、そのついでに前日女に向つて訊いたやうなことを重ねて母親に話しかけてみたけれど、

「さあ、どないなつてゐますことどすか、私はかうしてあの娘に養うてもらうてる身どすさかい、何も彼もあの娘がひとりで承知してるのどすよつて、あんたはんから、又機をお見やしてよういうて聽かしとくれやす。」といつて、彼女自身では、娘の體のことについての金錢の出入のことなど委しく知らぬやうな口振りであつたが、

「屋形の主人さんもあんたはんの事を昨夜もさういうてはりました。おかあさん、そ

の方大事にしてお上げやす、自分で來ずと、金だけ長い間送つて寄越すといふのは餘程量見が廣うないと出來んことやさかい。そない云うてはりました。」

母親はさういつて、私を喜ばすやうなことをいつてゐた。私もそのとほりに聽いてゐた。

今日はついでに花にでも行くのかと思つてゐたら、女はその晩屋形から早く戻つてきたが、昨日から何となく沈んで眉根を顰めたやうにしてゐたのが、歸つてくると、遽に打つて變つたやうに好い氣分になつてゐた。

私も、二人が大事にしてくれるからといつて、餘り好い氣になつて、何時までも其處にゐては外聞もあるし、母子の者が迷惑するであらうとは思ひながらも、居心が好いので、すつかり心が落着いてゐた。女も打融けて、よく、私が凭つてゐる机の傍に來て坐つて、自分もそこで樂書きなどをしたりしてよく話してゐた。そして、そこが居心地の好いことを私が、又しても繰返していふと、

「そんなによかつたら、こゝをあんたはんのまあにしときまへうか。」

「まあとは。……あゝ間か、あゝどうぞ居間にして置いてもらひたい。」

などといつてゐたが、日は瞬く間に經つて、そこに來てから半月ばかりして、私は六月の中旬暫く山陰道の方の旅行をしてゐた。けれど、梅雨の頃の田舍は悒鬱しくつて、とても長くは辛抱してゐられないので、京都の女のゐる二階座敷の八疊の間が、廣い世界にそこくらゐ住み好い處はないやうな氣がするので、いづれ夏には紀州の方の山の上に行くつもりではあるが、一週間ばかりして、又其處へ舞ひ戾つて來た。

その日は鬱陶しい五月雨の濕々と降りしぶいてゐる日であつた。ステーションから直ぐ俥で女の家に歸つて來て、薄暗い入口をはひつて、玄關から音なふと、階下の家主の老女はもとより、上も下も家中みんな留守と思はれるほどひつそりとしてゐる。それでも默つて上がつて行くのは厚皮しいやうで、二三度大きな聲を掛けると、やがて階段を下りて來る足音がして、外から開かぬやうに、ぴたりと閉めた奥の潛戸の彼方で、

「どなたはんどす。」といふ、母親の聲がする。

「私、わたしです。」といふと、潛戸をそつと半分ほど開けながら母親が胡散さうに外を覗くやうにして顏を出した。そして、その瞬間、先達て中の待遇から推して期待し

てゐたやうな、あまり好い顏をして見せなかつた。

「私です。今歸りました。」といふと、

「あゝ、あんたはんどすか。」といつたが、「さあお上がりやす。」といふかと思つてゐると、「一寸待つてくれやす。今ちよつとお客さんどすよつて。」

といつて、丁度留守で居ない階下の家主の老婆の表の六疊の座敷に案内して、「どうぞ一寸こゝでお待ちやしてとくれやす。」といつて、私をそこに置いといて、間の襖をぴしやりと閉めて、自分は二階に上がつて行つた。

すると、暫く待つ間もなく母親と入れちがひに女がそこへ入つて來て、笑顏を作りながら、

「おかへりやす。」と懷かしさうにいつて、私の膝の前に近く寄つてべつたり坐つた。そして二言三言口をきゝ交はしてゐるうちに、客といふのが襖の外の茶の間を通つて中庭から歸つてゆくと思はれて、母親も後から入口まで送つて出たらしい。私は、何の氣もなく、どんな人間が歸つてゆくのかと思つて、一寸起ち上がつて緣側の障子を開いて、小さい前栽と玄關口の方の庭とを仕切つた板塀の上越しに人の歸るのを見る

と、蝙蝠傘をさして新しい麥藁帽子を冠り、薄い鼠色のセルの夏外套を着た後姿が、肩から頭の方の一部分だけ僅かに見えたばかりで、どんな人間かよく分らなかつた。

　そこへ母親も入つて來て、

「お歸りやす。」と、今度はいつかのとほりに愛想のよい調子で、更めて挨拶をしながら、「今一寸知つた呉服屋さんが來てましたので、あんたはん又顏がさすと惡い思うてちよつと此處で待つてもらひましたんどす。……階下のお婆さんも今日は出やはりましてお留守どす。さあ、どうぞ二階にお上がりやして。」

と、母親は、先刻私が入つて來た時、潛戸の中から覗いた時の樣子とは、まるで違つた調子でいふ。

　私は、たゞ何といふこともなく、先刻のその顏色が氣になりながら、、

「へえ、有難う。上がります。……何もこんな雨の降る日に戻つて來なくとも好いのですけれど……」といひかけると、母親は、妙に感疑つたか、

「あんたはんのお留守の間に誰か來てゐる思ひやして?」と、笑顏しながら云ふ。

「いや、そんな事はちつとも思つてやしませんけれど、こんな雨の降る日に戻らなく

つても可いのですけれど、田舍は何としても蚊がゐる、蠅がゐる、とても辛抱出來ませんから……」

母親とさうして口を利き交はしてゐると、娘はそれきり默つてしまつた。それから私は二階の八疊に上がつて來て母親が今云つたことから妙に氣がさしたので、それとなく注意してよく見ると座敷の中央（まんなか）に今まで人の坐つてゐた夏座蒲團が、女もそこにゐたらしく二つ火鉢の傍に出てゐて、火鉢の中には敷島の吸殼が澤山灰の中にさしてあつた。私は腹の中で、たゞ呉服物の用ばかりで來てゐた客かどうかと自然（ひとりで）に疑つてみる氣になつた。が、勿論そんなことを口には出さなかつた。

そして、又こゝへ舞ひ戻つて來て暫く厄介を掛けることのさぞ迷惑であらうといふことを繰返して詫びて、女には、私には少しも構はず、主人の思惑もあるから店に歸つて勤めの方を大事にするやうにいつた。

私が田舍に往つたあとは、私のゐる間いろ／＼氣を使つたために疲れ鹽梅で、あれからずつと休んでゐたので、

「今日久し振りに店へかへります。ほんなら一寸いてきます。」

といつて、出て往つたが、女は、その晩からかけて翌日の晩も戻つて來なかつた。それから半月ばかりして、私が山の方に出立するまで彼女は多くは主人の方にいつてゐたが、立つ前には又二三日休んで、私の爲に別れを惜んでくれたのであつた。

三

あれほど母子二人して歡待して置きながら、今度居處を變つたのに、何故知らしてくれないであらうと、少からず淋しい氣持になつて、せめてこの鬱いだ心を慰めるには、明るく溫かい感じのする、行きとゞいた旅館に往つて泊るのが何よりよいと思つてその家へ投宿した。

すると丁度古い馴染の、氣の利いた女中が出て來て、氣持よく世話をしてくれた。私は先刻ステーションに着いてから鬱陶しい空模樣と同じやうに殆ど泣き出したいばかりに悲しくなつてゐたのが、やつと、その爲にいくらか心をまぎらすことができた。そして心地の好い風呂に入つて柔かい蒲團の中に橫はつて、都會的情趣に浸りな

がら早くから寝に就いた。七月の初めから殆ど三ケ月に近い、高い山の上の枯淡な僧房生活の、心と體との飢渇から、すつかり蘇生したやうな氣持になつた。外では夜に入るとともに豪雨にひどい嵐が吹き添つて來たと思はれて、徹宵荒れ狂うてゐたが、私はそれとは反對に却つて安らかに眠りに陷ちた。

翌日は午前はまだ暴風雨の名殘りがつゞいてゐたが、午過ぎから風も次第に歇み、雨も晴れた。女のことは始終念頭にあつたけれど、實は餘りにそのことばかり長い間思ひ續けて、思ひに疲れてゐるので、偶にはほかのことで氣を晴したく、その頃丁度東都から京都に來てゐた知人の處を訪ねたりしてその日は一日消した。

その翌日は、昨日の暴風雨の名殘りは痕跡もなく綺麗に拭ひ取つたやうな朗かな晴天になつた。紺碧の空は高く澄み渡つて、一昨日の豪雨に洗ひ淸められた四圍の景色は、暑くも寒くもない初秋の太陽の光を一杯浴びて、平常でさへ美しいその街の眺めは、今日は恰も玻璃の中の物を窺いて見てゐるやうに明麗であつた。

今日は一つ女の先に居た家の樣子を見て來よう。――無論女からの手紙を信じてもう其處にはゐないものと思つてゐたから――と思つて、私は午少し前に衣服を更めて

旅館からは直ぐ近い處に在る、電車通りを向うに渡つた横町にある路地の中に入つて往つてみた。すると、その日は好い鹽梅に階下の家主の老婆が内にゐたので、私は玄關の上り框に腰を掛けながら、老婆と久し振りの挨拶を交はして、暫く話してゐた。すると、そこへ女の母親が、寺詣りでもするらしい巾着をさげて入つて來た。

「あゝ、おかあはんお久しう。私、一昨日の晩紀州から歸つて來ました。この頃はもう此處にゐないんですつて。」

といつて、訊くと、母親もそこに腰を掛けながら、もう先月の末から其處の所帶を疊んでしまつて、自分は上京の方の親類の家に厄介になつてゐるやうなことを云つてゐた。私は、そこでも、そんな親類の家に厄介になつてゐるよりも、何とかして私が自分で適當な家を一軒借りて京都に住みたいから、そしたら、おかあはんに、そこへ來てもらひたいといふやうな意向を洩らすと、家主の老婆も傍から、

「さうおしやしたら、ほん宜しいがな。」といつて、口を添へてゐたが、母親はいつも愛想よくにこ／＼とはしてゐたが、

「そのこともあの娘がどない云ひますか、あの娘の腹一つにきまることどすさかい。」

と、いつて、毎時のとほりに何も彼も自分では要領を得た返事をしなかつた。
それでも私は、一昨日雨模様の鬱陶しい晩方にこの街にかへつて來て、こゝの路地を覗いて見た時とちがひ、もう此處にはゐないと思つてゐた母親に偶然また會つたので、さながら彼女に會つたと同じやうな喜びを感じたのであつた。
「今日は死んだ息子の命日どすよつて、ちよつとお墓詣りに來たついでにこゝのお婆さんとこへもお寄りしましたのどす。」といつてゐる。
「さうですか、今日はちやうどお寺詣りに好い彼岸びよりだ。私も一緒にまゐつてもいゝな。」と、私はひとりごとのやうにいつたが、母親には又會つて話す機會もあるだらうと思つて、その時はそのまゝ家主の老婦人の處を出て戻つた。
そして、女に會はうと思へば、どこかへ行つて知らしさへすれば會へるのだが、こちらの心はそれではないので、それから一二度女を電話口まで呼び出して話したことがあつた。紀州の方の山から歸つてきた、この間おかあはんにも先の家でちよつと遭つた、此處へ來てもらひたい、來ないか、と云つたけれど、そのうち都合して行きますと云つたきり、向うから電話を掛けてくれるやうなこともなく、毎時こちらの云ふ

ことを柳に風のやうに受け流してゐるやうであつた。後には、帳場に近い處で、女中や番頭などの耳に入るのが厭で、外の自動電話にいつて呼び出したりしたこともあつたが、いつも返事は同じことで、少しも要領を得なかつた。何だか、池の水の中に泳いでゐる美しい金魚か何ぞのやうに、餘り遠くへ逃げもせず、すぐにも手に捕まりさうで、さて容易に捉まらないといふやうな心地のするのがその女であつた。

どちらにしても纏つた金を幾らか調へてからでなければ、たとひ會つてみたところで、今までのとほりであると思つて、格別逢はうともせず、たゞ、籠の中に飼はれてゐる鳥のやうに、番をしてゐないからとて、滅多に居なくなることもあるまいと、常に心にはかゝりながら、强ひて安心して、せめて同じ土地の、しかも女のゐる處とは目と鼻との近い處にゐるといふので滿足してゐた。そして、夏の前居た女の家の路地の中が何となく戀しくつて、宿からは近い處ではあるしするので、時々階下の深切さうな老婦人の許を訪ねて往つて、玄關さきで話して歸ることがあつた。家主の老婦人は、

「あれから姉さんにお會ひしまへんのどすか。」といつて訊いてくれるのであつた。

「えゝ、まだ逢ひません。」といふと、

「さうどすか。」と、老婦人は呆れるやうにいつて「何であんたはんに會はんのどつしやろなあ。こゝで、私の處で一寸お會ひしやしたら宜しがな。」と、同情するやうにいつてくれるので、私は、その老婦人には、夏の前その二階がりの女の處に一ケ月あまり居る時分にも話したことのなかつた、女との長い間の入譯を打明けて愚痴まじりに聽いてもらふこともあつた。母親にもその後又そこで一二度出會つたことがあつた。

彼女は、一寸そこまで來たついでに立寄つたといふやうな樣子であつた。私は母子の言葉を信じて、無論もうその二階には八月以來ゐないのだが、娘の奉公してゐる處がそこから近いので、そんなにして、すぐ隣家へでも行くやうにして會ひに來た足ついでに、以前厄介になつてゐたこの老婦人の處へも立寄るのだと思つてゐた。

「あんたはんのこの間おいひやしたこと、あの娘に話してみましたら、あの娘のいふのには、あんたはんが又上京の方へおいでやしたら、一遍話しに寄せてもらひます云うてゐました。」母親は、私が家を持つから、そこへ來てもらひたいといふ話を、顏を見るたびに云ふと、そんな返事をしてゐた。

その間に月が變つて十月になり、長い間降りつゞいた秋雨が霽れると、古都の風物は日に日に色を增して美しく寂びてゆくのがさやかに眼に見えた。それとともに街の灯の色は夜毎々々に明麗になつてきて、まして瀟洒とした廓町の宵などを步いてゐると、暑くも寒くもない快適な夜氣の肌觸りは、そゞろに人の心を唆つて、ちやうど近松の中の、戀と小袖は一模樣、身に引締めて抱いて寢ねてこそなつかしいといふ文句が思はれて、どうかして一と目なりとも彼女の姿が見たいと思つて、私は折々女の勤めてゐる家の前を、宵暗にまぎれてそつと通つてみることもあつたが、一度も途中で出會はなかつた。

その內にも秋は次第に闌けて旅寢の夜の衾を洩れる風が冷たく身にしむやうになつてくるにつれて、いつになつたら、果てしのつくとも思はれない愛慾の滿たされない物足りなさに、私はちやうど移りゆく四圍の自然と同じやうに沈んだ心持に胸を鎖されてゐた。さうして一と月ばかり詰らない日を過してゐるうちに高い山に圍まれた京都の周圍には冬の襲うてくるのも早かつた。旅館の二階の緣側に立つて遠くの西山の方を眺めると、つい此間まで麗かに秋の光の輝いてゐたそちらの方の空には、もうい

つしか、わびしい時雨雲が古綿を千切つたやうに夕陽を浴びてじつと懸つてゐる。陰氣な冬はそこから湧いてくるのである。この四五年來その事のみを思ひつゞけて、ほとほと思ひ疲れてしまつた私は、どうかして女のことをなるべく思ふまいとして、いくら搔き消すやうにしても綿々として思ひ重なつてくる女のことを胸から追ひ拂ふやうにして、洛中洛外をさまよひ歩いて、時としては人氣のない古い寺院などに入つていつて、疲れ爛れた腦を休めるやうにしてゐた。

四

十月の末から私はまた一と月ばかり中國の方の田舍に歸つてゐた。心に浮かぬことがあるので田舍は少しも面白いこともなかつたが——尤も面白からうと思つて往つたのではなかつたけれど——ことに、この年は初めて惡性の世界的流行感冒が流行つた秋のことで、自分もその風邪に罹つたが、幸ひにして四五日の輕い風邪で濟んだ。けれども、その年はそんな惡性の風邪が流行するほどあつて、例年ならば美しい小春日

の續く頃に、毎日じめ〳〵とした冷たい雨ばかり降りつゞいてゐたので、私は、京の女のことが毎日氣に懸りながらも、暫く故鄕の生まれた家に滯留してゐた。田舍でも四圍の山々が日々に紅に色づいて、そして散り落ちていつた。私は何となく、氣忙しくなつた。その年の五月から六月にかけて、女の家に居て以來、もう何處へ往つても彼女の傍にゐるくらゐ好い處はなかつた。彼女と一緒にゐる處のほかは自分の滿足して住むべき世界はないやうな氣がするのであつた。

私は冷たい冬雨の降りそぼつ中をも厭はず、又田舍から京都に出て來た。そして今度は先にゐた旅館には行かず、ずつと上京の方の、氣の張らない、以前から馴染のある家に往つて滯泊することにした。そこは、先の下河原の方の意氣な都雅な家とは打つて變り、堅氣一方の、陰氣な宿で、さうなくてさへヒポコンデリイのやうに常に鬱いでゐる自分の症狀に對しては倍々好くないと思つたけれど、先達て田舍に往く前に一寸女と自動電話で話した時にも、

「上京の方の氣の張らん宿にお變りやしたら、私一ぺん寄せてもらひます。」

と、女が云つてゐたので、女を宿に訪ねて來さしたいばつかりに、そこへ宿を定め

たのであつた。欲しい女が思ふやうに自分の所有にならぬためにそんなに氣が鬱いでゐるせゐか、その頃私は一寸したことにも直ぐ感傷的になり易くなつてゐた。田舍から出て來て宿に着いたその晩も、さうして京都に出て來てみると、暫く滯留してゐた田舍の事などが、胸に喰ひ入るやうに哀れに感じられたりして、私は、どうすることも出來ないやうな漂泊の悲哀と寂寞とに包まれながら、やうやくの事でその宿で第一の夜を明かしたのであつた。

そして明けても暮れても女の事ばかり一途に思ひ詰めてゐる氣が苦しくなつて仕方がないので、かねてからこの秋は、見頃の時分をはづさず、高雄の紅葉を見に往きたいと思つてゐると、幸ひ翌日はめづらしい朗かな晩秋の好晴であつたので、宿にそれといひ置いて、午少し前からそつちへ遊山に出掛けていつた。時は十二月の二十四日であつた。電車のきく北野の終點まで行つて、そこから俥で洛西の郊外の方に出るとそこらの別莊づくりの庭に立つてゐる楓葉が美しい秋の日を浴びて眞紅に燃えてゐるのなどが目についた。それから仁和寺の前を通つて、古い若狹街道に沿うてさき〴〵に斷續する村里を通り過ぎて次第に深い溪に入つてゆくと、景色はいろ〳〵に變つて、

高雄の紅葉は少し盛りを過ぎてゐたが、見物の群衆は、京から三里も離れた山の中でも雜沓してゐた。私は、高い石磴を登つて清洒な神護寺の境内に上つて行き、そこの掛け茶屋に入つて食事をしたりして暫く休息をしてゐたが、碧く晴れた空には寒く澄んだ風が吹きわたつて、茶褐色のうら枯れた木々の落葉がちやうど小鳥の翔るやうに高い峰と峰との峽を舞ひ上がつてゆく。愛宕の山陰に短い秋の日は次第にかげつてそこらの茶店から茶店の前を、破れ三味線を彈きながら、哀れな聲を絞つて流行唄を歌ひ、物を乞うて歩く盲ひた婦の音調が惡く腸を斷たしめる。佗しい心には何處に行つても明るく樂しい處がなかつた。

五

田舍へ往つてからも二三度手紙を出して、今、惡い風邪が流行つてゐるが、變りはないかと訊ねてやつたりしたが、無論何とも云つて來なかつた。京都に出てくると、その晩すぐ手紙を出して、今度はかういふ處にゐるから、一度訪ねて來てもらひたいと

云つてやつたけれど、例のとほりに何ともいつて來なかつた。そして、今度の宿は、先の處とちがひ氣の張らないだけに、土地柄からいつても、何からいつても陰氣で、氣が晴れ〳〵としないので私は部屋の中に凝乎としてゐるのが居堪らなくなつて、高雄の紅葉を見にいつた翌晩祇園町の方に出て往き、夜にまぎれて女の勤めてゐる家の前をそつと通つてみた。

すると、不思議ではないか。入口の格子戸の上の處に、家に置いてゐる妓の名札が濃い文字で揭げてあるのに、しかもその女の札は、もう七八年もそこに住み古してゐるので、七八人も竝んで札の揭つてゐる一番筆頭であるのに、何故か、そこの處だけ丁度齒の脫けたやうになつてゐるのではないか。察するところ、札を外してからまだ幾日も日が經たぬのでまだ名札を外すだけはづして後を揃へず、そのまゝにしてゐるのらしい。私は寒い夜風の中に釘付けにされたやうな氣持で、そこへ突立つたまゝ、「はて、不思議だ。どうしたのだらう?」と、思つた。彼女を知つてから五年の長い間、不安に思ふ段になれば、隨分不安な譯であつた。日夜數知れぬ多くの人に名を呼ばれてゐる境涯の身であれば、商賣を廢めるからとて、一々馴染の客に斷つて往くわ

けのものでもない。けれども自分は、初めから度胸を据ゑて、女は私に默つて、そこから姿を消して往かないと信じてゐた。百に一つ、そんな場合がありはせぬだらうかと、遠く離れてゐて、ふと不安に襲はれることがあつても、何となく、そんなことは滅多になささうに思はれたのであつた。しかるに、今、まぎれる方もなく、明かに彼女の名札が取れてゐるのを見ると、近いうちに此處にゐなくなつたに相違ない。籠に飼はれた小鳥と同じく容易に逃げて居なくなる氣づかひはないと思つてゐたのは、もとより此方の不覺であつた。そんなことがありはせぬか、せぬかと不安に思ひながら今まで無かつたから、あるまいと思つてゐたら、たうとう籠の鳥は、いつの間にか逃げてしまつた。

　私は、そこに棒立ちになつたまゝ、幾度か自分の眼を疑つて、札の取れてゐるのがどうぞ惡い夢であれかしと念じたが、たしかに札は取れてゐる。餘程思ひ切つて、そのまゝその家へ入つて行つて訊ねてみようかと思つた。彼女に自分といふ者が付いてゐるのは、此處の家でもよく知つてゐる筈である。構ひはしないだらうと思つたが、自分は、彼女と關係の出來た最初から、何處までも陰の者になつて、そつと自分の所

有にしてしまふつもりであつたので、今更、女がゐなくなつたといつて、そこの家へ訪ねて往き、自分のほかに、もつと深いふかい男があつて、その男に落籍されたのに此方が、男は自分ひとりのやうな顔をしてゐて、裏にうらのある、そんな稼業の者の眞只中に飛んだ恥を曝すやうなことがあつてはならぬ。自分は、彼女をこそ、生命から二番目に愛してゐたけれど、それとともに自分の外聞をも遠慮しなければならぬ。

と、焦躁く胸をじつと抑へながら急いで、そこの小路を表の通りに出てきて、そこから近い、とある自動電話の中に入つて、そこの家の番號を呼び出して訪ねてみた。いつも、その女の本姓をいつて電話をかけたので、電話口へ出た婢衆らしい女に、こちらの名をいはず、それとなく、

「もし〳〵、あなたは松井さんですか。藤村さんはお出でですか。」といつてきくと、いつでも、その松井の家の定つた返事の通りに、婢衆は、

「藤村さんは今留守どす。」といふ。

これまでとても、彼女が家にゐてさへ一應はそんな返事をするのが癖なのであつたが、札が取れてゐるのでは、留守であることは問はずとも知れてゐる。それでも、女

がその家にゐる時分と同じやうに、いつもの「留守どす。」で返事を濟ませてゐる。勿論此方が誰であるか、知つてゐる筈もないのだが、もし知れてゐたならば、一層不愛想な返事をしたかも知れぬ。私は、ひたすら紙より薄い人情の冷たさを、夜の冷氣とともに身に沁みて感じながら、重ねて委しいことを訊かうとする氣力も拔けてしまひ、胸の中が空洞になつたやうな心持で、足の踏み度も覺えず、そのまゝ喪然として電車に乘り、上京の方の宿に戻つてきた。とてもその勢ひで取つて返し、その家に訪ねていつて、名札の取れて、もう居なくなつてしまつた事情を訊ねてみる力は失くなつてしまつたのである。そして足掛け五年の間眞實死ぬほど思ひ詰めた擧句が、こんなことになつてしまつたと思ふと、何より自分といふ者が可哀さうになつて來て、冬の夜の寒い電車の中にじつと腰を掛けてゐてさへ、ひとりでに悲しい涙が流れ出た。

名札が取れて女が居なくなつたにしても、もとより何處を當てに訊ねる譯にも行かず、況してそれが他の男に落籍されてしまつたのであるとすれば、今頃は、こちらの事を――もし知つてゐるとすれば――「阿呆め。」とでもいつて、好い心持になつてゐるであらう。それを思ひこれをおもひ、この冬の寒い夜風の中を氣狂ひになつて飛び

まはつても爲方がない。今夜はこのまゝ宿に歸り、哀れな自分を劬りながら、どうか凝乎と寢ながらよく考へよう。

さう思つて、宿にかへり、自分の部屋に通つて、火鉢の傍に一旦坐つて、心を落着けようとしてみたが、とても、もつと委しい事情を訊き糺さねばそのまゝに寢られるどころではない。それで、その宿には電話がないので、いつも借りつけになつてゐる、近處の家まで出ていつて、又彼女のゐた祇園町の家へ電話を掛けてみた。

すると、初めはやつぱり先刻と同じことをいつてゐたが、こちらの名を明かして、實は、先刻そちらの前を通りかかつて、ふと見ると、藤村の名札が取れてゐるのを見てはじめて氣がついたのであるといつて、

「留守ぢやない、もうあんたの家にはゐないんだらう。」と訊ねると、向うの婢衆は、

「ほんなら一寸待つてくれやす。」といつて、暫くして今度は變つた、すこし年をとつた女の聲で、

「藤村さんは、もう内にゐやはりやしまへんのどつせ。」といふ。

「どうしてゐなくなつたの。だれかお客さんにひかされたの？」

「さあ、わたし、そんな事、どや、よう知りまへんけれど、病氣でもう疾うに退かはりました。」
「そして、病氣で廢めて、藤村さんのおかあさんが連れて去つたの？」
「ちがひます。小父さんが來て連れていかはりました。」
　小父さんが來て連れて往つた。どんな小父さんかも知れたもんぢやないと思つたが、それ以上、電話でそんな婢衆などに訊いても委しいことの知られやうわけもなく、又眞實の事をいつて明かす筈もないと思つて、私はそれで電話を切つてしまつた。そして、假に嘘にしても……嘘にちがひないと思ふが……病氣で廢めたといふだけのことに、せめて幾らか賴みの綱が繫がつてゐるやうな氣がして、それだけに心に少し勢ひがついて、宿にとつて返し、夜の寒さに風邪を恐れながら、思ひ切つて厚着になり、又祇園町へと出掛けていつた。今から二た月前の九月の末、紀州の旅から京都に歸つて來て、久し振りに會つたばかりの、多年東京で懇親にしてゐた知人がつい二十日ばかり前、自分も田舍に往つて流行風邪で臥せつてゐる時に、流行感冒で儚く死んだといふことが強く胸に刻み付けられてゐるので、不幸なる自分が又風邪にでも罹つて、

このまゝ死にでもしたら、どんなに悲慘であらう、そんなことがあつたら執念が殘つてとても死にきれはせぬ。

そんなことまでも考へながら又祇園町まで出て來ると、十一月末の夜は闌けてゐても、廓の居まはりはさすがにまだ宵の口のやうに明るくて、大勢の抱妓を置いてゐるうへに、お茶屋を兼ねてゐる松井の內では今が丁度潮時のやうないそがしさである。

小父さんといつても、何だか分りはせぬ。ほかの男にひかされたものを、よく恥し氣もなく、商賣してゐた女の廢めた後を探ねて來る阿呆な男、と笑はれはせぬかといふ氣が先に立つて、心が後れるのを、そんなことを恥しいと思つて引込み思案でゐては、倍々自分の身一つを苦しめるばかりであると思ひ直して、勇氣をつけ、松井の入口に立つて、その夏の初め、女の家にゐた頃ちよつと顏を見て、言葉を交はしたことのあるお絮さんといふ婆さんにお目にかかりたいと、そこに出て來た婢衆に取次ぎを賴むと、お絮婆さんは、すぐ奧から出て來た。

それはもう五十を少し過ぎた女であつたが、何でも聞くところによると、もと此處の女あるじと同じく今から二三十年前にやつぱり祇園町で商賣に出てゐたことのある

女で、松井の主人が運の好いのに反して、この方は運が惡かつた。そして以前朋輩であつた人間の內へ女中頭のやうな相談相手のやうにして住込んでゐるのであつた。松井の女あるじの今猶ほ一見、二三十年前この土地で全盛を謳はれたことを偲ばしめるに反して、お繁婆さんの方は縹緻もわるく、見るから花車婆さんのやうな顏をしてゐた。それでも話してみると、譯は割合によく解る方で、お繁さんは笑顏で、

「おこしやす。えらいお久し振りどす。」と、いつて、打ち融けて挨拶をして、

「えらい端の方でお氣の毒さんどす、今ちよつと奥が取り込んでゐますよつて、こゝで失禮いたします。」と、いつて、婢衆に座蒲團を持つて來さして、私にすゝめる。

「ええ、もう、どうぞ構はないで下さい。」と、私は小さくなつて、そこの玄關の二疊の間に差し向つて坐つた。

そこで、先刻電話で聞いた女の事を改めて問ひ糺すと、お繁さんは、率直な調子で、

「お園さんはもう半月ばかり前にひどい病氣になりまして、それでひきました。」

「はあ、ひどい病氣で……」私は、さういつて、すぐ心の中ではあの纎細い彼女の美しく病み疲れた容姿を思ひ描きながら、

「この土地に長くゐると、そんな事になるだらうと思つてゐたのだ。だから……」と、ひとり言のやうにいつて、もう、私の眼には涙がにじんで來た。

「そして、ひどい病氣とはどんな病氣でした？」静かに訊いた。私は、彼女の體質や容姿から想像すると、多分肺でも悪くなつたのではあるまいかと思つた。そして、もしさうであつたならば、一層可憐で堪らないやうな氣がしてくるのであつた。

するとお繁さんは默つて意味ありげに笑ひながら、私の顏を見るだけで、その病氣が何であるか云はうとしない。それで、これは眞實は病氣ではない。病氣といふのは僞で、やつぱり旦那にでもひかされて、今頃はどこか其處らに好い氣持で納まつてゐるのだなと感疑りながら、こちらも、つとめて心を取り亂さぬやうにわざと平氣に笑ひにまぎらはして、

「嘘でせう、病氣といふのは。」重ねて訊くと、

「いえ、病氣はほんまどす。」といつて、まだ笑つて眞相を語らうとせぬ。

「どんな病氣です？」私は、今度は、商賣柄恥しいひどい病氣でもあるのかと思つた。

するとお繁婆さんはやつぱり笑ひながら、
「お園さん、氣狂ひになつたどす。」と率直にいふ。
「へえ、氣狂ひになつた！」私は、暫く呆然として對手の顏をじつと見詰めてゐた。
「一體どうして、そんなことになつたのです。」
　お繁婆さんが話して聽かすところによると、先月の末か今月の初め頃、彼女も瞬く間に流行してきた流行感冒に襲はれて一時は三十九度から四十度近い發熱で心配するほどであつたが、熱は間もなく下がり、風邪も一週間くらゐで癒るにはなほつたが、すつかり熱が除れて、やう／＼起き上がることが出來るやうになつた時分に、ふつと間違つたことを口に言ひ出した。初めは皆(みんな)も、平常(ふだん)から、あんな溫順(おとな)しいに似ず、どうかすると、よく輕い戲談などを云つたりすることもあるので、
「お園さん、何いうてはるのや。」と、笑つて、いつもの戲談かと思つてゐると、本人は飽くまでも眞顏でゐるので、これは、どうも每時(いつも)とは少し樣子が違つて變だなと思つてゐると、彼女は段々妙な違つたことをいふやうになつた。そして眼付がおそろしく据つたやうになつて、さうなくてさへ、平常(ふだん)から陰鬱になりがちの顏が、一層恐(こは)い

顔になつた。家にゐる他の妓達は又それを面白がつて、對手になつて戯弄ふと、彼女は生眞面目な顔をしてそれに受け應へをしてゐるといふ有様である。

お繁婆さんは可笑しさうに笑ひながら、

「そんな具合でもう氣の毒で見てゐられしまへんがな。ほて、もう、わたし、あんた方、そんな詰まらんこと云うてお園さん戯弄らんと置いとくれやすいうて、小言いうてました。」

私は、それを聽いて身にしみて悲慘を感じながら、じつと涙を飲み込むやうにして、

「飛んだことになつてしまつたものですなあ。」と、あとの言葉も出でずに默つて太息を吐いてゐた。

「もう、どだい、いふことが成つてへんのどすもの。」お繁婆さんは變なハイカラの言葉に力を入れていふ。

そんな有様で、とてもこの先續けて商賣など出來さうにないところから、母親のほかに西京の方にゐるといふ母方の叔父にも來てもらつて、話をつけ、お繁婆さんが附添うて管轄の警察署へ行つて、營業の鑑札を返納して來たといふのである。お繁婆さ

んは尙ほ可笑しさうに、

「警察へいても、お園さん眞面目な顏をして役人に呶鳴りつけるやうなことたいふもんやから、わたし傍に附添うてゐてはら〳〵してました。」

私も思はず寂しい笑ひを洩らしながら、

「なるほどさういふ譯ぢや爲様がありませんな。そして、今何處にゐるでせう。」

「さあ、その時叔父さんに伴れられて歸つたきり、何處に居るのかそれなりで一寸も音信がないさうにおす。わたしもそれから用事で大阪の方に往てきまして、今日歸つたばかりのとこどすよつて。今日も、あんたはんから訊かれる前に、お園さん、ちよつとも音信がないなあ、どないしてはるやろ云うて噂してましたところどす。」

成程叔父のあることは前から知つてゐたけれど、私は尙ほもその叔父さんといふのは果して眞實の叔父さんに違ひあるまいかと疑つたので、念を押すやうに、

「叔父さんといつて、その實旦那ぢやありませんか。こんな土地ぢや、かう申しちや何ですが、裏にうらがあるのが習はしですからな。」と、捌けた調子で、對手の口うらを引いてみたが、お繁婆さんは言下に、

「あの人旦那なんてありやしまへん。そりや本當の叔父さんどす。」
「その叔父のゐる處は何處でせう。あんた知つてゐませんか。」
「さあ、それもわたし何處や、よう知りまへんけど。」と、小首を傾けるやうにして、「何でも三條とか、油小路とか聽いたやうに思ふけど、委しいことは、よう知りまへん。」と、眞實知つてゐなさゝうである。

私は尙ほ、もつと委しい事を、あゝもからうもと訊ねたいと思つたが、家の內が急がしさうにしてゐるのと、向うが果して誠意をもつて話してくれてゐるのかどうか、半信半疑なので、いゝ加減にして出て戻らうとして、まだ立ちにくさうにしながら、「いろ〳〵有難うございました。あなたにお眼にかゝつて、樣子が一と通り分りました。」

私は、この上にも尙ほ向うの誠意を哀求するやうな心持で丁寧にお禮をいつた。幾度思つてみても、全く自分の生命にも換へ難い女である。その女の故ならば、いかなる屈辱を敢てしても決して厭はないと思つてゐたのである。

お繁婆さんは、

「あゝそれからあんたはんのお手紙が來てゐるのも知つてます。たしか二度來てたかと思つてます。前のはお園さんが自分で受取つてたしか見てゐました。後のはこゝに居らんやうになつてから來ましたよつて、私が預つて置きました。」

といつて、彼女は奥に立つて往き、三四本の、女にあてて來てゐる封書を、私からよこしたのと一緒に持つて出てきた。それを見ると、中の一つは自分のちよつと知つてゐるある男からの文であつた。私は、それを一目みると何とも云へない厭な氣持になつて「あの人間が！」と、丁度ウロンスキイが、自分の熱愛してゐるアンナの夫のカレニンの風貌を見て穢らはしい心持になつたと同じやうな氣がして、その瞬間忽ち自分が長い年月をかけて寶玉の如くに切愛してゐた彼女が終生いかんともすべからざる傷物になつたかのやうに思はれて、又もやがつかり失望してしまつた。女が居なくなつたことが既に自分には生命を斷たれたと同じ心地がしてゐるのに、自分が一面識のある人間とも知つてゐたのかと思ふと、私はあまりに運命の神の冷酷やら皮肉やらを悲しみ且つ歎かずにはゐられなかつた。しかし、それも、みんな自分の愚か故である。かうした賣笑の女に戀するからは、それは有りがちの事である。西鶴も疾うの昔

にそれを云つてゐる。今こんな事があると知つたのを好い思ひ切り時に、いつそ此處で、これつきり女を綺麗さつぱりと思ひ斷つてしまはうか、さうすると、この心の惱ましさを解脫することが出來て、どんなに胸が透くであらう。そして決然として直ぐにも東京へ歸つて行つて、多年女故に怠つてゐる自分の天職に全心を傾倒しよう。どうかして、さういふ心になりたい、と思ひながら、私は、膝の前に置かれたそれ等の男からの手紙を凝乎と見つめながら、封の中にどんなことを書いてあるのか、出來ることならば、封を切つて中を讀んでみたいやうに思つた。差出した處を見ると、何處か地方に行つてゐて、その旅先から出したものらしいから、その男も、女が氣が變になつて、商賣を廢めて、この土地から消え失せたことは知らずにゐるのであらう。：：私がさうして、じつとそれ等の封書に見入つてゐるので、お繁婆さんはどう思つたか、

「この人はほんの五六度知つてるだけどす。私も一寸顏を見て知つてます。あれは何處のお客やつたか。」と考へるやうにして、

「たしか、井の政のお客やつた思ふ。去年の春からのお客どした。：：：かうして人さ

んの手紙どすさかい、中を讀んで見るわけにもいきまへんしなあ。」と、私を慰め顔に云ふ。

「いえ〳〵、なにこの手紙を見たいと思つてるわけぢやありません。……たゞお園が叔父さんに連れられていつたきりで、今何處に居るのか、私も、あなたも御存じのとほり、もう長い間心配してゐた、あの女の事ですから、ぜひ一遍會つて、病氣の樣子を見たいと思つて……」と、私は、どこへ取りつく島もないやうな氣がして、さうい ふと、お繁婆さんも、さすがに同情のある調子でうなづきながら、

「えゝ〳〵、あんたはんの事は、みんな、もうよう知つてます。何處に居やはるか、此處に居らんやうになつてからでも、もう半月くらゐになりますよつてなあ。」

私は尚ほも繰返して、その中にも自然居處が知れるやうなことがあつたら、是非知らしてほしいと呉々も歎願するやうに頼んで置いて、やう〳〵其處を出て戻つた。

六

外に出ると、もう十二時を過ぎてゐるので、お茶屋へ往交ふ者のほかは人脚も疎らになつて、冷たい夜の風の中に、表の通りの方を歩く下駄の足音ばかりが、凍て付いた地のうへに高くひゞいてゐるばかりであつた。

そして、氣が狂つて叔父に連れられて、何處へ往つたとも分らなくなつた女の身の上が、今は可愛い、いぢらしいといふよりも、その可愛い、自分にとつては、自分がこの世に生存してゐる唯一の理由でもあり樂しみであると思つてゐた女が、自分が一二度會つたことのある男とも知つてゐたのであつたのかといふことのみが、胸の中一杯に蔓つて、これほど愚かしいことはない、何の因果であの女が思ひ切れぬのであらうと、自分の愚かしさを咎めつつも、やつぱり思ひ切ることが出來ず、その愚かしい煩惱に責め苛まれる思ひをしながら、うか〳〵と道を歩いてゐた。

そこから祇園町の一廓をちよつと出はづれると女の先にゐた處までは直ぐなので、たとひ今はもう其處にゐなくなつたにしても、その階下の家主の老婦人は性格の良い女性であるから、その人に會つて訊ねたならば、もしや知つてゐるかも知れないと思つて、一旦戻りかけた足を又そちらへ向きかへて、そこの暗い路地の中に入つてみた

が、門は堅く締つてゐて、四邊はいづこももう寢靜まつてゐる。

「あゝ、われながら愚かしい。今時分この邊に起きてゐる家もない筈であつた。」と、心づいて『ともかく今晩は歸つて寢て考へよう。氣が狂つたといふうへに、今晩になつて、はじめて氣が付いた譯でもないが、知らぬうちこそ淸淨だが、段々あとからいろいろな事が分つてくると、この先まだ〳〵厭な思ひをしなければならぬ。自分に强い意思があるなら、今晩といふ今晩こそ、彼女を潔く思ひ切つて、彼女をはじめて知つて以來、足かけ五年の間片時も心の安まらなかつた苦患を免かれて、快い睡眠を得ることが出來るのだが。……今、あんな人間から來てゐる手紙を見たのは、冷酷で皮肉と思はれる運命の神がその實深切に、自分に誡告してくれたのかも知れぬ。……それにしても、運命は餘りに皮肉で惡戲な事を爲る』と、私は氣ちがひになつた、憐れな彼女を愛しようとしても、皮肉な惡戲な惡魔がゐて、愛することを妨げられてゐるやうな、何ともいへない辛い思ひに胸を拉がれながら、やつと終ひ際の電車に乘つて上京の方の宿に戻つて來た。

その夜は殆ど微睡もせずに苦しみのうちに明かして、翌日は幸ひ氣候も暖かであつ

たので、ゆうべ一と夜寢ずにあゝかうと考へてゐた順序に從つて、朝飯の箸を置くとそのまゝ出て往き、どこよりも先づ祇園町の裏つゞきの、例の、女が先にゐた家につて、階下の家主の老婦人の許を訪ねてみたが、今朝は宅にゐる筈だと思つてゐたのに、昨夜のとほりにやつぱり門に錠がおりてゐる。爲方なく路次の入口の店屋で訊くと、

「お婆さんは、上京の方の親類とかに病人があるとかいうて、一週間ほど歸らんいうてお往きやして、さうどんなあ、それがもう二三日前のことどす。」といつてくれる。

私は、そこに突立ちながら「三四日前。」それなら何といふ殘念なことをしたらう。田舍から京都に戻つたあの翌日高雄へ紅葉を見に行かずに、此處へ來たら、何とか女の樣子も分つたらうに、と、思つたが爲方がない。それにもう此處には三月も前から居なくなつてゐるのだから、家主のお婆さんが居たとて委しいことは分らないかも知れぬ。昨夜松井の內のお繁婆さんの話の端に、叔父さんといふのは、油小路とか三條とか云つてゐた。それに、ずつと以前に女から、一人の叔父は油小路とかで悉皆屋とか糊屋とかをしてゐると聞いてゐたやうに思ふ。母親が上京の方の親類に同居して厄

介になつてゐるといつたのも、其處かも知れぬ。姓も彼女の姓とは異つてゐる、名も知らないが、もし神といふ者がこの私の眞心を知つてくれるならば、何とかしたら分るすべもないこともあるまい。これから油小路に往つて、悉皆屋と糊屋とを一軒々々探ねて歩いてみよう。さう決心して、それから直ぐ油小路にまはつていつた。そして三條四條を中心にして、その上下を幾回となく往きつ戻りつして一々兩側を歩いてみたが、もとより雲を攫むやうな話で、悉皆屋と糊屋とは幾らもあるが、手がかりのあらう筈もない。そして殆ど半日以上も一つところをお百度を踏むやうにして、終に歩き疲れて屈託しながら一とまづ宿まで引揚げて來た。

その又翌日、無暗に探ね歩いても爲方がない、何とか好い思案はあるまいかと一日外へ出ずに考へてゐたが、暮れ方になつて、やつぱりあの前にゐた路地の中の家主の處に行つてみるのが可いやうに思はれるので、一日内にとぢ籠つてゐるよりもと思つて出掛けていつたが、一週間ほど不在といひ置いていつて、まだ三四日にしかたらぬのであるから、老婦人はまだ歸つて居ない。相變らず門の扉にはさびしく錠がおろしてある。するとその路地の中に立つてゐると、そこへ路地の入口の米屋の女房が共用

水道の水を汲みに出てきたので、そのおかみは東京者で、一度も口をきいたことはなかつたが、夏の初め以來、顔だけ見知つてゐたので、勿論先では、これがあそこの二階にゐる女の旦那と思つて、こちらよりも一層注意して見てゐたかも知れぬ。それで、そのおかみに、

「こゝのお婆さんはお留守でせうか。」と、昨日も出口の店屋で訊いてゐるので無駄だと知りつゝも、さう云つて訊ねると、おかみは、バケツを提げたまゝ、

「あの、あそこの二階にゐたお婆さんですか。」と、門の外から女のゐた二階の方を指しながら、訊き返した。それで私は腹の中で、階下のお婆さんのことを訊ねたのだが、それを訊くのも、やつぱり階上にゐた女の母親を訊ねようとてであるから、これは、巧い具合だと思つて、

「えゝさうです。」と、いふと、

「あのお婆さんはつい五六日前に、すぐそこの、安井の金毘羅様のあちら側にお越しになりました。」といふ。

私は心の中で肯いて、それぢや、八月の末に此處の所帯を疊んでしまつて母親も居

なくなつたと云つたのは、みんなこしらへ事であつたかと、合點しながら、さあらぬ風に、

「あゝさうですか。五六日前に變りましたか。」

「えゝ、ついこの間です。澤山に荷物を持つて。お婆さん、私にも挨拶をして下すつて、今までは二階借りをしてゐましたけれど、今度は自分で一軒借りました。氣兼ねがなくなりましたから、どうぞ遊びに來て下さいというて行かれましたけれど、私もわざ／＼行く用もありませんから、まだ往つては見ませんが、なんでもすぐ其處の横町の通りから一寸入つた、やつぱり路地の中ださうです。」

　私は、はつと胸を刺すやうに思ひ當つて、自分でも、顏から血の氣が一時に失せたかと思つた。今までは二階借りであつたけれど、今度は一軒借りきりで、氣兼ねがない。假令病氣といふに嘘はないにしても、背後に誰か金を出す者が付いてゐるに定つてゐる。……心の中ではそんな事が鶯梭の如く往來する。それを凝乎と堪へて、

「はあ、一軒借りて。……」と私は思はずその一事に滿身の猜察力を集中しながら、獨言のやうにいつてゐると、委しい譯を知らぬおかみは、多分夏の初めそこに私の姿

を時々見てゐた以來、私達の關係に變りないことと思つたのであらう。

「もしお出でになるなら、あそこの俥屋でお訊きになると、直ぐ分ります。あそこの俥屋が荷物を運んでゆきましたから、よく知つてゐます。」

と、深切に敎へてくれたので、私は幾度も禮を繰返しながら、路地を出て、横町の廻り角の俥屋にいつて訊ねると、俥屋の女房がゐて、自分は行かないが、そこをどう行つて、かういつてと、委しく敎へてくれた。きけば、なるほど直ぐ近い處である。

私は、心に勇みがついて、その足で直ぐ金毘羅樣の境內を北から南に突き拔けて、繪馬堂に沿うたそこの横町を、少し往つて更に石疊みにした小綺麗な路地の中に入つて行つて見ると、俥屋の女房は小さい家だと敎へたが、三四軒竝んだ二階建の家のほかには、なるほど三軒つゞきの、小さい平家があるけれど、入口の名札に藤村といふ女の姓も名も出てゐない。それで又引返してもう一度俥屋にいつてもつと委しく訊くと、その三軒の平家の中央の家がそれだといふ。

「あゝ、さうですか？」と、いつて、俥屋の女房には、逆らはずそのまゝ又もとの路地の方に引返したが、今の先刻見たところでは、その中央の家には、なるほど、まだ

白木のまゝの眞新しい名札が出てゐたが、それには飯田とのみ誌してあつた。私は不審さに小首を傾げながら、もう一度路地に入つて來てその飯田といふ名札の揭つてゐる中央（まんなか）の家の前に立つて、暫く考へてゐた。

あゝ讀めた！　飯田といふのは旦那の姓であらう、かうして、この旦那は、可哀さうな私とは正反對に好きな女をうま／＼と自分の持物にし了せて、この新しい表札を打つたのであらう、と、向うのその嬉しい氣の內を想像するだけ、自分は恐ろしい修羅に身を燃しながら、もう生命懸けで飽くまでも自分の惡運に突擊してゆかうとする涙ぐむやうな意地になつて來た。三尺を又半分にした、やう／＼體の這入（はひ）られるだけの小さい潛戸は、まだ日も暮れぬのに、緊く閉切つて、留守かと思ふほどひつそりとしてゐる。

「もし／＼、御免なさい。」と、二三度聲をかけると、やがて、內から、

「どなたはんどす？」といふ聲がする。たしかに母親の聲である。ぢや、この家がそれにちがひなかつたと思ひながら、

「私です、わたしです。」と自分の名をいふと、母親はそうつと、五六寸潛戸（くゞり）を開けて

内から胡散さうに戸の外を窺いて見たが、そこには私が突立つてゐるので、

「あゝ、あんたはんどすか。」と、氣まづい顔をしていひながら、がらりと潜戸を開けて外に出るや否や身體で入口に立塞がるやうな恰好をして、後手にぴしやりと潜戸を閉めてしまつた。

そして五歩六歩入口を遠ざかりながら、

「あんたはん、私がこゝに來てゐるのがよう分りました。どなたに訊きやした？……こゝは人さんのお家どすよつて。私一寸雇はれて來てゐますのどす。」といふやうなことを、辯解がましくいひつゝ、なるたけ私を家の前から遠ざけるやうに、路地を歩いて出ようとする。

私は、つい一と月ばかり前時々會つてゐた時と打つて變つたやうな、そのあまりに餘所々々しい様子に、さうなくてさへ失望のあまり、ひどく弱くなつてゐる心を押潰されたやうな心地がしたが、努めて氣を勵ましながら、

「お母はん、お園さんが飛んでもない病氣になつたといふぢやありませんか。」と、まるで泣きかゝるやうな調子で言葉をかけた。

すると母親ももう鼻聲になつて、

「私、あの娘にあんな病氣しられて、もう、どないしようかと思うてます。同じ病氣かて、糞尿の世話をするくらゐどしたら、わたし何ぼか嬉しいか知れしまへん。あの娘の病氣の世話やつたら、どないに私骨が折れたかて、ちよつとも厭やしまへん。私もおの娘と一緒に死んだかて本望どすけど、あんたはん、何の因果であんな病氣になりましたか思うて私、もう此處半月ほどの間といふもの、夜も碌に寢られやしまへんのどす。ちよつと油斷してる間にどんなことをするか知れまへんよつて。」母親は悲しい聲で立てつづけに泣きごとをいふ。さういふ顏をよく見ると、成程娘の病氣に心痛すると思はれて、顏に血の氣は失せて眞靑である。

私は一々うなづきながら、一昨日の夜から、病氣といふことをはじめて聞いて、居處が知れないために殆ど京都中を探して歩いてゐたことを怨みまじりに話して、

「そして、今少しは良い方なのですか、どんなです？　私も一遍様子を見たいです。」

と、いふと、母親は、それを遮るやうな口吻で、

「今もう誰にも會はしてならんとお醫者さんがいははりますので、何方にも會はせん

やうにしてゐます。仲の好い友達が氣の毒がつて、見舞ひに行きたいいうてくりやはりますのでも、みんな斷りいうてるくらゐどすよつて。あの病氣は藥も何もいらんさかい、たゞじつと靜かにしてさへ置けばえゝのやさうにおす。この二三日やつとすこし落着いて來たとこどす。」

「お〻さうですか。何にしても心配です。……そして、今ひとりで靜かに寢てゐますか。」私は、どうかして、餘所ながらにでも、そうつと樣子を見たさうにいふと、母親は、又一生懸命に捲し立てるやうな調子で、

「ほて、今、京都に居らしまへんのどす。」

「えツ、あそこに寢てゐるんぢやないんですか。そして、何處にゐるんです?」

「違ひます。あそこはあんたはん、餘所の金持のお婆さんがひとりで隱居しておいでやす處どす。もうお年寄りのことどすさかい、この間からえらい病氣でむつかしい云うて息子はん達心配してはります處へ、知つた人さんから賴まれて私が附添ひに來てますのどす。そしてあの娘は遠い處の親類に預けてしまひました。」母親がおろ〳〵聲で誠しやかにさういふので、私は心の中で、道理で、取つてもつかぬ飯田といふ表札

が出てゐるのである。そして、そんな精神に異狀のある、たつた一人きりの娘の傍に附添うてゐないで、他人の年寄りの病人に附添うてゐるのを不思議に思ひながら、
「遠い親類に預けた！：：あんた、そしてまた何故傍について介抱してやらないのです？」
「あんたはん、私が傍に付いて介抱してやりたうても、あの娘がそんな病氣で、たんとお金がかゝりますよつて、私が人さんの家へ雇はれてゐてでも少しくらゐのお錢を儲けんことにはどもならしまへんがな。」母親は泣くやうにいふ。
私はつく〴〵と彼等母子の者の世にも薄命の者であることを思ひながら、眉を顰めるやうにして、
「あんた錢を儲けなければならないなんて、それは何とか出來るぢやありませんか。あんたの唯一人きりの大切な娘がそんな一通りならぬ病氣をしてゐるのに、傍についてゐて介抱してやらないといふことがありますか。」と小言をいふやうにいふと、母親は、少し顏を和げて、
「えゝ、私も附いてゐてやりたいは山々どすけど、今いふとほり、醫者に見せること

もいらん、藥も飲まないでもええ、たゞ靜かにして居りさへすりや好えのやうにおすさかい、親類のおかみさんが、お母はん、もうちよつとも心配することはない、確かに癒してあげますよつて、安心しといでやすいうてくりやはりますので、そこへ委せてあります。」

「遠い親類て、どこです？」

さういつて訊ねても、母親ははつきり何處といふことをいはずに、たゞ、

「ずつと遠いところどす。田舍の方どす。」といふ。

「田舍て、どこの田舍です？　お母はん、あなたにも、あんなにいうて居つたぢやありませんか、私と一處に家を持つて、お園さんが廢めるまで待つてゐませうつて。そんな病氣をなぜ私に知らしてくれなかつたのです。」

私が、怨言まじりに心配して訊くので、母親も返事を否む譯にも行かず、折々考へるやうにしながら、「あんたはんにも一遍相談したい思ひましたけど、さうして居られしまへんがな。そんな病氣どすよつて。田舍といふのは京から二三里離れたお百姓の家どす。私の弟の家どすさかい、そこの嫁はんが、ほん深切にしてくりやはりますよ

つて。」

「二三里の田舍ぢや、あんまり遠い家でもありません。」

「私も、二三日前に一寸行つて來たきり、此方の御隱居さんが病院に入らうかどうしようかいうてはりますくらゐで、少しも手が引けませんよつて、一遍あとの樣子を見に行かんならん思うてもまだ、あんたはん、よう往かれまへんがな。私も、あんたはんがお出でやしたんで、今家を默つて出て來ましたよつて、早う去なんと、年寄りの病人さんが、用事があるといけまへんさかい……」

母親は鼻聲で、あつちも此方も心のせくやうに云ふ。私は一層同情に堪へない心持で、

「いくら、あんた、親類に預けて安心だといつて、一人の親が一人の娘の病氣の世話をしないで、餘所の他人の介抱に雇はれてゐるといふことがあるものですか。まあ、今此處で委しい話も出來ませんから、何とか繰合して暇ができたら、お母はん一遍今度の私の宿まで來て下さい、そして、もつとくはしい病氣の樣子も訊きたいし、色々な御相談もしませう。」

さういつて、宿の名と處とをくはしく敎へると、母親は少し考へるやうにして、明日はちよつと都合が惡くてゆけないから明後日はきつと訊ねて行きますといふ。その約束を堅めて、

「あんたはんも亦風邪ひかんやうに早う往んでお休みやす。」

「お母さんも餘り心配せんと、そのうへ自分が又患つたら困りますよ。」

挨拶を交はして、そのまゝそこで立ち別れた。日はもうとつぷり暮れて、寒い〳〵乾いた夕風が薄闇の中を音もなく吹いてゐた。

七

母親の居所が知れて、まづ一と安心はしたものの、路地の出口の女房のはなしではつい五六日前に先の二階借りの處から引移つて行つたといふ。それを母子の者は何故私に對して隱してゐたか、考へて見ると水臭い仕打ちである。それに先刻飯田と表札を打つた家の潛戸を開けて母親が中から出て來ながら、丁度此方が押入つてゆかうと

するのを、先廻りをして入れまいとでもするやうな樣子をしたのが疑つてみればみる程變である。まあ、しかし、そんなことを惡どく根問ひせぬ方が美しくつていゝ、委細は明後日宿へ訪ねて來た時に、よく解るやうに、なんどりと話してみよう、と、それからそれへと、疑つてみたり、又思ひなほして安心してみたりしながら宿へ歸つて來た。

それから中一日置いて、約束の明後日になつて、今に來るかくるかと一日どこへも出ず晩まで待つてゐたけれど母親は訪ねて來ないので、たうとう待ちあぐねて、日暮れ方に又此方からそこまで出掛けて往つてみた。と、一昨日見た飯田と誌した表札は取りはづしてしまつて、相變らず潛戸は寂然と閉まつてゐる。やゝ暫くそのまゝそこに佇んで思案をしてゐると、すぐ左隣りの二十七八のおかみさんが、入口から顔を出して、

「お隣りはもうお留守どつせ。」といふ。

「あゝ、さうですか。もうお留守て、誰もゐないのですか。」と重ねて訊くと、

「えゝ、私、どや知りまへんけど、何でも病人さんが、えらい惡うて入院してはりま

すゝかいうて、お婆さんも昨日付いて行かはりまして、今何方もゐやはりやしまへん。何や知らん、お婆さんこの二三日えらい忙しさうにいうてはりました。」といふ。

私は、何だか狐につまゝれたやうで、茫然としてゐたが、さういへば、母親が一昨日話してゐた隱居のお婆さんが入院したといふのかも知れぬと思ひながら、尙ほそこを立ち去りかねて、一二度表から潛戶をひつぱつてみたり、櫺子窓の磨り硝子の隙から家の中を窺いてみようとしたけれど、隣家の女房が見てゐるので、押してさうすることもならず、そのまゝ引返して路地を出て來た。そして群疑は叉雲の如く湧き上つた。けれども、母親のいつたやうに付き添うてゐる隱居の婆さんと、自分の娘と二人の病人を持つてゐるのが眞實ならば、忙しい道理である。今日は私を訪ねるといふ約束が一日二日延びても無理はないと、また思ひ直して、悄然として宿の方に戻つてきた。

その翌日、たしかに當てにはならぬが、もしか今日は來はせぬかと、叉一日外へ出ぬやうにして心待ちに待ちながら、不安と疑ひとに惱まされて鬱ぎ込んでゐると、二三時頃になつて、宿の者が、お年寄りの御婦人の方がお見えになりましたと知らして

來たので、たうとう來たなと、すぐ通してくれるやうにいつて待つてゐると、表の方から、長い廊下を傳うて部屋に入つて來たのは、母親の外に今一人、嘗て見も知らぬ人相が甚だよくない五十餘りの、脊のひよろ高い、瘠ぎすの男である。見ると蒼白い顏色に薄い痘痕(あばた)がある。

　私はその男の樣子を見ると同時に、はつとした感じが頭に閃いた。それで、じつと心を落着けて、態度を崩さぬやうにしながら、平らやかな顏をしてわざと丁寧に一應の挨拶を交はしてみると、その男は懷中から一枚の名刺を取出して私の前に差出しながら、

「私はかういふ者です。」といふ。

「あゝさうですか。」といひつゝ、それを手に取り上げて讀んでみると、「京都市何々法律事務所事務員小村何某」と仰山に書いてゐる。私は、

「あゝさうですか。」と重ねてうなづいて見せたが、こんな男が二人や三人組んで來たくらゐでびくともするのぢやないが、それにしても一昨昨日(さきをとゝひ)の晩、母親と立ち話をして別れた時にも、自分は何處までも人情づくで、眞實母子(おやこ)二人の者の身を哀れに思つ

たのであつた。そして、哀れに思へばこそ一人愛しんで長い間盡してゐたのである。それゆゑ假令精神に異狀を來して居ようが氣狂ひであらうが、あんな纖美しい女が狂人になつてゐるとすれば、そんな病人になつたからといつて、今更棄てるどころか、一層可愛い。いかなる困難を排しても女を自分の手中の物にして、病氣をも癒してやらねばならぬと思つてゐるのに、もし、自分のこの體たらくを見知つてゐる者があつて、自分を痴愚とも醉狂ともいはば云へ、自分ながら感心するほどの眞實を傾け盡して女の事を思つてゐるのに、こんな男を同伴して來る母親の心が怨めしい。何故自分のこの胸の內が母親には分らぬのであらう。自分一人で來て打融けた談合をしようとせずに、訊くまでもなくもう底意は明かに見えてゐる。その母親の心が、もうすつかり私と絕緣してゐるといふことが、慘めに私の胸に打擊を與へた。

それを思ひながら、私は默り込んでゐると、その男は、

「僕は、この藤村の親類の者に依賴せられて今日來たのだが、君がこの藤村の娘を大變脅迫したために、精神に異狀を來したといつて、ひどく立腹をして居る。それで、君がどうしても女が欲しいなら、錢を五百何十圓出してもらはねばならん。」と、橫柄

な調子でいふ。

私は、それを聽くと、もう、むら〳〵となつた。そして、腹の中で「何を吐しやがる。盜人猛々しいとは、その言ひ分である。」と、思つたが、それは凝乎と抑へて口には出さず、

「はあ、私が藤村の娘を脅迫したために精神に異狀を來したといふのですか。……なほ、女が欲しいやうなら、錢を五百何十圓出せ？　私にはよく合點がゆかぬ。」と、言葉は、なるべく靜かにしながら、きつとなつて問ひ返した。

するとその男は、

「自分はたゞ頼まれたので、委しい譯は知らんが、君が當人をひどく嚇かしたのが原因で氣が狂つたさうぢやないか。その爲に親類一同の者が大變君を怨んでゐる。」と、頭からおつ被せようとする。

それを聽いて私は、餘りの腹立たしさに顏が痙攣するかと思ふほど硬くなつたのを強ひて笑ひながら、

「戲談をいつてゐる！」と、語氣を強めて吐き出すやうに云つた「なるほど今年の一

月以來、……それまで、もう何年といふ長い年月の間私の方から散々盡して心配してゐることが、いつまで經つても少しも埒があかぬので、一體どうなつてゐるかと、隨分嚴しいことを、手紙でいつて寄越したことは度々あります。しかし、それは私としては當然のことで、勿論、あんな商賣をしてゐる女に山ほど錢を入れ揚げたつて、それは入揚げる方が愚ではあるが、假令幾ら泥水稼業の女にしても、たゞ無闇に男を騙して金を捲き上げさへすれば可いといふ譯のものでもありますまい。私がこの藤村の娘に對してしたことを最初からずつとお話をすると斯うなのです。まあ聽いて下さい。」

と、いつて、對手が妙に生齧りの法律口調で話しかけるのを、此方は、わざと打解けた傳法な口の利き樣になつて、四五年前からの女との經緯を、その男には、口を挿入れる隙もないくらゐに、二時間ばかり、まるで小說の筋でも話して聽かすやうに、ところどころ惚氣まで交へて立てつゞけに話してきかせた。私の顏は熱して、頰には紅がさしてきた。

するとその男は、段々私の話に釣込まれてしまひ、初めの變に四角張つてゐた樣子はいつか次第に打ち融けて、私の話が惚氣ばなしのやうになつて來ると、堪らす噴き

出しながら、
「君は女に甘い。君は下手だ。そんな君、女にたゞ遠方から金を送るといふことがあるものか。さういふ時には君が自分で金を持つて京都に來て、さあ、金はこゝに用意してある。慥めて自分の方に來るかどうするかと向うの腹を確めて、此方のいふ事を聽くなら、金を出して遣らうといふ調子で行かにや駄目ぢや。」と意見をするやうにいつて、笑つてゐる。

私は又、半ばはわざとさうして見せるところもあつたが、男が笑つてゐるのを見て勃然となり、飽くまでも眞劍な調子で、
「いや、笑ひ事ぢやありません。又惚氣を云ふつもりでもありません。他人から見れば馬鹿と見えるくらゐ、凡そそれほどまでに、私は、相手を信じ切つて盡して來たことをお話するのです。惚氣を聽かすやうですが、それも私達の間がそれほどまでに打ち融けて居つたことを説明してゐるのです。それにも拘らず、……」

と、尚ほ後を繼がうとすると、その男は、一層笑ひ出して、
「いや、君は馬鹿だ。はゝゝゝ君、出てゐる女は君、君一人だけが客ぢやない、ほか

にも大勢そんな男があるもの……」と笑ひ消してしまふ。
母親も傍から口を出して、
「世話になつた人はあんたはんばかりやおへん。まだ〳〵もつと他に、いふに云へんお世話になつたお人がありますのどす。」と、その男にも聽いてくれといふやうにいふ。
「うむ、そりやさうやろとも。」その男は尤もといふやうにうなづいてゐる。
私は、それを不快に思ひながら聽いてゐたが、
「そりや、私のほかに、もつと世話になつてゐた男があるかも知れない。何も自分一人が色男のつもりでゐた譯ぢやないが、自分もこの年になつて女に引掛つたのは、これが初めてぢやない。隨分女の苦勞は東京にゐて度々して來てゐるんだ。しかし今度のやうな御念の入つた騙され方をしたのは初めてだ。それに何ぞや、私が嚇かしたために氣が狂つたなぞと、聞いて呆れる。それどころぢやない、私の方であの女の事を思ひ詰めて患はぬが不思議なくらゐに、自分でも思つてゐるのです。私が嚇かしたためにそんな病氣になつたといふ苦情があるなら私の方で悅んで引取つて癒してやりませう。しかし、先刻のお話で錢を五百圓出せといふのはどういふ譯です?」

きつぱり、さういふと、その男は又うなづいて、妙な東京辯を交へながら、

「うむ、そりや君の心持も私にはよう解つてゐる。だから、病氣になつた事については情状酌量してどうしてくれとは云はぬから、女の事は諦めてもらひたい。それでもどうしても君の方へ連れて來たいといふなら、五百五十圓か、それだけの金を君の方から出してもらはねばならん。その金が出來るか。」

人を馬鹿扱ひにして宥めるやうな、又足許を見透して輕蔑したやうなことをいふ。私は、情状を酌量するもあつたものではないと心の中でその淺薄な言ひ草を腹を立てるよりも笑ひながら、

「へえ、五百何十圓！　それはどうした金です？」と訊き返しながら、今まで散々人を騙して金を搾れるだけ搾つて置きながら――尤も本人は何にも知らずにゐるのかも知れぬが――何處まで蟲の好いことを云ふと思つた。

すると、母親は又興奮した顏で傍から口を出して、

「その金はどうした金て、あんたはん、まだ松井さんにあの娘の借金がおすがな。あんたはんも私の處におゐやした時に、何度もあの娘に訊いておゐやしたやおへんか、

またたんとの借金おした。その金を返さんことには、あんたはん松井さんかて、あの娘を廢めさしてくりやはりやしまへんがな。」眞顏でいふ。

「その借金を五百五十圓今度親類から出してもらつたのだ。」傍の男が後を受取つて云ふ。

私には、どうも、はつきり腑に落ちぬ。

「へえ？……しかし、この間私が松井へ行つて、お粲さんに會つて訊いた時には、そんなに借金はもうなささうな口振りであつたが。」

「あの人何も知らはりやしまへん。無いどころか、まだ仰山あつて、あの娘はそんな病氣になる……親一人、子ひとりの私の身になつたら、あんたはん、泣くに泣かりやしまへんがな。それで南山城の舊い親類に賴んで證文書いて、それだけの金を今度貸してもらうたのどす。」母親は、傍の男にも訴へ顏にいふ。

私は、默つてそれを聽いてゐたが、成程彼女達の先祖はもと府下の南山城の大河原といふ處であつたとは、自分が女を知つて間もない時分から聞いてゐることであつたその大河原といふのは關西線の木津川の溪流に臨んだ、山間の一驛で、その邊の山水

は私の夙に最も好んでゐる所で、自分の愛する女の先祖の地があんな景色の好い處であるかと思ふと、一層その邊の風景が懐かしい物に思はれてゐたのであつた。そして女の祖父に當る人間が、彼女の父親の弟分にして、も一人他人の子を養子にしてゐたが、祖父が死に、今からざつと三十年も前に父親が一家を擧げて京都に移つて來る時分に、所有してゐた山林田畑をその義弟の保管に任して置くと、彼はその財産を全部失くしてしまひ、自分は伊賀の上野在の農家に養子に行つて、猶ほ存命である。ほかに兄弟とてなかつた父方の親類といへば云はれるのは其所きりで、血こそ繋がつてゐないが今でも親類づき合ひをしてゐるのであつた。……それだけの事は度々母子の者から聽かされて自分も知つてゐるが、その他に南山城に、不斷親しい往來をしないでゐて、突然金を貸してくれるやうな處がありさうに思へぬ。

「へえ？……そんな親類があるのですか。伊賀の上野にはあると、あなた方から私もかねて聞いてゐたが。」と、私が訝しさうにいふと、母親は、引つ手繰るやうな調子で

「あんたはん、そんな委しい事知らはりやしまへん。そんな親類ありますがな。」といふ。

「へえ？　何といふ親類です？　やつぱり大河原の？」と重ねて訊くと、傍の男は、又それを受取つて、
「自分で、藤村の親類で、やつぱり藤村利平だといふ者だというとつた。その人間がわざ〳〵私の處に來て依賴して歸つた。」
「あんたはん、あんな遠い處からその事で出て來てくれたのどす。」二人は調子の合つたことをいつてゐる。
私も、心の中で、あゝいふのだから、そんな親類があるのかも知れぬと思つた。
「ぢや、私がその藤村利平といふ人に一應會つて話しませう。」
「いや、もうこの間一寸來て、すぐ歸つてしまうた。」といつてしまふ。
終に、どちらのいひ分も要領を得ずにそんな取り留めのない話になつたが、私の心は、どうあつても女を思ひ絶たない、女に會はなければ承知しないが腹一ぱいで、たとひこの天地が碎けるとも女を見なければ氣が濟まぬのである。それで、たうとう三四時間も話し込んでゐる内に暗くなつてしまつたので、その男は、忙しいといつて立ちさうにするのを、私は何處までも一度女に會つて、差向ひで納得するやうな話をし

なければ何といつてもこのまゝに濟ます譯にはゆかぬといひ張つた。
すると、母親もその男も遲くなつて心が急くの兩方で、
「そやから、病氣さへ良うなつたら、あんたはんにも會はせますいうてるやおまへんか。」
「きつと會はせますな。」
といふことにして、二人は歸つた。

八

この間母親と一緒に來た小村といふ男が、十日か十五日經つたら會はせませうと受合つたので、自分もそれで幾らか安心して、なるべく他の事に氣をまぎらすやうに努めながら、その十日間の早く經つのを待つてゐた。そして約束の十日が過ぎると、もうそのことばかりが考へられて心が急くので、宿から餘り遠くない處と聞いてゐた、その小村の家を訪ねて往つて、この間母親と一緒に來た時に聽き殘した、もつと委し

い事をあれこれと訊ねてみた。そして、金を出したのはやつぱり南山城の大河原字童仙房といふ處の藤村利平といふ人間であつて、その人間が、自分の事務に携はつてゐる室町竹屋町の法律事務所にわざ〳〵訪ねて來て、親戚關係の藤村の娘の事を依頼していつたのである。大河原の童仙房といふ處にさういふ人間があるかどうか、自分は委しいことは知らぬが、事務所の方には四五年前に他の事件を依頼して來たことがあるので、今度はその緣故で來たのである、といふ。

私は、それを、この間はじめて聞いた時から幾度となく疑つてみた。そんな親類があつて、此度それだけの金を出してくれるくらゐならば、そも〳〵あんな卑しい境涯に身を沈めない前に泣き付いて行く筈である。けれども、さういふ親類があるといふから、或はさうかも知れぬ。そして、

「もう、あれから暫く經つたから、病氣も大分良くなつたでせう。私自分で一遍往つて樣子を見て來たいと思ふんですが。」といふと、小村は口をきくよりも先に頭振りをふつて、

「いや〳〵まだなか〳〵そんな處でない。母親の話ではどうも良くないらしい。」とい

ふ。

「とにかく、それでは私が自分で往つてみませう。」といつて、女の靜養してゐるといふ山科の方の在所へ往く道順や向うの處を委しく訊ねると、小村は、君が獨りで往つたのではとても分らない、ひどく分りにくい處だといつてゐたが、それでも強ひて此方が訊くので、山科は字小山といふ處で、大津ゆき電車の毘沙門前といふ停留場で降りて五六町いつた百姓家だといふ。姓はときくと、さあ姓は、自分も一度母親に連れられて一度行つたきりでつい氣が付かなかつたが、やつぱり藤村といつたかも知れぬといふ。

まるで雲を掴むやうな當てのないことであるが、私はそれから小村方を出て、寒い空に風の吹く砂塵の道を一心になつて、女に食べさすために口馴染の祇園のいづ字の壽司などをわざ〳〵買ひとゝのへて三條から大津行きの電車に乘つた。小村のいつた毘沙門前の停留場といふのは、大津街道の追分からすこし行くと直ぐなので、そこで電車を降りて、踏切番をしてゐる女に小山といふ處へ行くのはどう往つたらよいかと訊ねると、女は、合點のいかぬやうに、「小山はこゝから五六町やきゝまへんなあ。

あこに見えるのが小山どすよつて、一里もつとおすやろ。」といつて指す方を見ると、田圃の向うの逢坂山の峰つゞきにあたる高い山の麓の方に冬の日を浴びて人家の散らばつてゐる村里がある。私は、あそこまでは大變だと思ひながら、

「さうですか、毘沙門前の停留場を降りてすぐ五六町ときいたのですが。」と、私は繰返して獨言を云つてみたが、踏切り番の女は、たゞ、

「ちがひますやろ。」

とばかりで爲方がない。そして、自分ながら阿呆な訊ね樣だと思つたが、もし京都から斯々の風體の者で病氣の靜養に來てゐる者がこの邊の農家に見當らないであらうかと問うてみたが、それもやつぱり、

「さあ、氣が付きまへんなあ。」で、どうすることも出來ない。

爲方がないから、私はそこから大津往來の街道の方に出て、京都から携へてきた壽司の折詰と水菓子の籠とを持ち扱ひながら、雲を摑むやうなことを云つては、折々立ち止まつて、そこらの人間に心當りをいつて問ひ／＼元氣を出して向うの山裾の小山の字まで探ねて往つた。十二月の初旬の頃でところ／＼薄陽の射してゐる陰氣な窓か

ら、ちらりちらり雪花が落ちて來た。それでも私は兩手に重い物を下げてゐるので、じつとり肌に汗をかきながら道を急いで、寂れた街道を通りぬけて、茶圃の間を横切つたり、藪垣の脇を通つたりして、遠くから見えてゐた、山裾の小山の部落まで來てそこから中の人家について訊ねたが、さういふ心當りは何處にもなかつた。それでも猶ほ諦めないで、そこから又引返して、殆ど、山科の部落といふ部落を、ちら／＼粉雪の降つてゐるにも拘らず私は身體中汗になつて、脚が棒のやうになるまで探ね廻つたが、もとより住所番地姓名を明細に知つてゐる譯でもないので遂に何處にもそんな心當りはなく、在所の村々が暗くなりかけたから爲方なく、斷念して、失望しながら歸路についた。

　あとで小村といふ男に會つてそのことを話すと、彼は一人往つたのでは、とても分らん。」といつてゐたが、母親が近いうちに又その話で來ることになつてゐるから來てくれといふので、少しは好い話をするかと思つて、樂んでその日に往くと、母親の調子はこの前會つた時より一層險惡になつて、此方が、女に未練があるので、どこまでも下手に優しくして物をいふと、彼女は、理詰めになつて來ると、終には私に向つ

て散々ぱら悪態を吐いた。
　そして、山科に娘を預けたといふのは、嘘であらうといふと、もう、そんな處に居るものか、遠くの親類が引取つたとか、又からいへば、私が東京へ歸つて行くとでも思つたか、世話をする人が家内にするといつて東京へ連れていつたなどといろんなことをいつてゐた。たしかに南山城に行つてゐるとも思へないが、母親が、毎時よくいふとほりだとすれば、或はさうかも知れぬ。あの女が、自分の探り求めえられる世界から外へ身を隱した、もう、とてもどうしても會ふことも見ることも出來ぬと思へば自分は生きてゐる心地はせぬ。そんな思ひをして毎日じつとして鬱いでばかりゐるよりは、當てのないことでも、往つて探してみる方がいくらか氣を慰めると思つて、私は、十二月のもう二十九日といふ日に、わざ〳〵そちらの方へ出掛けていつた。木津で、名古屋行きに汽車を乘換へると、車內は何となく年末らしい氣分のする旅行者が大勢乘つてゐる。一體木津川の溪谷に沿うた、そこら邊の汽車からの眺望は夙に私の好きな處なので、私は、人に話すことの出來ない、がしかし、自分の生きてゐる殆ど唯一の事情の縺れから、堪へがたい憂ひを胸に包みながら、其等の旅客に交つて腰を

掛けながら、せめても自分の好める窓外の冬景色に眼を慰めてゐた。車室がスチームに暖められてゐるせゐか、冬枯れた窓外の山も野も見るから暖かさうな靜かな冬の陽に浴して、溪流に臨んだ雜木林の山には茜色の日影が澱んで、美しく澄んだ空の表にその山の姿が、はつきり浮いてゐる。間もなく志す大河原驛に來て私は下車した。

かねて南山城は大河原村の字童仙房といふ處の親類に引取られてゐると聞いてゐたので、大河原の驛に下車すると、そこから村里まで歩いて、村役場に就いて、先づ親類といふ人間の姓名をいつて、戸籍簿を調べてもらつたが、村役人は「そんな名前の人は心當りがありませんが。」といつて、帳簿を私に見せてくれた。そして、童仙房といふ處は、この大河原村の內であつても、こゝから車馬も通はぬ險惡な山路を二三里も奧へ入つて行かねばならぬといふ。そんな遠い山路を入つていつても童仙房といふ處にそんな人間がないならば無益なことである。

そして、そんな姓名はこの大河原村にはない。それと同じ姓は、この隣村の何がし村の聞き違へではないか、その村には藤村といふ姓が多いといふ。しかしその村もやつぱり鷲峰山といふ高い山の麓になつてゐるので、そこまで入つて行くには、どちら

からいつても困難であるが、まだ此所から行くよりも、こゝから三つめの停車場の加茂から入つて行つた方がいゝが、それでも五六里の道である。そちらからならば倅が通ふかも知れぬといつて教へてくれた。

大河原といふことは、今度の場合に限らずこれまでも度々母親の口から聞いてゐるので、そんな人間が實在するなら大河原に違ひはなからうと思つたが、あの連中の云ふことには、どんな虚構があるかも知れぬ。もしや、その隣村ではあるまいかと思案して、こゝまで乘り掛かつたついでに、何處までも追究せずにはゐられない氣がするので、私はそこまで探ね入つて行く決心をした。南山城の相樂郡といへば殆ど山ばかりの村である。そこに峙つてゐる鷲峰山は標高はやうやく三千尺に過ぎないが、巉岩絶壁を以て削り立つてゐるので、昔、役の小角が開創したといはれてゐる近畿の靈場の一つである。その麓を繞つて、殆ど外界と交通を絶つたやうな別天地が開けてゐるのである。

私はこの寒空にそこまで入つて行くことの容易ならぬことを思つて、幾度か躊躇して、長い太息を吐いたが、女がもしその深い山の中に行つてゐるとしたら、自分もそ

こまで入つてゆかねば會ふことも見ることも出來ぬのであると思ふと、それを中止するのも何だか心殘りである。さう思つて、大河原驛から又笠置、加茂と三つ手前の驛まで引返して戻つた。そして、加茂驛に下車して停車場の出口で、そこに客待ちをしながら正月のお飾りをこしらへてゐた二三人の車夫に、何がしの村まで、これから行つてくれぬかといふと、彼等は、呆れた顏をして、笑ひながら、

「とつても……」と、一口いつたきりで、顏を横に振つて對手にならうとせぬ。尙ほよく訊ねると、泥濘が車輪を半分も埋めるので、俥が動かない、荷車ならば行くといふ。

私に、思案に暮れて暫くそこに突立つて考へてゐたがさうかといつて、斷念する氣にはならぬので、必ず行くといふ決心はなかつたが爲方なく驛路の、長い街つゞきを向うへ向うへと何處までも歩いて行つた。やがて半道も行くと、街道はひとりでに高い木津川の堤に上がつていつた。木津川も先の大河原驛あたりから、こゝまで下つて來ると、汪洋とした趣を備へて、川幅が廣くなつてゐる。鷲峰山下の村に通ふ街道はそこに架した長い板橋を彼方に渡つてゆくのである。私は、ゆかうかゆくまいかと思

ふよりも、行けるかどうかを氣づかひながら、ともかくその長い板橋を向うに渡つていつた。それでも、なか〳〵交通が頻繁だと思はれて、相應に人が往來してゐる。私は長い橋の中ほどに佇んで川の上流の方を眺めると、嶮岨な峰と峰とが襟を重ねたやうに重疊してゐる。時によつては好い景色とも見られるであらうが、午後から何だか寒さが増して陰氣な空模様に變つたと思つてゐたら、雪花(ゆき)がちらり〳〵散つて來た。私は、長い橋の上に立つて空を見上げながら「この空模様で、膝を沒する泥濘道(ぬかるみみち)ではとても覺束ない。」と又思案をしたが、ともかく橋を向うに渡つて猶ほ歩いてゐると、そこへ後からがら〳〵空車(からぐるま)を挽いた若い男の荷馬車がやつて來た。私はその男に聲を掛けた。

「その荷馬車は何處まで行く？　何がしの村まで行かぬか。」

と訊ねると、その途中まで歸るのだといふ。

「君、その荷馬車に乘せてもらへないか。」と頼むと、

「あゝ、乘つて行きなはれ。」といひながら、彼はずん〳〵行く。

それは、何か貨物を運搬した歸りと思はれて粗雜な板箱の中は汚くよごれてゐる。

私はそれを見て心を決しかねて、尙ほ後からついてゆくと、彼は暫く行くと、馬を停めて置いて、道傍に有り合はした藁塚から藁を拔き取つて來て、それを箱の中に敷いて、

「さあ、乘んなはれ。」といふ。私は、心に、若い馬子の深切を謝したものの、さすがにその荷車に乘り兼ねた。自分は、何の因果であの女を諦められぬのであらう、と感慨に迫りながら行く手の方を見ると、灰色空の下に深い山又山が重疊してゐる氣勢である。

「いや、もう、止さうか。」と、若い馬子にいつて、私は到頭斷念して引返した。そして又木津川の長い板橋を渡つてくると、雪を含んだ冷たい川風が頰を斬るやうに水の面から吹いて來た。

霜凍る宵

一

それから又懊惱と失望とに毎日鬱ぎ込みながら爲すこともなく日を過してゐたが、もし京都の地にもう女がゐないとすれば、去年の春以來歸らぬ東京に一度歸つてみようかなどと思ひながら、それもならず日を送る内一月の中旬を過ぎたある日のことであつた。陰氣に曇つた冷たい空つ風の吹いてゐる日の午前、家に許り閉籠つてゐると氣が鬱いで堪へられないので、又外に出て何の當てもなく街を歩いてゐたが、やつぱり、例の女のもとゐたあたりに何となく心が惹かれるのでそちらへ廻つて行つて、横町を歩いてゐると、向うの建仁寺の裏門の處を、母親が、こんな寒い朝早くから何處へ行つたのか深い襟巻をして此方へ歩いて來るのが、遠くから眼についた。私はそれを一目見ると、心にうなづいて、

「この機會を何時から待つてゐたか知れぬ。」と、心の中に雀躍りしながら、その廻り角の處で何方に行くであらうかと、ほかに人通りのない寂しい裏町なので此方の板

塀の陰にそつと身を忍ばせて、待つてゐると、母親はそれとは氣が付かぬらしく、その廻り角の處に來て、左に折れた。……そこを左に折れると、先々月の末に探しあてて行つた例の路地裏の方へ行く道順である。私は、母親をやり過して置いて、七八間も後れながら忍び〳〵蹤いてゆくと、幾つもある廻り角を曲つて段々この間の家の方へ近づいて行く。そして、到頭、やつぱりその路地を入つていつた。母親の姿が路地の曲り角を廻つて見えなくなると、私は小走りに急いで後を追うてゆくと、母親は、やつぱり過日の三軒竝んだ中央の家の潜戶を開けて入つてゆくところであつたそして入つたあとをぱつたりと閉めてしまつた。

私はこちらの路地の入口の處に佇立まつて「ははあ。」とばかりその樣子を見ながら心の中で、「今まで言つてゐたことは何も彼も皆噓ばかりであつた。やつぱり女もこの家にゐるにちがひない。」と獨りでうなづいて、

もう斯うして居處を突留めた以上は大丈夫である。これから一と思ひに蹈込んでやらうか。」と思つたが、いや〳〵長い間の氣の縺れに今は精神が疲勞し切つてゐる。今すぐ、あの戶を叩いては、又仕損じることがあつてはいけない。あの家の中に女が潛

んでゐると知つたら安心である。敢て急ぐには及ばぬ。ゆつくり心を落着けて、精神の疲勞を囘復した上で話に取り掛つても遲しとせぬ。さう思案をして、そのまゝ靜と路地を引返して表の通りの方へ出て來た。そして早く一應宿へ歸つて、積日の辛苦を寛げようと思つて電車の方に歩いてくると、去年の十二月の初めから、空漠とした女の居處を探す爲にひよつとしたら懊惱の極、喪失して病死しはせぬだらうかと自分で思つてゐた、その居處を突留めた悦びやら悲しみやらが一緒に込み上げて來て、熱い玉のやうな涙がはら〳〵と兩頰に流れ落ちた。そして神經が無暗に昻ぶつて、胸の動悸が早鐘を撞くやうにひゞく。寒い外氣に觸れて頰のまはりに乾き付く涙を、道を行く人に憚るやうにしてそつと拭きながら、私は心の中で、

『やつぱり初めから彼處にゐたのだ。それを、あの母親の云ふことにうま〳〵騙されて、ありもせぬ遠くの方ばかし探してゐた。今の處に變つて來る前先の時もあの路地にはもうゐないといふから、さうかと思つてゐると、やつぱり彼處にゐたのであつた今度も亦さうであつた。一度ならず二度までも輕々と、あの母親のいふことを眞實に受けて、この貴重な腦神經を、どんな無駄に浪費したか知れぬ』と、口惜しさと憤

りとで頭がかつとなるやうである。
それから二三日の間はつとめて心をほかの事に外らして氣を慰め、神經を休めてから今度は餘程の强い決心をして又その路地に入つて行つた。そして入口の潛戶の處に立つて引張つてみたが、やつぱり晝間でも中から錠を下ろしてゐると思はれて開かない。
「ご免なさい。」
と、聲を掛けてみた。すると、入口の脇の櫺子窓をそつと開けて、母親が顏を出した。
「おかあはん、やつぱり此處にゐるんぢやありませんか。」と、私は、何處までも好きな女の母親に物をいふやうに優しい調子でいふと、母親は、それでもまだ剛情を張つて、
「こゝは私の家と違ひます。前から、さういうてるやおへんか。」と、飽くまでも白ばくれようとする。
私も心で勃然としながら、

「いや、もう、そんなに隱さない方が可いです。あなた方は初めから此處に居たのは分つてゐるんだ。お園さんはどうしてゐます？」

さういふと、母親もさすがに包みかねて、聲を柔げながら、

「今まだ病氣が本當にようありまへんさかい。ようなつたら、あんたはんにも會はせますいうてるやおへんか、どうぞ今度また會うてやつとくれやす。」

と調子のいゝことをいふ。

「そこに居るんなら、今會つたつていゝぢやありませんか。」

「今一寸留守どすさかい。又加減がようなつたら、私の方から、あんたはんにお知らせします。もう暫くの間待つてとくれやす。」

窓の內と外とで立ちながら、そんな話をしたが、母親は入口を開けて私を家の中へ入れようとせぬ。そして終には、呆れて應答も出來ないやうな野卑な口をきいて毒づくのである。そも〳〵女に逢ひ初めた時分、それからつい去年の五月の頃、女の家に逗留してゐた時分に見て思つてゐた母親とは、まるで打つて變つた惡婆らしい本性を露出して來た。

それにつけても、まだ女の家にゐた頃、女が、私と二人ばかりの時、「内のお母はん、一寸慾の深い人どすさかい。」と一と口いつたことのあつたのを、ふと思ひ起した。それを質樸な婆さんと見たのが此方の誤りであつたか……そんなことを思つた。

私の心の中を正直に思つてみれば、もう、女の顏を見たいが一心である。ともかくも一度どうかして本人の顏が見たい。振返つてみると、母親にこそ近頃度々會つてゐるが、本人の顏を見たのは、もう、去年の七月の初め彼女の處から山の方に立つていつた、あの時見たきり七八ケ月といふもの見ないのである。流行感冒から精神に異狀を來たして長い間患つてゐたといふから、どんな容姿をしてゐるか、さぞ病み細つてゐるであらう。どうかして一度顏を見たいものである。そして出來ることなら母親に內證で、此方の胸をそつと向うに通ずる術もないものかと、いろ〳〵に心を碎いたが、好い方法も考へつかぬ。毎日そこの路地口にいつて立つてゐたなら、風呂に行く時にでも會はれはせぬかと思つてみたが、一月から二月にかけて寒い最中のこととて、あまり無分別なことをして病氣にでもなつたら、この上に尙ほ詰らぬ目に會はね

ばならぬと思ふと、そんなことも出來ぬ。そして時々路地に入つていつて入口の處に立つて家の中の樣子に耳を澄ましてみるが、人がゐるのか、ゐないのか、ことりといふ音もせねば話聲も洩れぬ。そつと音のせぬやうに潛戸（くゞり）を引張つてみても、相變らず閉め切つてゐて動かない。入口の左手が一間の欞子窓になつてゐて、自由に手の入るだけの荒い出格子の奥に硝子戸が立つてゐて、下の方だけ擦り硝子をはめてある。そこから、手を挿入れて試みにそつとその硝子戸を押してみると五六寸何の事もなくずうつと開きかけたが、ふつとそれから先戸が動かなくなつたのが、どうやら誰か内側からそれを押へてゐるらしく思はれたので、此度（こんど）は二枚立つてゐる硝子戸の左手の方を反對に右手に引かうとすると、それも亦押へたらしく開かない。どうしようかと思つて一寸考へたが、一旦押す手を止めて置いて、その出窓が一尺ほどの幅になつてゐるので、此度は隣りの家の入口の方に廻つて、その横手の方から、一と押しに力を入れて、ぐつと押すと、此方の力が勝つて、硝子戸は一尺ほどすつと開いた。そして内側をふつと見ると、向うの窓の下の處に、嬉しや、彼女が纎細（かぼそ）い手でまだ硝子戸に指を押しあてたまゝ私の方を見て、默つてにつこりとしてゐる。その顏は病人らしく蒼

白いが、思つたよりも肥えて頬などが圓々としてゐる。近いころ髪を洗つたと思はれて、ばさ〳〵した髪を束ねて櫛卷にしてゐる。小綺麗なメリンスの掛蒲團をかけて置炬燵にあたりながら氣慰みに絹刺しをしてゐた處と見えて、右手にそれを持つてゐる。私は窓の横から窺きながら、

「お園さん。」と低い調子で深い心の籠つた聲をかけた。

と、そこへ、その物音を聽き付けて、次の間から母親が襖をあけて出て來て、

「なんで、そない端の處に出てゐるのや、早うこつちお入りんか。そな處にゐるからや。」と、ひそ〳〵小言をいひながら、力なげに起ち上つた彼女の背後に手を添へて奥の間の方へ押し隱してしまつた。そして硝子戸を今度はぴつしやり閉めてしまつた。折角好い鹽梅に顔を見ることが出來たのに、一と口も口を利く間もなかつた。

けれども、長い間戀ひ焦がれて、たつた一目でもいゝから見たい〳〵と思つてゐた女の顔を見ることができたので、ちやうど、長い間冬威にうら枯れてゐた灰色の草原に綠の春草が芽ぐんだやうに一點の潤ひが私の胸に蘇つてきた。病後の血色こそ好くないが、腫んだやうに圓々と肥つて、につと此方を見て笑つてゐた容姿には、決して

心から私といふものを厭うてはゐないらしい、毒氣のないところが表れてゐた。あゝして小綺麗なメレンス友禪の掛蒲團の置炬燵にあたりながら絽刺しをしてゐた容姿が、明瞭と眼の底に膠着いて、いつまでも離れない。それにしても、あれは、何人が、あゝさして置くのであらう？　よもや背後に誰も付いてゐないで、氣樂さうにあしてゐられる筈がない。

　そんなことを思ふと、身を煎られるやうな惱ましさに胸の動悸が躍つて、殆ど居ても起つてもゐられないほど女のことが思はれる。

　そして、もう惡性の流行感冒に罹つても構はない、もし、そんな事にでもなつたら、却つて身を棄て鉢に思ひ切つたことが出來る、生半に身を厭へばこそ心が後れるのだ、誰か男が背後に付いてゐるに違ひないとすれば大抵夜の八時九時時分には女の家に來てゐるであらうと、その頃を見計らつて、殆ど毎夜のやうに上京の方から遠い道を電車に乘つて出て來ては路地の中に忍んで、女の櫺子窓の下にそつと立つてゐた。そして、家の中から男の話聲が洩れはせぬか、その男の聲が聽きたい、どんなことを話してゐるであらう？　と冷たい暗闇の夜氣の中に暫く凝乎と佇んでゐても、家の中

からはことりの音もせぬ。そつと例の硝子戸に觸つてみるけれど、重い硝子戸は容易に動かない。誰も居ない留守なのかと思つてゐると、居るにはゐると思はれて、疊の上を人の歩く足音がする。それが母親であつたら勝手が悪いと思つたが、試みに、誰とも分らないほどに低い聲で、

「今晩は〳〵。……ご免なさい〳〵。」

と聲をかけてみると、すつと内から硝子戸が一尺ばかり開いて、そつと白い顏を出したのは、中の電燈を後に背負つて、暗がりではあるが、たしかに彼女である。そして、眼で外の闇の中を探るやうにしてゐる。

「お園さん。」

と、私は思はず櫺子窓に寄り添ふやうにして力の籠つた低聲で呼び掛けながら手に物を云はせて、おいで〳〵をして見せると、彼女は、聲の正體が分つたので、そのまま默つて、急いで硝子戸を閉めてしまつた。どうすることも出來ない私はちやうど猿が樹から落ちたやうな心持になつた。向うで幾らかその氣があるなら、何とか合圖くらゐのことはしてくれさうなものであるのに、少しもそんな樣子のなかつたのは、す

つかり心が離れてしまつてゐるからである。さう思ふともう心に勢ひが脱けて、その上續けて寒い闇の中に佇んでゐる力がなくなり、落膽と悲憤とに呼吸も絶え〴〵になりさうな胸をそつと搔き抱きながら空しく引返して戻つてくるのであつた。

　それ以來硝子戸を固く釘付けにでもしたと思はれて、夜の闇にまぎれて幾ら押してみても引いてみても開かなくなつてしまつた。相變らず出掛けていつて窓の下に佇んで家の中の物音に身體中の神經を集めて耳を澄ましても母子の者の話す聲さへせぬ。何とか家の中を窺いて見る方法はないかと思つて、硝子戸を仰いで見ると、下の方は磨き硝子になつてゐるが上の方は普通の硝子になつてゐるので、路地の中に闇にまぎれて、人の通るのを恐る〳〵そこらに足を踏み掛けて竊と櫺子格子に取り付いて身を伸び上つて内を窺くと、表の四疊半と中の茶の間と兩用の小さい電燈を茶の間の方に引張つていつて、その下の長火鉢によりかゝりながら彼女が獨りきりでいつかの縫刺しをしてゐるのが見える。そして身體が三分の一ばかり手前の襖に隱れてゐるので、その陰に母親もゐるのか分らない。とにかく靜かで、たゞ縫刺しの針を運ぶ指先が動いてゐるだけである。こちらが窓に伸び上つてゐる物音でも聞えたら、ついと振向き

さうであるが、それも聞えぬのか、まるで石像のやうに靜かにしてゐる。ついでに內の中の樣子を見ると、この間は氣がつかなかつたが、すぐ取付きの表の間には壁の隅に二枚折りの銀屛風を立て、上り口に向いた處には又金地の衝立などを置いてある。『あんな、いろんな家具などを買込んでゐる。』と、それに何となく嫉妬を感じながら、心急き急き倚よく見ると、內は三間と思はれて茶の間のも一つ奥が一枚襖を開いたところから、そちらは明るく見えてゐる。そしてそこに寢床を敷いてあるのが半分程見えてゐる。私は神經が凝結したやうになつて、そちらをなほじつと見ると、木賊色の木綿ではあるが、ふか〳〵と綿の入つた敷蒲團を二三枚も重ねて敷き、そのうへに襟の處に眞白い布を當てた同じ色の厚い掛蒲團を二枚重ねて、それをまん中からはね返して、もう寢さへすればよいやうにしてある。そちらの座敷が明るいのでよく見える。私はもう身體中の血が沸き返るやうである。

『旦那が來てゐるだらうか?』と、小首を傾げてみた。

旦那らしい者があると思つて見るさへ、何とも云へない不快な氣持がするが、いかに慾目でそんなものは無いと思はうとしても家の中の樣子では、それがあることは確

かである。果して自分の他にまだそんな者があつて、今その世話でかうなつてゐるとすれば、どう、自分の身びいきといふ立場を離れて考へても不埒である。たとひ賣女にしても、容易にそんな事が出來る譯のものではない。しかし、それは彼女の自分の意思でさうなつたものか？ 本人の心底をよく訊いてみなければならぬが、二三日前の夜一寸顏を覗けた時、素氣なく硝子戸を閉めたことと云ひ、そののちかうして硝子戸を開かなくしたことなどを思ひ合しても女には私の事にぷつつり氣がなくなつてしまつたのではなからうか？ 何とかして此方の懊惱してゐる胸の中を立ち割つたやうにして見せたいものだ。母親の言つた詐りごとを眞に受けて、あの十二月の初めの寒い日に、山村の在所といふ在所を、一日重い土産物などを兩手にさげて探し廻つたこと、それから去年の暮の、しかも二十九日に押迫つて、それも母親のいふ通りを信じて、わざ／＼汽車に乘つて、南山城の山の中に入つて行かうとしたこと、又京都中を探し歩いたこと、そんな心勞を數へ立てゝいふ段になつたら幾らいつても盡きない。……女は硝子戸一枚隔てたすぐ眼の前にゐながら、この心の中を通ずる術もない。

私は櫺子格子からやつと手を放して地におり立ちながら、『旦那が來てゐるので、あ

あして寢床までちやんと用意してあるのだらうか。それとも自分の寢床かしらん？』
　そんな者が來てゐるなら、あゝして自分獨り默つて絽刺しをさしてゐる筈もない。すると、あれは、これから自分の寢る床であらうか。どうかして旦那が來てゐる處を突留めたい。それが、どんな人間であつても自分はそれに遠慮して手を引くのではない。自分より以上深い關係の人間がほかにあらうとは思へない。……
　さうして心の中の瞋恚の焰に燃えたり、又堪へ難い失望のどん底に沈んでしまつたやうな心持になつたりしながらも又ふと思ひ返してみると、女は長い間の苦界から今漸く脫け出でて、あゝして靜かに落着からうとしてゐるところである。それを無慙に突き崩さうとするのはみじめのやうでもある。さうかと思ふと、又自分と云ふ者を振返つてみるとどうであらう。この眞冬の夜半に寒風に身を曝して女の家の窓の下に佇みながら家へ入つて行くこともならぬ。しかも此方は彼女の爲に、長い間殆ど自分の凡ての欲求を犧牲にして出來る限りのことを仕盡して來てゐるのではないか。あゝして溫々とした寢床などをしてゐるのに、自分はどうかといへば、これから宿に歸つて冷たい夜具の中に入つて寂しく寢なければならぬのである。すると、又どう考へても道

理に合はない母子の勝手至極を憤らずには居られない。

「よし。どうあつても、これはこのまゝには棄てゝ置かないぞ。」と思つたが、あまりに心が疲勞してゐるので、その晩はそのまゝ悄然として宿に戻つた。

二

でも、どうかして女だけに此方の心を通じたい。亂暴なことをして、女の心が、もし、自分から離れてゐなかつたとしたならば、その爲に却つて、自分を遠ざかつてゆくやうなことがあつてはならぬと思ひ、胸はいろんな思ひで一杯になりながらやつぱり思ひ切つたことを爲得ないでゐたが、もうさうしてゐるのに耐らなくなつて、二三日過ぎた晩同じやうに窓の下に立つてみたが、相變らず靜寂としてゐる。男が來てゐるかゐないか分らないが、來てゐれば、かうすれば利くであらう。その女には、とんな者が付いてゐるぞと思はせようと思つて、潜戸の處に寄つて、臆せず、二つ三つ、「今晩は！」と高い聲を掛けた。

すると、
「どなたはんどす？」といひながら、母親が硝子戸を開けて顔を出した。
「今晩は。私です。」
「あゝあんたはんどすか。あんたはんには、もう用はない。」と、いつて、そのまゝぴしやりと硝子戸を閉めてしまつた。
さうなると、もう耐へにこらへぬいてゐる憤怒がかつと込み上げて抑へることが出來ない。私は、わざと夜遲く近所合壁に聞えるやうに、潛戸をどん〳〵打ち叩いて、
「今晩は〳〵〳〵。」とやけに呼んだ。
すると、家の中でも默つてゐるわけにゆかず母親は又硝子戸を開けて顔を出して、少し先よりも低い聲で、
「何か用どすか。」といふ。
「何か用どすかもないもんだ。用があるから呼んでゐるのです。話があるからこゝを開けて下さい。」
「開けられまへん。こゝは私の家と違ひます。」

「あゝ、もう、そんな何時までも白ばくれたことをいひなさんな。幾ら口から出まかせをいつて、人を騙さうとしても、此方が正直なもんだから、一應は騙されてゐるが、騙されたと知つただけ餘計腹が立つ。私を一體何と思つてゐるんだ。お前さん達に、いつまでもいゝやうにされてゐる子供ぢやないんだぞ。東京でもう散々ぱら甞を嘗めて來てゐる私だ。今迄こゝの女に焦がれてゐればこそ馬鹿にされ放題になつてゐたが、から見えても丹波や丹後の山の中から出て來た人間とは人が違ふんだ。」私は、自分ながら少し下品だと思つたが眞暗な夜のことではあり、人の往來もない、深く入り込んだ路地の中とて、母子に聽かすよりも、もし男でも來てゐたら、それに聽かすつもりで、そんなことを癇高い調子でいひ續けた。そして、もし男が來合せてゐるならそこへ顏を出せば丁度いゝと思つた。

するど、母親は、いつもに似ず私の劍幕が凄じいのと、近所隣りへ氣を兼ねるので、いつもの不貞腐れをいひ得ないで、私をそつと宥めるやうに、

「まあ、あんたはんもそんな大きい聲をせんと置いてくれやす。あんたはんも身分のある方やおへんか。あんたはんの心は私にもよう解つてますよつて、あの娘が病氣が

良うなつたら又會はせます。」

「病氣が良くなつたら會はせますつて、もう良くなつてるぢやありませんか。」私も少し聲を低くした。「私が、どんなに、あなた方二人の身の事を長い間思つて上げてゐるか、——決して恩に被せるのではないが——その事を少し思つてみたなら、假令今までのやうな商賣をしてゐた者でも、私に嘘が吐かれる筈がない。……いや山科のお百姓の家に出養生をさしてゐるの、いや南山城の親類が引取つたのといつて、みんな眞赤な嘘ぞやありませんか。あなたはよく金神樣を信心してゐるが、何を信心してゐるのです。」私の言葉は段々優しい怨み言になつて來た。

母親がそれについて何かいはうとするのを、おつ被せるやうにして言ひ捲つた。

「えゝ、よう解つてますよつて、今夜はもう遲うおすさかい、又出直して來とおくれやす。あんたはんの氣の濟むやうにお話しますよつて。」

「あゝ、さうですか。それぢや又近いうちに來ますから、此度また、もう話すことはないなどと云つては承知しませんよ。」さういつて、私はおとなしく振返つて歸らうとすると、母親は、さういつた口の下から、すぐ、

「勝手にせい。此度來たら寄せつけへん。」と、棄てぜりふを、私の背後に浴びせかけながら、ぴしやりと硝子戸を閉めた。
私は、『そら又、あのとほりの惡たれ婆だから始末にいけない』と心の中で慨歎しながら、後戻りをして、も一度戸を叩いて、近所へ恥しい思ひをさしてやらうかと思つたが、いつものとほり失望と悲憤との餘り息切れがするまで精神が消耗してゐるので、そつと胸の動悸を抑へるやうにしてそのまゝ路地を出て來た。
しかし、もう、さうなると、今までのやうに、女の氣を測りかねて、差控へてばかりゐられなくなつた。何とかして家の中へ這入り込んでゆく方法はないものかと樣々に心を碎きながら、好い機の來るのを待つてゐた。すると、いつもの通り夜九時頃になつて櫺子窓の下に立つて聞くと、めづらしい人が來てゐると思はれて男の話聲がする。はつと、私は胸を躍らしながら、じつと耳を澄ますと、來てゐるのは一人だけでないと思はれて女の話聲も交つてゐる。どんなことを話すかとなほ聞いてゐると、
「ほんならもう歸りませうか。」と四五十ばかりの女の聲がして、
「あゝ歸りませう。」と、それに應ずる男の聲がする。その晩は家の中も明るい。それ

で急いで又そつと格子に取り付いて伸び上がつて、ちらと家の內を窺ふと、一番奥のたしか六疊の座敷に、二三人の客が丁度今立ち上がつて歸らうとするところである。私は急いで格子を滑り下りて、すぐ左手の隣りの家ではまだ潛戶を閉めずにあつたので、それを幸ひと、そこの入口に身を忍ばせて上り框に腰を掛けながら、女の家から人の出てゆくのを遣り過してゐると、「えらい御馳走さんどした。」と口々に禮をいつて、何か彼か陽氣な調子で話し乍ら、ぞろ〳〵出て來た。こちらは堅くなつて息を詰め、兩方の家の中から幽かに洩れてくる灯の明りに、路地の敷石をから〳〵踏み鳴らしながら歸つてゆく人影を見張つてゐると、暗がりでよく分らぬが、女はお茶屋のおかみらしく、中央に行くのが男で、脊が高い。はてな、旦那ならばかうして一緒に歸つてゆく筈もなからうと思つてゐると、一番後の女と竝んで、何か密々と話しながらゆくのは母親である。私は、

「あゝ、母親のやつめ、出てゆく。そこの路次の出口まで客を送り出すのであらう。きつと、すぐ歸つてくるので、潛戶を開けたまゝにしてゐるかも知れぬ。」

と早速氣が付いて、それ等が暗がりに路次の角を曲つたのを見濟まして置いて、入

口の處に來てみると、果して潛戸を開け放しにしてゐる。
私は、巧く仕て遣つたりと心にうなづきながら、つゝと內へ入りながら、中から潛戸を閉めて置いて狹い通り庭をずつと奧へ進むと、茶の間と表の間との境になつてゐる薄暗い中戸の處に、そこまで客を送り出したものと見えて女が一人で立つてゐる。
そして出し拔けに私が入つて來たのを見て、
「あゝ！」と愕えたやうに中聲を發して、そのまゝそこに立ち竦んだ。
私は、いゝ氣味だといふやうに强ひて笑ひながら、
「お園さん、一遍あんたに會ひたいと思つてゐたのだ。」と、つとめて優しくいひつゝ私はそのまゝ茶の間へ上がつて、火鉢の手前にどつかと坐つてしまつた。
女はそこらを片付けてゐたらしかつたが、もう、おづ〳〵しながら爲方なく自分も上にあがつて、向うの方に膝を突きながら、
「あんたはんが今此處へ來ておくれやしたんでは、私、どない云うてえゝかわかりまへん。」と悄然としてふるへ聲にいふ。その眼は何ともいへない悲痛な色をして私を見てゐる。

私は、氣味がいゝやら、可愛いやらである。

そこへ、がら〳〵と表の潛戸の開く音がして、母親が戻つて來た。

三

私は、入つて來た時、よつぽど、あの潛戸の猿を落して、母親に閉め出しを食はしてやらうかと思つたが、それも、あんまり意地が惡いやうで、それまでにはし得なかつた。それといふのも、さうまでになつても、私の心の内は、やつぱり何とかして、母子の心が、自分の方へ向いてくるやうに優しく仕向けたいからであつた。

母親は通り庭から中の茶の間の前に入つてくると思ひがけなく、火鉢の向うに私が來て坐つてゐるのを見ると吃驚して忽ち狂氣のやうになつて怒り出した。

「あんたはん、何でこゝの家へ入つておいでやした。此處は私の家とちがひます。」といひながら上り框をあがつて、娘に向つて、

「お前もどうしてるのや、よう氣いお付けんか。あんたが入れたんやろ。」と、小言を

いふ。娘は靜とそこに坐つたまゝ、
「わたし、そんなことをしいしまへん。この方が自分で入つておいでやした。」と尋常な調子でいつてゐる。
私は凝乎と雨腕を組んで、その場の光景を見ながら、母親から何といはれても、太太しく默り込んで、身動きもせずに坐つてゐた。すると、母親はさすがに手出しはし得なかつたが、今にも打ちかゝつて來さうな氣勢で、まるで病犬が吠えつくやうな狀態で、すこし離れた處から、がみがみいつてゐる。
「あんたはん、何の權利があつて此處の家へ默つて入つておいでやした。こゝの家は私の家と違ひまつせ。」といひつゝ、肱を突張つて段々私の傍に横から擦寄つて來て、「默つて餘所の家へ入り込んで來て、盜人……盜人！」と、隣り合壁に聞えるやうな大きな聲を出して我鳴りつゞけた。
「警察へ往てさう云うてくる。警察、警察。さあ警察へうせい。警察へ連れて往く」と母親は一人で端たなくいきり立つたが、私が微塵も騷がうとせぬので、どう手出しの爲様もない。本人の娘はむすめで、これもどうしていゝか當惑したまゝ、そこに坐

つて口も利かずに母親の騒ぐのをたゞ傍見してゐるばかりである。私は小氣味のよさうに、飽くまでも泰然としてゐた。すると母親は、急を呼ぶやうに聲を揚げて、
「兄さん！　にいさん！」と、左手の隣家の主人を呼んだ。その隣家は、去年の十一月の末、はじめてその路地の中へ女の家を探ねて入つていつた時から折々顏を見て口をきゝ合つてゐたのであつたが、先達て中から又度々私が出掛けていつて、母親と大きな聲でいひ諍つたりするのを見かねて、もう七十餘りにもなる主人の母親といふのが雙方の仲に入つて、ちよつと口を利きかけてゐたのであつた。旅館や貸席などの多いその一郭を華客先にして、そこの家では、小綺麗な仕出し料理を營んでゐたが、兄さんと呼ばれた主人はまだ三十五六の脊の高い男で、その主人とは私はまだ顏を見ただけで一度も口を利いてゐなかつた。母親がさういつて大きな聲で呼んだので、越前屋といふ仕出し屋の若い主人は印の入つた襟のかゝつた厚子の鯉口を着て三尺を下の方で前結びにしたまゝのつそりと入つて來た。

　さうして吟々いつてゐる母親と私とのまん中に突立つたまゝ、「まあ〳〵、どちらも靜かにおしやす。」と、兩方の掌で抑へる形をして、

「丁度好いとこどした。此間から私も見て知らん顔はしてゐましたけど、一遍お話を聽いてみたいと思うてたのどす。」といつて、そこに腰を下ろすと、母親は隣りの主人が入つてきたので氣が強くなつて、一層がみ〳〵云ひ募つた。主人はそれを宥めて、
「お母はん。まあさういはんと、話はもつと靜かにしてゝも解りますよつて。」といつて、此度は私の方に向ひ、
「兄さん、えらい濟んまへんが一寸あんたはん私のとこへ往とつておくれやす。……いえ、私も及ばぬながらかうして仲に入りましたからにはこのまゝには致しまへんよつて。」と、いふ。
けれども私は、今までもう幾度か、いろんな人間が仲に入つたにも拘らず、其等は皆母親に味方して、邪魔にこそなれ、此方の要求するとほり、一度だつて、肝腎の本人に差向ひに會はしてくれて納得のゆく話をさする取計らひをしてくれようとはしなかつた、それを思うて、私は幾度か腹の內で男泣きに泣いて、人の無情をどんなに憤つたか知れなかつた。これまでは、自分の熱愛する女がさうせよといふなら、もう一生京都に住んで京の土になつても厭ひはせぬとまで懐かしく思つてゐたその京都を、

それ以來私はいかに憎惡して呪つたであらう。出來ることなら薄情な京都の人間の住んでゐるこの土地を人ぐるみ焦土となるまで燒き盡してやりたいとまで思つてゐるのである。他人は悉く無情である、自分のこの切なる心を到底察してくれない。そんな他人に同情してもらつたり、憫んでもらつたりしようとはかけても思はぬ。自分の大切な大切な魂の問題である。その爲によし患つて死んだつて、叉恥づべき名が世間に立たうとも自分ひとりの事である。何人にもどうしてくれといひたくない。それ故にこそ、實に一口に云はうとて云へないくらゐ、樣々に胸の碎ける思ひをして、やつと今晩といふ今晩、またと得られない機會を捉へて、かうして女の家(うち)に入り込んだのである。今までの母親の仕打からいつたならば、この機會を逸したが最後二度と再びこんな好い都合なことはないのである。私は隣家(となり)の主人に向つていつた。

「有難うございますが、今までちよい〳〵御覽のとほりの次第で大抵私の恥しい事情はお祭しであらうと思ひますが、今晩はどうあつても、この本人の意向を、私自身で訊きたいと思つてゐるのですから。」

と、私は、傍で先刻(さつき)から口の絶え間もなく狂犬のやうに猛つてゐる母親には脇目も

くれず、向うに靜かにして坐つてゐる女を指しながら堅い決意を表はした。さうして久し振りに見れば見るほど女が好くつて堪らない。

すると主人は、

「そやから、このまゝにしまへんというてゐます。姉さんには私が必ず後で逢はせますよつて、一寸私の家(うち)へ往とつておくれやす。」と萬事飲込んだやうにいふ。

それで私も物解りよく素直に、

「それでは貴方におまかせして置きます。」と、きつとした調子でいつて、起ち上がりかけると、彼女はどう思案したものか、靜かに坐つたまゝ、やつと口を切つて、

「あんたはん、ほんなら、これから松井さんへ往て話しとくれやす。」と、きつぱりした調子でいふ。

それで、私は一旦起ちかけた腰をまた下ろしながら、

「うむ、それもよからう。松井さんへ往けといふなら、彼處へ往つて、あそこの主人に話を聽いてもらふのもわるくはないが、あんたも私と一緒に往くか。」

さういつて訊くと、女はそれきり沈默つてしまつて返事をしない。

「お前が一緒に往くなら私も往く。さあ、どうする。」
傍にゐる越前屋の主人は、その時口を入れて、
「それがよろしいやろ。ほんならさうおしやす。私も何や、途中から入つて、前の委しいことは一寸も知らんのどすさかい。お隣りにゐて、默つて見てもゐられまへんよつて、何とかお話をしてみようと思うたのどすけど、松井さんやつたら、よう、今までの事も知つてはりますやろから。」
「わたし後で往きますよつて、あんたはん先往とくれやす。」と、やつぱり落着いた調子でいふ。
私は頭振りをふつて、
「それぢやいけない。私を先に出し遣つて置いて、こゝから又閉め出さうとするのだらう。今晩はもうその手は喰はないんだから。」
「そんなこと爲いしまへん。あんたはん一足先いてとくれやす。わたし一寸遲れて往きます。」
「あゝさうか、たしかに來るね？」

「えゝ往きます。」
隣家の主人も、長い間の入譯を知つてゐる、以前の主人の處に往つて話を聽いてもらふのが一等よからうと云つてすゝめるので、私はその氣になつて起つて庭に下りようとすると、先刻からまるで狂氣になつて、何か彼かひとり語をくど〳〵と繰返して饒舌りつゞけてゐた母親は、私が立つて上り框から庭に下りようとするのを見て、
「貴様ひとりで、勝手にさつ〳〵とうせえ。内の娘はそんな處へ出て往く用はない。」
といつて、又いつもの惡態を吐く。
それを聞くと、私は、とても箸にも棒にもかゝらぬ沒分曉漢だとは、承知してゐるので、もう、なるべく母親とは、何をいはれても、口を利かぬ、對手にもせぬやうにして居らうと堪へてゐても、やつぱり堪へきれなくなつて、私は、上り框に下りかけたまゝ、
「何をいふ。」と、そつちを振返つて、「きつと、そんなことだらうと思つてゐるのだ。よし、そんならもう可い。もうどんな事があつても此處を立ち退かないのだから、何時までも此處に居据つてゐませう。……お隣りの親方、御免なさいよ」と、いつて、

私は又もとの座に戻つて坐つた。
　すると越前屋の親方は、
「まあ、ほんなら、兄さん一寸私の處へ往てとくれやす。私が引受けて一應お話をしてみますよつて。お母はんも、もう、ちよつと靜かにしてとくれやす。隣家が近うおすよつて。その事は私が、後でよう聽かしてもらひます。」
　と、いつて、雙方を宥めようとする。
　それで私は又物解りのよい子供のやうに素直に、隣家の主人のいふことを聽いて、
「それでは一寸お宅へ往つてお邪魔をしてゐますから、どうぞ宜しく賴みます。」といつて出てゆかうとしながら、じつと女の方を倫ほよく見ると、平常から大きい美しい眼は、今にも、ちよつと物でも觸れば、すぐ泣き出しさうに、一層大きくこちらを見張つて、露が一ぱい溜つてゐる。私はその眼に心を殘しながら、合壁の隣家へ入つていつた。

四

そこの家も、女の家と同じ造りで三間の家であつたが、もう此間から、その事で、ちよい〳〵顏を見合はして、口も利いてゐる七十餘の老婆は酒が好きと思はれて中の茶の間の火鉢の前に坐つて、手酌でちびり〳〵酒を飲んでゐた。もう大分上機嫌になつてゐたが、見るから一癖も二た癖もありさうな、癇癪の強いぎよろりとした大きな出眼の、額から顳顬のあたりが太い筋や皺で拘攣つたやうになつて、氣むづかしいのは、云はずと知れてゐる。

そこには、その老婆のほかに主人の若い女房がゐて庭に立ち働いてゐたり、主人の妹らしい三十くらゐと二十餘の女が來合はしてゐたりして、廣くもない座に大勢の人間がゐるのが、私には自分の年配を考へて、面伏せであつたり遠慮であつたりした。そして、近づきのない京都三界に來て、さうした譯でそんな家の厄介になつたりするのが何ともいへず鬱屈であつたが、それも思ひつめた女ゆゑと諦めてゐた。私は悄然

としながら、案内せられるまゝにそちらに通ると、座蒲團を持つて來てすゝめたり、手焙りに火を取り分けて出したりしながら、

「どうぞそないに遠慮せんと、寒うおすよつて、ずつと大きな火鉢の方に寄つとおくれやす。」とみんなしていつてくれる。

これも何だか半分氣狂ひではないかと思はれさうなそこの婆さんは醉狂の癖があると思はれて、ひどく興奮してしまつて、此方から辭を卑うして挨拶をしてもそれに應答しようともせず、變に、自分ほど偉い者はないといつた、頭の高い調子で、いつまでもちびり〳〵飮んでゐる。いつか聞くところによると、婆さんは、西鄕隆盛などが維新の志士として東三本樹あたりの妓樓で盛んに遊んでゐた頃藝妓に出てゐて、隆盛が碁盤の上に立たして、片手でぐつと差上げたことなどあつた。婆さんはそれを一つばなしに今でも折々人に話して聽かすのであつた。私は、何の事はない、ちやうど、毛剃九右衞門の前に引出された小町屋宗七といつたやうな恰好で、その婆さんの前に手を突いて、

「いろ〳〵飛んだ御厄介をかけます。全體あなたに昨日一應話をおねがひして置いた

のですから、その返事を待つてゐればよかつたのですが、今晩自分が勝手に隣の家へ入り込んで來て、こんなことになつたものですから。」

何によらず對手の仕向けが少し氣に入らないと、すぐ皮肉に横へ外れて出ようとする風の老婆と見たので、昨日の朝も、向うから、及ばずながら、仲に入つて話してみませうといつてくれたのを幸ひに一寸賴んで置いたゆきがかりがあつたから、さういつて一言いひ譯をすると、婆さんはぎよつと顏中を顰めたやうに意地の惡さうな眼をむいて、

「いゝや、こんな事は年寄りの出るところやおへん。」と一國さうに、わざと仰山に頭をふつたかと思ふと、

「內の伜は年はまだ若うおすけどな、こんなことは私がよう仕込んでますよつて、お爲にならんやうには取計らひまへんやろ。」と、何處までも偉い者のやうにいふ。

しかし私は、女さへ自分の物になるならば、何處まで阿呆になつてゐても辛抱できるだけ辛抱する氣で、婆さんが、どんなに偉さうなことをいつたり、凄じい氣焰を吐いても、たゞ「へい〳〵」して、じつと小さくなつて其處に坐つてゐた。そして、今

のこのざまが、見も知らぬ人間の前でなかつたならば、自分には、とてもかうして我慢してゐられないであらうと思ふと、それが東京を遠く離れた京都の土地であるのがせめてもの幸ひであつた。婆さんは六ケしさうな顔をして膳の上の肴をつゝきながらぶつ〱ひとり言をいふやうに、

「まだ何處の何方とも、一向お名前も承りまへんけど、出てゐる者に金を取られるといふことは、世間に何ぼもあるならひどすよつて、……茶屋の行燈には何と書いておす、え、金を取ると書いておす。からお見受けしたところ、あんたはんも、まんざら物の出來んお方でもおへんやろ。向うは人を騙さにや商賣が成り立ちまへん。それを知つて騙されるのは此方の不覺。それを又騙されんやうでは、遊びに往ても面白うない。出てゐた者がひいた後まで、馴染のお客やからいうて、一々義理を立てゝゐては今日その身が立ちまへん。……何處の何方はんかまだお名前も知りまへんが、こりやあ、わるい御量見や。」婆さんは一語々々に尤もらしう力を籠めて説諭するやうにいふ

私は、まだ名前を承らぬと厭味をいはれたので、それには聊か當惑しながら、

「それは、まつたく私の不行屆でした。つい此度の事に心を取亂して申し忘れてゐま

した。私はなにがしと申す者でございまして、生國は何處ですが、もう長く東京に住んで居ります。」さういつて初めて本名を語ると、婆さんは何處までも皮肉らしく、
「いや、それを承つても私どもには御用のないお方でございますやろけれど。」と、酒盃を口にあてながらわざつと切り口上に云つて、
「さだめしあんたはんにも親御達がござりますやろ。わたくしの處にも、役には立ちまへんが、あのとほりまだ若い倅が一人ごはります。もうこの間から、あんたはんのお出でやすことを見るにつけ、私はほかの事は思ひまへん。これがわたしの處の倅であつたら、わたしはどないな氣がするやろ思ふと、この胸が痛うなります」婆さんは、さういひながら、さも／＼胸の痛みに觸るやうに皺だらけの筋張つた顏を一層顰めてそつと胸に手を當てる形をした。「あんたはんはそりや、御自分の好きな女子の爲に勝手に自分の身を苦しめておいでやすのやろさかい、ちつとも私、構ひまへんで。そやけど親御の身になつたら、どないに思ふか。わたしは、あんたはんの顏を見るのが辛い。もう、わたし、あんたはんが此所の路地へ入つて來るのを見るのが厭どす。見たうない、見せておくれやすな。」

婆さんは一人で、きかぬ氣らしく頭をふりながら言ひ續けるのである。私は、揉手をせんばかりに、はい〳〵して、

「あなたの仰有ることは、一々御尤もです。けれども私にとつては又一と口に申すことの出來ない深い譯があるのですから・・・」

「あゝいや、もう、その譯がようない。それは聽かいでも解つてます。まあ、伜がなんとか埒のつく話をしてますやろ。どうぞ遠慮せんと待つといでやす。」いくらか氣を鎭めてさういつてゐるかと思ふと、婆さんは、しきりに酒氣を吐きながら、肴の皿を箸で舐めまはして、

「當年これで七十一になります。年は取つてますが、伜で話が解らなんだから、わたしが出て話します。私がからというたら後へ寄りまへん。」婆さんは、皺だらけの腕を捲つてみせて「まだ〳〵若いものでは仕樣むない。每日私が小言のいひ續けどす。」まるで何を云つてゐるか、痙攣したやうに變なところに力を籠めて管を卷いてゐる。

　合壁一つ隔てた女の家では、いつまでも母親ががみ〳〵我鳴る聲ばかりが聞えてゐた。すると、やがて、越前屋の主人は、どうしたのか、その母親を宥め賺しながら連

れて戻つて來た。そして優しい言葉で、

「お母さん、どうぞ此方へ、長うお手間は取らしまへんよつて、ちよつと此所でお待ちやしてとくれやす。」といつて、主人は自分で手まめに次の間から座蒲團などを取つて來て、母親にすゝめた。

私は、母親の入つて來たのを見ると、まるで仇同志なので、ぷいと立つてそこを外さうとすると、主人は、

「あゝ、兄さんもどうぞそこに居てとくれやしたら宜しい。構しまへんがな。さあ、どなたはんも寒うおすさかい、遠慮せんと、ずつと火鉢の傍に寄つて當つてとくれやす。……お母はんも、どうぞ私の處ではもう何もいはんと置いとくれやす。お話は又後でゆつくり聽きますよつて。」といつて、私の方に向ひ、「兄さんも、どうぞそのつもりで。」と、顏に多く物を云はして、主人は再び隣りへ引返していつた。

主人がさういふのに連れて、ほかの者も狹い茶の間の一つ處に母親や私を坐らした。見ると母親は先刻の激昂した樣子は幾らか和いで、越前屋の者に對しては笑顏をしながら、それでもまだ愚痴つぽく、

「えらい遲うから、兄さんもお忙しい處皆様にお世話掛けてほんまに濟まんことどす……あんたはん、昨日こちらのお婆さんにお頼みやしたやおへんか。その返事もまだ聽かんうちから、餘處の家へ默つて入つてきやして、警察へ訴へて出たら、あんたはん罪人やおへんか。あの家は私の家とちがひます。旦那はんが今日は來てゐやはらんからいゝけど、もし旦那はんでも來とゐやしたら、どないおしやす。」母親はまだ先刻の驚きと激怒の餘熱の殘つてゐるやうにくど／＼と一つことを繰返していつてゐる。

私は、もう母親を對手に物をいひかけると、此方までが自分でも愛想の盡きるほど下劣な人間に成り果てるやうな氣がしてくるので、もう、どんな氣に障るやうなことをいひ出されても、じいつと腹に溜めて居らうとしても、旦那はんが來てゐたら……などといはれたのが、又、頭が赫となるほど癪に障つたので、

「旦那が何です。私のほかにそんな者があらう筈がない。そんな男がもし來てでもゐたら默つて引込んでゐる私ぢやない。そんな者があるなら、今晩それが來合はして居ればよかつたと思つてゐるんだ。いつでも對手をしてやる。」

私は堪へかねて、母親の方に向き直つて云ふと、生醉ひに醉ばらつた越前屋の婆さ

んは、眼と眼との間に顔中の皺を寄せて、さも〳〵氣色の惡さうに、
「あゝもう、うるさい。喧嘩をするなら、私の家の中でせんと、どうぞ戸外に出てして貰ひまへう。今倅があれほどいうて往きようたのに、倅の顔を潰さんやうにしてとくれやす。」
そんな調子で私と母親とで睨み合つてゐるところへ越前屋の主人は又戻つて來て、
「おかあはん、えらいお待ち遠さんどした。さあ、もう濟みましたよつて、どうぞ歸つとくれやす。ほんまにえらい濟まんことどした。」主人は撫でるやうに優しくいふと、母親は內の人達に繰返しくりかへし禮をいひつゝ、やがて自分の家へ歸つていつた。

五

そして、母親が出て歸つたあとの入口を主人は何度も氣にして振返つて見ながら、
その時まだ庭に立ち働いてゐた女房が、
「もうお歸りやした。」といつたので、安心したやうに、私の方を見て、

「さあ兄さん、えらいお待たせして濟みません。どうぞ、もつとずつと火鉢の傍にお寄りやす。夜が更けてきつう寒うおす。」といつて、自分も火鉢の向うに座を占めながら、

「あのお母はんが傍に付いてゐると、喧しうて話が出來しまへんよつて、それで一寸此方へ來てもらうてました。」主人は落着いていつた。

その顔をよく見ると、主人の眼は泣いたやうに赤く潤んでゐる。そして火鉢の正座に坐つてゐる老母と、横から手を翳して凭つてゐる私との顔を等分に見ながら、低い聲に力を入れて、

「お婆さんわたし、今姉さんから話を聽いて呆れた。……」越前屋の主人は、あとの句も續かぬやうな濕つぽい調子になつてゐる。

「なんでや？」

「なさぬ仲やの。……」と、聲を祕めていつて、「私、今はじめて聽かされた。そんなことがないか知らん思うとつたんや。やつぱりさうやつた。」と、主人は、ひどく人情につまされてゐる。

婆さんは、それを聽くと、これは又傷ましさに耐へられないやうに仰山に顏を顰めて、
「可哀さうに……」と、呆れた口を大きく開いて一句々々力をこめていつて、うなづきながら、「さうか。それで皆讀めた。……生さぬ仲やと……」二度も三度も思ひ入つたやうに、それを繰返して、尤もだといふやうに「……いや、さうでもございますやろ。……それでは話が又一層やゝこしうございます。」
と、やうやく我に返つた調子で、ひとり語のやうにいつて沈吟してゐる。
私は暫く口を噤んで二人の話をじつと聽きながら最初は自分の耳を疑つて訊き返してみた。主人は、
「えゝ、眞實の子やないのやさうにおす。」と、私に答へて置いて、「姉さんそれで今えらう泣いてた。私も一緒に泣かされた。」
婆さんは深い歎息まじりに、しんみりとした調子で、
「いや、世の中は廣うおす。世の中は廣うおすわい。……實の子やつたら、あの商賣はさせられまへん。本當の親にそれがさせられよつたら、鬼どす。鬼でなうて眞實の

わが子にそれがさせられるものやおへん。」と、つく〴〵感じたやうにいつてゐる。
私は、心の中でそれを、いろ〳〵に疑つてみた。果して血を分けた母子の仲でないとすると、自分に對する考へも彼女と母親との腹は一つでないかも知れぬ。
「それを彼女が自分で、かうだといふのですか。」
「えゝ、姉さんさういひやした。……今のお母さんには何度も子供が生れても、みんな死んでしまうて、大けうなるまで育たんので、自分はまだ三つか四つかの時分に今の親に貰はれて來たのどすて。それで生みの親は何處かに有るちふことだけ聽いてはゐるが、どこにどないしてゐるかわからんのやさうや。それやよつて、二人の間がいつも氣が合はんので年中喧嘩ばかりしてゐるけど、何でも自分の心を屈げて親のいふことに從うて居らんならんいうて、姉さん今えらう泣いてはりました。私もほんまに貰ひ泣きをしました。」
越前屋の主人はさういづて、屈強な男の眼に眞實涙を潤ませてゐる。そして尙ほ言葉を繼いで、私の方を見ながら、
「それぐらゐやよつて、此度の事も少しも姉さんは自分の本心でさうしてゐるのやな

い云うてはります。」

暫くじつと聽いてゐた婆さんは又口を挿んで、

「それが眞實(ほんと)でござりますやろ。」といふ。

「さうでせうかなあ。」私も小首を傾けながら、「さうだとすると、事譯(ことがら)が大分解るのですが。……」といつて、まづずつと以前初めて女に案内せられて、祇園町の、とある路地裏に母親に會ひに往つた時の最初の印象を思ひ浮べてみた。その時既に妙に似てゐない母子だなと思つたのであつた。その後も、去年の夏の初め頃、彼女達母子(おやこ)の傍に、一ケ月あまりも寢泊りしてゐる時にも、時々ふつと二人の顏容(かほかたち)から態度などを見比べて、どうも似てゐない。娘には自分もこれほど心から深く愛着してゐながら、これがその母親かと思ふと、さすがに思ひ込んだ戀も、いくらか興が醒めるやうな氣がするのであつた。そして心の中で、どうか、これが眞實の母子でなくつてくれたら好い、何か然るべき人が内證の落胤とでもいふのであつたならば……といふやうな空想を描いたことも事實であつた。が、さう思ふたびにいつでもそれを、さうでないと語つてゐるかのごとく私に考へさするのは、二人の耳の形であつた。それは、二人とも

酷く似た殺ぎ耳であつて、その耳の形が明らかに彼等の身の薄命を豫言してゐるかの如く思はれてゐた。
　そして今、越前屋の主人が女から聞いて來たとほりに眞實なさぬ仲であるならば、これまでに幾倍して一入可愛さも募る思ひがするとともに、今人手に取られたやうになつてゐる女を自分の手に取り返す見込みも十分あるのであるが、主人の聞いて來た話によつて、私はやゝ失望の奈落から救ひ上げられさうな氣持になり、かげながら、さうなると又一層不安な思ひに襲はれて何だかあの耳一つが氣に懸つてくる。
「さうですかなあ……なるほど、さういへば、顏容に何處といつて一つ似たところはないのですが。」といつて、私は心に思つてゐる耳の話をして、「始終母子でいひ諍ひすることのあるのは、私もよく見て知つてゐますが、その口喧嘩の爲振りから見ると、どうも、眞實の母子でなかつたら、あゝではあるまいかと、思はれることもあります。」
　私は、彼女の家に逗留してゐた時分の二人の屢々物の言ひ合ひをしてゐた樣子を、つとめて思ひ起すやうにしてみた。そして、その眞僞如何に彼女自身のいふことの眞

僞如何がかゝつてゐると思つた。越前屋の主人は、

「さあ、そんな以前のことは、私も、どや、よう知りまへんけど、姉さんは今自分でさういうてはりました。……うたがや、どつちでも疑へますけど、姉さんが泣き〳〵いふのをみると、やつぱり貰はれたのが眞實どすやろ。しかし酷いことをする親もあるもんどすなあ……そんなの藝子にはめづらしい事もおへんけど、あの商賣にそんな酷いことをする親はまあたんとはおへんなあ。」主人は肝腎の話を忘れて頻りに思入つたやうにいふ。

「わたし、聞きまへん。この年になるけど、初めてや。」と、強く頭をふつて呆れてゐる。

主人は更に涙に濕つた聲をひそめながら、

「もう此間から何かこれには深い譯があるにちがひないから、母親の居らん處で、とつくり姉さんの腹を一遍訊いてみたいと思うてたら、私の想像したとほりやつた。」と分らなかつた謎がやつと解けた時のやうな氣持でいつて又私の方に顔を向けながら、

「ほて、姉さんはかういうてはります。……わたしは、あんたはん――××さんとい

ふ人の事は一日も忘れては居らん、毎日々々心の中ではあの人は今時分は何處にどないしておゐやすやろ思うて氣に懸つてゐたのやいうてはります。此度の事には一口にいへん深い事情があつて、自分の疾うからからしようと思うてゐたこととは、ちやうど反對したことになつてしまつたいうて、きつう泣いてはりました。」といつて、主人はしんみりとした調子で話した。

私は、主人が先刻から何度も繰返していふ、姉さんがきつうそれで泣いてはりますといふのを聞かされるたびに、その女の泣いてくれる涙で、長い間の自分の怨みも憤りも悲しみも凡て洗ひ淨められて、深い暗い失望のどん底から、すつと輕い、好い心地で高く持ち上げられてゐるやうな氣がしてきた。そして今まで凝乎と耐へてゐる胸がどうかして一ととところ緩んだやうになるとともに、何ともいへない感謝するやうな涙が淸い泉のやうに身體中から溫く湧いてくるのが感じられた。私は、その涙を兩方の指先に拂ひながら、

「あゝさうですか。それで今ほかの人間の世話になつてゐるといふのですか。」私は早く先が訊きたくて心が無暗と急いだ。

主人はうなづいて「それを姉さんいうてはりました。今世話になつてる人といふのは、一緒になるといふやうな見込みのある人とちがふ。おかみさんもあるし、子供も二人とか三人とかある人で、これまでにもう何度もひかしてやらう云うてたことはあつたけど、姉さん自身ではもう××さんの處に行くことに、心は定めてゐたんやさうにおす。そこへ去年の秋のあの風邪が原因でえらい病氣して自分は正氣がないやうになつてゐるところを附込んで、お母はんは目先の慾の深い人やよつて、今の人がお母はんに金を五百圓とか遣つて姉さんの身を引受けよう、ほんならどうぞお委せしますといふことに、自分の知らぬ間に二人で約束してしまうて、醫者から何からみんなその人がしてくれて、お蔭で病氣も追々良うなつたのやし、今となつて向うの人にも深い義理がかゝつて××さんの方ばかりへ義理を立てる譯にもゆかんやうになつた。それで今急にどうするといふことも出來んさかい、こゝ半歳か一年待つてゐてもらひたい。その間に好い機があつたら又此方から手紙を出すか、話をするかするさかい……」

「それで半歳か一年待つてくれといふのですか。」

「まあ、さういうてはるのどす。今急にあんたはんの處へ行けんことになつたよつ

て、それを私から××さんによう斷りいうてくれるやうに、姉さんからくれ／＼も頼んではりました。…そんな譯どすよつて、あんたはんももう好い時節の來るまで餘り氣を急かんと置きやす。この話急いたらあきまへん。私も御緣でこして及ばずながら仲に入つて口をきゝました以上は決して惡い話には致しませんつもりどすよつて。」と、頼母しさうに私を慰めてくれて、

「それにしてもあの母親は、姉さんも、お母はんといふ人目先の慾の深い人どすいうてはつたが、ひどいことをする婆さんどすなあ。たゞ一時金貰うたかて見込みのない人やつたら爲方がないやおへんか。」繰返してそれを呆れてゐる。

「いろ／＼お骨折り有難うぞんじます。」

と、私は主人の前に頭を下げて心から禮をいつたが、さうしてむざ／＼人の樂しみにさして置くのを承知しながら、今すぐにも自分の方へ取戻すことの出來ぬのが堪へ難い不滿であり、今迄の長い間の、とてもいふに云へない自分の、その女の爲に忍んで來た慘憺たる胸中を考へれば考へるほど、そんな破滅になつてしまつたのが餘りに理不盡であるやうに思へて、どうしたらこの耐へがたい胸を鎭めることが出來るかと

思つた。それと共に、向うの人間にどれだけの恩義を被てゐるか、それは分らないにしても、又たとひ、果して彼女のいふことを信じて母親に對して生さぬ仲の遠慮といふことを認めるにしても、あまり女の心のいひ甲斐なさと賴りなさとが焦躁しかつた。そしてその向うの人間といふのは、いつか彼女が自分で話して聽かした去年の二月にも病氣の時ひかしてやらうといひ出したその人間のことであらう。その人間ならば決してさう深い譯はなかつた筈である。それにこの間の夜松井の女主人の處へたづねて往つて會つた時の話にも、此度病氣で愈々廢業する時にもう女の身についた借金といふ程のものも無かつたといふし、そんな深い客のあつたことは知つてゐる樣ではなかつた。松井の女主人のいふのでは、あの佛壇の阿彌陀樣の背後から出てきた羽織袴を着けた三十餘りの男こそ前にも後にも唯一人きりの深い男であつたが、それはもう今からいつて一昨年の夏の末に死んで終つた。松井の女主人は、先夜會つた時にその死んだ男のことをいつて、長火鉢の前で大勢ほかの妓のある傍で、私を冷笑する樣な調子で、

「あんたはん、お園はんには三野村さんといふ夫婦約束までした深い人がおしたがな。

三野村さんが今まで生きとつたら、もう疾うに一緒になつてはる。」さういつて三野村といふ、彼女の方からも一と頃は深く思ひ又向うからは變らず深く思はれてゐた男のあつたことをいろ〳〵いひ出して、そんな深い男のあつたのも知らずして、好い氣で遠くの東京の空の果てにゐながらたゞ一途にその商賣人の女を思ひ詰めてゐたばかりか、から成りゆいた今までも潔く諦めようとはせずにやつぱりその女に想ひを殘してゐる男の痴呆(うつけ)さ加減のあまりに馬鹿らしいのを、些かの同情もなく冷たく笑つてゐた。その時の女あるじの口うらなどから細かに推察してみても、どうも、今の世話になつてゐるその人間が、女とさまで深い譯があつたとは考へられない。それどころではない、もとの女あるじが、

「三野村さんはあつてもお園さんは、あんたはんも好きやつた。三野村さんの死んだあとは、あんたはんの處に行く氣やつたのどすやろ。」と一口いつたことを思つてみても、女の底意は察することが出來るのである。私は、それを思ふにつけても、毎度近松の作をいふやうであるが、「冥途の飛脚」の中で、竹本の淨瑠璃に謡ふ、あの傾城に眞實なしと世の人の申せどもそれはみな僻言(ひがこと)、譯知らずの言葉ぞや、……とかく戀路

には虚(いつはり)もなし、誠もなし、たゞ縁のあるのが誠ぞやといふ、思ふにまかせぬ戀の悲しみの眞理を語つてゐる一くさりを思ひ合せてふつとした行きちがひから、何年にも續いて、自分の魂を打込んで焦心苦慮した事がまるで水の泡になつてしまつたことを慨いても歎いても足りないで私はひとり胸の中で天道を怨み喞つ心になつてゐた。

　そして何とかして今直ぐにも女を自分の手に取り返す術はないものかと思ひつゞけてゐた。

「それで今本人はどうしてゐます？　私に會はうともいひませんか。」私は彼女に面と向つて怨みのたけを言ひたかつた。

「えゝ、それで姉さん今こゝへ來やはります。……お母はんには、あんたはんは、もう疾うにこゝからお歸りやしたことにして。」と、入口の方に氣を配りながら、越前屋の主人はその前に坐つてゐる婆さんにも聞えぬやうに、そうつと私の耳のところに口を持つてきて押つつけるやうにしながら、

「それからなほ姉さんがこんなことをいうてはりました。――えらい失禮やけど、もし又あんたはんがお小遣でもお入用どしたら、私の手を經て姉さんの方からどうとも

しますよつて、その事もちよつというといてくれ云うてはりました。」
私は、それをじいつと聞いてゐて、越前屋の主人の口から靜かに吐き出す溫かい息が軟かに耳朶を撫でるやうに觸れるごとに、それが彼女自身の溫かい口から洩れてくる優しい柔かい息のやうに感じられて、身體が、まるで甘い戀の電流に觸れたやうに、ぞく〳〵とした。
主人が口を離すのを待つて、私は、嬉しさに堪へかねた氣持で、
「あゝ、さうですか。そんなことをもいひましたか。……いや併し、それだけ聞けば滿足です。私ももう何年もの間彼女(あれ)のことばかり思ひつゞけて何をするにも手につかずにお話のならぬ不自由な目をして來ましたが、まさか私一人の用くらゐに事は缺きませんから、そんな心配は無用にしてくれ、それよりも一日も早く自分の決心をしてくれるやうにいつて置いてください。」私はもう少しも毒のない、優しい心に還りながら靜かにさういつた。
主人は私のいふことを聞きながら、外の路地の方に氣が懸かるやうに、
「姉さんもう來やはりますやろ。」といつてゐるところへ、入口に立つてゐた越前屋の

若い女房はそちらから、
「あ、來やはりました。」と低聲で知らせる。
「主人はそれで、表の間の方に立つていつて出迎へながらわざと聲を大きくして隣りの母親に聞えるやうに、
「お母はんえらい濟んまへんが、どうぞ、今お話しましたとほりですよつて、ちよつと姉さんをお貸しやしとくれやす。……××さんはもう先刻帰らはりましたよつて、どうぞ安心してとくれやす。」といつて、そこへおづ〳〵入つてきた隣りの女をやさしく劬り招じ入れた。

六

「さあ、姉さん、ずつと此方へお入りやしとくれやす。ほかに遠慮するやうな人だれもゐいしまへんよつて。」
といひつゝ、主人は母親が今まで敷いてゐた蒲團を裏返して、長火鉢に近いところ

に直した。主人の背後に身を隱すやうにしながら、庭から茶の間に入つてきた彼女は、隅の暗いところに立ち竦んだまゝ、へえ〳〵と溫順に會釋ばかりして、いつまでもそこに居わづらうてゐる風情である。

婆さんも共に聲をかけて、

「姉さん、なんもそないに遠慮せんかてよろしい。さあ〳〵そな處に居らんとずつとこちらへお上がりやす。」

彼女が、さうしたまゝ、いつまでも家の人達に口をきかしてゐるのを傍にゐて見かねながら、私もそちらを振返つて、

「皆さんがいうて下されるのだから早う此方へ上がつたがいゝだらう。」と、聲をかけながら、そこに佇んだ容姿をちらと見ると、蒼ざめた頰のあたりに銀杏返しの髮の毛が惱ましく垂れかゝつて赤く泣いた眼がしを〳〵として潤んでゐる。

女は猶ほも面羞さうな樣子をしながら、

「わたし、もう、こゝで失禮いたします。」と、口の中でいつて、上がらうとせぬ。

主人も婆さんも、聲をそろへて、

「何おいひやす、姉さん。そんなところに居られしまへん。さあ〳〵。」と急いだ。
女は、「へえ。」と腰をこゞめながら、それでやつと、「ほんならこゝからどうぞごめんやす。」と沈み〳〵云つて、上り框に躙り上がつて、茶の間の板の間のところに小さくなつて坐つた。主人はそれを咎めるやうに、
「姉さん寒いのに、そんなとこに居られしまへんたら、さあ此方へおいでやして、兄さんの傍に來て火鉢におあたりやす。」と、手を取らんばかりに世話を燒いた。
女は幾度もいくたびも催促せられて、また泣きじやくりをしながら、やう〳〵座蒲團の上まで寄つてきた。
主人は、合壁の隣りに居殘つてゐる母親に氣を兼ねて、聲をひそめ、二人の仲を改めて取り成すやうな口を利いて、
「さあ、姉さん、こゝは私の家どす。もう誰に遠慮もいりまへんよつて、兄さんと心おきなう話したい思うておいでやしたことをお話しやす。」
さういつたが、彼女は、何といはれても、たゞ「へえ、へえ。」と、低い聲でいふのみで、憂はしさうに濕つてゐる。

私も、あれほど會ひたい、見たいと思つてゐながら、さうして面と顔を差向つてみると、卽座に何からいひ出していゝやらいひたいことが有り餘つて、かへつて何にもいひえないやうな氣がして、初心らしくたゞ默つてゐると、主人は、小言のやうに、
「さあ、兄さんも何とか姉さんに言葉をかけてお上げやす。」と言つたが、二人ともそのまゝやつぱり默つてゐた。

そこでかへつて其處にゐて用のない生醉ひの婆さんが傍から又してもうるさく口出しをするのを、彼女も私も同じ思ひで、神經に觸るやうに自然と顔に表してゐた。主人はそれを拂ひ退けるやうに、
「お婆さんあんた、あつちい往といでやす。あんた自分で關係せんというとゐやしたやないか。」と、たしなめて置いて、女の方を見て言葉を改めながら、
「姉さん、今いろ〱あんたはんから聞きました事譯はあらまし私から兄さんにお話して、兄さんも心よう納得してくりやはりましたよつて、それはどうぞ安心しておくれやす……。」といつて、暫く間を置いて一層力を籠めて、
「その代り私がかうして仲に入つて口を利きました以上は、姉さん今度また私にまで

も嘘をお吐きやすやうなことがおしたら、その時こそ、今度は私が承知しまへんで：：よろしいか。」と、念を押すやうに云つた。

彼女はそれで又溫順しく「へえ。」とうなづきながら、兩手の襦袢の袖でそつと涙を拭いてゐる。まだ商賣をしてゐる時分から色氣のないくらゐ白粉氣の少い女であつたが、廢めてから一層身裝振りなど構はぬと思はれて、可惜、つくれば、目に立つほどの縹緻をおもひなしにか妙に煤けたやうに汚してゐる。そのうへ今泣いたせゐか美しい眼のあたりがひどく窶れてゐる。此處のあるじが先刻も、戻つて來てからの話に、「姉さんがおいひやすのが眞實に違ひおへんやろ。自分も好きで世話になる旦那があるのやつたら、あんなものやおへん。この隣りに越しておいでやしてからでももう三月か四月になりますけれど、姉さんが綺麗にしておいでやすのを內の者だれかて一寸も見いしまへん。お湯にかて、さうどすなあ、十日めくらゐにおいでやすのを見るくらゐのものどす。」といつて、隣家にゐてそれとなく氣の付いてゐる、女の平常のことを噂してゐたが、今じつと女の容姿を打ちまもりながら心の中で、なるほど主人のいふとほり、今の彼女にはつくるの飾るのといふ氣は少しも無いものと見た。そして私

もやつと口を切つて、彼女に話しかけた。

「私も一伍始終のことを話して、あんたにとくと聽いてもらひたいことは山ほどあるけれど、それをいひ出す日になれば、腹も立てねばならぬ、愚痴もいはねばならぬ。とても一口や二口では言ひつくせぬし、あんたもそんな病後のことだから、それは又の日に讓つて置く。それで今こちらの親方から聽いたとほり、爲方がない好い機の來るまで辛抱してゐるつもりでゐるから、あんたもその氣でゐてもらはねばならぬ。」私は、あれほど、逢はぬ先は會つたらどうしてくれようと憤怒に驅られてゐたものが、さうして悄然と打ち沈んでゐるのを面と向つて見ると、打つて變つたやうに氣が弱くなつてしまつて、怨みをいふことはさて置き、かへつて、やつぱり哀れつぽい容姿をしてゐる女を劬り慰めてやりたい心になつた。

するとと彼女は私からはじめて物をいひかけられて、どんな氣になつたのか、今までの溫順しく沈んでゐた樣子とはやゝ變つた調子になつて、

「あんたはん何で山の井さんへいて、その話をしておもらひやさんのどす。」と、神經質な口調で不足らしく云ふ。山の井といふのは初めて女を招んでゐた茶屋の名である。

私は、女のさういつた發作的の心持を推測しかねて、ちよつと不思議さうに彼女の顏を見たが、

「あんた今、この場でそんなことをいひ出したつて、爲方がないぢやないか。」といつたが、おほかた彼女の腹では、自分の心にもなく今の人間に急に脱ぐことの出來ない恩義を被らなければならぬやうになつたのも、自分の知らぬ間に母親とその男との仲に立つて專ら周旋したのが、その客で入つてゐたお茶屋の骨折りであつたことを思つて、もう今となつては、一寸拔き差しならぬ羽目になつてしまつたも、私が最初からの茶屋を通して話を進めなかつたこととの手ぬかりを云ふのであらうと思つた。けれども、さう成り入つた原因をいへばまた、彼女にもさうした責めがないでもなかつたのだ。

主人も私の言葉につれて、

「姉さん、そんなこともう、今いはんと置きやす。いつでも後になつて、あんたはん達二人で又笑つてそんなことは話せますよつて。」と抑へるやうにいつて、

「……さあ、もうあんまり長うなると、お母はんが又喧しういはりますさかい……姉さんほんならよろしいなあ、どうぞ今夜の約束は××さんでなうて私に對して違へ

んやうにしておくれやす。」

と主人は重ね〴〵念を押していつた。そして私に向つて、

「兄さん、あんたはんも、もういふことおへんか……ほんならもう、どつちも異存おへんなあ。」と、言ひ切つて、又氣を變へて、

「さあ、姉さん。えらい御苦勞さんどした。どうぞ歸つてお寢みやしとくれやす。遲うまで濟みまへん。」

彼女はそれをしをにやう〳〵立ち上がつて禮をいひつゝ、壁隣りの自分の家に歸つた。

七

まだ二月半ばの嚴しい寒威は殘つてゐても、さすがに祇園町まで來てみると明麗な灯の色にも、絕ゆる間もない人の往來にも、何となくもう春が近づいて來たやうで、殊に東京と異つて、京は冬でも風がなくつて靜かなせゐか夜氣の肌觸りは身を切るや

うに冷たくつても、ほの白く露霜を置いた、しつとりとした夜であつた。私は、その女の勤めてゐた先の女主人に會ふために、上京の方から十一時過ぎになつて、花見小路のその家に出掛けて往つた。

もう去年の十一月の末、女がそんなことになつた時から、直接に女主人にぜひ一度會つて、彼女の勤めてゐた時分の事から病氣でひいた前後の事情を、自分の得心するやうに委しく訊いてみたいと思つてゐたのであつた。嘘を商賣とするその社會の者の習ひで、此方が客として今まで外部から知ることの出來なたつた裏面の眞相を、果してどれだけの誠意を披瀝して聽かしてくれるものか、それと知りつゝ、わざ／＼笑はれるために行くのも阿呆らしいやうで控へてゐたが、それでも、何時までも女の居る處が知れなくつて懊惱に懊惱を重ねてゐた時分には、もう思案に餘つて愚かになり、女の在所を探し出すことが出來なければ、せめて彼女の話でも、誰かを對手にしてゐたい、それには先の主人に會つていろ／＼な話を訊いたならば或は手がかりが見つかるかも知れない。さう思つて、その家へ電話を掛けて女主人の都合を問ひ合はすと、いつも留守といふ返事であつた。彼女が勤めてゐた時分にも電話を掛けると、定つ

て、女衆の聲で冷淡に、

「今留守どす。」といふのが其所の家の癖で、あんな無愛想なことでよく商賣が出來ると思ふくらゐであつたが、女衆の返事では、女主人は晝間から外に出て夜の九時か十時頃でなければ歸らぬといふ。それが何時訊ねても同じ事なので、三度に一度は私といふことを知つて、故意と嫌つてさういはしてゐるのかも知れないと疑つてみたりした。頭から會ふのを嫌つてゐるくらゐなら會つたところで奥底のない話をしてくれる筈もない。先の女主人が私を向うに廻してゐるくらゐなら女の話はもう所詮駄目と思はなければならぬ。さう思ふと私は倍々何處へ取りつく島もないやうな氣がして、何方を向いても京都の人間は揃ひもそろつてよくもかう薄情に出來てゐるものだ、いつそ自分の名も命も投げ出して憎いと思ふ奴等を悉く殺してやらうか、殘らず殺すことさへ出來れば殺してやるんだがと思つたこともあつた。けれどもそれもならず、女主人に會つて見たならばと思ふ望みも絶えて、消え入るやうな乏しい心地になつてゐた。それでもどうかしては又堪らなくなつて、どんな恥を忍んでも厭はないから、一度會つて此方の悲しい眞心を立ち割つて話して見たならば、いかに冷淡無情を商賣の

信條と心得てゐる廓者でも、よもや此方の赤誠が通じないことはあるまい。さう思ひ返して時々電話を掛けて都合を訊いたり、自分で入口まで出掛けて往つたことも一度や二度でなかつたが、小面の憎い女衆はよく私の顏を覺えてゐると思はれて、卑下しながら入口に立つた私を見ると、わざと素知らぬ振りをして狹い通り庭の奧の方で働いてゐた。そして幾度も案内を乞ふと、やつと澁々出て來て、

「太夫どすか、今ゐやはりやしまへん。」といつて、それつきり中戸の奧に又引返してしまふのであつた。

女主人は今から二十年ほど前まで祇園で薄雲太夫といつて長い間全盛で鳴らしたもので、揚屋の送り迎へに八文字を踏んで祇園街を練り歩いてゐた、その頃廓の者が太夫を尊敬して呼び習はした通稱を、今でも猶ほ口にして太夫といつてゐるのであつた

電話で訊くと、今すぐならゐるといふので夜遲く遠くから急いで行つてみると、今まで内にゐたが又何處かへ出て往つたといふやうなことがあつて、私は殆ど耐へがたい屈辱を感じてゐたが、彼等の前にはどんなに馬鹿になつてゐても、それほど苦痛とも思はなかつた。

そのうち女の居所が知れて、本人の心の奥底も分り幾らか自分にも心に張合ひが出來たせゐか、今までより少し勇氣づいて、たとひ效の無いことにしてももとの女主人の處にもいつて話してみようといふ氣になつて、又電話で都合を訊くと、「今晩は內にゐやはりますよつてどうぞ來ておくれやす。太夫がさういうてはります。」といふ、いつにない女衆が氣の輕い返事である。尤もその二三日前に私は一寸した物を持つて、たゞ入口まで顏を出したのであつた。

十二時近くになると花見小路の通りは冬の夜ながら抱妓の送り迎へに、またひとしきり往來の人脚がつゞいて、煌々としてゐる妓樓の家の中は丁度神經が興奮してゐる時のやうに夜の更けるに從つて冴え返つてゐる。その家の入口に立つて訪ふと、今度は毎時とちがつた小婢が取次ぎに出て、一遍奧に引返したが、すぐ又出て來て、丁寧に、

「どうぞお通りやして」

といつて、玄關から疊敷の中廊下を傳うて、ずつと奧の茶の間に案內していつた。八疊に七疊ばかりの二間つゞきの座敷の片隅には長火鉢を置いて、鐵瓶にしやん〳〵

湯が煮立つてゐる。女主人はその向側に座を占めてゐた。見たところ其處は大勢の抱妓達がはじめ家中の者の溜り場にしてあると思はれて、緣起棚にはそんな夜更けでもまだ宵の口のやうに燈明の光が明るくともつてゐて、眩しいやうな電燈の灯影の漲つたところに、丁度入れ替へ時なので、まだ二人三人の妓達が身支度をして出たり入つたりしてゐる。

私は心の中で今日は不思議に調子が柔かいなと思ひながら、座敷の入口の方でわざと腰を低うしてゐると、女主人は蟠りのない物の言ひ振りで、

「さあ、ずつと此方へお越しやす。」

と、年はもう五十の上を大分出てゐると聞いてゐるにもかゝはらず、聲はまだ、まるで二十餘りの女のやうに柔和である。顔から容姿から、とてもそんな年寄りとは思へない。これがその昔祇園街で全盛を誇つた薄雲太夫の後身かと思ふと、私は妙な好奇心にも驅られながら、さう打ち融けた言葉を掛けられたのを機會に、

「は、どうぞご免なさいまし。」

といつて、颯と起つて長火鉢の此方側まで進んで小婢のなほした座蒲團の上に坐つ

た。

色氣のない束髪に結つて、何かしら野暮な物を着た大柄で上品に見える女主人は柔和な顔で、二三日前に持つていつた物の禮をいつたり、今まで何時訪ねて往つても留守がちであつたりしたことを云つて、

「こんな商賣してますよつて、朝は遲うおすし、晝からは毎日お詣りにゆくか、そでなけや活動が好きでよう活動見に往きますよつて、いつも夜の今時分からでないと家にゐいしまへんもんどすさかい。」と若い聲でいつてゐた。

私は、多年情海の波瀾を凌いで來た、海に千年山に千年ともいふべき、その女主人と差し向ひに坐つてゐると、何だか、あまりに子供じみた馬鹿らしいことをいひ出すのが氣恥しいやうで、妙に自分ながら硬くなつて口ごもつてゐると、そこへ外から今歸つたらしい若い妓が一人出てきて、

「たゞ今。」といひながら長火鉢の傍に寄つた。

女主人はそつちを向いて、

「おかへりやす。」と返事しながら何か二言三言話してゐたが、又私の方を見て、

「あんたはん、この妓を知つとゐやすやろ。」といふ。

私はちよつと思ひ出せないので小首を傾けながら、その妓の顔をまじ〳〵と見てゐると、向うではよく知つてゐると思はれて、

「よう知つてゐます。」といひながら、私の顔を見て笑つてゐる。十八九ばかりの小柄な妓であるが口元などの可愛い、優しい容姿をしてゐる。女主人も笑ひながら、

「なあ、よう知つてやす筈どすがな。」といつて、私の顔を見てゐる。

私はこんな美しい妓に知つて居られる覺えがないといふやうに、なほも頻りに頭を傾けてゐると、女主人が、

「お園さんと一緒によう　あんたはんに招ばれて往かはりましたが、若奴さんどすがな。」といつたので、私はやつと思ひ起した。そして四五年前に較べると全く見違へるほど成人した若奴の大人びた容姿を、呆れたやうに見まもりながら、

「あツ、さうだつたか、若奴さんとは一寸氣が付かなかつた。あんたが餘り好い藝妓さんになつたもんだから、さういはれるまでどうしても思ひ出せなかつた。」さういつて、私は又彼女の顔をしみ〴〵と見てゐた。ほんとに四五年前見てゐた時分とはまる

で比べ者にならぬくらゐ美しい女になつてゐるのに私は驚いたのであつた。
女主人は機嫌よげに彼女の顏と私の方とを交る〴〵見ながら、
「ほんまに好い藝妓さんになりやはりましたでつしやろ。この妓にも好きな人がひとりあるのどつせ。」と、輕く弄ふやうにいふと、若奴は優しい顏に翳を見せて羞しさうにしながら、兩掌で頬のあたりを擦つて、
「ほんまにあの頃はよう寄せてもろてゐましたなあ。」と、過ぎ去つた時分のことを思ひうかべるやうな顏をしてゐる。私もそれに伴れてその頃の事が又思ひ起されるのであつた。
涼しい加茂の河原にもうぼつ〳〵床の架かる時分であつた。春の過ぎゆく頃から殆ど揚げつめてゐた女がだん〳〵打ちとけてくるにつけて、
「なあ、へ、内に、わたしの妹のやうにしてゐる可愛い藝者がひとりあるのつせ。」といふから、
「へえ、どんな藝者。」と訊くと、
「そりや可愛い藝者。まだ十四どつせ。」

「十四になる藝者、そんな若い藝者があるの。舞妓ちやないの。」
「ちがひます。藝妓どす。」
「可笑しいなあ。なぜ舞妓にならないんだらう。」
「さあ、そなことどうや、わたしよう譯は知りまへんけど、初めから藝者で出てはります。そりや可愛かはい人どつせ、あんたはんに一遍招んでもろとくれやすいうて、わたし內の姐さんから賴まれてゐました。」
さういふので、招んでみると、女のいふとほりまだ子供の藝者であつた。それから後も時々女と一緒に來て方々外に連れて步いたりしてゐたが、あれからずつと見なかつたので、まるで別な女になつてゐた。私は、自分の女のことを、あまり正面から女主人に切り出すのを極りわるく思つてゐたところへ又そんなほかの者が傍に來たのでいよ／＼いひ出しかねてゐたが、若奴と丁度そんな話になつたので、照れ隱しのやうに、
「若奴さん、ほんとに美い藝妓さんになつたなあ。」と私は又つく〴〵とその容姿に見入りながら、「こんな別嬪になるんだと知つてゐたら、あんな薄情な女に生命を打込ん

で惚れるんぢやなかつた。」とわざといつて笑つていつた。

するると女主人は、自然にそつちへ話を向けてきて、

「お園さんにお會ひやしたか。」といつて訊いた。

「え丶この間初めて一遍會ひました。」

「病氣はどうです。わたしも一遍見舞ひにいかう〳〵思うて、ねつからようい きまへん。」

「病氣はもう大したこともなささうです。一體不斷から病人らしい靜かにしてゐる女ですから。」

すると若奴も傍から、

「ほんまにさうどす。お園さんは溫和しい人どしたなあ。姐さんあんな靜かな人おへんなあ。」

私は段々話をそつちへ進めて、

「病氣で氣が變になつたといふのは、あれは眞實なのですか。」といつて女主人に訊ねた。

「そりや眞實(ほんま)どす。」と、女主人は眞面目な顏になつて、「初めは私達も熱に浮かされてそんなことをいふのか思うてゐましたが、その頃病氣の方はもう疾うに良うなつて、熱も無いやうになつてゐるのに異うたことをいひ出したので、さあ、これは大變なことになつた思うて心配しました。……あんたはんもよう知つとゐやすとほり、あの人達母子二人きりどすさかい、同じ病氣になるのやつたかてまだお母はんの方やつたら困りやうがちがひますけど、親を養はんならん肝腎の娘が病氣も病氣もそんな病氣になつてしまうてどう爲樣もなりまへんもんどすさかい。……そりや氣の毒どした。あれで一生あのとほりやつたら、どないおしやすやろ思うて心配してゐましたけど、それでもまあ早う良うおなりやして結構どす。一時はどないなるか思うてたなあ。」女主人はさういつて若奴の方を振返つて見た。

　若奴は同情するやうな眼をしてうなづきながら、

「ほんまに氣の毒どしたわ。皆ほかの人面白がつて對手にしてはりましたけど、姐さんわたし何もよういへしまへなんだ。顏を見るさへ辛うて。」

「さうやつた。眼が凄いやうに釣り上がつて、お園さんのあの細い首が抜け出たやう

に長うなつて、怖いこはい顔をして。」
私はさうであつたかと思ひながら、
「そんなにひどかつたのですか。」
といつてゐると、女主人は私の方をじつと見ながら、
「あんたはん、餘程お園さんに酷いことをおいひやしたんやなあ。」とたづねるやうにいふ。
「どうしてです？」
「あんたはんの手紙に警察へ突出すとか、どうとかするやうなことをいうてあつたと見えて、そのことを毎時(いつも)ようい うてました。ほかの者警察のことも巡査のことも何も云うて居らんのに、お園さん、そら警察から私を連れに來た、警察が來る警察が來るいうて、警察のことばかりいうてゐました。よつぽどあんたはんの手紙に脅かされたものらしい。」
彼女の言葉は婉曲であるが、その腹の底ではお園が精神に異狀を呈したのも大根(おほね)の原因(もと)は私からの手紙に脅迫されたのだと思つてゐるらしい口振りである。

八

なるほどさう思はれるのも全く無根の事實でもない。去年の春まだ私が東京にゐて京都に來ない時分、もう何年にかゝわたる度々の送金の使途について委しい返事を聞かうとしても、いつも、柳に風と受け流してばかりゐて少しも要領を得たことをいつて寄越さなかつたので、隨分思ひ切つた神經質的な激しいことを書いて怨んだり脅かしたりするやうなことをいつてよこしたのは事實であつた。けれども、そんなことは他人に打ち明かすべきことでないから、自分ひとりの胸の底に深く押し包んでゐたけれど、それ程氣に染んで片時も思ひ忘れることの出來ない女を、一年も二年も凝乎と耐へて見ないでゐて、金だけは苦しい思ひをしてきちん〳〵と送つてやり、たゞわづかに女から寄越す手紙をいつも懐にして寢ながら逢ひたい見たい心の萬分の一をまぎらしてゐたのではないか。あらゆる永遠の希望や目前の慾望を犧牲にし、全力を擧げてその女を所有するが爲に幾年の間の耐忍辛苦を續けて來たのである。自分でも時々、

『あゝ馬鹿らしい。こんなにして金を送つて遣つても、今時分女は餘所の男とどんなことをしてゐるか……』

と、それからそれへ聯想を馳せると、頭が赫と逆上して來て、もう居ても立つてもゐられなくなり、いつそこの金を持つて、これからすぐ京都へ往つて、あの好きな柔和らしい顏を見て來ようかと思つたことが幾度であつたか知れなかつたが、その都度、『いや〳〵、往つて逢ひたいのは山々であるが、今の逢ひたさ見たさをじつと耐へてゐなければ、このさき何時になつたら首尾よく彼女を自分のものにすることが出來るか、覺束ない。』

さう思ひ返しながら、われと吾が拳固を以て自分の頭を毆つて、逸り狂ふ心の駒を繋ぎ止めたのであつた。けれども流石の私も、後にはたうとう隱忍し切れなくなつて、焦立つ心持をそのまゝ文字に書き綴つてやつたのである。女の方でも、此方の心持はよく知つてゐるので、手紙でいつてやることを、たゞ何でもなく聞いてゐる譯にはいかなかつたのである。それが爲に氣が狂つたといへば當然のやうでもあるが又可憐なやうな氣もする。

私は何となく女主人の顏から眼をそらしながら、

「脅かした譯でもなかつたんですが、私にしてもあれくらゐのことをいふ氣になるのも無理はないと思ふんです。……」と、私はいひさして、後をすこしくいひ澱んでゐたが、彼女がもう此處に居なくなつたのであるから、今となつてそれをいつたところで、格別女主人の氣を惡くさする氣づかひもないと思つたので、自分が疾うから女の借金を拂つて商賣の足を洗はすつもりであつたことを話して、

「こんな事はもう幾十度となく知り飽きてゐられる貴女がたに向つて今更こんな土地に有りうちの話をするも愚痴のやうですけれど、その爲に、私はとても一日や二日にいへない苦心をして來たのです。」

私は專ら女主人の同情に訴へるつもりで肺腑の底から出る熱い息と一緒に啣ち顏にさう云つた。いくら冷淡と薄情とを信條として大勢の抱妓に采配を揮つてゐる此家の女主人にしても物の入譯は又人一倍解る筈だと思つたのであつた。すると彼女は今まで話してゐた調子とすこし變つて、冷嘲するやうな笑ひ方をしながら、

「あんたはんそんなことをおいひやしたかて、お園さんにはもうずつと前から三野村

さんといふ人がおしたがな。三野村さんが今まで生きとつたら疾うに夫婦になつてはる。」

遠慮もなく、ずばりといひ放つた。それを聽くと私はぐさりと心臟に釘を刺されたやうにがつかりした。が、そんな深くいひ交はした男があるのも知らずに、自分ひとりで好い氣になつて自惚れてゐたと思はれるのがいかにも恥しいので、强ひてそんな風を顏色に出さないやうにしながら、私はやゝ暫くいふべき言葉もなかつたが、やがてわざと輕い調子で、

「えゝそんなことも少しは知らぬでもなかつたのですが、そんな人間はあつても大丈夫お園は自分の物になると私は思つてゐたのです。」と、私は飽くまでも信ずるやうにいつた。

すると彼女は、一層嵩にかゝつて冷笑しながら、

「あんたはんだけ自分でさう思ひやしたかて、お園さんあんたはんの處へ行く氣いちよつともあらしまへんなんだんどすもの。……その人はもうお死にやしたけど。」といつて、私に語る言葉の端々が妙に粗雜になつてくるに反して、その死んだ人間の事を

いふ時にはひどく思ひ遣りのある調子になりながら、火鉢の傍に坐つてゐる若奴の顔を振返つて、

「なあ、三野村さんとお園さんの事では何遍も揉めたなあ。」と、女あるじはその時分のことを思ひうかべて心から亡くなつた人の身を悲しむかのやうに、私が傍に居ることなどてんで忘れてしまつた風で、しんみりとなり、

「三野村さん死になはつたのはついこの間のやうに思うてたら、もう一昨年になる。さうやなあ、一昨年の夏のもうしまひ頃やつた。可哀さうやつたなあ、あんなにお園さんに惚れてゐても死んでしまうたら爲様がない。」

彼女はたうとう獨言をいひ出した。

私は厭あな氣持で默つてそれを聽いてゐた。私にあて付けて故意にそんなことをいつてゐるのかと思つて氣をつけてゐたが、彼女は眞實三野村といふ男の死を哀れんでゐるらしい。それならば情涙の涸渇したと思つてゐたこの薄雲太夫の後身にもやつぱり人並の思ひやりはあるのだ。たゞ私に對して同情を懐かないばかりなのだ。それにしても私のこれほど血の涙の出るほどの胸の中がどうして彼女の胸に徹せぬのであら

う。私は自分の事を思つてみても昔の物語や淨瑠璃などにある人間ならばともかくも今の世に凡そ私くらゐ眞情を傾け盡して女を思ひ詰めた男があるであらうか。……なるほどその三野村といふ男のことは、もう三四年も前に一寸耳にせぬでもなかつたが、たとひ如何なる深い男があつても、自分のこの眞情に勝る眞情を女に捧げてゐる者は一人もありませぬ。それに、自分の觀察したところによると、女は自分の方から進んでいつて決して男に深くなるやうな氣質は持つてゐない。男に惚れるやうな女ならば却つて又手を施すことも出來るのであるが、彼女に限つてさういふ風は少しもなかつた。どうせ卑しい勤めをしてゐるのであるから、いろんな男に近づきはあるにちがひない。どんな男があつても構はぬ。自分は猜疑もしなければ嫉妬もせず、たゞ一筋に眞情を傾けて女の意のまゝにつくしてやつてさへ居れば、いつかは此方の眞情が向うに徹しなければならぬ。殊更にあゝいふ稼業の女はそんな嫉妬がましいことをいふ男に對して厭氣がさすのである。さう思つて私は、三野村といふ男のことも全く知らぬこともなかつたけれど、そんなことは彼女に向つて戲談にもあまり口に出したことはなかつたのである。又私自身にしてもそんなことを思つてみるさへ堪へられない

焦躁しさに責め苛まれるので、そんな惱ましい鬱懷をばなるべくそのまゝそつと脇へ押遣つて置くやうにしておいたのであつた。が、今女あるじから初めて、入組んだその男のことを聞くにつけ思ひ起したのは、去年の五月の頃女の家にゐた時佛壇の奥から出て來た寫眞の和服姿の男がそれであらうと、さう思ふと、その男と彼女との仲の濃やかな關係がはつきり象を具へて眼に見えて來た。私は丁度煮湯を飮んだやうに胸が燃えた。

女主人は、私の今の胸の中を察してか察せずしてか、今度は私の方を見ながら、

「そりや三野村さん死なはつた時には可哀さうにおしたで。」と、私をまで誘ひ込むやうにいふのであつた。「けども死んだらあきまへんなあ。あんなに惚れてゐて死んでしもて……」

私はもう火を噴くやうな氣持で、

「そしてお園の方でもやつぱりその男には惚れてゐたのですか。」と、言葉だけは平氣を裝つて確めるやうに訊いてみた。

「そりやあお園さんかて惚れてはりましたがな。商賣を止めたらお園さん自分でも二、

野村さんの奥さんになることに極めて居つたのどす。」女主人は當然のことを語るやうにいふ。

私の胸の中はます〳〵引掻きまはされるやうになつた。そして、まさかそんな事とは夢にも知らず飽くまでも女を信じ切つてゐた自分の愚かさが、眞面目に考へるには餘りに馬鹿げてゐて、このうへ女主人や若奴のゐる前で腹を立てた顏を見せるのが、恥の上塗りをするやうで私は何處までも弱い氣を見せずに、

「だつて、三野村にはほかに女があつたといふぢやありませんか。」といつてみた。

自分がはじめて彼女を知つて一年ばかり經つてから、女には京都に土着の人間で三野村といふ繪師で深い男があるといふことを聞いたので、その後京都に往つて女に逢つた時、輕く、

「三野村といふ人とは相變らず仲が好いのかい？」と、戲弄ふやうにいつて氣を引いてみた。

すると女は顏色も變へずに、

「あの人偶にどす。それに奥さんのある人やおへんか。」と、鼻の先で事も無げにい

つてのけたことがあつた。

女と三野村の事をいつたのは後にも前にもそれきりであつたのみならず、自分でもそれつきりその人間のことは考へてもみなかつた。その男の事など物の數にも思はなかつたのである。

さういふと女主人は、

「えゝ、そりやおした。そやけど三野村さんはあの女よりお園さんの方がどのくらゐ好きやつたか知れまへん。……それで揉めたのどす。」といつて、前に溯つて彼等の交情の濃やかであつた筋道を思ひ出して話すのであつた。

その男ももとは東京か横濱あたりの人間で繪の修業に京都に來る時一緒に東から連れて來た女があつた。それは以前から茶屋女であつたらしく、京都に來ても京極邊の路地裏に軒を竝べてゐる、ある江戸料理屋へ女中に住込ませて、自分も始終そこへ入り浸つてゐるのであつた。話の樣子では職人風の繪師によくあるやうな、あまり上品な人間でもなかつた。技術も捗々しく上達しないで死んでしまつたが、女の事にかけては腕があつたらしく、一方その女が喰付いてゐて離れようとしないのに自分ではひ

どくお園に惚れてゐた。
　女主人は今思ひ出しても、三野村がいとしくもあり可笑しくもあるといふやうに笑ひながら、
「あんなに惚れはつて。……なあ、私、三村野さんがお園さんに惚れはつたやうにあんなにほれた人見たことおへんわ。」さういつて又若奴と私に話しかけながら、「三野村さん、あんたお園さんの何處がようてそんなにほれたんどすいうてきくと、三野村さんもお園さんの、ほんなら何處が好えといふところもないけれど、たゞかうどことなくおとなしいやうな處がえゝいふのどす。」
「ぢや、男の好きなのは誰の思ふところも同じこつた。」と、私は、その三野村が女を觀る眼にかけては自分と正しく一致してゐたことを思ふにつけても、なるほどと肯けるのであつた。女主人のいふとほり彼は深い心の底からお園に惚れてゐたのにちがひない。私もやつぱり女の起居振舞などのしつとりとして物靜かなところが不思議に氣に入つてゐるのであつた。そして、三野村の惚れ様が傍の見る眼も同情に堪へないくらゐそれは〳〵切ないものであつたことを女主人が頻りに繰返していふのを聽かされ

ると、又しても私がその三野村に又輪をかけたほど惚れてゐるのに、それを遺憾なく解らす術のないのが焦躁しかつた。そして、

「私だつてあの女には眞實に惚れてゐるんですよ。」といつたが、幾ら眞劍なところを見せようとしても、それをそのとほりに受け入れてくれさうにないので、半ば戲談にまぎらして、いつてゐるよりほかなかつた。

女主人は此方の見てゐるとほり、さういつてもたゞ、

「えゝ。」と心にもない義理の返辭をしてゐるに過ぎなかつた。そして三野村の話をしかけさへすれば好い機嫌で向うから進んでいろんな話をそれからそれへとするのであつた。

「ぢや、その人はこゝへ――あなたの處へ來たのですな。」

「えゝもう始終此處へ來てはつたのどす。……一と頃よう來てはつたなあ。」女あるじは若奴の方に話しかけた。

「よう來てはりましたなあ。」

私は、そんなことから旣にその男の敵でなかつたことを思つた。自分もずつと以前

ならば、惚れた女の抱へられてゐる家へ入り込んで行くくらゐのことをしかねない人間ではあつたが、どこまでも自分の顏を惡くしないで手際よく事を運びたいと餘り大事を取り過ぎたのがいけなかつた。やつぱりかういふことは押しが强くなくつてはいけないのだと今更のやうに心付きながら、

「さうですか：：：始終こちらへ來てゐたのですか。」私は思はずそれを繰返して暫く開いた口が塞がらなかつた。

女主人は顏で若奴の坐してゐる長火鉢の横を示しながら、

「よう此處へお園さんと二人で竝んで私とこのとほりに話してはりましたがな。家でもお園さんとよう泊りやはつた。」

彼女の語ることは向うではその心でなくても、言々句々縱横無盡に私の肺腑を刺した。私は眞實胸の痛みを撫でるやうにしながら、

「さうですか。：：：しかし私には幾ら惚れてゐてもその女の抱へられてゐる屋形まで押掛けてゆくのは何となく遠慮があつて、それは出來なかつたのです。」私は自分の愼みをいくらか誇りかにいふと、女主人はそんなことは無用のことだといふやうに、

「こゝの内お茶屋どすがな。何も遠慮することあらしまへん。おいでやしたらえゝのに。」

私はその家が揚屋をかねてゐることは、そのとき女主人がいふまで氣が付かなかつた。それと疾うから知つてゐたならば何の遠慮をすることがあらう、それにしても女はどういふ心で私にはそれを明かさなかつたか。舊いことを思ひ出してみても、最初行きつけのお茶屋から彼女を招ぶには竝大抵の骨折りでは、おいそれと來てくれなかつた。それといふのも今になつていろ〳〵思ひ合すれば、やつぱりさういふ深い男が始終付いてゐるので、滅多な客が自分の家へ直に來ることを好まなかつたのかも知れぬ。……それにしても五年前から自分と逢つてゐた場合の記憶をあの時はかうとさまざま思ひ浮べて見ると、それが何も彼もみんな腹にもないことをたゞ巧んで爲たりいつたりしてゐたとばかりはどうしても思へない。……私は凝乎とひとり考へ沈んでゐた。

九

若奴も傍から折々思ひ直したやうに口を入れて、
「お園さんも三野村さんのところへよう行かはりましたなあ。」
といふと、女主人はうなづいて、
「ふむ、よう通うて行てたあ。」
といつて、話すところによると、彼等が馴染みはじめの時分男は二三人の若い畫家と一緒に智恩院の内のある寺院に間借りをして、其處で文展に出品する繪などを描いてゐた。仲間の中でも彼がひとり落伍者で遂に一度も文展に入選しなかつたが、お園は畫間體のあいてゐる時間を都合して始終そこへ遊びに行つてゐた。そして畫師が畫枠に向つてゐる傍に付いて墨を摺つたり繪の具を溶かしたりした。
女あるじは笑つていつた。
「三野村さんあなた、勉强をおしやすのにそないに女を傍に置いたりしてよう繪が描

けますなあいうて私がきくと、そなことない、お園が傍に付いて居つてくれんと繪が描けんおいひやすのどす。……さうどすか、わたし又何ぼ好きな女かて傍に付いてゐられたりしたら氣が散つて描けんやろ思はれるのに、そんなことというてはりました。」

私は、二人の情交の濃やかであつたことを聞けばきくほど身體に血の通ひが止まる心地がしながら、惚れた女を思ふ男の心は誰も同じだと、

「私だつてそのとほりですよ。私は傍に引付けて置くことが出來ぬ代りに遠くにゐてどんなに彼女（あれ）を思つてゐたか。その人間などはまださうして傍に置いとくことが出來ただけでも埋め合せがつく。」私は溢（こぼ）すやうにいふのであつた。

「三野村さんよう此處でお園さんが傍にゐる處でいうてはつた。……頼りない女や。私が京都にゐるからかうしてゐるやうなものやけど、東京の方にでも往つてしまへばそれきりやいうて、始終頼りない女やいうてはりました。」

「ほんとにそのとほりだ。そしてお園は傍で聽いてゐて何といふのです。」

「お園さんたゞ默つて笑ひ〳〵きいてゐるだけどす。……ほて、そんなに惚れてゐるくせに又二人でよう喧嘩をする。喧嘩ばかりしてゐた。三野村さんよう云うてはりま

した。姉さん、あゝして私の處へ遊びに來てくれるのはえゝが、顏さへ見ればいつでも喧嘩や。そして仕舞にはやつぱり翌日までお花をつけることになるから來てくれるたびに金が要つて叶はんいうてはりました。お園さんの方でも、ほん、よう喧嘩をして戻つてかといふのに、やつぱり戻らない、喧嘩をしながらいつ迄も傍に付いてゐる。」

　さういつて、女主人が尙ほつゞけて話すのでは、ずつと先の頃ひと仕切り餘りにお園の方から男の處に通うて行くので、女主人が氣に逆はぬやうに三野村の處へ遊びにゆくのもよいが兩方の身の爲にならぬから餘り詰めて行かぬやうにしたがよいといつて、いひ含めたのであつた。すると一寸見はおとなしいやうでも勝氣のお園はそれが癪に觸つたといつて一月ばかりも商賣を休んでゐたことがあつた。その後も三野村のことで時々そんなことがあつた。女主人と同じやうに彼女の母親もそんな惡足のやうな男が付いてゐるのをひどく心配して二人の仲を切らうとしていろ〳〵氣を揉んでゐた。それで暫く三野村との間が中絶してゐたこともあつたが、男の方でどうしても思ひ切らうとしなかつた。いろ〳〵に手をかへて母親の機嫌を取らうとすればするほど母親の方では增長して彼を散々にこき下ろすのであつた。そして、一度でも文展に入

選したら娘を遣つてもよいとか、東京から伴れて來てゐる女と綺麗に手を切つてしまへば承諾するとか、その場かぎりの體の好いことをいつてゐた。そして母親や女主人の方で二人の間を堰くやうにすればするほど三野村の方で一層躍起になつてお園が花にいつてゐる出先までも附纒うて商賣の邪魔になるやうなことをしたりするのであつた。

女主人は、それでも私が長居をしていろ〳〵話をしてゐる間にいくらか此方の心中が解つて來たやうであつたが、いくたびも澀むやうに私の顔をじつと見ながら、

「今やからあんたはんに云ひますけど、眞相はからやのどす。」といつて、尙ほ委しく話して聞かせたところによると、斯うであつた。

母親や女主人から、三野村のやうな男にいつまでも係り合つてゐては後の身の爲にならぬと喧しくいふのと、お園自身で段々それと解つて來て、その後自分の方からはなるたけ男に遠ざかるやうにしてゐたのであつた。すると丁度その頃初めて私と知るやうになつた。その年春のをはりから夏の半ばまで三月ばかりもゐて私が東京に歸つてからも引きつゞき絶えず手紙の往復をしてゐるうち、秋になつて女から急に體の始

末に就いて相談を仕掛けて來た。勿論そのことは此方から進んでさうするつもりであつたから、此方でも必死になつて金の工夫をしてみたけれど遂に思ふだけの金は出來なかつた。それで、自分の方ではさう急にといつてはとても金の策はつかない。甚だ殘念であるが、やつぱりかねて約束して置いたとほり早くてもう半年くらゐはどうしても待つてもらはなければならぬ。それでも是非とも今に今身を退かねばならぬといふ止み難い事情でもあるなら、ほかに爲方（しかた）がない、その場合に處すべき非常手段について參考となるべきことを細かに書中にしてやつたのであつた。そして彼女からの手紙は來るたびごとに切なくなつて、ひたすら不如意の身の境遇を喞ち歎いてゐた。此方からそれに應へて遣る手紙もそれに相當したものであつた。

　三野村は、前に暫く、祇園町から程近い小堀の路地裏に母親がひとりで住んでゐる頃そこの二階に同居してゐたこともあつたくらゐで、そこから他へ出ていつてからもやつぱり時々母親（はゝおや）の處へ訪ねて來てゐたが、ある日母子（おやこ）二人とも留守の間に入つて來て其處らを掻き探してゐるうちにふと私から遣つた手紙の藏つてあつたのを見つけて殘らず讀んでしまつた。それには抱へぬしをひどく忌むやうなことが書いてあつた。

それまであるじから敵のやうに遠ざけられてゐた三野村は好い物を攫つたと雀躍りして悦び、早速それを持つて往つて、

「姐さんあんたは私ばかりを悪い者のやうに思つてゐますが、これ、こんなことを二人で相談してゐる。用心しなけりやいけません。」

といつて、私から女にあてゝ遣つた祕密の手紙を、すつかり女主人に見せてしまつた。もし私と彼女と手紙で相談してゐたことが成就したならば、立場は各々異つてゐても彼等は利害を同じうせねばならなかつた。

女主人は又私の方を見て、

「私のとこでも、そんなことでお園さんにあの時廢められでもすると困るさかい……それまでは私もあんたはんといふ人があつてお園さんを深切にいうておくれやすといふことは蔭ながらよう知つてゐまして、あんたはんの處へ行くのでもなるたけ他を斷つてもそこを都合ようしてお園さんを上げるやうにして置いたのに、どうしてそんな私のとこの迷惑になるやうなことをおしやすやろ思うて……こんなことというてはえらい濟まんことどすけど、そんな手紙を見てから後あんたはんの事を怨んでゐました。

それで三野村さんも初めは私の方で、お園さんにあんな人を付けて置いては後にお園さんの出世の邪魔になるというて段々二人の間を遠ざけるやうにしてたのどすけど、あんたはんがそんな事をお園さんと手紙で相談してやすことを知つてから、此度は又私から進んで三野村さんとお園さんを手を握るやうにさしたのどす。それは私の方でわざとさうさしたのどす。」女主人は話に力を入れてさういふのであつた。

その話はもう四五年前のことであつたけれど、今向きつけて女主人から此方の祕密にしてゐたことを素破抜かれては早速何といつてよいか言葉に窮した。自分ももうその時分の委しいことは大方忘れてゐるが、女の方から餘り性急にやい〳〵いつて、とても急には調ひさうもない額の金を請求して來て、もし此方でそれだけの金が調はない時には、かねて自分をひかさうとしてゐる大阪の方の客にでも賴んでなりともぜひとも此處で身をひかねば自分の顏が立たぬ、それもこれもみんな私への義理を立て通さうとする苦しい立場からのことであるといふやうなことを眞實こめた言葉でいつて寄越すところから、その際此方で出來る限りのことをして遣つたうへで、それでどうすることもならなかつたら、止むを得ないから思ひ切つて最後の手段に出るより外は

なからうといつてやつたのであつた。勿論女からの手紙には、來る手紙にも此度の抱へぬしの仕打ちに對して少からず不滿を抱いてゐるらしい口吻を洩らしてゐた……私はその時分のことを心の中で又いろ〳〵思ひ起してみながら、今初めて聽く、此方ではそれほど重きを置かなかつた戀の競爭者の三野村が、さうした極祕密の私の手紙まで女の處から奪ひ去つて、しかもそれを利用して抱主の女あるじの信用を回復し彼自身の戀の勝利を確實にしたとは！

やゝ暫くして私は、

「えゝ、さういはれゝばそんな手紙を寄越したことがあつたのは自分でも覺えてゐます。しかしその時彼女から私に寄越した手紙では此方でいろ〳〵不平があつたやうなことをよくいつてよこしてゐました。一體どんなことがあつたのです。私の方から、それはどんなことで揉めてゐるのかといつて訊ねても、その内譯は何にもいはずに、たゞ癪に觸ることがあるから母の處に歸つて店を休んでゐる、一日も早く商賣を廢めたいと云つてゐました。」

さういつて訊くと、女あるじは思ひ合すやうな顏をして、

「あゝ、さうや〳〵。それが三野村さんのことで私の云ふことが氣に入らんいうてお園さん休んでた時のことどす。」

さういふと、若奴も傍にゐて、

「へえ、さうどした。」といふ。

私はあれやこれやその時の事を更に精しく思ひ出して、

「ぢや、何も彼も私の事が原因(もと)で屋形と捫着を惹起してゐるやうなことをいつて手紙を寄越してゐながら、それは皆拵へ事で、眞相(ほんたう)は三野村の事が原因(もと)だつたのですな……どうも、さうでせう。私はあんたもご承知のとほりあの年の夏の三ヶ月ばかり京都にゐて東京に歸つたきり手紙と金とを送つて寄越すだけで、てんで自分の體は來ないんですもの、私の爲に捫着が起る道理がないのです。みんな噓をいつてゐたのだ。だからかうしてみなければ眞相(しんさう)は分らない。それでゐて私こそ好い面の皮だ。三野村自身のことでそんなに揉めてゐるのとは知らず、言つてくるがまゝに身受けの金のことまで遠くにゐてどれだけ心配してやつたか。……私は何もあなたの方の迷惑になるやうなことを初めから好んで彼女(あれ)に勸めた譯ぢやない。自分では何處までも穩便な方法

で借錢を拂つて廢業させようと思つてゐたのです。それでもあまり火の付いたやうにいつて强請(せが)んで來るからさうでもするよりほかに爲方(しかた)がなからうと思つたのです。」

　さういふと女あるじは幾らか此方の事情も分つたやうに、

「三野村さんもずつと前に一度そんなことをお園さんに勸めたことがあつたのどす。そんなことせられては私の方かて默つて見て居られんさかい、それでお園さんを長いこと三野村さんのお花にはやらんやうにしてたのどす。そりやあの人のことでは何度も揉めたことがあるのどす。あんたはんのいまおいひやす、あの時かて大變どした。お園さんも亦三野村さんのことやいふとあんなおとなしい人が本氣になるのやもの、……」

　私は又その四五年前の當時女から悲しい金の工面を訴へて來た時のことを繰返して思ひ浮べながら、

「しかし、さうであつたかなあ。……」と、その時の女の心底を考へ直してみた「ちやその時私が彼女(あれ)からいつて來ただけの金を調へて送つたら、それで足を拔いて、そして體は私の方に來ないで三野村の方に往つてしまつたな。」

女あるじは眞正面に私の顏を見て、
「えゝ、そしたらもう三野村さんの方にいてしまふ氣どしたのどす。」
それでもまだ私は小首を傾けて、
「さうでせうかなあ。その時は無論三野村が離れず付いてゐるから、たとひお園の方では自分だけの一存で私に金を賴んで來たのであつても、自由な體になつてしまへば三野村がすぐ浚つて去つたにちがひない。……その時一日に追掛けて二度も寄越した手紙を幾十通となく、今でも藏つて私は持つてゐます。それで見ると、まさか嘘ばかりで私に賴んだものとは自惚れか知らぬが、どうしてもさう思へないなあ。」
私はひとり言のやうにいつて、心の中でその時血の出るやうな苦しい金の才覺をした悲しい記憶を呼び起した。すると女主人も思案するやうな顏をして、
「ふむ――變どすなあ……そやけどお園さんは、えゝやうにいうてお客さんを騙してお金を取るやうな惡い智慧のまはる人やない。私のとこに七年も八年もゐたのどすさかい、あの人の氣性は親よりも誰よりも私が一番よう知つてゐます。商賣かて方々渡つて歩いたりしたこともないし、初めて私のところから出て廢めるまで一つところに

ゐて、長い間商賣はしてもいつまでも素人のとほりどした。三野村さんかて、お園さんがあんたから貰ふ金で花をつけて遊ぶのどうするのいふことはない、心の綺麗な人どした。……お園さん本當に三野村さんに惚れとつたのやろか。」

女主人はさういひさして又傍にゐる若奴の方を振返つた。

私はそれに口を入れて、

「あの女は自分でもよくいつてゐた。わたし、こんな商賣してゐたかて、まだ一度も男に惚れたいふことおへん。さういつてゐたが、三野村ともそんな悶着が度々あつたくらゐだから無論嫌ひではなかつたらうが、さう魂を打込んで男にほれるといふやうな性質の女ぢやなささうですな。」

「よう此處で三野村さんと喧嘩してはりましたなあ。」若奴がいふ

「ふむ、よう喧嘩をしてたなあ。あんなに惚れてゐてどうしてあゝ喧嘩したのやろ。」

女主人はその時分のことを思ひ出すやうな風で笑つた。

「それは仲が好過ぎてする喧嘩でせう。」

さういふと、女主人と若奴とは口を揃へてそれを否定し、

「いや仲が好過ぎてするのとちがふ。仲が好うてする喧嘩とさうでなうてする喧嘩とは違つてゐます。お園さんと三野村さんの喧嘩は本當に仲が惡うてするやうな喧嘩やつたなあ。」

「えゝさうどす。お園さん、もうあんたはんのやうな人は嫌ひや、もう此處へ來んと置いとくれやすいうて、隨分きついこというてはりました。」若奴がそれに付けていつた。

「男が死んだ時お園はどうしてゐました。ひどく落膽してゐましたか。」

女主人は又若奴と顏を見合しながら、

「死んだ時かて格別お園さんの方では力落したやうな風はなかつたなあ。」

若奴はその時分のことはよく覺えてゐるらしく、

「ちよつともそんな樣子はありやしまへなんだわ。……さう〳〵あの時お園さん二三日大阪へ行つてはりました。そして夜遲うなつて歸つて來やはりました。まあ、お氣の毒に三野村さんがお死にやしたのに、お園さんは大方そんなこととも知らはらんやろか大阪に往て何處で何しておゐやすんやろいうて私内で云うてゐました。ほて、此

處へ入つておいでやした時、お園さんの顏を見ると、私すぐ、お園さん三野村さんが死なはりました、こつちやは大きな聲でいひましたけど、お園さんはびつくりともしやはらんで、たゞ一口さうどすかおいひやしたきりどつせ、姐さん。そのとき私、お園さん薄情な人やなあ思ひました。」

若奴がさういふと、女主人は、

「ふん、さうやつたかなあ、わたしあの時どうしてたか內に居らなんで、あとで聞いた。……死んだ時はそりやあ可哀さうどしたで。」

といつて、又追憶を新にする風であつたが、私はそれよりも自分の目前の境遇の方が遙かに憐れであつた。（をはり）

解説

宇野浩二

『別れた妻に送る手紙』は、明治四十三年、（一千九百十八年）、秋江が三十五歳の年の作で、「早稲田文學」の四月號に發表された。

この小説に就いて、作者は、處女作と云つてもいいものである、と述べた後で、三人稱で書かれた謂はゆる客觀小説の形式ではないが、ある部分の叙寫は、つとめて客觀的に描かうとして、目的を達してゐるつもりである、と自信をもつて述べてゐる。

そればかりではなく、作者は、この小説に、それ以上に、かういふ自信を持つてゐる。

「今日（昭和四年頃）になつて讀んでみて決して作者自身は滿足してゐるものではな

いが、後の讀者は、これを文學史的に一參考として見てもらひたい。といふのは、作者がこの作を成したには、意識的に、當時の文學思想に反抗した意味が强かつたのである。當時の文壇は、いふまでもなく自然主義が風靡してゐた。作者は、當時その餘りに極端に走り過ぎた自然主義の無情緒主義に慊らなかつたところから、故意に、かかる情緒的のものを書いてみる氣になつた。その後の文學思想の變遷について知る者には、この作がたとひその變遷に對して一助とならなかつたとしても、作者の微意のある所は認めてくれるであらうと思つてゐる。」

猶、かう書いた後に、作者は、「同時に、この作は、私といふ主人公の一女性に對する執著を叙したものである事はいふまでもない。」と附け加へてゐる。

私は、この小説が發表された頃は二十歳の文學書生で、その頃の自然主義といはれた諸家の諸作品は勿論、それに反抗して起つたと見られるさまざまの主義やいろいろの流儀の作品を耽讀し過ぎたためか、否、そのためばかりでなく、私は、この『別れた妻に送る手紙』を讀んだ時、誇張して云ふと、驚歎した。

『別れた妻に送る手紙』は、題名が表すとほり手紙體の小説ではあるが、この手紙體

の小說は、謂はゆる短篇小說の宗家と云はれるモウパッサンにも、その他近代の和洋の數多の作家にも、用ひられてゐるけれども、それ等の小說は大抵みな便利な形式として使はれてゐるだけであるが、この秋江の手紙體の小說は、止むに止まれぬ氣持から、思ひ餘つて、つまり、この世の何處かに生きてゐる、『別れた妻』に宛てて、「拜啓。お前――別れて了つたから、もう私がお前と呼び掛ける權利はない。(中略)けれど、私は、まだお前と呼ばずにはゐられない。どうぞ此の手紙だけではお前と呼ばしてくれ」といふ書き始めの言葉でも分るやうに、實に不思議な、或る意味で、無茶な小說である。しかし、かういふ小說は、恐らく、古今東西、後にも先にも、近松秋江でない誰にも書けないものである事だけは確である。それと共に、その題材の善し惡し、その表現の善し惡しに拘らず、秋江のこの種の小說は妙に人の胸を打つものがある。私が二十歲の青年であつたにも拘らず、『別れた妻に送る手紙』を讀んで驚歎したのはその「妙に人の胸を打つもの」があつたためであらう。

『黑髮』は、大正十一年(一千九百二十二年)一月號の「改造」に出たのであるから、

秋江が四十六歳の年の作である。つまり、『別れた妻に送る手紙』から數へると、ざつと十二年目に書かれたものである。

この十二年程の間に、『別れた妻に送る手紙』の續編をなす『疑惑』(大正二年九月號の「新小説」)と『舞鶴心中』(大正四年一月號の「中央公論」)を書いてゐる。この二篇はこの選集の中に收められてゐないが、『舞鶴心中』は、客觀小説の形式で、作者が可なり骨を折つた作品らしいが、『疑惑』と比べると、段違ひに落ちる。しかし、それは、『舞鶴心中』はそれほど劣つた小説でもないのであるが、『疑惑』が殊に勝れた作品であるからである。私は、秋江の謂はゆる情痴小説の中で、何が最も勝れてゐるかと強ひて問かれたら、別れた妻を扱つた作品の中では『疑惑』を取り、京都大阪の遊女を題材にした小説の中では『黒髪』を上げる。

『疑惑』は大正二年の作、『黒髪』は大正十一年の作であるから、その間に八九年の歳月が經つてゐる。

この八九年の間に、秋江は、『津の國屋』、『仇情』、『春のゆくへ』、『男清姫』、(以上大正三年、)『舞鶴心中』、『うつろひ』、『住吉心中』、『閨怨』、『葛城』、(以上大正四年、)『葛

城太夫』『戀を戀する人』、『四條河原』、(以上大正五年、)『あだ夢』、『旅人』、その他、(以上大正六年、)『祕密』、『その頃』、『逆旅の緣』、『箱根土產』、『死んで行つた人々』、(以上大正七年、)『薄情』、『老婆』、『老若』、『初しぐれ』、(以上大正八年、)『小石川の家』、『汚染』、『喧嘩わかれ』、『冷熱』、その他、(以上大正九年、)『春の海』、『思ひ別れ』、その他、(以上大正十年、)を、德田秋江といふ名で、發表してゐるが、以上の小說の中で、善かれ惡しかれ、私の記憶に殘つてゐるのは、『津の國屋』、『仇情』、『男淸姬』、『舞鶴心中』、『死んで行つた人人』、『老若』、『初しぐれ』、『小石川の家』、『冷熱』などである。

右に上げた十二篇の小說の中で、『墓域』と『老若』は共に作者の故鄕を題材にした情緒的な小品であり、『舞鶴心中』と『葛城太夫』は、共に秋江には珍しい客觀的な小說の形式で書かれたものであるが、また共に作者の野心を持つた小說であるが、作者の努力と苦心は分るけれども、迫力の乏しい怨みがある。しかし、この二つの小說を讀むと、『別れた妻に送る手紙』に見られるやうな身と心の散散な苦勞から遁れるために、作者が京都と京都の女に生き甲斐を感じ、そこから作者の新しい文學の道が開けるのではないか、と、——いくらか結果から見た考へではあるが、——思はれるところ

がある。が、やはり、秋江らしい小說は、『津の國屋』『仇情』『男淸姬』『うつろひ』『祕密』『死んで行つた人々』『初しぐれ』『小石川の家』『冷熱』などである。

秋江らしい小說といふのは、後の批評家のいふ、謂ゆる情痴文學である。それを前に上げた小說に當て嵌めると『津の國屋』『仇情』『男淸姬』『うつろひ』の四篇は大阪の遊女を題材にしたもので『小石川の家』は『別れた妻』が家を出て行く前の事を書いた小說であり『死んで行つた人々』は『別れた妻に送る手紙』の餘話のやうな作品であり『初しぐれ』は京都の遊女物の斷片のやうな小品であり『冷熱』は京都の遊女物の餘話のごとき小篇であり『祕密』はこの選集の第三卷に收められる、人の姿を題材にした『夏姿』を別の面から書いた作品である。

右の簡單な解說で幾らか察せられるやうに、『疑惑』の出た大正二年から『黑髮』が發表された大正十一年までの八九年の間に秋江がどういふ生活をしてゐたか、――これは可なり重要な事であるが、――その間に發表された小說では、殆ど誰にも朧にしか知る事が出來ないのである。ところが、私は大正二三年から四五年までの秋江の生活の一端を割りに近くで見聞きした。それは、東京の赤城下町邊に下宿してゐた頃と、

大阪の難波の或る色町の中の宿屋に滯在してゐた頃と、大阪の南と北の郊外の宿屋を轉轉としてゐた頃とである。つまり、愛した妻と別れ、獨身で、彼が一種の放浪生活をしてゐた頃である。その頃の秋江は、西行が好きで、『新しき人、西行』といふ文章の中で、西行のかういふ歌が格別に好きであると書いてゐる。

　葉がくれに散り止まれる花のみぞ忍びし人に逢ふここちする

　ともすれば月すむ空にあくがるる心のはてを知るよしもがな

その頃、私は、牛込の神樂坂を、痩せた體（からだ）に釣り合はない太いステッキを提げるやうな恰好に持ちながら、いつも一人で、蹌踉と下りて來る秋江にしばしば逢つた。しかし、いつも歩きながら「やツ、」と云つて頷くだけで、それ以上物を云つた事がない。ところが、その頃の別の時、大阪の心齊橋筋で逢つた時、秋江は、これから半時間後に東京へ歸る汽車に乘るといふ私を捉へて、私が斷はる言葉など殆ど耳に入れないで難波の色町の中の宿屋に私を連れて行つて、一時間餘り立て續けに、その頃ぞつこん打ち込んでゐた遊女の話をした事がある。その頃のかういふ話を書いてゐると切りがないから他の話は悉く省略して、ざつとかういふ狀態にあつた秋江が、東京から大阪

へ、大阪から京都へ、西行法師とは全く別のものを求めて、一種の遍歴をするうちに、廻（めぐ）り逢つたやうな形になつたのが『黒髪』の遊女である。

名作『黒髪』は、前に述べたごとく、大正十一年一月號の「改造」に發表され、同じ「改造」の四月號に、續篇として『狂亂』といふ題で發表され、同じ年の五月號の「新小說」に、その又續篇として、『霜凍る宵』といふ題で發表された。つまり、『黒髪』は、『黒髪』、『狂亂』、『霜凍る宵』の三篇を合はして、一篇の小說と見るべきものである。

この『黒髪』が雜誌につづけて發表された時、或る批評家が、この小說に就いて德田秋聲と長田幹彥の作風を眞似たものであるといふ意味の事を書いたのに對して、秋江はかう答へてゐる。

『黒髪』や『狂亂』のやうな「實錄物には些の秋聲も幹彥も混入してゐない。生一本の、本當の、近松秋江で、つまり、十餘年前の『疑惑』當時の依然たる近松秋江で行つてゐる。」

かういふ意味の事を書いた文章の中で、秋江はかう書いてゐる。

「如何に『黒髪』と『狂亂』とで小生が思ひ切つて、第三人稱式を離れ、純粋の自己の直接經驗を有體に記録しようとして取掛つたかは、最初、昨年の秋、それを書からか書くまいかと思案してゐた時、恰も德田秋聲、久米正雄の二君も此處（註、或る溫泉場）に滯在せられて居り、二君から、小生自身の、その事件を書かぬのは嘘だ、是非それを書けと勸められるままに、（中略）それに就いては『私はにしようか、何吉にしようか、』と兩君に謀りしに、秋聲氏は『何吉の方がよい、』と申され、久米正雄氏は『僕は、私はの方がよいと思ふ』と申され、さうして、小生自身の意見でも、どうせ、自分の臟腑を恥かし氣もなく紙に打突けるのであるから、生半の何吉は不徹底である。『私は』の方が、眞實の感情が乘つて來ると思つた。（後略）』

この秋江の言葉でも分るやうに、『黒髪』は「臟腑を紙に打突け」た作品である、と共に、劃期的な名作『別れた妻に送る手紙』を書いてから、十年近い歳月の間、それのみに身心を傾けて藝術と人生の修業と修行をした作家が、五十歳近くになつて、圓熟した然も巧まない技巧を以て、創作した名作である。谷崎潤一郎がこの小說に帽子を脱いだと云つたのは當然の事である。

猶『狂亂』について、正宗白鳥が、その發表當時、秋江に、かういふ便りを書いてゐる。

「雜誌小説はこの頃殆ど讀まなくなつたが、今月の『改造』は武林（註、武林無想庵の『性慾の觸手』）と君の長篇『狂亂』が出てゐるので、わざわざ雜誌を買つて讀みました。兩方對照して、人となりが活躍してゐて、甚だ面白い。君のは、例の如き筋立てであるが、人間の苦惱が僕にはよく感ぜられる。徒らにこれを嗤ふ者あれば、人間の本心を知らぬものです。この次ぎが讀みたいやうに思ひました。かういふ作は、小説讀者の多數である二十前後の若い男女の好みに叶はざるべく、批評家の受けもどうかと思はれるが、小生はこれを近來の誌上の傑作に推す」

昭和十四年七月二十日印刷
昭和十四年八月一日發行

近松秋江傑作選集、第一卷
定價一圓七十錢

著者　近松秋江

發行者　東京市麹町區丸ノ内二丁目二番地　木川開

印刷者　東京市牛込區榎町七番地　堀修造

發行所　東京市麹町區丸ノ内二丁目
丸ノ内ビルデイング五八八區
中央公論社
振替口座東京二四番
電話丸ノ内 二三五番 二三六番 二三七番 二三八番

大日本印刷株式會社榎町工場印刷